鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　３９

令和４年度発掘調査報告

（第２分冊）

横小路周辺遺跡

甘縄神社遺跡群

大慶寺旧境内遺跡

北条小町邸跡（泰時・時頼邸跡）

佐助ヶ谷遺跡

令和５年３月

鎌倉市教育委員会

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　３９

令和４年度発掘調査報告

（第２分冊）

横小路周辺遺跡

甘縄神社遺跡群

大慶寺旧境内遺跡

北条小町邸跡（泰時・時頼邸跡）

佐助ヶ谷遺跡

令和５年３月

鎌倉市教育委員会

甘縄神社遺跡群（長谷一丁目236番１地点）出土　金銅製長方形鏡板

甘縄神社遺跡群（長谷一丁目236番１地点）出土　金銅製長方形鏡板　部分拡大
撮影：龍谷大学文学部歴史学科　北野信彦氏

ごあいさつ

本市は、市域の６割以上が周知の埋蔵文化財包蔵地であり、遺跡が眠る土地の上で多くの市民が生活を送っています。そのため、家屋や店舗の新築や建替え等に伴い、遺跡に影響を及ぼす工事が行われることも多くあります。このように、私たちが日々の生活を送っていく上でやむを得ず失われる埋蔵文化財について、記録を保存し後世に残すことは、現在を生きる私たちの責務であると言えます。

鎌倉市教育委員会では、昭和 59 年度から個人専用住宅の建築等に係る発掘調査を実施しています。本書には令和元年度～令和４年度に実施した、個人専用住宅の建築等に伴う発掘調査４か所の調査記録と平成 25 年度、令和２年度に実施した発掘調査に係る自然科学分析結果を掲載しています。このうち、甘縄神社遺跡群では金銅製長方形鏡板が出土しました。これは古墳時代終末期の馬具ですが、神奈川県内では初めての出土で、鎌倉時代以前の鎌倉を知るための重要な資料となります。

本書に収めたひとつひとつの調査成果は様々ですが、いずれも武家政権発祥の地であり、今もその歴史を継承し文化を発信する鎌倉の貴重な文化遺産です。これらの成果を広く知っていただくとともに、研究資料として活用されることを願って止みません。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては、関係者の皆様に深いご理解を賜るとともに、さまざまなご協力をいただきましたことを心からお礼を申しあげます。

令和５年３月 24 日
鎌倉市教育委員会

例　　言

1　本書は令和４年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書（第２分冊）である。
2　本書所収の調査地点は別表・別図のとおりである。
3　現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
4　出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
5　各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

第２分冊　目次

ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅰ
例言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅱ
目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅲ
本誌掲載の平成25年・令和２年～令和４年度発掘調査地点一覧・・・・・・・・・・・Ⅳ
調査地点位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅴ

2　横小路周辺遺跡（No. 259）二階堂字荏柄 81 番 22 地点

第一章　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第二章　遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第三章　発見された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
第四章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

3　甘縄神社遺跡群（No. 177）長谷一丁目 236 番１地点

第一章　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・116
第二章　遺跡の位置と周辺の発掘成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・116
第三章　調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122
第四章　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・123
第五章　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・125
第六章　調査成果のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・147

4　大慶寺旧境内遺跡（No. 361）寺分一丁目 810 番１地点

第一章　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・164
第二章　遺跡の位置と周辺の発掘成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・164
第三章　調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・168
第四章　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・169
第五章　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・171
第六章　調査成果のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・177

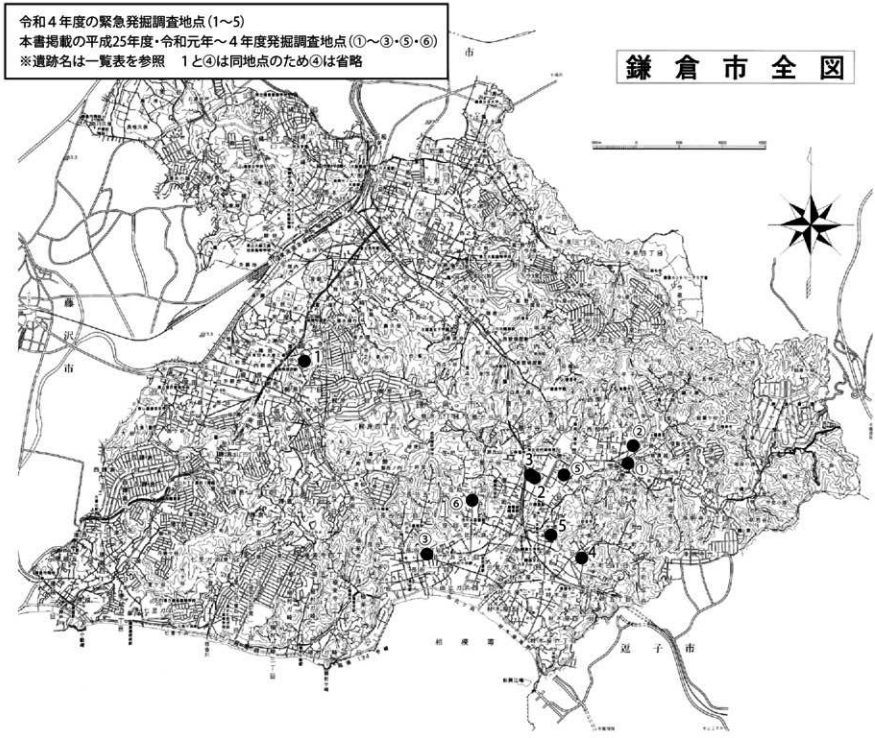
5　北条小町邸跡から出土した大型植物遺体および魚骨・・・・・・・・・・・・・185

6　佐助ヶ谷遺跡の花粉分析、プラント・オパール分析・・・・・・・・・・・・・191

本誌掲載の平成25年・令和２年～令和４年度発掘調査地点一覧

第２分冊

	遺　跡　名	所　在　地	調　査　原　因	遺跡種別	調査面積	調　査　期　間
2	横小路周辺遺跡 №259	二階堂字荏柄81番22	個人専用住宅 （鋼管杭工事）	城館跡	56.99	令和3年5月24日 ～令和3年9月7日
3	甘縄神社遺跡群 №177	長谷一丁目236番1	個人専用住宅 （柱状改良工事）	城館跡 社寺跡	56.39	令和3年6月28日 ～令和3年10月5日
4	大慶寺旧境内遺跡 №361	寺分一丁目810番１	個人専用住宅 （柱状改良工事）	城館跡	39.75	令和4年2月22日 ～令和4年4月22日
5	北条小町邸跡（泰時・時頼邸跡） №282	雪ノ下一丁目403番14	個人専用住宅 （鋼管杭工事）	屋敷跡	41.80	平成25年10月10日 ～平成25年12月27日
6	佐助ヶ谷遺跡 №203	佐助一丁目601番6	個人専用住宅 （鋼管杭工事）	城館跡 社寺跡	113.00	令和2年9月1日 ～令和2年12月25日


令和４年度の緊急発掘調査地点（1～5）
本書掲載の平成25年度・令和元年～４年度発掘調査地点（①～③・⑤・⑥）
※遺跡名は一覧表を参照　1と④は同地点のため④は省略
鎌 倉 市 全 図
逗 子 市

横小路周辺遺跡(No.259)

二階堂字荏柄81番22地点

例言

1. 本書は鎌倉市二階堂字荏柄 81 番 22 地点における個人住宅建設に伴う発掘調査報告書である。調査面積は 56.995 ㎡である。
2. 調査は令和 3 年 5 月 24 日から同年 9 月 7 日にかけて実施した。
3. 調査体制は以下の通りである。

調査担当	玉林美男
調査員	伊丹まどか・岡田慶子・岡本夏菜・小川さやか・菊川泉・吉田桂子
調査作業員	岡利文・高柳雅一・西澤靖明・松村保孝・三島義人

4. 本報作成分担は以下の通りである。

遺物実測	太田しのぶ・小川さやか・押木弘己・清水由加里・伊丹まどか
遺構図版作成	清水由加里・吉田桂子
遺物図版作成	清水由香里
グリッド図作成	清水由加里
遺物観察表	伊丹まどか
遺構計測表	伊丹まどか
破片遺物集計表	伊丹まどか
遺構写真	玉林美男
遺物写真	押木弘己・吉田桂子
写真図版作成	押木弘己・吉田桂子
執筆・編集	玉林美男　第三章は伊丹が下原稿を作り、玉林が補筆・改稿した

5. 出土品等発掘調査に係る資料は鎌倉市教育委員会が管理している。
6. 本報図版の遺構・遺物の縮尺は以下の通りである。
   遺構全測図：1／80　　個別遺構図：1／40　　遺物実測図：1／3（＊銭貨は原寸）
   なお各挿図にはスケールを表示してある。
7. 検出した遺構の計測値・実測遺物観察・実測できなかった遺物を含む総出土点数は表にまとめて掲載した。
   復元した遺物の計測値には（　　）を付して表してある。
   本文中「かわらけ」と記載したものはロクロ成形のかわらけを示し、手づくね成形のかわらけは「てづくね」と記載している。
   ロクロ成形かわらけの底径値は回転糸切りの外径部分で計測し、手づくね成形かわらけは口径と器高のみを報告し底径は掲載していない。
8. 遺構番号は検出時に便宜的に付した番号であり、遺構の新旧を表していない。
9. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「ＹＫ2101」とした。

本文目次

第一章　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第二章　遺跡の位置と歴史的環境
第1節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第2節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第3節　堆積土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第三章　発見された遺構と遺物
第1節　第1面の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
第2節　第2面の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第3節　第3面の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
第4節　第4面の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
第5節　第5面の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
第6節　第6面の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
第四章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
横小路周辺遺跡出土の粘土分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66

横小路周辺遺跡（二階堂字荏柄81番22）発掘調査にかかる届出等の文書・・・・・・・・・・・・・・・5
周辺調査地点一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
遺構計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
出土遺物破片数表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87

挿図目次

図1　調査地点の位置・・・・・・・・・・・・・8
図2　調査地点と周辺の遺跡・・・・・・・・・・9
図3-1　荏柄天神社図・・・・・・・・・・・・・11
図3-2　荏柄天神社――乗院図・・・・・・・・・11
図3-3　鎌倉町土地宝典・・・・・・・・・・・・11
図4　二階堂大路推定図・・・・・・・・・・・・12
図5　調査区配置図・・・・・・・・・・・・・・20
図6　調査区壁土層堆積図(1)・・・・・・・・・21
図7　調査区壁土層堆積図(2)・・・・・・・・・22
図8　第1面・第2面全測図・・・・・・・・・・24
図9　第1面遺構39・出土遺物・・・・・・・・・25
図10　第1面遺構40・41・出土遺物・・・・・・26
図11　第1面面上・構成土出土遺物・・・・・・27
図12　第2面遺構1・出土遺物(1)・・・・・・・29
図13　第2面遺構1・出土遺物(2)・・・・・・・30
図14　第2面遺構50・出土遺物・・・・・・・・32
図15　第2面個別遺構・面上・出土遺物・・・・33
図16　第2面構成土出土遺物・・・・・・・・・34
図17　第3面・第4面全測図・・・・・・・・・・36
図18　第3面個別遺構・出土遺物・・・・・・・37

図19　第3面面上構成土出土遺物(1)・・・・・・39
図20　第3面面上構成土出土遺物(2)・・・・・・・40
図21　第4面遺構30・出土遺物(1)・・・・・・・42
図22　第4面遺構30・出土遺物(2)・・・・・・・43
図23　第4面個別遺構・出土遺物・・・・・・・・46
図24　第4面面上・構成土出土遺物・・・・・・　47
図25　第5面・第6面全測図・・・・・・・・・・49
図26　第5面個別遺構・構成土出土遺物(1)・・・50
図27　第5面個別遺構・構成土出土遺物(2)・・・51
図28　第6面個別遺構図・・・・・・・・・・・52
図29　確認調査出土遺物・・・・・・・・・・・53
図30　表土～第1面出土遺物・・・・・・・・・53
図31　表土・撹乱出土遺物(1)・・・・・・・・54
図32　表土・撹乱出土遺物(2)・・・・・・・・55
図33　表土・撹乱出土遺物(3)・・・・・・・・56
図34　表土・撹乱出土遺物(4)・・・・・・・・57
図35　表土・撹乱出土遺物(5)・・・・・・・・58
図36　表土・撹乱出土遺物(6)・・・・・・・・59
図37　表土・撹乱出土遺物(7)・・・・・・・・60
図38　表土・撹乱出土遺物(8)・・・・・・・・61
図39　表土・撹乱出土遺物(9)・・・・・・・・62

図版1　調査前全景・Ⅰ区第1面・第2面全景・第2面遺構1調査区周辺(西から)・(南から)・・・・・・・・・・・・89
図版2　Ⅰ区第1面南東側土層・試掘坑・第3面遺構9・遺構11～13・遺構109かわらけ出土状況・第3面全景・・・90
図版3　Ⅰ第3面遺構109・第4面遺構30・第4面南側検出状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
図版4　Ⅰ区第4面・Ⅰ区調査区崩落状況・Ⅱ区第1面遺構40・遺構41・第1面全景・・・・・・・・・・・・・・・92
図版5　Ⅱ区第2面・遺構39・遺構43・遺構44・遺構45・遺構48・遺構50・第2面上層全景・・・・・・・・・・・93
図版6　Ⅱ区第2面遺構50・第3面全景・第4面遺構62・第4面全景・Ⅱ区西壁セクション・・・・・・・・・・・・・94
図版7　Ⅱ区西壁セクション・第4面遺構39セクション・遺構58・遺構59・第4面全景・第5面全景・・・・・・・・95
図版8　Ⅱ区第5面遺構64・65・67・68・69・70・第5面全景(南から)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・96
図版9　Ⅱ区第6面遺構39・86・87・第6面遺構出土状況・第6面全景・第1面遺構39・・・・・・・・・・・・・・・97
図版10　Ⅱ区遺構39・・・・・・・・・・・・・・・・・98
図版11　第1面遺構39・遺構41・面上・構成土・第2面遺構1出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99
図版12　第2面遺構1(2)・遺構50・遺構45・遺構48・面上出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100
図版13　第2面構成土・第3面遺構109出土遺物・・・・101
図版14　第3面面上・構成土出土遺物・・・・・・・・102
図版15　第4面遺構30出土遺物(1)(2)・・・・・・・103
図版16　第4面遺構23・遺構56・遺構61・遺構62・面上・構成土出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104
図版17　第5面遺構64・遺構65・構成土・確認調査出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・105
図版18　表土～第1面・・撹乱出土遺物(1)・・・・・106
図版19　表土・撹乱出土遺物(2)・・・・・・・・・・107
図版20　表土・撹乱出土遺物(3)・・・・・・・・・・108
図版21　表土・撹乱出土遺物(4)・・・・・・・・・・109
図版22　表土・撹乱出土遺物(5)・・・・・・・・・・110
図版23　表土・撹乱出土遺物(6)・・・・・・・・・・111

第一章　調査に至る経緯

令和２年７月、当該地における土木工事について事業者より鎌倉市教育委員会文化財課へ相談があった。その内容は、現地表下 732.5cm に達する鋼管杭工事を行う個人専用住宅建設の計画であった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、事前に行なった確認調査の結果、現況地盤面より深さ 80 cmで中世遺物包含層、遺構を確認し、更に下層まで遺跡が残存していることが確認された。その結果により、当該工事計画が埋蔵文化財に影響を及ぼすことが避けられないとの判断に至った。

令和２年10月26日付で事業者より文化財保護法第93条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出を受理した。これに対して、令和２年 11 月 16 日付で神奈川県教育委員会教育長より発掘調査を実施する旨の指示が通知され、当該地の埋蔵文化財については発掘調査を実施して、記録保存の措置を図ることとなった。事業者は令和３年４月 24 日付で鎌倉市教育委員会に発掘調査依頼書を提出し、発掘調査は令和３年５月 24 日に開始し、令和３年９月７日に終了した。

文書種別・内容		文書番号	日付	発信者	受信者
確認調査	依頼		令和２年７月 10 日	事業者	鎌倉市教育委員会
	実施		令和２年９月 30 日 ・令和２年10月１日		
文化財保護法93条	提出		令和２年 10 月 26 日	事業者	神奈川県教育委員会
	通知	文遺第61093号	令和２年 11 月 16 日	神奈川県教育委員会	事業者
出土品の手続	発見届		令和３年９月 27 日	鎌倉市教育委員会	神奈川県警
	保管証		令和３年９月 27 日	鎌倉市教育委員会	神奈川県教育委員会
	認定と帰属	文遺第51019号	令和３年 10 月 21 日	神奈川県教育委員会	鎌倉市教育委員会 ・土地所有者

横小路周辺遺跡（二階堂字荏柄 81 番 22）発掘調査にかかる届出等の文書

＊令和5年8月22日正誤表の内容を追記
(鎌倉市教育委員会)

第二章　遺跡の位置と歴史的環境

第１節　歴史的環境（図１～図４・表２）

本遺跡は鎌倉市の中央部に位置し、旧鎌倉地区を囲繞する標高 50～140m の急峻な山稜から南に伸びる尾根の南側山麓に位置する。隣接する荏柄山の標高は 61.5m、当該地の標高は 15.8m である。本遺跡は荏柄天神社が鎮座する荏柄山の南麓に位置する。本遺跡周辺では鎌倉地区中央部を東西に流れる滑川の支流二階堂川が西流し、荏柄天神社参道東側で南に転じて滑川に注いでいる。本遺跡東側では荏柄山東の薬師堂ヶ谷を流れる平子川が南流して二階堂川に合流し、西側では荏柄山西の谷戸（東御門）を流れる東御門川が南流している。本遺跡は二階堂川とその支流東御門川及び平子川に挟まれた、山稜下の自然堤防上に位置する。

本調査地が所在する二階堂字荏柄は長治二（1105）年創建と伝えられる荏柄天神社の所在地及びその

周辺地域の地名である。荏柄天神社の西約 100mから西は雪ノ下、北西は西御門と地名が変わる。周辺には東に源頼朝創建の永福寺跡（国指定史跡）、西には法華堂跡（源頼朝墓・北条義時墓　国指定史跡）・大倉幕府跡、南西には源頼朝創建で源実朝・北条政子の墓所となった勝長寿院跡、南東には行基開山と伝える杉本寺が存在する。荏柄天神社境内は背後の山林を含め国指定史跡に指定されている。各史跡等との位置関係は国指定史跡永福寺跡が北東 450m、国指定史跡法華堂跡（北条義時墓）は北西 300m、大倉幕府跡伝承地は西方 300m、勝長寿院跡は南西 500m である。本遺跡は国指定史跡荏柄天神社境内の南側に所在し、荏柄天神社本殿の南東約 90m、国指定史跡範囲南辺から 35m に位置している。

字荏柄に属する荏柄天神社南東麓は荏柄天神社の別当坊一乗院や社家の所在地と推定され、水戸光圀が編纂を命じた『新編鎌倉志』（図 3-1）や江戸幕府官撰の地誌『新編相模國風土記稿』（図 3-2）には天神社階段下東側に別当坊一乗院が描かれている。現在でも字荏柄 73 番 1 の荏柄山の南麓に別当の、82 番の山際に明治時代の宮司及び神社関係者の墓が存在する。一乗院は江戸時代には東寺末の真言宗寺院であったが廃仏毀釈により廃され、荏柄天神社は二階堂村の村社に格付けされた。宮司は鎌倉宮関係者が、後に鶴岡八幡宮宮司が兼務した。一乗院の地は上地され、民間に払い下げられたが、明治 30 年までは荒蕪地で二階堂村が管理していたことが分かる（註 1）。調査地は別当坊所在地の南端に位置し、南側の道路（お宮通り）との比高差が 0.5m 程存在する。また北側宅地との比高差も 0.5m ほど有り、本調査区を含めこのお宮通りより一段高い部分が字荏柄に含まれ、低い部分が字横小路に含まれる（図 3-3 註 2）。

本遺跡付近の低地は旧石器時代には海底であったが縄文時代中期には離水して砂浜が形成され、以後次第に砂丘が形成された。弥生時代中期には現在の海岸から 400m、古墳時代後期には 250m の地点まで遺跡が形成されており、相模川の砂の供給により砂丘の形成が進み、陸地化が進行したことが窺われる。発達した谷戸からの水系に加え、砂丘の形成により砂丘間低地が加わり、古墳時代後期までには内陸部に複雑且つ広大な低湿地が多く形成され、砂丘上に黒色粘質土が形成されたため、それを可耕地として砂丘上や河川の自然堤防上に弥生時代後期～古墳時代前期まで集落が形成されることとなった。しかしこの集落は古墳時代前期に発生した洪水により埋没し、古墳時代後期になって初めて従来の集落とは異なる場所に集落が形成されることになる。この状況は鎌倉市に隣接する藤沢市・逗子市でも認められる。古墳時代後期の遺跡は海岸砂丘地帯をはじめ、砂丘後背湿地に面した砂丘上に形成された。古墳時代後期以降も砂丘の形成は進み、20 世紀に入り相模川にダムが形成されることにより砂の供給が途絶え、新たな砂丘の形成は終了した。

古くは荏柄天神社石段下の西側宅地（二階堂字荏柄 77 番）で井戸掘削に際し地表下 3m（標高 9m 許り）の所から縄文時代前期諸磯ｂ式・中期阿玉台式の土器・粘板岩製礫器・凹石が出土している。発見位置の直下は砂層であったとあるから、この時期には陸化し、砂浜が形成されていたことが指摘されている。また横浜国立大学付属小学校校庭では小使室前に井戸を掘った際、地表下 4m、標高 6m 程の高さで砂層が検出され、その上面から縄文時代後期の称名寺式土器が出土している。（註 3）

当該地周辺の弥生時代遺跡は県道金沢鎌倉線の筋違橋と岐れ道の間の道路南側、滑川北岸の河岸段丘上に確認されている。弥生時代中期～古墳時代前期の集落跡が存在し、方形周溝墓も確認されているが、この時期には南・東側が高く、水は南から北、東から西へ流れていたと推定されている（註 4）。

古墳時代後期には北条義時法華堂跡の山頂付近に島津忠久墓・大江広元墓・毛利季光墓と称される横穴墓、その東山麓にも横穴墓が存在する。これ以東には横穴墓は確認されていない（註 5）。
奈良・平安時代になると荏柄天神社南側、滑川までの平坦地（大倉幕府周辺遺跡②地点）では 8 世紀～

10 世紀後半頃までの遺物を含む竪穴住居址や溝等が確認されている。隣接する①地点でも同様の遺構が確認されているが、古代の遺構群については報告がなされていない。大倉幕府周辺遺跡④・⑤地点・横小路周辺遺跡⑫でも同様の年代の遺物が出土しているが、調査面積が狭小のためか、明確な遺構は検出されていない。横小路周辺遺跡⑬では溝と竪穴住居址が確認されており、出土遺物は 9 世紀後半とされている。このように荏柄天神社南側では奈良時代～平安時代までの集落跡が検出されている。この地域を『和名類聚鈔』・『正倉院文書　相模國天平七年封戸租交易帳』に記載されている鎌倉郡荏草郷に比定する見解が『新編相模國風土記稿』・『鎌倉市史　総説編』に示され（註 7）、定説化している。荏柄天神社南麓で確認されたこれらの遺跡はこの説を補完するかのように見えるが、これは古墳時代後期の横穴墓の分布から見ると全くの誤りである。当該地を含め以東の旧鎌倉十二郷の内は鎌倉郷内と考えるのがよいと考える（註 8）。

大倉幕府周辺遺跡②地点では中世以前に意識的に破壊され新たな土地区画が行われていることが確認され、上幅 3.6m、深さ 1.4m の薬研堀が確認されている。ここからは旗指古窯の製品が確認され、埋没年代の上限が 10 世紀後半と推定（註 9）されており、調査者は溝に囲まれた館を想定している（註 10）。筆者は『保暦間記』の記事から「大倉幕府」が平直方館を引き継ぐものと推定し、この付近に存在した 10 世紀後半段階からの遺跡の上に造営された可能性を指摘しているが、この薬研堀の埋没年代の上限が 10 世紀後半であることは、平直方の父維時の代に相当する。ただし、11 世紀段階以降の出土品等、直接的な資料は得られていない。隣接する大倉幕府周辺遺跡①地点でもこれと連続・関連する竪穴住居址群や溝等の遺構が確認されているが、報告が行われていない（註 11）。

荏柄天神社は縁起に依れば長治元（1104）年八月二十五日、雷雨と共に一幅の憤怒天神画像がこの地に降ってきたため祀られたという。この伝承によれば付近に人家があったことが想像されようが、12 世紀前半代の遺構・遺物は確認されていない。後、源頼朝が大倉屋敷の鬼門の鎮守としたという（註 12）。史料上は『吾妻鏡』建仁二（1202）年九月十一日条に将軍源頼家が大江広元を奉幣使としている事が初見である。縁起等はこれを道真の三百年祭としている。菅原道真の没年は延喜三（903）年で、300 年に当たる。創建年号も満で 201 年に当たり没年と関連した伝承であろう。創建の年は疑わしく、後に建仁二年から百年程遡った年に求めたのかもしれない。ただ、大倉幕府周辺遺跡①・②地点で確認されている溝に囲まれた遺跡が存続しているのであればその鎮守として祀られた可能性はあろうが、「荏柄」の名が不審である。むしろ縁起には長治二年の記事に続き、「その後代々を経て、源二位右大将家、鎌倉大蔵ヶ谷に、殿作り有りし時、当社を造立有りて、鬼門の守護神とす。」とあり、源頼朝が大蔵御所の鬼門の守護として社殿を造営したとある。鬼門の位置は主屋の寝所から測られるから、基点は大蔵御所である。荏柄天神社の位置から大蔵御所の主屋を決めたとは考えづらいから、縁起に随えば、治承四(1180)年大蔵御所の造営に当たり、当初どこに社殿があったかは別にして、この時、荏柄天神社が勧請されたと考えられよう。是は平将門が新皇を名乗ったとき、その位は八幡神が与え、位記は天神が記したとの『将門記』の記事によるのだろう。治承・寿永の乱において反乱軍の首魁として出発した源頼朝にとって、その権威と正当性を示すのが八幡神と天神であったろう。其々を自らの館の正当な位置に配することは、館を建設するにあたって必要な行為であったと考えられる。

『吾妻鏡』文治元（1185）年九月一日条には勅使として鎌倉に下向した大江公朝の宿舎について「比企四郎東御門之宅云々」とあり、大倉幕府の東門付近にあった比企能員の館としている。建保元（1213）年三月二十五日条には「和田胤長屋地在荏柄前、依為御所東隣」、同四月二日条には「相州被拝領胤長荏柄前屋地」とある。和田胤長の荏柄前の屋地が御所の東隣に位置し、それを相州（北条義時）が拝領したこ

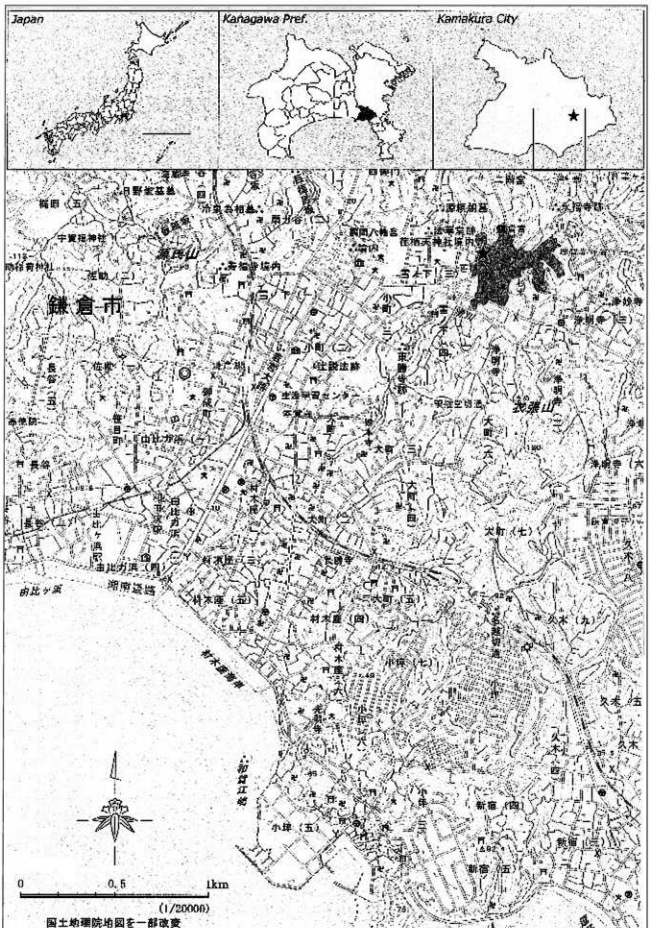


図１　調査地点の位置　★調査地点

図２　調査地点と周辺の遺跡

とが述べられている。御所東門付近には比企氏の宅があり、これが比企氏討滅に功のあった和田氏に与えられたと考えられ、それをまた北条義時が拝領していると考えられる。その位置は従来、『新編鎌倉志』掲載の絵図により荏柄天神社の西側に比定されているが、『吾妻鏡』の前述記事からは荏柄天神社の東西どちらかは特定できない。『新編相模國風土記稿』には荏柄社別当一乗院において寛政九（1797）年に書写した「頓朝屋舗圖」が掲載されており、北東隅の敷地がＬ字形に窪みそこに荏柄社の名が書かれている。さらに敷地内北東隅に弁天社が描かれているが、この弁天社は『新編相模國風土記稿』の「荏柄天神社図」や文政十一年（1827）六月に別当一乗院から寺社奉行に提出された図面の控である「荏柄天神

社指図」(註 13)にもこれと同位置に弁天社が描かれている。「頼朝屋舗圖」に依れば荏柄天神社の位置に「東御門」とも記されている。この事から「和田胤長屋地」の位置は荏柄天神社東側となり、同図に「東西に五十間」「南　大道」とあるから、大倉幕府の位置も東御門川と荏柄天神社との間、さらに南は「大道」までの南北に細長い区域となる。「大道」を二階堂大路とみるか六浦道とみるかは意見の分かれるところではある。筆者は以前六浦道と考えた（註 14）。しかし『吾妻鏡』文治三年正月十三日・建保元年十二月一日条に八田知家邸、正治元年五月七日条に畠山重忠邸が南御門に在ることが記されており、両邸は同時に存在していたから、大倉御所の南側に相応の空間地を想定せねばならない。南門は通路を介して六浦道へと通じていたのかもしれない。

『吾妻鏡』建長三（1251）年十月七日条には「薬師堂谷焼亡。延二階堂大路南一宇佐美判官荏柄家於至云々」とあり、薬師堂から出た火が二階堂大路南側に延焼し、宇佐美判官の荏柄の家まで至ったと述べられている。現在、関取場から北東に延び鎌倉宮の南側に至る道路を中世の二階堂大路と推定している（註 15）が、この道は字横小路に属し近世に河川を埋め立てた後に造成された道である（註 16）。このため二階堂大路は別の、大路の南側に屋敷を造れるほどの広い空間を持つ場所に求めなければならない。この火災を現在の地形に当てはめて考えると、薬師堂谷を焼亡したこの火災は薬師堂ヶ谷の西側の荏柄方面に類焼していることから、北東風によって二階堂川に沿って西に類焼したと考えられる。川を渡っていないのであれば二階堂川と荏柄山の間に二階堂大路を推定しなければならないし、川を越えていれば二階堂大路は二階堂川の南側に存在したことになる。川の南まで類焼したとすれば市立第二小学校付近の二階堂川東岸・滑川北岸で止まったと考えられる。このため、二階堂大路の二階堂川南側部分は市立第二小学校東側の尾根先を川に沿って東西に走っていたと考えられ、この時期の「荏柄」は現在の字「向荏柄」まで含めて考える事が必要であろう。発掘調査の成果によれば、①と③の間に二階堂大路の幅と方向が推測され、「鎌倉前期の二階堂大路？（両側側溝の中心間距離＝約 22m）」として図示されている(図 4)。この推定図では大路の東側の延長は二階堂川が南流を始める角付近に至っている（註 17)。このことから、二階堂大路は二階堂字四ツ石から西行し、⑩の西で南に折れ、二階堂川を渡り、川沿いに西行して現在の稲葉越橋の南側で二階堂川を渡り、市立第二小学校北側の道路付近を西行して二階堂川が南に流れを変える⑫の北側付近で川を渡り、①と③の間の道、関取り場から東行する道に至ると思われる。⑫では南北方向の道の一部が確認されているが、川を渡った道が南行する部分であろうか。

弘長元(1261)年五月八日、「荏柄神主平政泰」が木造天神坐像(重文)を造立した(註 18)。この事から荏柄社には「神主」が居たことが確認されるが、以後の資料には出てきていない。また神主館の場所は特定されていない。

『吾妻鏡』弘長三(1263)年十二月十七日条には、「荏柄社前失火。余炎至塔辻。宮内権大輔時秀家。被定御産所之所、同以不免災」、『鎌倉年代記裏書』弘安三(1280)年十月二十八日条にも「右大将幷義時時房朝臣法華堂、荏柄社幷尼寺二階堂相州館以下焼失。火本中下馬橋中条判官宿所云々」同延慶三(1311)年十一月六日にも「自安養院失火焼失所々、勝長寿院、法華堂、神宮寺、浄光明寺、多宝寺、理智光院、椙本、田代、二階堂、大門、荏柄社、其外堂社不知其数」と火災の記事がある。

元弘三(1333)年の鎌倉幕府滅亡に際しては火災の記録・伝承等は存在しない。室町時代になると享徳三(1454)年成立の『殿中以下年中行事』(『成氏年中行事』・『鎌倉年中行事』とも）には鎌倉公方が正月二十三日、二十五日に荏柄社に参詣し、二月二十三日から二十五日まで参籠していたことが記されている。

図３－１

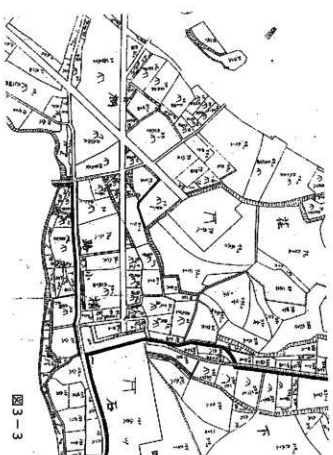


図３－３

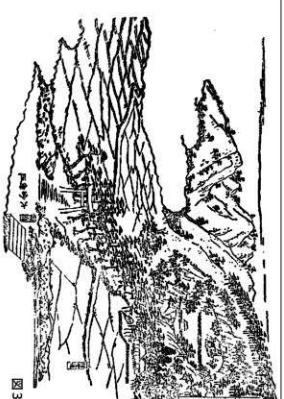


図３－２

図３-１　荏柄天神社図　図３-２　荏柄天神社――乗院図　図３-３　鎌倉町土地宝典

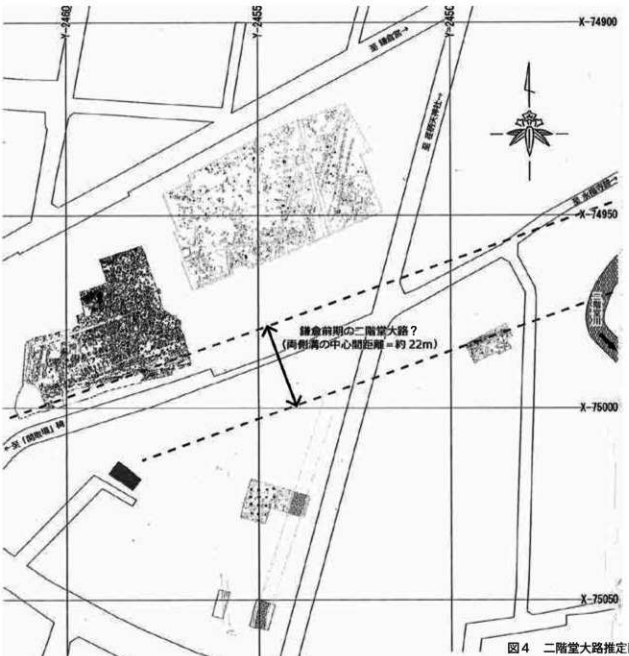


図4　二階堂大路推定図

『鎌倉大草紙』享徳四(1455)年六月十六日条には享徳の乱により今川範忠が鎌倉に乱入し神社仏閣を焼き払い、荏柄社の社壇を破り、天神の神体を駿河に乱取ったことが記されている。文明十八(1486)年、京都相国寺の万里集九が荏柄社に参詣した折には「梁上有兵燼之余痕」(『梅花無尽蔵』)と、建物に兵火による焼け跡が残っていた。享徳の乱により荏柄社はじめ周囲が戦火にかかったことがわかる。駿河の今川氏の元に乱取られた天神像は長享元（1487）年に還座(『鎌倉大草紙』)している。

天文十五(1546)年、北条氏康は川越出陣に当たり荏柄要害(城)に兵を籠め、不慮の備えとした(『関八州古戦録』「北条氏康河越後詰、付夜戦ノ事」)(註 19)。この城郭は荏柄天神社から法華堂跡までの山塊に所在する。鎌倉を防御するための城郭であったと考えられる。後北条氏は大道寺政繁を鎌倉代官に任じていたから、付近に大道寺氏の館(鎌倉代官所)の存在が想起される。天文十七(1548)年十二月二十七日、北条氏康は荏柄社社殿造営のため関を設け、関銭徴収の法を定めている(『荏柄天神社文書』)。関の場所は「関取場」の伝承が残り、一部発掘調査が行われている。ここでは東側に東御門川に面して竪

穴状の礎石建物跡が確認され、関所の跡と考えられている(註 20)。永禄四(1561)年、里見義弘は荏柄社の関所を破り、小田原に入らんとしたという(『関八州古戦録』)。長尾景虎は同年三月から関東に攻め入り、小田原を包囲したが、これに呼応したのであろう。景虎は小田原攻めの帰途鶴岡八幡宮に詣で、山之内上杉氏の家督を上杉憲正から譲られ、関東管領の職を継いで上杉政虎と称した。この時期、鎌倉内の北条氏勢力は一掃されたと考えられるから、荏柄城は落城し、天神社は合戦によりは被害があったことが想定される。法華堂・荏柄天神社に上杉方から狼藉禁止令が出された形跡がないことは、荏柄城の存在によるのかもしれない。

天正十八(1590)年四月、後北条氏を下した豊臣秀吉は鎌倉に入り、荏柄社等に軍勢甲乙人の乱暴狼藉・放火及び非分の課役等を禁じ(『相州文書』・『鶴岡八幡宮文書』)、七月には社領安堵の御朱印、造営等を沙汰し、翌天正十九年関東に入部した徳川家康は社領十九貫二百文の朱印を下し、修復を命じた(『鎌倉荏柄山天神社由緒書』)。荏柄天神社に別当が確認されるのは戦国時代になってからである。天文十五(1546)年十月五日付『了源補任状』では東寺大勧進了源が某氏を一乗院に補任しており、以後、明治元年の神仏分離令発布まで存続する。万治元(1658)年一乗院住持柳長が示寂したが、彼は大僧都法印であった。寛政三(1791)年、鶴岡八幡宮供僧増福快雅が荏柄天神社一乗院別当を兼任し、同八(1796)年には一乗院に移住している(『鶴岡八幡宮寺諸職次第』)。高位の僧が別当に任ぜられており、江戸時代において荏柄天神社の位置づけが非常に高かったことがわかる。実際、寛永元(1624)年には鶴岡八幡宮若宮社造営に併せ、旧若宮社本殿が荏柄天神社に移築されている。これが現在の荏柄天神社本殿で、徳治三(1308)年建立の鎌倉最古の木造建造物(国指定重要文化財)である。寛文八(1668)年には鶴岡八幡宮修復に伴い、徳川家綱から御金御材木数百本を賜い、社頭末社等修復し、一乗院を修理している。

明応三(1494)年に亡くなった上杉定正の年次未詳書状(『荏柄天神社所蔵文書　上杉定正書状』)には「荏柄少別当」に宛てたものがある。鶴岡八幡宮の例によれば別当の外に僧職の「少別当」が居たことがわかる(註 21)。鶴岡八幡宮と同様の寺社構成であり、これと別当坊一乗院の存在から別当の、天神坐像体内銘「荏柄神主平政泰」から荏柄神主の存在が確認され、天神社の近隣に別当坊・少別当坊(屋敷)・神主屋敷が存在したことが推測される。供僧の存在は確認されていないが、政権からの位置づけは高く、供僧(坊)の存在は考慮すべきかも知れない。しかし鶴岡八幡宮では別当の補任は長く行われておらず供僧により社務が運営されていたから、供僧が居ないから別当が任ぜられていたのかもしれない。

文政四(1821)年、荏柄社に詣でた十方庵大浄は「三拾三　荏柄山天満宮神体の霊筆」として「一　相州鎌倉郡荏柄の天満宮は、鶴ガ岡の東凡そ三町路傍の北側にあり、大門長さ凡そ二町、左右の行樹みな桜樹のみ也。既に行尽せば別当は右側に家居す。是より石階三拾五段を登りて中門にいたる。荏柄山と認めし額をあげたり。」と別当坊一乗院が石階の東側に存ったことを記しており、絵図資料との齟齬はない(註 22)。神仏分離に伴う上地で一乗院は所領・地所を喪失して廃寺となったが、次のような話を伝えている。「一乗院はそんな訳で、つぶれちまったんですが、当時尼さんが一人いて、荏柄天神の宝物を預かっていたんです。無檀家で食えなくなった尼さんは、逃げるときにどういうふうにしてもち出したんですか、目ぼしい宝物をほとんどもち出しちまったんです。なんでも伊豆の方へ逃げちまったってことですが、せっかく大事な宝物がそのとき散逸しちまったんです。」(註 23)僧寺にどのような経緯で尼が入ったのか定かではないが、鎌倉宮から宮司が任命されるまでの間の混乱であろうか。神仏分離に伴う上地があった後も尼が居住する建物があったことがわかる。神仏分離後、建物が取り壊されるまで多少の時間があったのであろう。

現在の岐れ道から鎌倉宮に至るお宮通は明治元年(1868)に創建された鎌倉宮の参道で、それ以前の

道は「覚園寺道」と言われた。「覚園寺道は古い庚申塔などに刻んでありますが、関場から二階堂大路を通って、横小路から薬師堂谷へ入る道と、荏柄天神の崖下を山の根に沿って道があり、それが薬師堂谷へ入れるようになっていたんですが、いまは途中が民家になっちまってますから行けません」（註 24）とある。この道は山裾を廻り、別当坊と山裾の境に通じていた道であろう（註 2　前掲書参照）。

この地域の中世遺跡からは、①・②・二階堂字荏柄 3 番 6 外地点（註 25）で 12 世紀第 4 四半期と推定される「ロクロ成形静止糸切りのかわらけ」と「てづくね成形かわらけ」が出土している。②は施設建物の中心部に当たると推定されるが、本報告が刊行されていないため詳細は不明である（註 26）が、二階堂字荏柄 3 番 6 外地点でも柱間 8 尺の掘立柱建物跡が検出されており、この建物も通常の柱間 7 尺の建物より大きい。このため、この建物もこの区域の主要建物を構成する一棟と考えられる。そうするとこの建物のさらに南側に施設の区画を求めねばならないであろう。③で検出された東西溝からはてづくねかわらけが出土し、13 世紀前半期には埋没・廃棄過程に至ったとされている。この東西溝はさらに北側に移っている。下層東西溝からは静止糸切りのかわらけが出土している。下層遺構の東西溝から出土したかわらけについては押木氏の指摘するように、源頼朝入部以降永福寺創建までの間の土器と考えることが適切であろう（註 27）。上層東西溝（1036）の埋没年代が「13 世紀前半期」であるとすれば、二階堂川西岸に於ける二階堂大路の設置は大倉御所から宇津宮辻子御所への移転後とも考えられる。御所の東門が直ぐ二階堂川に面していたことも考えられよう。

No.	地番	調査年度（開始年度）	所収文献
横小路周辺遺跡（No. 259）			
❶	二階堂字荏柄 880 番	1982 年度	『向荏柄遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会　馬淵和雄・草　廣志・福田　誠ほか 1985
❷	二階堂字荏柄 874 番	1982 年度	『向荏柄遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会　馬淵和雄・草　廣志・福田　誠ほか 1985
❷	二階堂字荏柄 9 番 1	1987 年度	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 6』鎌倉市教育委員会　鶴川英夫 1990 『横小路周辺遺跡発掘調査報告書』横小路周辺遺跡発掘調査団　鶴川英夫 1991
❸	二階堂字横小路 110 番 3	1994 年度	『横小路周辺遺跡―未報告調査遺跡の調査―』横小路周辺遺跡発掘調査団　宗基秀明ほか 1996
❸	雪ノ下五丁目 557 番 1	1996 年度	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会　野木賢二 1998
❸	二階堂字横小路 93 番 11	1997 年度	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会　野木賢二 1999
❸	二階堂字荏柄 10 番 6 外	1998 年度	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会　福田　誠ほか 2002
❸	二階堂字荏柄 10 番 1	2000 年度	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 19』鎌倉市教育委員会　草　廣志ほか 2003
❸	二階堂字金下 323 番外	2001 年度	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20』鎌倉市教育委員会　福田　誠 2004
❸	二階堂字四ツ石 115 番 3 の一部	2003 年度	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会　福田　誠 2007
❸	二階堂字荏柄 875 番 4	2008 年度	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 34（第 3 分冊）』鎌倉市教育委員会　永田史子・青藤修治 2018
❸	二階堂字稲荷越 856 番 5	2009 年度	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 35（第 3 分冊）』鎌倉市教育委員会　永田史子・栄澤雅美 2019
❸	二階堂字荏柄 939 番 10	2011 年度	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 31（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会　藤谷　満 2015
❸	二階堂字横小路 98 番外	2017 年度	『横小路周辺遺跡（No. 259）』島田建　鎗治福勝二ほか 2021
❸	二階堂字荏柄 818 番 1	2017 年度	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 37（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会　押木弘己 2021
❸	二階堂字荏柄 26 番イの一部	2018 年度	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 37（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会　押木弘己 2021
❸	二階堂字荏柄 61 番 22	2021 年度	本報告
大倉幕府周辺遺跡群（No. 49）			
①	二階堂字荏柄 38 番 1	1991 年度	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 9（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会　馬淵和雄 1993
②	二階堂字荏柄 38 番 2	2011 年度	『第 22 回　鎌倉市遺跡調査・研究発表会　発表要旨』鎌倉考古学研究所　齋木秀雄 2012
③	二階堂字荏柄 12 番 8	2016 年度	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 34（第 1 分冊）』鎌倉市教育委員会　押木弘己 2018
④	二階堂字荏柄 76 番 8	2005 年度	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 30（第 1 分冊）』鎌倉市教育委員会　伊丹まどか　ほか 2014
⑤	二階堂字荏柄 76 番 4	2006 年度	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 35（第 3 分冊）』鎌倉市教育委員会　永田史子・栄澤雅美 2019
⑥	二階堂字荏柄 38 番 12、16	2018 年度	『大倉幕府周辺遺跡群（鎌倉市 No. 49 遺跡）発掘調査報告書』博通　滝澤弘子・富田　祈 2021

❼・❽は大倉幕府周辺遺跡、❾は覚園寺旧境内遺跡、❿は永福寺跡の範囲に所在

周辺調査地点一覧

西暦	元号	日付	事例
1213	建保元年	三月二十五日	和田義盛屋地在荏柄前、依為御所実検『吾妻鏡』
		四月二日	相州被得領掌長荏柄前屋地『吾妻鏡』
1251	建長三年	十月七日	薬師堂谷、焼亡。延二階堂大路南　宇佐美判官荏柄家於至云々『吾妻鏡』
1261	弘長元年	五月八日	荏柄神主平政泰　不造天神全像を建立、『天神全像造胎内銘文』
1263	弘長三年	十二月十七日	荏柄社前失火、余炎到塔辻。宮内権大輔時秀家。被定御座所之処。同以不失炎。『吾妻鏡』
1280	弘安三年	十月二十八日	右大将并義時　時房等朝臣　法華堂、荏柄社幷尼寺　二階堂相州館乙下焼失。火元牛下馬橋中條作吉郎所云々。『吾妻鏡』
1311	延慶三年	十一月六日	鎌倉大火。安養院より失火。荏柄社焼失す。(鎌倉年代記裏書・北条九代記) 自安養院失火、楊木、田代、大門、荏柄社、其外堂社不知其数
1454	享徳三年		『殿中以下年中行事』(応永年中行事・鎌倉年中行事とも)　鎌倉公方、正月二十三日、二十五日に荏柄社参詣。二十五日には殿中で千句の催しあり。二月二十三日～二十五日まで荏柄社に参詣。『吾妻鏡』
1455	享徳四年	六月十六日	今川範忠、鎌倉に乱入し神社仏閣を焼き払う。この時荏柄社の社壇を破り天神の身体駿河に乱取す(鎌倉大草紙)
1486	文明十八年		扇谷相国寺の僧万里集九、荏柄社を参詣『詣荏柄の天満宮　梁上有兵燹之余痕』(『梅花無尽蔵』)
1487	長享元年		荏柄天神御神体(画像)駿河より還座(鎌倉大日記)
1494	明応三年		上杉定正没、定正年次未詳書状に「荏柄社別当」宛てあり『上杉定正書状』
1546	天文十五年	十月五日	東寺大勧進了源、某氏を一乗院に補佐する。『了源補任状』 荏柄の要害(城)へ兵を籠めの儀とする(北条氏康)『関八州古戦録』 『北条氏康、川越後詰、付衆軽ノ事』 北条氏康、荏柄社鎮座祭のため関を設け、関銭徴収の法令を定める。(一説に天文十三年『1544』とする)『鎌倉荏柄御造営関任置法』
1561	永禄四年		里見義弘、荏柄社の関所を破り小田原に入るという
1590	天正十八年	四月二日	豊臣秀吉、荏柄社等に軍勢甲乙人等の濫妨狼藉、放火及び非分の課役の賦課等を禁ず(相州文書　鶴岡八幡宮文書)
		七月	豊臣秀吉、社領御朱印造営等を分ず(鎌倉荏柄天神山天神社由緒書)
1591	天正十九年	十一月六日	徳川家康社領永十九貫＝百文の朱印を下し修復を命じる(鎌倉荏柄山天神社由緒書)
1624	寛永元年		鶴岡八幡宮に併せて八幡宮宮を本殿に移築『吾妻鏡』
1658	万治元年		一乗院住持禅長示寂。『大僧都法印御長五十年忌追福供養塔』
1668	寛文八年		鶴岡八幡宮修復に伴い、徳川家綱より御金御材木数百本を賜い社頭末社等悉皆修復し一乗院を修理。(鎌倉荏柄天神山由緒書)
1697	元禄十年		八幡宮御造営の材木を賜わり、社頭残らず修理を行う(鎌倉荏柄天神社由緒書)
1736	元文元年		八幡宮修復の際、先規の通り残木を賜わり、修理を行う。(乍恐以書付奉願上候)
1781	天明元年		八幡宮修復の際、先規の通り残木を賜わり、修理を行う。(乍恐以書付奉願上候)
1791	寛政三年		鶴岡八幡宮供僧増福院快雅、荏柄天神社別当一乗院兼任す(鶴岡八幡宮寺諸職次第)
1796	寛政八年		春快雅一乗院に移住(鶴岡八幡宮寺諸職次第)
1821	文政四年		十万度大夢、荏柄社に詣でる。『三怡三　荏柄山天満宮神体の置筆、祖州鎌倉郡荏柄の天満宮は、鶴が岡の東八そ三町許傍の北側にあり、大門長さ凡二町石有の行樹みな桜樹のみ也、既に行尽くせば別当はお側に家居す。これより石階三拾五段を登りて中門にいたる。荏柄山と認めし額をあげたり』(巡遊雑記)
1868	明治元年		神社分離令発布。一乗院と分離し荏柄天神となる(当時尼が一人居て荏柄天神の宝物を預かっていた。伊豆の方に逃げたとも)
1871	明治四年		廃藩置県が実施され社寺領が上地された。(としよりの話) 明治初年　荏柄は五軒で立川が四、関沢が一で、立川姓でまとまっている。(としよりの話) 覚園寺道は(中略)関場から二階堂大路を通って横小路から薬師堂と荏柄天神の崖下を山ノ根に沿った道がありそれが薬師堂谷に入れるようになっていた。(としよりの話)
1873	明治六年		二階堂村鎮守の熊野神社と合祀し村社に別格される。
			＊熊野権現―明治三十年ごろに荏柄天神社に合祀されることに決定され、八雲神社(神興)と共に移転し、当初は神興を一乗院跡地へ草屋根の形で移転した。ところが一乗院跡地は国の所管となり他へ払い下げられたので至急荏柄天神境内地へ移転するように申込まれ現在地に移転した。大正震災まで

『地鎮座900年　荏柄天神社　資料編　論考編』平成十六年十月二十五日　荏柄天神社より作成

<註>

註1　『御鎮座九百年　荏柄天神社　資料編・論考編』　2004年10月　荏柄天神社　熊野神社について「明治三十年頃に荏柄天神社に合祀する事に決定され、八雲神社(神輿)とともに移転し、当初は神輿一乗院跡地へ草屋根の形で移転した。ところが、一乗院跡地は国の所管となり他へ払い下げられたので至急荏柄天神境内地へ移転するよう申し込まれ、現在地へ移転した」とあり、一乗院跡地は廃絶後しばらく未利用地になっていた事がわかる。以下、本文中特に注記のない記述は同書による。

註2　『鎌倉町土地宝典』

註3　赤星直忠　「縄文土器時代の鎌倉」『鎌倉市史　考古編』　1959年3月初版発行　鎌倉市史編纂委員会編　吉川弘文館

註4　『鎌倉家城調査会報告書　第47集　神奈川県・鎌倉市　大倉幕府周辺遺跡発掘調査報告書　―雪ノ下4丁目581番5地点―』　2007年3月　有限会社　鎌倉遺跡調査会

註5　田村良照　「古代鎌倉の横穴墓様相」　(『東国歴史考古学研究所調査研究報告第30集　鎌倉の横穴墓　―調査報告と資料集成―』　2002年5月　東国歴史考古学研究所)には浄明寺五丁目の公方屋敷と十二所の明石谷に横穴墓の印があるが、現地確認した限りでは「やぐら」である。

註6　齋木秀夫　「大倉幕府周辺遺跡群（二階堂字荏柄38番2）の調査」　『第22回　鎌倉市遺跡調査・研究発表会　発表要旨』　2012年8月　特定非営利活動法人　鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会

註7　高柳光寿　「二　尺度郷・荏草郷」『鎌倉市史　総説編』　1959年10月初版発行　鎌倉市史編纂委員会編　吉川弘文館

註8　古墳時代後期の横穴墓の分布を見ると鎌倉郷・荏草郷に比定される滑川流域に展開する横穴墓群はこの法華堂周辺の横穴群を分布の東限としている。荏草郷は滑川の中・上流域、逆川の上流域に領域を比定されているが、集落を反映する横穴墓が存在しないし、また可耕地となる低地も少なく、一郷を形成するような地形的領域を持っていない。沼浜郷が田越川流域の逗子市域全域を含むのとは対照的である。一方、尺度郷は横浜市栄区鰯川流域～柏尾川左岸～境川合流地点（藤沢市川名）～境川藤沢橋付近・藤沢市藤沢までを含む広大な区域と成り、そこに含まれる横穴墓群も莫大である。これは「尺度」を「サカト」と読み、「坂戸」を「坂の入口」と理解し、その位置を東海道の藤沢宿から大鋸・鉄砲宿への登り口にあった坂戸の地名を「尺度郷」の由来としたためであるが、この道は古代では相模国の中心的な道とはなっていない。この場合の「坂戸」は相模国鎌倉郡から武蔵国久良岐郡に向かう峠道、後の鎌倉街道中・下ノ道と称される相模・武蔵国境に位置する坂の名称ととらえるのが適当と考える。そうすると横穴墓の分布域から片瀬郷の領域と考えられる藤沢市川名地区を除くと鰯川流域～鎌倉市砂押川流域と柏尾川左岸の小袋谷川流域と手広川・大塚川流域の二つに分かれ、それぞれ相応の横穴群が分布している。このうち鰯川流域～鎌倉市砂押川流域の横穴墓群が「尺度郷」を後に形成する集団の反映とすれば、柏尾川左岸の小袋谷川流域と手広川・大塚川流域の横穴墓群はどのような集団の反映と見るべきであろうか。これこそ後に「荏草郷」を形成する集団の反映と見るべきではないかと考えている。柏尾川左岸の小袋谷川流域と手広川・大塚川流域こそ「荏草郷」の領域であろう。荏柄と荏草は全く関係がないとの考えも成り立とうが、私見を是とすれば、荏柄天神社は源頼朝の居館として移築された山之内にあった知家事兼道の家と共に大倉幕府に近接して奉祭されたということも考えられよう。これについては別項を予定している。

註9　押木弘巳　「相模国における古代末期の土器様相」　『鎌倉かわらけの再検討　―大倉幕府周辺

遺跡の一括資料の分析から―』　2016年3月　鎌倉かわらけ研究会

註10　報告者は「断面V字形野溝は、敷地の北西から北東にかけてL字形に掘られている。年代は河川が埋まった後で出土遺物は少ないが、11世紀の灰釉陶器が底面から出土している。館・屋敷等の区画溝である可能性がある」としている。この灰釉陶器は前掲註9により年代が訂正されている。

註11　馬淵和雄　「2．大倉幕府周辺遺跡群　二階堂字荏柄38番1（No.49）」　『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　9　平成4年度発掘調査報告（第2分冊）』　1993年3月　鎌倉市教育委員会

註12　『相州荏柄山天満宮略縁起』　本縁起の末尾に「東都隠士　橘千蔭書之」とあり、国学者・歌人の加藤千蔭（1735～1808）が書したことが分かるが、1802年頃、没後900年祭に合わせて書されたのかもしれない。『御鎮座九百年　荏柄天神社』[資料編]　2002年10月　荏柄天神社　所収

註13　前掲註12

註14　玉林美男　「大倉幕府跡の中・近世の記事について」　『鎌倉市教育委員会文化財紀要　第4号』　2022年3月　鎌倉市教育委員会　なお、ここでは方四十丈の正方形（条坊制の一町）で考えた。これは図に示された弁天社の位置が特定できなかったためである。しかし弁天社が荏柄天神社石階の西側に確認されたので、南北に長い形に訂正する。この復原は宇津宮辻子幕府跡が南北に長いことと関係すると思われる。

註15　高柳光寿　「第十一章　鎌倉の市街　十一　西大路・二階堂大路」『鎌倉市史　総説編』1959年10月初版発行　鎌倉市史編纂委員会編　吉川弘文館

註16　鎌倉宮前の南北道に近接する❻地点の発掘調査では「二階堂大路」とされる川に面した道の北端から北へ約6mまでが旧河川の埋め立てと指摘されており、⓫地点の調査では現道付近は削平により道路跡は発見できなかったが、⓫の南側の向いの同100番1地点での確認調査では河川敷の埋め立てであり、遺構は検出できなかった。また❹地点の調査では轍跡と考えられる南北方向の小溝が多数検出されており、⓾地点では同様の東西方向の溝が確認され、二階堂大路の一部と推定されている。一方、二階堂川が南行する部分の以西では③地点では道路と並行すると考えられる東西溝が、①地点では道路の側溝と考えられる溝と木組み側溝の支持材の遺構と考えられる対の柱穴列などが確認されている。しかし⑥の現道の南側、字荏柄562番2地点の立会調査では道路状の遺構や溝は確認されていない。

註17　押木弘己「大倉幕府周辺遺跡群(No.49)　二階堂字荏柄3番6外地点」『鎌倉市緊急調査報告書35』　鎌倉市教育委員会　2019年3月

註18　註1前掲書　「天神坐像体内銘」

註19　この荏柄要害(城)は平成16年、荏柄天神社境内の国指定史跡指定に際して行った境内地の現地確認において筆者が発見し、城郭研究会理事大竹正芳氏にお願いして現地測量を行っていただいた。大竹正芳　「荏柄の要害遺構確認調査報告概要」『城郭史研究第26号』　日本城郭史学会　2007年1月　東京堂出版

註20　大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団　『神奈川県鎌倉市　大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下字大倉耕地569番1地点発掘調査報告書』　1990年3月

註21　『鎌倉の廃寺　鶴岡八幡宮寺』　貫達人　有隣新書　有隣堂

註22　註1前掲書

註23　「二階堂」　『鎌倉市文化財資料　第7集　としよりのはなし』　鎌倉市教育委員会社会教育部文化財保護課　編　1990年第5刷発行　鎌倉市教育委員会

註24　註17前掲書　なお、ここでは横小路は鎌倉宮前の短い南北道と説明されている。

註25　押木弘己　「大倉幕府周辺遺跡群(No. 49)　二階堂字荏柄12番8外地点」『鎌倉市緊急調査報告書　34』　鎌倉市教育委員会　2018年3月

註26　現地視察した鎌倉市文化財専門委員会委員　故鈴木亘先生は、礎石建ち柱間一丈の巨大な建物で、尋常な遺構ではないと指摘されていた。

註27　鎌倉では12世紀前半をイメージさせる地は「杉本」である。しかし杉本寺は『吾妻鏡』では「大倉観音堂」で、文治五年十一月二十三日の火災に際し、自ら椙の根元にお移りになったという伝説ができ、杉本の観音と呼ばれるようになりなった(『杉本寺縁起』)。杉本の名称は鎌倉時代にできたものであり、それ以前の人物である三浦一族杉本氏とは関りはない。杉本寺前面の発掘調査（杉本寺周辺遺跡発掘調査団編　『神奈川県鎌倉市　杉本寺周辺遺跡　二階堂字杉本912番1ほか地点発掘調査報告書』　鎌倉市教育委員会　2002年3月）でも12世紀前半にまで遡る遺構・遺物は検出されていない。

第2節　調査の方法

個人専用住宅の建設に伴い発掘調査を実施した。掘削による発生土を敷地内に仮置きする都合からⅠ区・Ⅱ区と分割して調査をしている。各区ともに国家座標点（JGD2011）の基準軸を用い市道上に打設された3級基準点（№204）、及び補助点として都市再生街区多角点 3A008 の2点間距離を起点とし、開放トラバース測量によって光波測距儀で測定を繰り返して現地測地内まで基準点（標高を含む）を移設し、検出した遺構を計測・記録している。Ⅰ区調査中、度重なる豪雨のために調査区壁が崩落、遺構が埋没してしまい、安全性を考えⅠ区は調査を中断したため、調査区壁及び下層の調査・記録ができず、調査を終了した。

第3節　堆積土層（図6・図7）

調査区北壁・西壁で確認した土層堆積図を用いて堆積状況を上層より説明する。

調査前現地表の標高は約 15.80m を測り、ほぼ平坦であった。現場南側道路上の標高は約 15.30m であり、調査地北側と約 50cm の高低差がある。重機によって表土・現代の客土を除去したが、調査区の中央辺りから南側では南に向かって斜面堆積になっていたためや、より深く削平を受け現地表から約 110cm 下方まで撹乱されている部分もあったため、南側は重機による掘削を北側地業層とほぼ同じレベルで止め、以下を人力により掘り下げて第1面の遺構検出を行った。表土は暗褐色弱粘質土。第1面検出までの土層は現代の撹乱と客土を北側で約 50cm、南側で現地表から約 70cm～110cm 下方まで掘り下げた。第1面北側は海抜約 15.40m で遺構を検出し、南側は報告では第2面遺構とした遺構1を海抜約 15.10m で検出し、調査地が緩やかに北から南に下る様子を確認した。第1面構成土は泥岩塊・泥岩・泥岩粒・玉石を含む茶褐色弱粘質土が約 20 cm～40 cm堆積していた。第2面構成土は第1面よりやや締りのある泥岩を多く含み、泥岩粒を含む茶褐色弱粘質土が約 20 cm堆積していた。調査区北側で地業を検出している。Ⅱ区では溝状遺構（遺構1）北側でかわらけ廃棄遺構を検出している。遺構検出レベルは北側で約 15.20m。南側で 14.70m。第1面同様に緩やかに北から南に下る様相を観察している。第3面も第2面同様に調査区北側で地業を検出し、北から南に向かって緩やかに傾斜する様相を呈していたが、Ⅱ区はⅠ区に比べてやや傾斜が大きくなりⅠ区の様相と若干異なっていた。南側は上層の遺構によって削平を受けており遺構の検出はできなかった。第3面構成土は泥岩・泥岩粒・炭化物を含む暗褐色弱粘質土。遺構検出レベルは北側で 15.10m、南側で 14.50m。第4面構成土は泥岩・泥岩粒・炭化物をそれぞれ多く含み固く締まる暗褐色弱粘質土。Ⅱ区では広範囲に浅い落ち込みに炭化物の堆積している様子を検出した。遺構検出レベルは北側で海抜 14.80m、南側で 14.40m。第5面以下は豪雨のためにⅠ区の調査区壁が崩落し遺構が埋没したため安全を考えて調査を中断したためⅡ区のみ調査・記録した。構成土は泥岩を多く含み締りの無い灰色粘質土。遺構検出レベルは 14.40m、南側で 14.10m。調査区壁の崩落のためⅠ区は安全性を考慮して第4面以下の生活面を確認することができなかった。第5面・第6面はⅡ区のみで検出、記録している。第5面は5～10cm 大の泥岩を多く含む黄灰色粘質土上で遺構を確認した。確認した海抜高は北側 14.50m。南側 14.30m。数値では緩やかに北から南に傾斜する様相を呈しているが、ほぼ平坦である。調査区北側で炭化物・遺物片を多く含む堆積土有り。上層同様に炭化物が集中的に堆積する箇所があった。第6面は褐鉄（高師小僧を含む）・砂礫を多く含む黒色粘質土。遺構検出レベルは 14.10m～14.20m であり、ほぼ平坦となる。調査地南側は沼地状の堆積で酸化した土質を所々に含み、第6面検出層上層は薄く炭化物層が堆積していた。第6面土構成土下層は砂質の混入する黒色粘質土だが、僅かに遺物が出土しており地山とはいえない。Ⅰ区南東隅に設けた排水溝の中、海抜約 12.40m 辺で黒色粘土を観察しており、地山の可能性があ

ると考えている。Ⅰ区西壁堆積土層図の一部に土層注記が抜けている箇所がある。豪雨のために調査区壁が崩落してしまい注記を断念した箇所である。

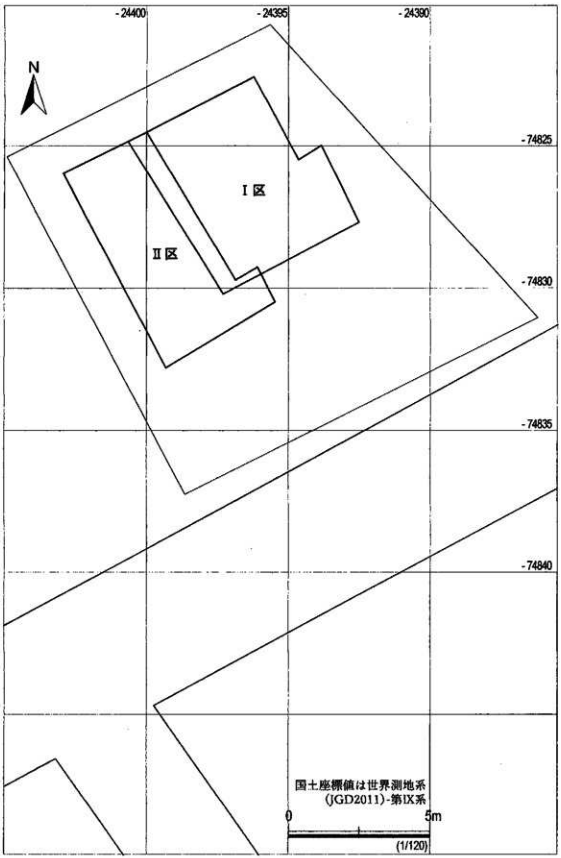


図５　調査区配置図

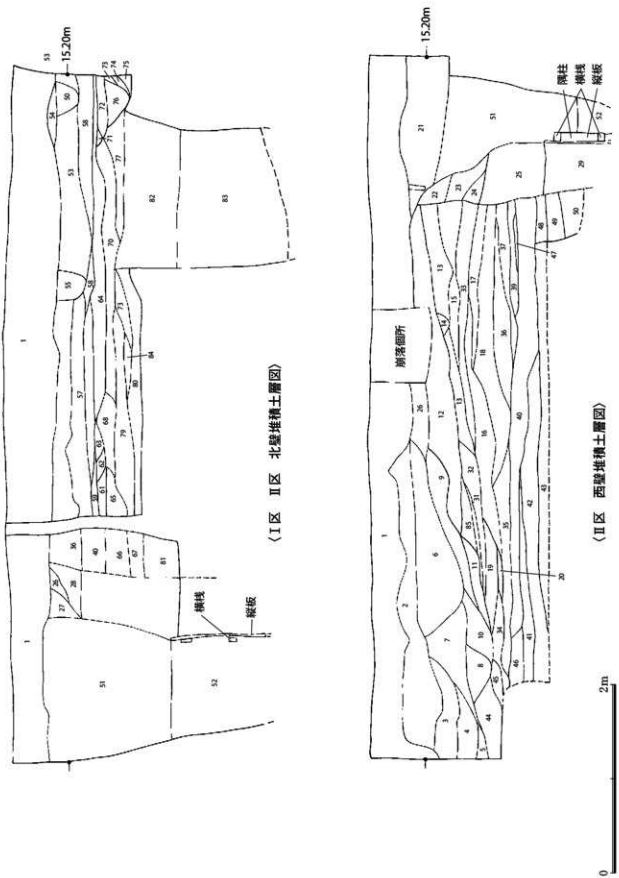
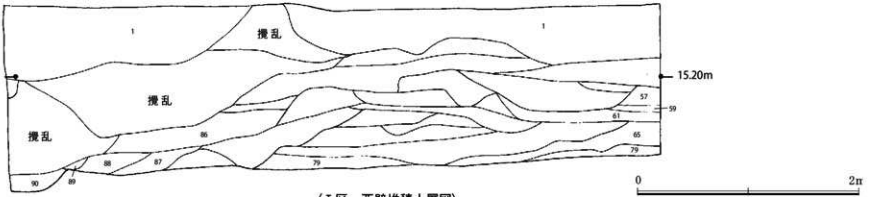


図6　調査区壁土層堆積図（1）



〈Ⅰ区　西壁堆積土層図〉

1　暗褐色弱粘質土　現代耕土
2　茶褐色弱粘質土　泥岩粒・締りなし
3　茶褐色弱粘質土　泥岩・泥岩粒（2に近似）・遺構 41 覆土
4　茶褐色弱粘質土　泥岩粒・粘性あり・遺構 41 覆土
5　茶褐色弱土　遺構 41 覆土
6　茶褐色弱粘質土　泥岩・泥岩粒・炭化物（少）・遺構 40 覆土
7　茶褐色弱粘質土　泥岩塊・泥岩・泥岩粒・玉石・第 1 面構成土
8　茶褐色弱粘質土　泥岩（多）・泥岩粒・炭化物
9　茶褐色弱粘質土　泥岩塊・泥岩（多）・炭化物
10　茶褐色弱粘質土　泥岩・泥岩粒・炭化物（少）
11　暗褐色弱粘質土　泥岩粒・炭化物（少）・玉石・かわらけ集中・出土層土（遺構 50）
12　茶褐色弱粘質土　泥岩塊（少）・泥岩（多）・泥岩粒・炭化物・第 1 面構成土
13　茶褐色弱粘質土　泥岩（多）・泥岩粒・第2面構成土
14　茶褐色弱粘質土　泥岩・泥岩粒
15　茶褐色弱粘質土　泥岩塊・泥岩（多）・泥岩粒・炭化物（少）・第1面構成土
16　暗褐色弱粘質土　泥岩（少）・泥岩粒・炭化物（多）・第3面構成土
17　茶褐色弱粘質土　泥岩（多）・泥岩粒（多）・硬く締まる・第4面構成土
18　暗褐色弱粘質土　炭岩粒（多）炭化物（多）・玉石・第4面構成土
19　茶褐色弱粘質土　泥岩（少）・泥岩粒・炭化物（ブロック状に混入）
20　茶褐色弱粘質土　泥岩粒・炭化物・粘性あり
21　茶褐色弱粘質土　泥岩塊（多）・泥岩（多）・泥岩粒・現代ガラ
22　暗褐色弱粘質土　泥岩（多）・泥岩粒・炭化物（多）・粘性あり・遺構 39 掘り方覆土
23　暗褐色弱粘質土　泥岩（多）・泥岩粒・炭化物（小）・粘性あり・遺構 39 掘り方覆土
24　暗褐色粘質土　泥岩粒（少）・遺構 39 掘り方覆土
25　暗褐色粘質土　泥岩（少）・泥岩粒（多）・遺構 39 掘り方覆土
26　茶褐色弱粘質土　泥岩（少）・泥岩粒（多）・炭化物（少）・遺構 39 掘り方覆土
27　茶褐色弱粘質土　泥岩粒・炭化物・粘性あり・遺構 39 掘り方覆土
28　茶褐色弱粘質土　泥岩（少）・泥岩粒・炭化物・遺構 39 掘り方覆土
29　灰青色弱粘質土　泥岩・泥岩粒・炭化物（少）・木片・遺構 39 掘り方覆土
30　茶褐色弱粘質土　泥岩粒
31　茶褐色弱粘質土　泥岩・炭化物（多）・締りなし
32　茶褐色弱粘質土　泥岩粒・炭化物（少）
33　茶褐色弱粘質土　泥岩・炭化物（多）・第3面構成土
34　茶褐色弱粘質土　泥岩（少）・炭化物（多）・焼土
35　灰色粘質土　泥岩（多）・泥岩粒（多）・炭化物（少）・締りあり
36　灰色弱粘質土　泥岩（多）・締り無し・第5面構成土
37　灰色弱粘質土　泥岩（多）・炭化物（多）・焼土
38　暗褐色弱粘質土　泥岩・炭化物（多）・締りなし
39　暗褐色弱粘質土　泥岩（多）・締りなし
40　灰色粘質土　泥岩（多）・締りあり・第5面構成土
41　黒色粘質土　泥岩粒（少）・締りなし
42　黒色粘質土　褐鉄（多）・第6面構成土
43　黒色粘質土　褐鉄（少）・第6面構成土
44　灰色粘質土　炭化物・焼土粒
45　灰色粘質土　泥岩・炭化物・遺構1覆土
46　暗青灰色粘質土　泥岩
47　灰色粘質土　炭化物
48　褐色粘質土　泥岩粒・下層に泥岩
49　黒色粘質土　上層に炭化物凝積・木片・締りあり
50　黒色粘質土　泥岩（少）・砂礫・締りあり
51　暗褐色弱粘質土　泥岩塊（多）・泥岩（多）・泥岩粒・遺構 39 覆土
52　灰青色土　泥岩層・遺構 39 覆土
53　灰茶褐色弱粘質土　泥岩・泥岩粒・炭化物・やや締まりあり・第1面構成土
54　茶褐色弱粘質土　泥岩・泥岩粒・炭化物・中世遺物包含層
55　灰茶褐色弱粘質土　泥岩粒・炭化物（多）・締りなし
56　灰茶褐色弱粘質土　泥岩・泥岩粒・炭化物（少）・締りなし
57　茶褐色弱粘質土　泥岩塊・泥岩・泥岩粒・炭化物（少）・第1面構成土
58　茶褐色弱粘質土　泥岩塊・泥岩・泥岩粒・炭化物
59　灰褐色弱粘質土　泥岩粒
60　茶褐色弱粘質土　泥岩・泥岩粒・炭化物（多）・第2面構成土
61　灰茶褐色弱粘質土　泥岩塊・泥岩
62　灰茶褐色弱粘質土　泥岩粒
63　茶褐色弱粘質土　泥岩・泥岩粒
64　茶褐色弱粘質土　泥岩塊・泥岩・泥岩粒・炭化物（少）・褐鉄
65　茶褐色弱粘質土　泥岩・泥岩粒
66　暗褐色弱粘質土　泥岩（少）・泥岩粒・炭化物（多）
67　灰色粘質土　泥岩（多）・泥岩粒（多）・炭化物（少）・締りあり
68　暗褐色弱粘質土　泥岩（少）・泥岩粒・炭化物（多）
69　暗褐色弱粘質土　泥岩・泥岩粒・炭化物・第3面構成土
70　暗褐色弱粘質土　泥岩・泥岩粒・第3面構成土
71　暗褐色弱粘質土　泥岩粒・炭化物
72　暗褐色弱粘質土　泥岩・泥岩粒・70に近似
73　暗褐色弱粘質土　泥岩粒
74　暗褐色弱粘質土　泥岩粒・炭化物
75　暗褐色弱粘質土　泥岩粒・炭化物（少）
76　茶褐色弱粘質土　泥岩粒・炭イト含
77　灰茶色弱粘質土　酸分・泥質化・炭化物・遺構 39 覆土
78　暗褐色弱粘質土　泥岩粒
79　灰色粘質土　泥岩（多）・泥岩粒（多）・炭化物（少）
80　暗褐色弱粘質土　泥岩・泥岩粒・締りあり・第4面構成土
81　灰色粘質土　泥岩（多）・締りあり
82　暗茶褐色弱粘質土　泥岩塊（少）・泥岩・泥岩粒（多）・炭化物・遺構 30 覆土
83　暗褐色粘質土　泥岩・泥岩粒・炭化物・黒色粘土・木片・遺構 30 覆土
84　暗灰色粘質土　泥岩粒
85　暗褐色弱粘質土　泥岩粒・炭化物（少）
86-90　青灰色弱粘質土　泥岩・泥岩粒・木片多数出土・遺構1覆土

第三章　発見された遺構と遺物

第1節　第1面の遺構と遺物(図8～図11)

Ⅰ区北西隅はしっかりとした版築が残るが、調査区中央辺に開いた試掘坑の南辺から緩く南に向かって傾斜が始まる。この時点で第2面とした遺構1を検出しており、同様に第2面とした杭痕のある柱穴も発見している。遺構1を境として南側と北側は堆積土の様相が大きく異なる。遺構1(溝状遺構)内の堆積土は粘土質で上層は近代、近世遺物を含む茶褐色粘質土である。下層は青灰色粘質土であり、上層と下層では採集した遺物の年代観が異なるが、遺物採集はこの時点で両層出土の遺物を一括で採集している。水分の多い粘土質の堆積土であるため遺物の沈下が生じて撹乱状態になったのか、覆土の撹乱によるものかは不明である。Ⅰ区では撹乱として下層まで掘ってしまったが遺構1の上層で確認された溝覆土は、Ⅱ区で検出した遺構40・41の覆土に近似しており同一の遺構と思われる。第1面では図化できなかったので、図面には示していない。Ⅱ区ではⅠ区に比べて上層の撹乱による削平が無かったため、やや高いレベルで遺構を検出した個所もあったが、先行して掘ったⅠ区とレベルを合わせ、同じレベルまで下げて遺構検出を行っている。なお、遺構40と遺構41は第2面で取り扱うことになった遺構1より新しく近世以降のものである。

発見した遺構は井戸1基、溝2条、土坑1基。

遺構39(図9)

方形横桟隅柱型の井戸である。調査区外に遺構が延び規模は不明となった。覆土上層には遺構廃棄時に投げ込まれた大、小泥岩を多く確認した。覆土下層で隅柱、横桟を検出した。遺構39覆土はⅠ区・Ⅱ区調査区北壁、西壁堆積土層図(図6)を参照していただきたい。隅柱は11cm×12cm、深度制限のため深く掘り下げることができず遺構検出レベルから約110cm下方まで調査・記録し、さらに下層に遺構が延びていることを確認した。横桟は2段検出。隅柱に枘を開け組んでいる。横桟の規格は9cm×9cm。調査区外に遺構が延び幅は不明。縦板は南側で4枚、東側で2枚横桟の外側から検出している。南側で検出した縦板は幅25cmと23cm。西側で検出した縦板は27cmと25cmであり幅の規格は統一されていない。

遺構39は壁際で検出したため安全を考慮して調査終了間際まで残して検出し、第1面全景の時点ではプランのみ記録・撮影している。掘り込み面は検出面よりさらに上層である。

出土遺物(図9)

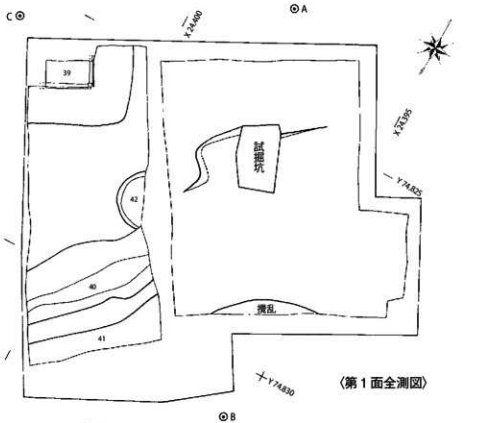
1はてづくね。2～6はかわらけ。7は青磁碗。8は常滑片口鉢Ⅰ類。9は鉄製品釘。その他に青白磁皿・常滑甕・渥美甕・丸瓦・平瓦・瓦器質火鉢・木製品折敷・木製品破片・果核が破片で出土している。

10～12は掘り方覆土出土遺物。10は木製品部材。11は木製品(棒状)。12は木製品(串状)。その他にてづくね・かわらけ・青磁碗・口唇部輪花状の青白磁皿・白磁皿・常滑甕・常滑片口鉢Ⅱ類・山茶碗・丸瓦・土器質火鉢・鉄製品釘が破片で出土している。

遺構40(図10)

調査区南で検出し東西方向に延びる溝状の遺構である。遺構の記録はⅡ区しかできなかったが、Ⅰ区でも同様に溝状の落ち込みを確認している。遺構覆土が表土と近似しており遺構プランの確認がⅠ区、Ⅱ区ともに困難であった。遺構覆土は茶褐色弱粘質土、大小泥岩を含み炭化物を含む。

出土遺物(図10)



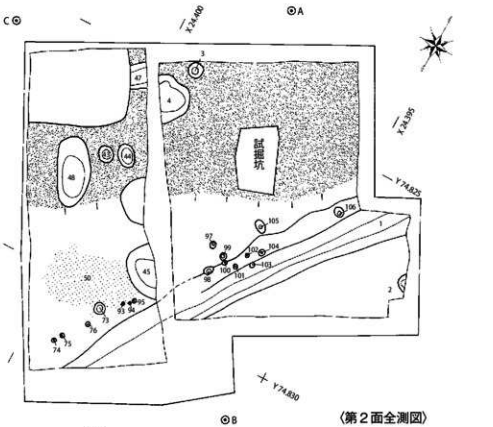


図８　第１面・第２面全測図

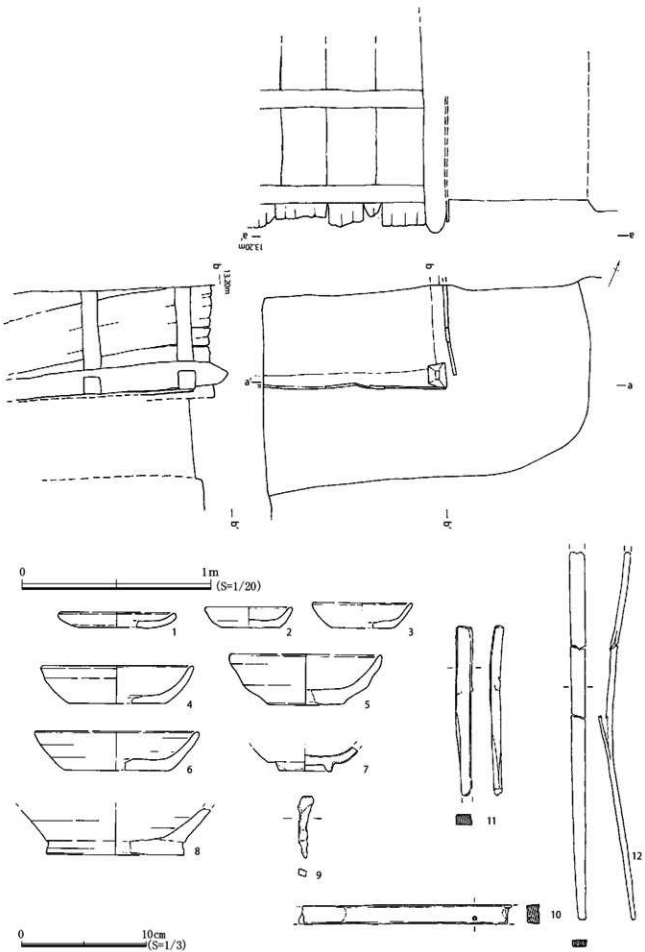


図９　第１面遺構 39・出土遺物

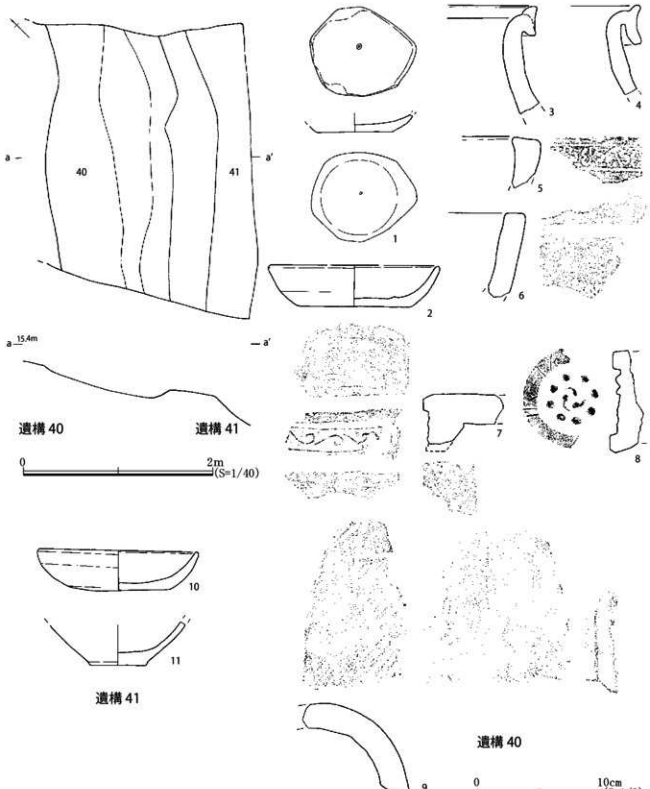


図 10　第 1 面遺構 40・41 出土遺物

1〜2 はかわらけ。3〜4 は常滑甕。5〜6 は瓦器質火鉢。7 は軒平瓦。8 は軒丸瓦(桟瓦)。9 は丸瓦。その他にてづくね・常滑片口鉢Ⅰ類・常滑片口鉢Ⅱ類・平瓦・砥石・染付器種不明が破片で出土している。近世以降の遺物が混じるが、覆土が軟弱で分別が困難だったため一括して採集・記録した。

遺構 41 (図 10)

遺構の大半が調査区外に延びており形状・規模など不明となったが、遺構 40 同様に東西方向に延びる溝状

の遺構と考えている。遺構覆土は締まりのない茶褐色弱粘質土だが、遺構底面辺は炭化物・泥岩・泥岩粒を含む硬く締まった土である。覆土上層には近世遺物が混入していた。

出土遺物(図 10)

10 はかわらけ。11 は瀬戸平碗。その他にてづくね・青白磁梅瓶・瀬戸入子・瀬戸壺・常滑甕・常滑壺・平瓦・瓦器質火鉢・染付器種不明が破片で出土している。

遺構 42(図 6)

土坑である。調査区外に遺構が延び規模は不明となった。遺構覆土は明茶褐色弱粘質土、泥岩塊(多)・泥岩粒(多)炭化物(少)・黒褐色粘土がブロック状に混入。遺物はかわらけ・てづくね・常滑甕・平瓦が破片で出土している。

第 1 面面上出土遺物(図 11)

第 1 面精査時に面上で出土した遺物である。1～10 はかわらけ。11 は常滑片口鉢 I 類。12 は常滑片口鉢 II 類。13 は常滑甕。14 は備前擂鉢。15 は土器質火鉢。16～17 は鉄製品釘。18 は金属製品用途不明。19 は石製品硯。その他にてづくね・青磁皿・白磁碗・褐釉甕・黄釉盤・常滑壺・山茶碗・平瓦・瓦器質火鉢・近世磁器碗が破片で出土している。

第 1 面構成土出土遺物(図 11)

第 1 面遺構検出後第 2 面検出までの堆積層から出土した遺物である。20 はてづくね。21～23 はかわらけ。24～25 は鉄製品釘。その他に青磁碗・青白磁合子・瀬戸折縁皿・常滑甕・平瓦が破片で出土している。

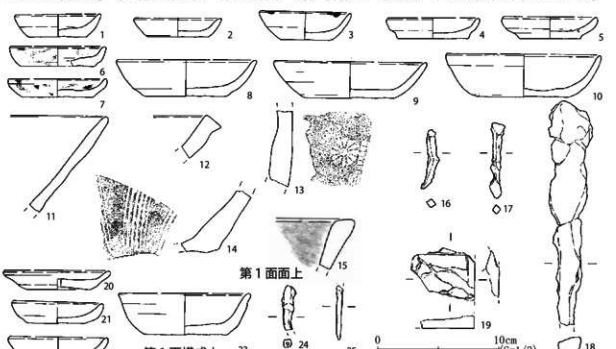


図 11　第 1 面面上・構成土出土遺物

第 2 節　第 2 面の遺構と遺物(図 8・図 12～図 16)

北から南に向かって傾斜がある様相は第 1 面検出時と変わらないが、版築層とは異なり薄く地業が何層かに重なる様相を呈していたため堆積層が変化するたびに精査して遺構検出をした。地業層としては弱いが、泥岩を含む硬く締まった堆積が調査区の北側に広がっている。この部分はスクリーントーンを貼って示して

ある。地業層上には炭化物・泥岩粒を含む暗茶褐色弱粘質土が薄く堆積していた。地業が切れた辺から南側に向かって斜面となる。第2面検出レベルは北側で海抜約15.00m。南側で海抜約14.50mである

遺構1を境に土層の堆積状況が変わり、遺構1の北側は泥岩・泥岩粒を含む締りのよい土質であるが、北から南に落ち込み斜面となる。遺構1南側は砂質土を含む粘性の高い土質で、やや平坦な地形を呈する。

発見した遺構は溝1条・土坑4基・ピット4穴・杭痕を伴うピット17穴・かわらけ廃棄遺構である。なお遺構1は遺構の発見順で第2面での説明となったが所属する年代としては近世とした方がよいだろう。

遺構1(図12・図13)

調査区南端で検出し東西方向に延びる溝である。遺構覆土は青灰色弱粘質土、砂質土を多く含み締りはない。褐鉄、泥岩、泥岩粒、茶褐色有機質土を含む。底面は東から西に向かって緩く傾斜していた。方位はN-36°-Eである。溝北側では後述する杭痕のある小さなピットを多く検出し、遺構1に伴う杭列と考えている。

Ⅰ区では溝の斜面に稜があったがⅡ区では確認できず、またⅠ区では溝底から南に向かった溝の稜線が確認されたがⅡ区では溝底の立ち上がりが確認できなかった。

出土遺物(図12・図13)

1はてづくね。2～13はかわらけ。14は肥前皿。15は瀬戸入子。16は瀬戸香炉。17は瀬戸壺。18は渥美甕。19は常滑片口鉢Ⅱ類。20は常滑広口壺。21は備前擂鉢。22～23は瓦器質火鉢。24は瀬戸擂鉢。25は丸瓦。26～28は平瓦。29～32は鉄製品釘。33～35は石製品砥石。その他に青磁碗・青白磁梅瓶・白磁碗・白磁口兀皿・褐釉甕・瀬戸折縁皿・瀬戸卸皿・瀬戸洗・瀬戸壺・瀬戸擂鉢・常滑片口鉢Ⅱ類・魚住鉢・山茶碗・軒平瓦・役瓦・土器質火鉢・瓦器質燭台・石製品硯・石製品・石製品滑石鍋・染付碗、染付皿・近世磁器が破片で出土している。遺物の出土状況から見て、古い遺構が長く利用されたものと考えたい。第2面の遺構としているがさらに上層からの遺構であろう。

遺構2(図8)

ピットである。調査区外に遺構が延び規模は不明となった。遺構覆土は茶褐色弱粘質土、泥岩・砂礫を含む。覆土下層に泥岩、泥岩粒が多く混入。遺物はてづくね・かわらけが破片で出土している。

遺構3(図15)

円形を呈するピットである。遺構覆土は茶褐色弱粘質土、炭化物・泥岩・泥岩粒を含む。遺物はかわらけが破片で出土している。

遺構4(図15)

やや不整形な土坑である。調査区外に遺構が延び規模は不明となった。遺構覆土は茶褐色弱粘質土、炭化物・泥岩・泥岩粒を含む。遺物はてづくね・かわらけが破片で出土している。

遺構43(図15)

円形を呈するピットである。遺構覆土は明茶褐色弱粘質土、泥岩(多)・泥岩粒(多)炭化物(少)を含む。遺物はかわらけが破片で出土している。

遺構44(図8)

楕円形を呈するピットである。遺構覆土は茶褐色弱粘質土、泥岩粒・泥苞・炭化物含む。遺物はかわらけが破片で出土している。

遺構45(図15)

土坑である。調査区外に遺構が延び規模は不明となった。遺構覆土は締りのない茶褐色弱粘質土、泥岩・泥岩粒を含む

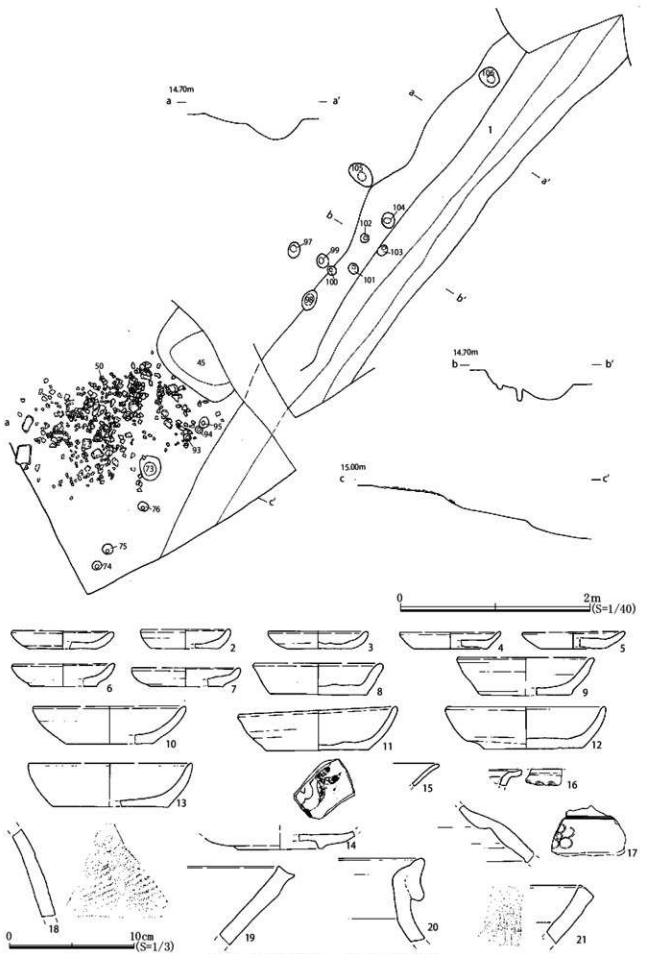


図12　第２面遺構１・出土遺物（１）

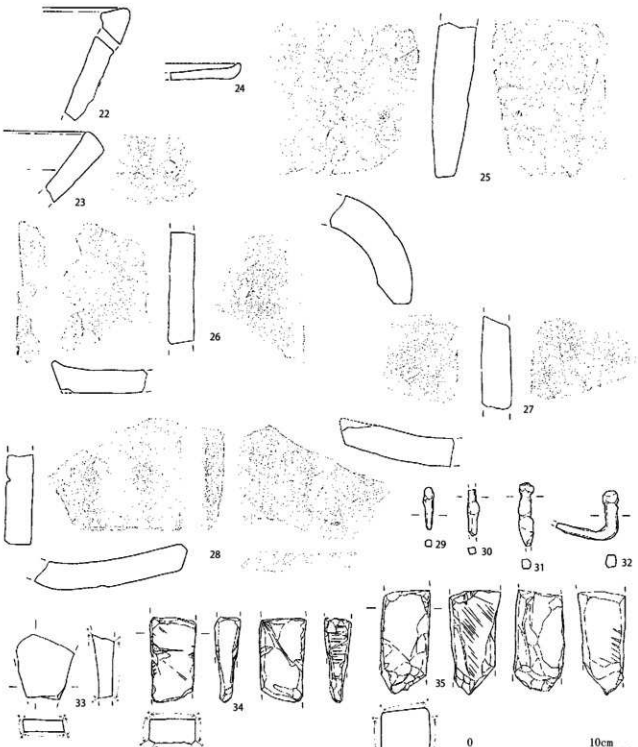


図 13　第 2 面遺構 1 ・出土遺物（2）

出土遺物（図 15）

1～2 はかわらけ。3 は青白磁小壺。その他に青白磁梅瓶・青白磁合子・褐釉甕・常滑甕・常滑片口鉢Ⅰ類・平瓦・瓦器質火鉢・黒縁瓦器碗が破片で出土している。

遺構 47（図 6）

遺構 39 に切られ、調査区外に遺構が延び規模・形状は不明となった。ピットである。遺構覆土は締りのない茶褐色弱粘質土、炭化物少・泥岩・泥岩粒を含む。遺物はかわらけが破片で出土している。

遺構 48(図 15)

楕円形を呈する土坑である。遺構覆土は褐色弱粘質土、泥岩粒・泥岩・泥岩塊・炭化物を含む。

出土遺物(図 15)

4は常滑片口鉢Ⅱ類。その他にかわらけが破片で出土している。

遺構 50(図 14)

かわらけ廃棄遺構である。通常鎌倉市街地遺跡で発見される廃棄遺構のかわらけに比べて、一個体がより細かく破損しているかわらけが、概ね斜面の縁に沿って長辺約1．5m、短辺約1m程の長方形の範囲で検出された。遺構覆土は黒褐色弱粘質土、炭化物を多く含む。

出土遺物(図 14)

1～32はかわらけ。33～34は鉄製品釘。35は石製品砥石。その他に青磁碗・常滑甕が破片で出土している。

ピット列(図 8)

ピットは遺構 1 の西岸に遺構に沿った様に並行して存在するが、明確な配列ではなく、ピット間の距離も 20 cm、60cm、80cm 等一定していない。溝の側板を留めるための杭痕かと思われる。遺構 74～遺構 99 を結ぶ方位は N-35° -E である。

遺構 73

円形を呈するピット。覆土内に杭痕あり。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、炭化物(多)・泥岩粒を含む。遺物はかわらけが破片で出土している。

遺構 74

円形を呈するピットである。覆土内に杭痕あり。遺構覆土は灰褐色粘土。出土遺物はない。

遺構 75

円形を呈するピットである。覆土内に杭痕あり。遺構覆土は灰褐色粘土。出土遺物はない。

遺構 76

円形を呈するピットである。覆土内に杭痕あり。遺構覆土は灰褐色粘土。出土遺物はない。

遺構 93

円形を呈するピットである。覆土内に杭痕あり。遺構覆土は灰褐色粘土。出土遺物はない。

遺構 94

円形を呈するピットである。覆土内に杭痕あり。遺構覆土は灰褐色粘土。出土遺物はない。

遺構 95

円形を呈するピットである。覆土内に杭痕あり。遺構覆土は灰褐色粘土。出土遺物はない。

遺構 97

円形を呈するピットである。覆土内に杭痕あり。遺構覆土は茶褐色粘土。出土遺物はない。

遺構 98

楕円形を呈するピットである。覆土内に杭痕あり。遺構覆土は茶褐色粘土。出土遺物はない。

遺構 99

円形を呈するピットである。覆土内に杭痕あり。遺構覆土は茶褐色粘土。出土遺物はない。

遺構 100

円形を呈するピットである。覆土内に杭痕あり。遺構覆土は茶褐色粘土。出土遺物はない。

遺構 101

円形を呈するピットである。覆土内に杭痕あり。遺構覆土は茶褐色粘土。出土遺物はない。

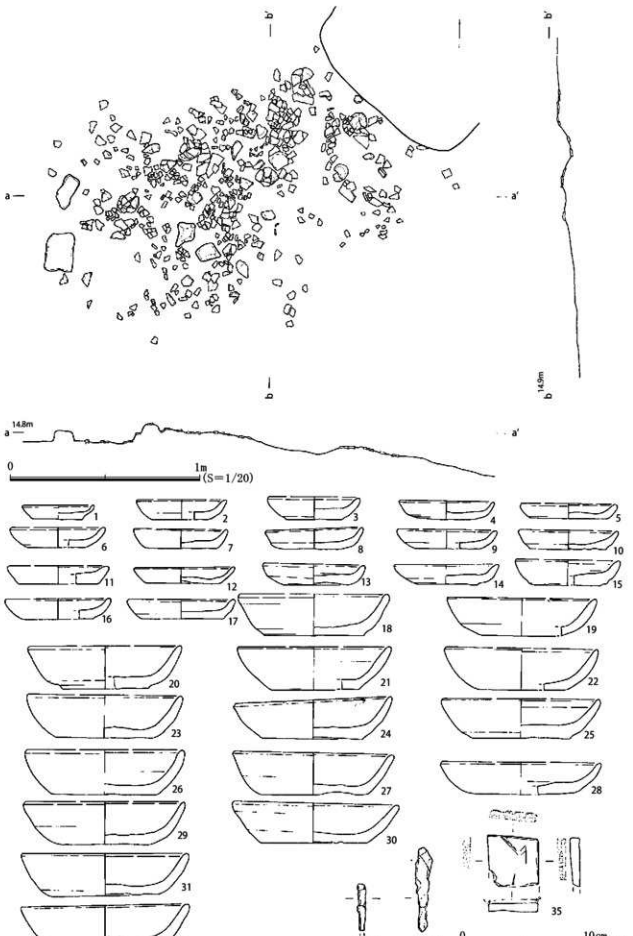


図 14　第 2 面遺構 50・出土遺物

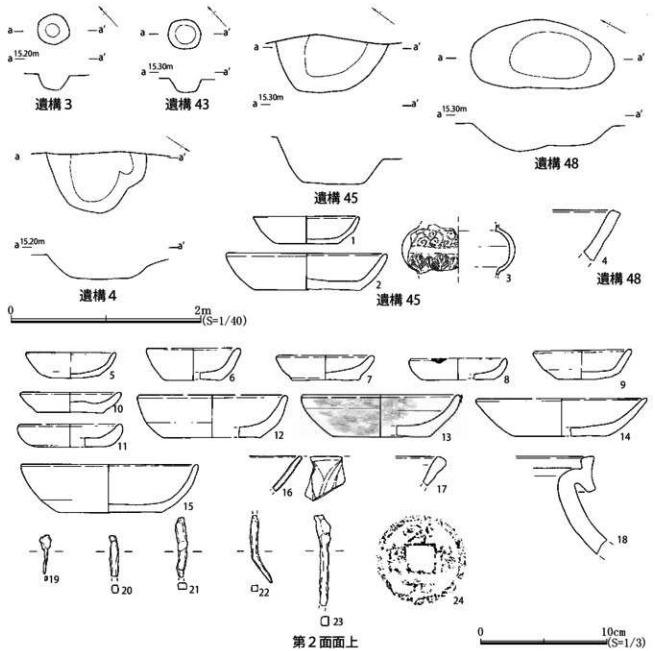


図 15　第２面個別遺構・面上・出土遺物

遺構 102

円形を呈するピットである。覆土内に杭痕あり。遺構覆土は茶褐色粘土。出土遺物はない。

遺構 103

円形を呈するピットである。覆土内に杭痕あり。遺構覆土は茶褐色粘土。出土遺物はない。

遺構 104

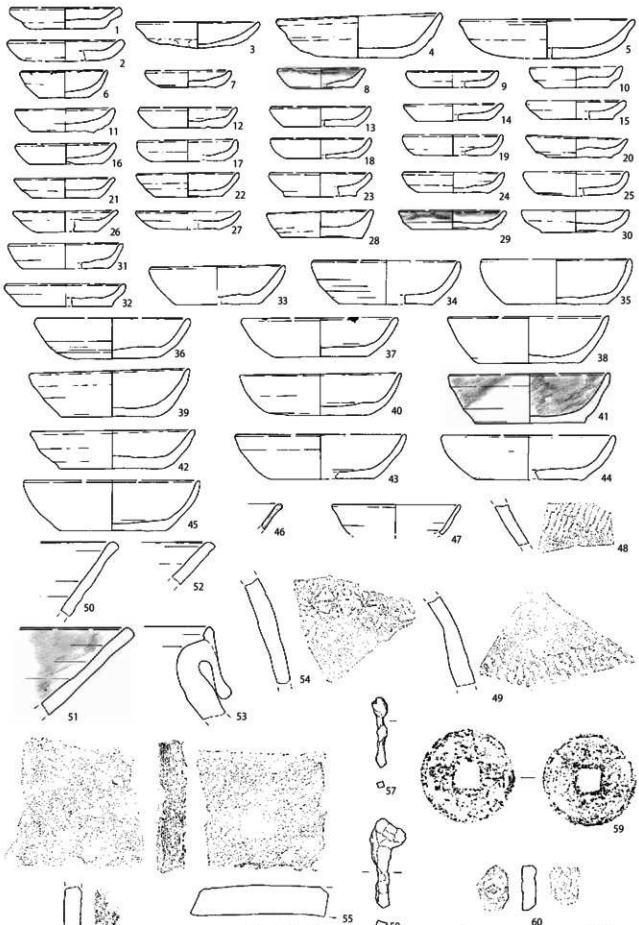
円形を呈するピットである。覆土内に杭痕あり。遺構覆土は茶褐色粘土。出土遺物はない。

遺構 105

楕円形を呈するピットである。覆土内に杭痕あり。遺構覆土は茶褐色粘土。出土遺物はない。

遺構 106

円形を呈するピットである。覆土内に杭痕あり。遺構覆土は茶褐色粘土。出土遺物はない。



第２面構成土

図 16　第２面構成土出土遺物

第 2 面面上出土遺物(図 15)

第 2 面精査時に面上から出土した遺物である。5～15 はかわらけ。16 は青磁碗。17 は常滑片口鉢Ⅰ類。18 は常滑甕。19～23 は鉄製品釘。24 は銅製品銭貨。その他に白磁皿・瀬戸折縁皿・常滑甕・丸瓦・瓦器質火鉢・滑石製品。菱形を両面に彫り出している。器種不明・鉄釘が破片で出土している。

第 2 面構成土出土遺物(図 16)

第 2 面遺構検出後第 3 面検出までの堆積層から出土した遺物である。1～5 はてづくね。6～45 はかわらけ。46 は青磁小鉢。47 は瀬戸入子。48 は渥美甕。49～50 は常滑片口鉢Ⅰ類。51 は常滑片口鉢Ⅱ類。52 は常滑甕。53～54 は渥美甕。55 は平瓦。56 は不明土器。57～58 は鉄製品釘。59 は銅製品銭貨。60 は滑石製品器種不明。その他に青白磁梅瓶・白磁口兀皿・黄釉盤・常滑壺・平瓦・瓦器質火鉢・石製品砥石・土師器甕・獣骨が破片で出土している。

第 3 節　第 3 面の遺構と遺物(図 17～図 20)

第 2 面検出後、炭化物・泥岩粒を含んだ茶褐色弱粘質土層を除きやや硬く締まった泥岩・泥岩粒を含む暗褐色弱粘質土層上で第 3 面を検出した。北から南に向かう傾斜がⅠ区ではやや緩くなるが、Ⅱ区の方は高低差が残ったままとなる。第 2 面ではⅡ区遺構 1 の北側にかわらけ廃棄遺構(遺構 50)を発見しているが、第 3 面ではⅠ区遺構 1 北側でかわらけ廃棄遺構(遺構 109)を発見している。いずれも遺構 1 北側で検出しているが、発見した海抜高に差があるために面を分けて報告している。遺構 109 の検出レベルは 14.56m 遺構 50 の検出レベルは 14.75m である。狭い空間なので明確ではないが概ね東側落ち込みに沿って地業面や遺構が存在することが確認された。発見した遺構は土坑 3 基、ピット 14 穴。

遺構 5(図 18)

楕円形を呈するピットである。遺構 18 を切る。遺構覆土は締まりの悪い灰褐色弱粘質土、泥岩・炭化物、砂質土を含む。遺物はかわらけ・滑石製器種不明が破片で出土している。

遺構 6(図 18)

楕円形を呈するピットである遺構 18 を切る。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、炭化物・泥岩粒を含む。出土遺物はない。

遺構 7(図 18)

円形を呈するピットである。遺構覆土は明茶褐色弱粘質土、褐鉄のしみた硬い覆土。出土遺物はない。

遺構 8(図 18)

Ⅰ区からⅡ区に跨って検出された。楕円形を呈する土坑である。遺構覆土は茶褐色弱粘質土、炭化物(少)を含む。出土遺物はない。

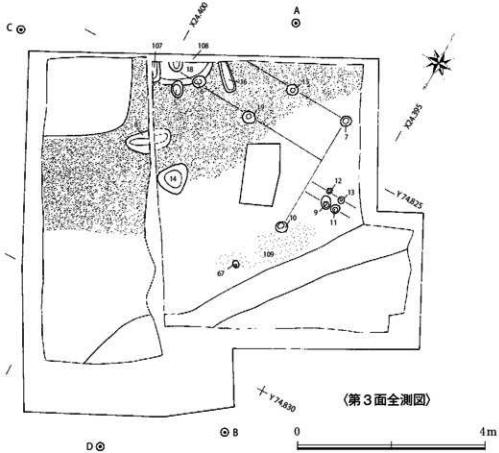
遺構 9(図 18)

楕円形を呈するピットである。遺構覆土は褐色粘土、茶色有機質土を含み杭痕が残る。遺構底面には杭痕横に泥岩を検出しており、杭を支えていたと考える。

出土遺物(図 18)

1 はてづくね。その他に青白磁壷・常滑甕が破片で出土している。

遺構 10(図 18)



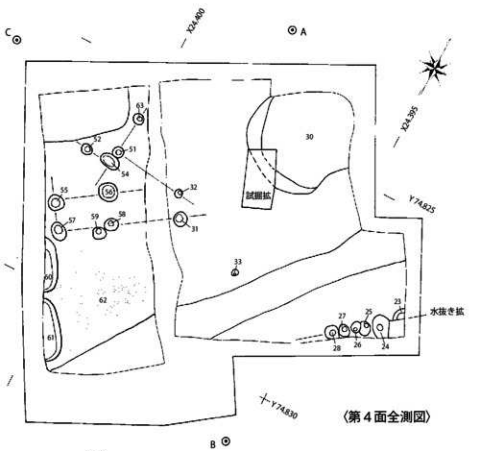


図17　第３面・第４面全測図

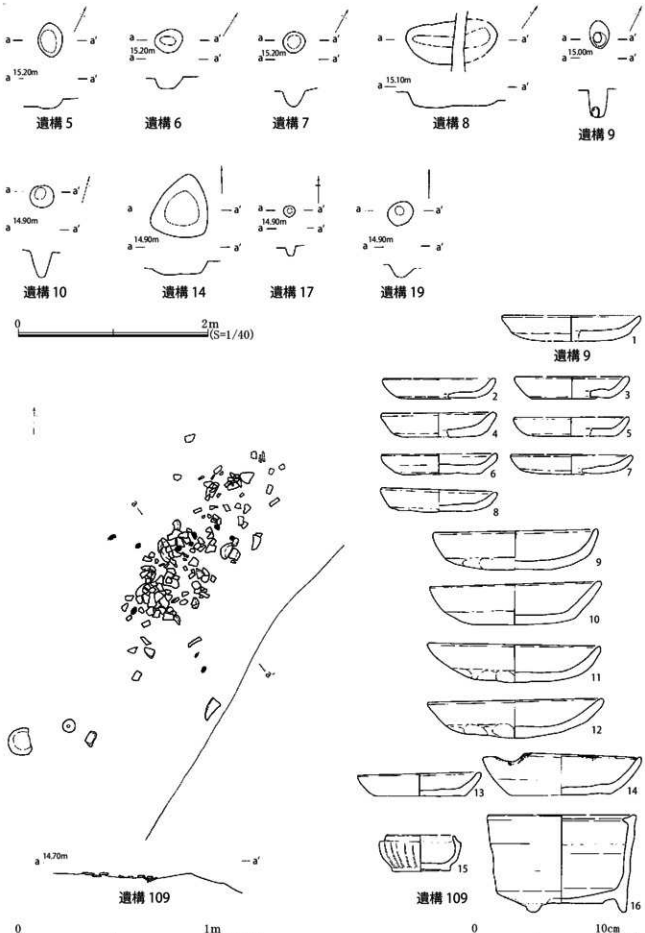


図 18　第 3 面個別遺構・出土遺物

円形を呈するピットである。遺構覆土は褐色粘土、茶色有機質土・泥岩粒を含む。覆土内に杭痕有り。遺物はかわらけ・てづくね・常滑甕が破片で出土している。

遺構 11(図 17)

円形を呈するピットである。遺構覆土は褐色粘土、泥岩粒を含む。覆土内に杭痕有り。遺物はかわらけ・てづくねが破片で出土している。

遺構 12(図 17)

円形を呈するピットである。遺構覆土は褐色粘土、泥岩粒を含む。出土遺物はない。

遺構 13(図 17)

円形を呈するピットである。遺構覆土は褐色粘土、炭化物・泥岩粒を含む。出土遺物はない。

遺構 14(図 18)

不整円形を呈する土坑である。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、泥岩・泥岩粒・炭化物を含む。遺物はかわらけ・てづくね・南伊勢系土鍋が破片で出土している。

遺構 15(図 17)

円形を呈するピットである。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、泥岩粒・炭化物を含む。出土遺物はない。

遺構 16(図 17)

方形を呈するピットである。調査区外に遺構が延び規模は不明。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、泥岩粒・炭化物を含む。出土遺物はない。

遺構 17(図 17)

円形を呈するピットである。遺構覆土は褐色粘質土、泥岩粒・炭化物(少)・褐色粘土を含む。出土遺物はない。

遺構 18(図 17)

調査区外に遺構が延び規模・形状は不明となった。遺構 5・6 に切られる。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、泥岩・泥岩粒・炭化物(多)を含む。遺物はかわらけ・てづくねが破片で出土している。

遺構 19(図 18)

円形を呈するピットである。遺構覆土は明茶褐色弱粘質土、泥岩粒・褐鉄(多)を含む。遺物はかわらけが破片で出土している。

遺構 107(図 17)

調査区外に遺構が延び規模・形状は不明となった。ピットである。遺構覆土は茶褐色弱粘質土、泥岩・泥岩粒を含む。出土遺物はない。

遺構 108(図 17)

調査区外に遺構が延び規模・形状は不明となった。ピットである。遺構覆土は茶褐色弱粘質土、泥岩・泥岩粒を含む。出土遺物はない。

遺構 109(図 18)

第 3 面面上、遺構 1 の北側の斜面上に広がるてづくね成形のかわらけを主としたかわらけ廃棄である。幅約 60㎝、長さ 120㎝の範囲に集中している。採集したかわらけの多くは砕片であった

出土遺物(図 18)

2～12 はてづくね。13～14 はかわらけ。15 は白磁合子。16 は舶載品香炉。採集したかわらけは細片が多く実測できた遺物は数点となった。白色粘土小塊が出土した。分析結果は「第 4 章　横小路周辺遺跡出土の粘土分析」参照

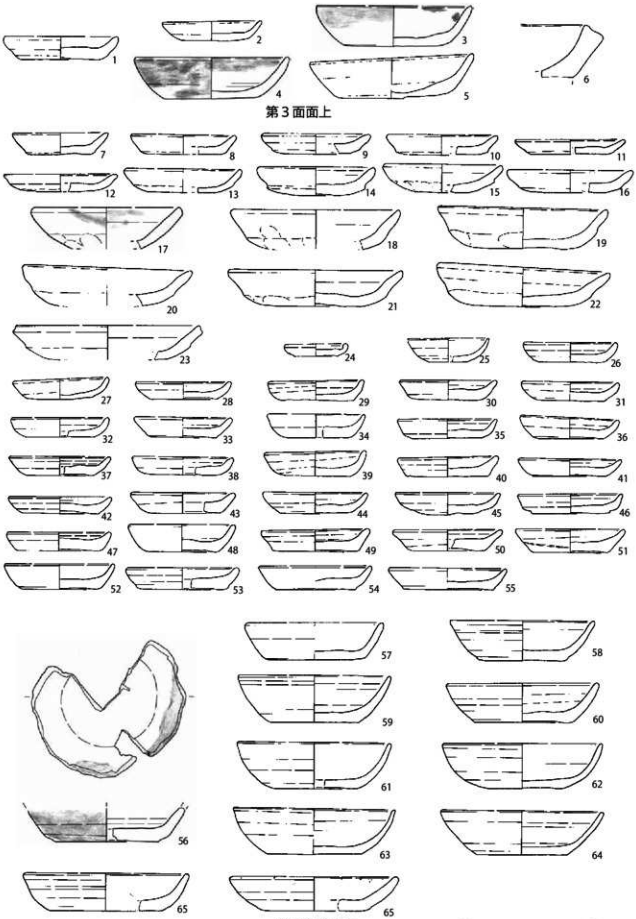


図 19　第３面面上・構成土出土遺物（１）

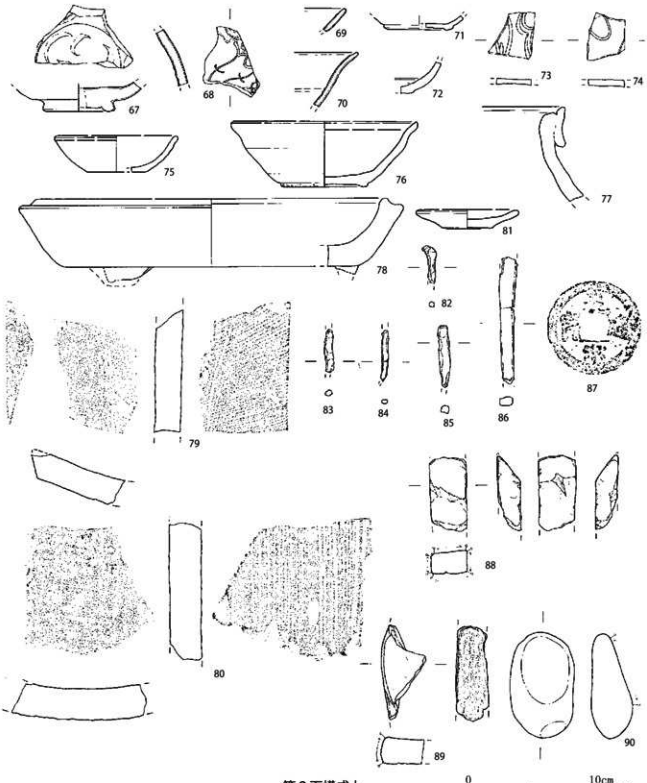


図 20　第 3 面面上・構成土出土遺物（2）

第 3 面面上出土遺物(図 19)

第 3 面精査時に面上から出土した遺物である。1 はてづくね。2～5 はかわらけ。6 は瓦器質火鉢。その他に常滑甕が破片で出土している。

第 3 面構成土出土遺物(図 19～図 20)

第3面遺構検出後第4面検出までの堆積層から出土した遺物である。7～23はてづくね。24～66はかわらけ。67は青磁碗。68は高麗青磁瓶。69は白磁皿。70は白磁碗。71は白磁合子。72～74は緑釉盤。75は瀬戸入子。76は山茶碗。77は常滑広口壺。78は瓦器質火鉢。79～80は平瓦。81はかわらけ質皿。82～85は鉄製品釘。86は鉄製品用途不明。87は銅製品銭貨。88は石製品砥石。89～90は石製品磨石。その他に青白磁梅瓶・白磁口冗碗・白磁口冗皿・褐釉甕・瀬戸壺・常滑甕・常滑片口鉢Ⅰ類・常滑片口鉢Ⅱ類・丸瓦・瓦器皿・瓦器質黒縁碗・滑石製器種不明・土師器甕が破片で出土している。

第4節　第4面の遺構と遺物(図17・図21～図24)

第3面遺構検出後半に豪雨のためⅠ区の調査区壁が崩落し危険なため、Ⅰ区はほぼ調査ができない状況になり第4面の記録は不確かなものとなった。崩落前、Ⅰ区北西部は堆積層を追って掘り下げていくと不自然に落ち込んでしまった箇所もある。Ⅱ区は泥岩塊・泥岩・泥岩粒を含む茶褐色弱粘質土層上で検出。粗い地業層である。Ⅱ区の南側に炭化物(遺構62)が多く堆積していた（スクリーントーン部分）。炭化物層は上層の遺構1に切られていた。遺構検出レベルは、北側海抜14.76～14.65m。南に向かって傾斜する。南側は約14.43m。発見した遺構は井戸1基・土坑2基・ピット18穴・炭化物範囲(遺構62)である。

遺構23((図23)

調査区外に遺構が延び規模・形状は不明となった。ピットである。遺構覆土は茶褐色弱粘質土、泥岩粒・炭化物(少)を含む。

出土遺物(図23)

1はかわらけ。その他にてづくねが破片で出土している。

遺構24(図23)

楕円形を呈するピットである。遺構覆土は茶褐色弱粘質土、泥岩・泥岩粒・炭化物(多)を含む。遺構24～遺構28は一列に並ぶピット群で覆土は近似している。

出土遺物(図23)

2は金属製品器種不明。その他にかわらけ・てづくね・常滑甕・鉄製品釘・滑石製品器種不明が破片で出土している。

遺構25(図23)

円形を呈するピットである。遺構26に切られる。遺構覆土は茶褐色弱粘質土、泥岩・泥岩粒・炭化物(多)を含む。遺物はかわらけ・てづくね・瀬戸入子・常滑甕が破片で出土している。

遺構26(図23)

楕円形を呈するピットである。遺構25を切る。遺構覆土は茶褐色弱粘質土、泥岩・泥岩粒・炭化物(多)を含む。遺物はかわらけ・てづくねが破片で出土している。

遺構27(図23)

楕円形を呈するピットである。遺構覆土は茶褐色弱粘質土、泥岩・泥岩粒・炭化物(多)を含む。遺物はてづくね・青白磁水注・平瓦が破片で出土している。

遺構28(図23)

円形を呈するピットである。遺構覆土は茶褐色弱粘質土、泥岩・泥岩粒・炭化物(多)を含む。

出土遺物(図23)

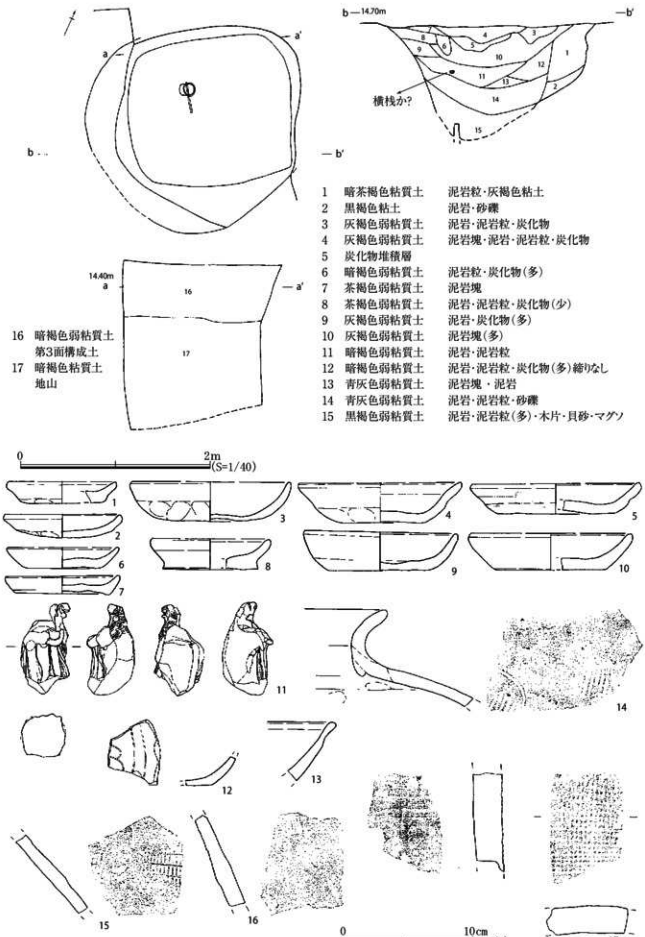


図 21　第 4 面遺構 30・出土遺物（1）

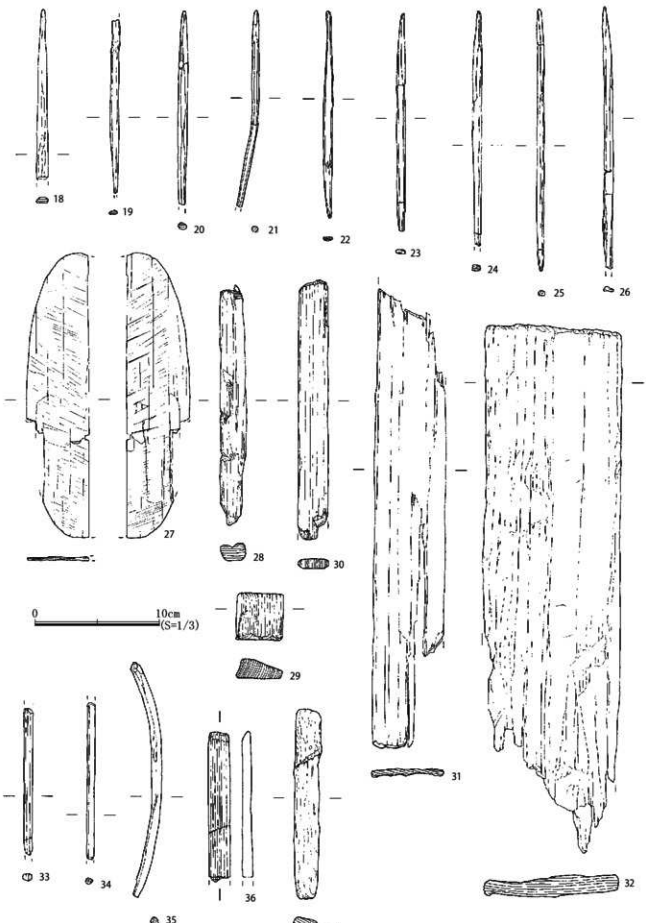


図 22　第 4 面遺構 30・出土遺物（2）

3～4 はてづくね。その他に遺物は出土していない。

遺構 30(図 21)

方形横桟隅柱型の井戸である。上層は遺構を埋めた際に投げ込まれた泥岩を多く含む不自然な高まりを観察している。覆土下層には貝砂・植物遺体が多く堆積していた。

遺構プランを確認し東西方向にベルトを残し、ベルト南側から掘り始めた。調査区北壁、東壁方向に遺構が延びており、遺構中央にベルトを設定することができなかった。ベルト東で遺構の掘り方を観察することができたが、南西隅は試掘坑に切られているためか掘り方を検出できなかった。南西隅に隅柱にしてはやや細めではあるが柱状の木材を検出し、北東隅遺構下層で横桟が出土した。覆土内からは草履芯を始め木製品が多く出土しているが、遺構中央付近やや西寄りに柄杓が出土した。柄杓の写真撮影、図面の記録は行ったが、豪雨のために調査区壁が崩落したため採集することができなかった。

前述したように豪雨による調査区壁の崩落があり、遺構の大半が埋没してしまったため、調査の安全性を考え途中で遺構の検出を中断している。

出土遺物(図 21～図 22)

1～5 はてづくね。6～10 はかわらけ。11 は白磁人形。12 は緑釉盤。13 は山茶碗。14 は渥美甕。15～16 は常滑甕。17 は平瓦。18～37 は木製品。18 は串状、19～26 は箸状、27 は草履芯、28 は用途不明、29 は端材、30 は部材、31～32 は建材、33～35 は棒状、36～37 は用途不明。その他に白磁壷・常滑壷・常滑片口鉢Ⅰ類・丸瓦が破片で出土している。

遺構 31(図 23)

円形を呈するピットである。遺構覆土は灰褐色粘質土、泥岩粒(多)・炭化物(多)を含み粘性強い。出土遺物はない。

遺構 32(図 23)

円形を呈するピットである。遺構覆土は灰褐色粘質土、泥岩粒・炭化物を含む。出土遺物はない。

遺構 33(図 23)

円形を呈するピットである。遺構覆土は暗褐色粘質土、覆土内に杭が遺存する。出土遺物はない。

遺構 51(図 17)

円形を呈するピットである。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、泥岩・泥岩粒を含む。出土遺物はない。

遺構 52(図 23)

円形を呈するピットである。遺構覆土は締まりのない灰褐色粘質土、泥岩粒を含む。杭痕あり。出土遺物はない。

遺構 54(図 23)

楕円形を呈するピット。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、炭化物(多)・泥岩粒を含む。遺物はてづくね・鉄製品釘が破片で出土している。遺構 54～遺構 57 は覆土近似している。

遺構 55(図 17)

円形を呈するピットである。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、炭化物(多)・泥岩粒を含む。遺物はかわらけ・鉄製品釘が破片で出土している。

遺構 56(図 23)

円形を呈するピットである。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、炭化物(多)・泥岩粒を含む。

出土遺物(図 23)

5 は瓦器質火鉢。その他にかわらけが破片で出土している。

遺構 57(図 23)

楕円形を呈するピットである。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、炭化物(多)・泥岩粒を含む。

出土遺物(図 23)

6 はかわらけ。その他にてづくねが破片で出土している。

遺構 58(図 23)

円形を呈するピットである。遺構覆土は締まりのない茶褐色弱粘質土、泥岩粒を含む。遺物はかわらけが破片で出土している。

遺構 59(図 23)

円形を呈するピットである。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、炭化物・泥岩粒を含む。覆土内に杭痕有り。遺物はてづくねが破片で出土している。

遺構 60(図 23)

調査区外に遺構が延び規模・形状は不明となった。土坑である。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、泥岩粒・炭化物を含む。

出土遺物(図 23)

7 はかわらけ。その他にてづくね・青磁碗が破片で出土している。

遺構 61(図 23)

調査区外に遺構が延び規模・形状は不明となった。土坑である。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、泥岩・泥岩粒・炭化物を含む。

出土遺物(図 23)

8 はかわらけ。9 は常滑片口鉢Ⅰ類。その他にてづくね・黄釉盤・常滑甕・常滑片口鉢Ⅰ類が破片で出土している。

遺構 62(図 23)

炭化物堆積範囲である。当初土坑状を呈すると考えて掘り進めたが、斜面堆積上の少し窪んだ個所に炭化物と泥岩・泥岩粒を含む暗茶褐色弱粘質土が堆積する様相を確認した。出土した遺物に焼痕などはなかった。

出土遺物(図 23)

10～14 はてづくね。15～25 はかわらけ。26 は黄釉盤。27 は渥美甕。28 は常滑片口鉢Ⅱ類。29 は丸瓦。30 は石製品碁石か。その他に常滑甕・平瓦・瓦器質火鉢・滑石製鍋・鉄製品釘が破片で出土している。

遺構 63(図 23)

円形を呈するピットである。遺構覆土は粘性の強い暗褐色弱粘質土、泥岩粒を含む。出土遺物はない。

第 4 面面上出土遺物(図 24)

第 4 面精査時に面上から出土した遺物である。1～3 はかわらけ。その他に出土した遺物はない。

第 4 面構成土出土遺物(図 24)

第 4 面遺構検出後第 5 面検出までの堆積層から出土した遺物である。4～19 はてづくね。20～30 はかわらけ。31 は青磁碗。32 は湖西系山皿。33 は山茶碗。34 は常滑片口鉢Ⅱ類。35～38 は常滑甕。39 は丸瓦。40～42 は平瓦。43 は須恵器甕。44 は鉄製品釘。45 は石製品温石。46～47 は石製品砥石。その他に青磁壺・青磁盤・青白磁合子・青白磁皿・白磁口兀皿・褐釉甕・瀬戸壺・常滑片口鉢Ⅰ類・渥美甕・南伊勢系土鍋・石製品硯・滑石製鍋・鉄製品釘が破片で出土している。

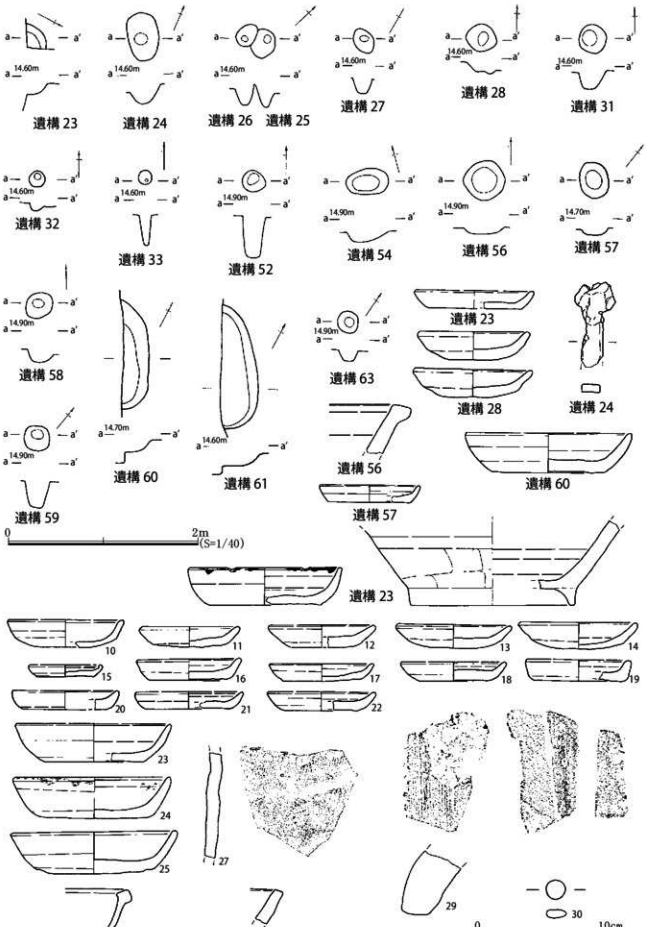


図 23　第 4 面個別遺構・出土遺物

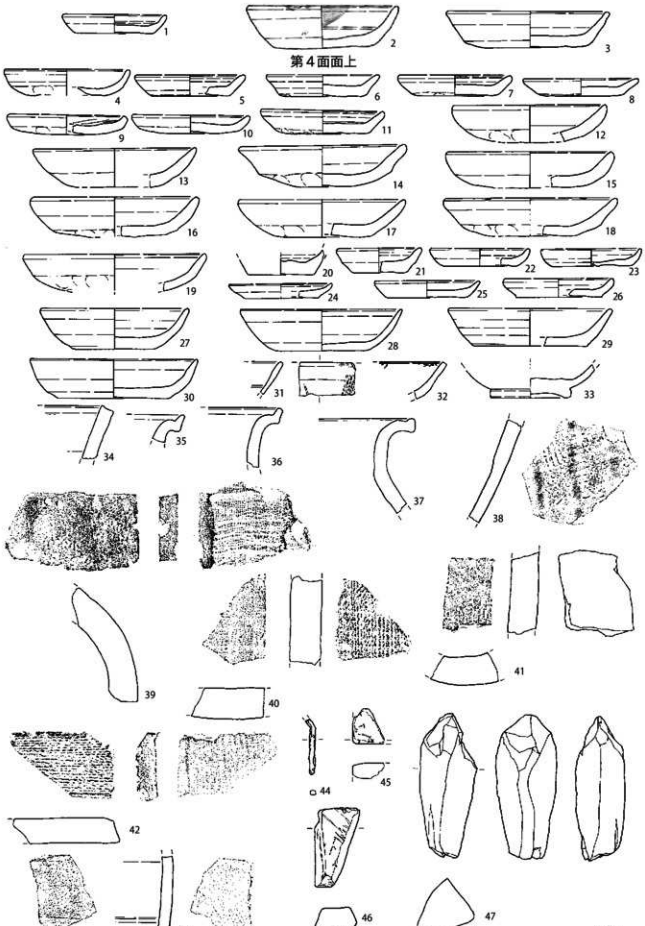


図 24　第４面面上・構成土出土遺物

第5節　第5面の遺構と遺物(図25～図27)

調査区壁の崩落のためⅠ区は安全性を考慮して第4面以下の生活面を確認することができなかった。第5面・第6面はⅡ区のみで検出、記録している。第5面は5～10cm大の泥岩を多く含む黄灰色粘質土上で遺構を確認した。確認した海抜高は北側14.50m、南側14.32m。数値では緩やかに北から南に傾斜する様相を呈しているが、ほぼ平坦である。調査区北側で炭化物・遺物片を多く含む堆積土有り。上層同様に炭化物が集中的に堆積する箇所があった。

発見した遺構は土坑2基・ピット7穴。

遺構64(図26)

調査区外に遺構が延び規模・形状は不明となった。土坑である。上層から暗褐色粘質土→炭化物→暗褐色粘質土(5㎜大の泥岩を多く含む)→炭化物の順で互層に堆積し、遺構底面でかわらけが多く出土している。

出土遺物(図26)

1～17はてづくね。18～24はかわらけ。25は青磁碗。26は山茶碗。27は石製品五輪塔。28は石製品敲き石か。その他に常滑甕・渥美甕・平瓦・鉄製品釘・土師器甕が破片で出土している。

遺構65(図26)

円形を呈する土坑である。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、上層に砂質の炭化物が多く堆積し、泥岩・泥岩粒・玉石を含む。遺構67に覆土近似。

出土遺物(図27)

29～62はかわらけ。その他にてづくね・常滑甕・鉄製品釘が破片で出土している。

遺構66(図26)

円形を呈するピットである。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、泥岩(少)・泥岩粒・炭化物を含む。遺構66・68・69・70は覆土近似。出土遺物はない。

遺構67(図26)

円形を呈するピットである。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、泥岩・泥岩粒を含む。遺構上層には厚く砂質の炭化物が堆積していた。遺物はてづくねが破片で出土している。遺構65に覆土近似。

遺構68(26)

楕円形を呈するピットである。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、炭化物(少)・泥岩(少)・泥岩粒を含む。遺物はかわらけ・てづくねが破片で出土している。

遺構69(図26)

円形を呈するピットである。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、炭化物・泥岩・泥岩粒を含む。出土遺物はない。

遺構70(図26)

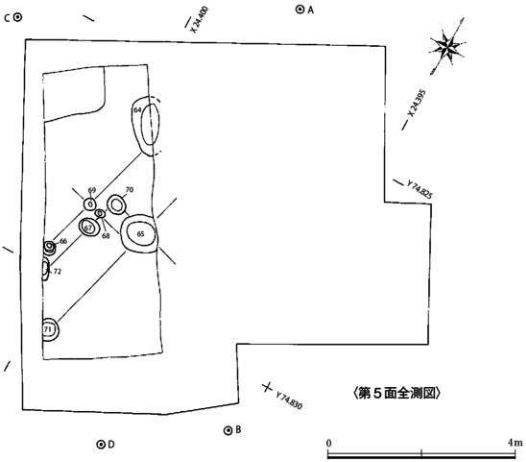
円形を呈するピットである。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、炭化物(少)・泥岩・泥岩粒を含む。遺物はかわらけ・常滑甕が破片で出土している。

出土遺物(図27)

63～64はかわらけ。その他に常滑甕が破片で出土している。

遺構71(図26)

円形を呈するピットである。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、炭化物(少)・泥岩・泥岩粒を含む。遺物はかわらけ・常滑甕が破片で出土している。遺構72と覆土近似。



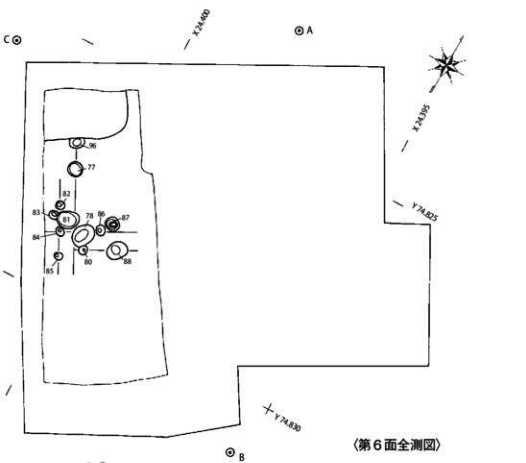


図 25　第５面・第６面全測図

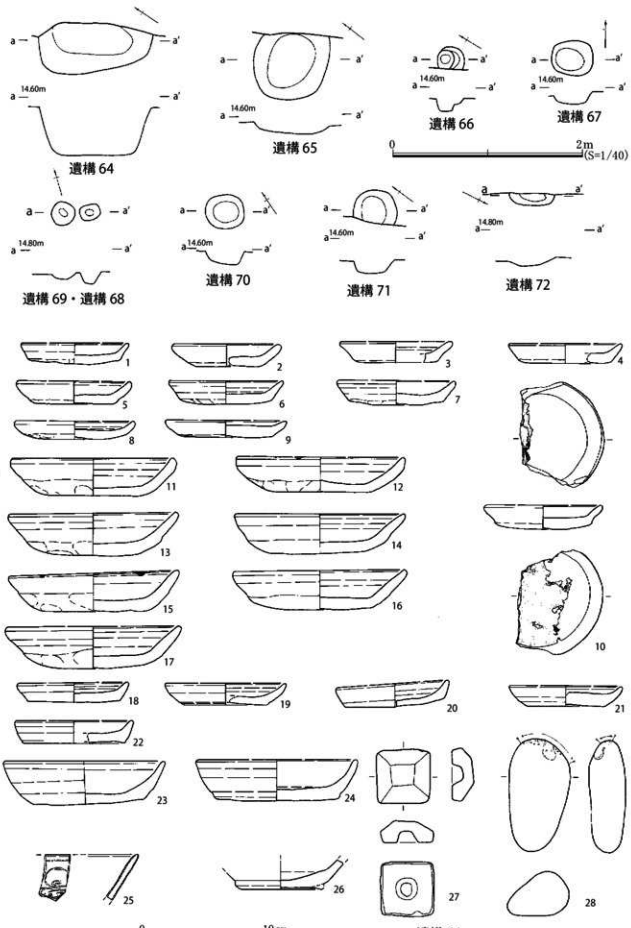


図 26　第 5 面個別遺構・構成土出土遺物（1）

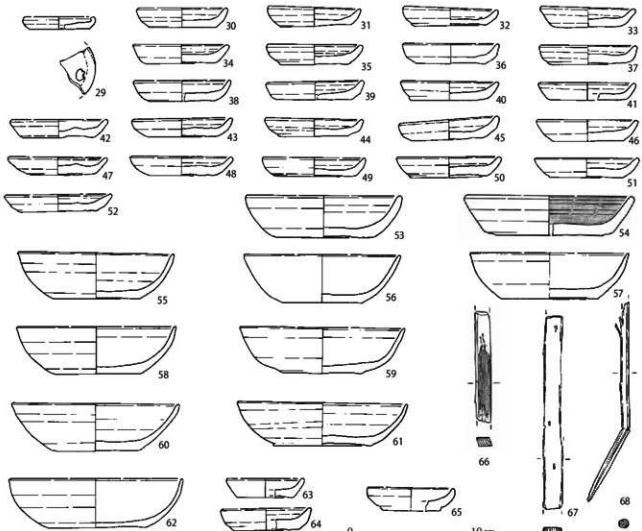


図 27　第 5 面個別遺構・構成土出土遺物（2）

出土遺物(図 27)

65 はかわらけ。その他にてづくねが破片で出土している。

遺構 72(図 25)

調査区外に遺構が延び規模・形状は不明となった。ピットである。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、炭化物(少)・泥岩・泥岩粒を含む。出土遺物はない。遺構 71 と覆土近似。

第 5 面構成土出土遺物(図 27)

第 5 面遺構検出後第 6 面検出までの堆積層から出土した遺物である。66 は木製品箸状。67 は漆製品部材。68 は木製品用途不明。その他に木製品が破片で出土している。

第 6 節　第 6 面の遺構と遺物(図 25・図 28)

Ⅱ区の調査地南側は沼地状の堆積で酸化した土質を所々に含み、砂礫も多く含んでいた。黒褐色粘土(褐鉄・高師小僧を含む)上で遺構を検出。第 6 面検出層上層は薄く炭化物層が堆積していた。遺構検出レベルは北側、南側共に海抜 14.00m。ほぼ平坦な様相を呈する。

発見した遺構はピット 12 穴。

遺構 77(図 28)

円形を呈するピットである。遺構覆土は茶褐色弱粘質土、泥岩(多)・泥岩粒・木片(多)を含む。底面に泥岩有り。遺物はてづくねが破片で出土している。

遺構 78(図 28)

楕円形を呈するピットである。遺構覆土は茶褐色弱粘質土、泥岩塊・泥岩(多)・泥岩粒を含む。出土遺物はない。

遺構 80(図 28)

円形を呈するピットである。遺構覆土は茶褐色弱粘質土、泥岩(多)・泥岩粒を含む。出土遺物はない。

遺構 81(図 25)

円形を呈するピットである。遺構覆土は暗褐色粘質土、炭化物(多)・木片を含む。出土遺物はない。遺構 83～86 に覆土近似。

遺構 82(図 28)

楕円形を呈するピットである。遺構覆土は暗褐色弱粘質土、泥岩粒(多)を含む。遺構 83 を切る。出土遺物はない。

遺構 83(図 28)

楕円形を呈するピットである。遺構 82 に切られる。遺構覆土は暗褐色粘質土、炭化物(多)・木片を含む。出土遺物はない。覆土は遺構 81 に近似。

遺構 84(図 28)

楕円形を呈するピットである。遺構覆土は暗褐色粘質土、炭化物(多)・木片を含む。出土遺物はない。覆土は遺構 81 に近似。

遺構 85(図 25)

楕円形を呈するピットである。遺構覆土は暗褐色粘質土、炭化物(多)・木片を含む。出土遺物はない。覆土は遺構 81 に近似。

遺構 86(図 28)

円形を呈するピットである。遺構覆土は暗褐色粘質土、泥岩粒(多)・炭化物(多)・木片を含む。出土遺物はない。覆土は遺構 81 に近似。

遺構 87(図 25)

やや方形を呈するピットである。遺構覆土は暗褐色粘質土、泥岩・泥岩粒を含む。覆土内には方形を呈する鉄塊が残っていた。柱の痕か。出土遺物はない。

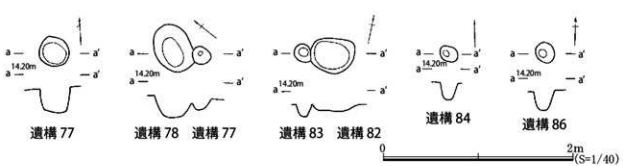


図 28　第 6 面個別遺構図

遺構 88(図 25)

楕円形を呈するピットである。遺構覆土は茶褐色弱粘質土、炭化物(多)・泥岩粒(多)・粘性有り。下層に炭化物が堆積していた。出土遺物はない。

遺構 96(図 25)

円形を呈するピットである。遺構 39 に切られる。遺構覆土は茶褐色弱粘質土、炭化物(多)・泥岩粒(多)を含む。出土遺物はない。

確認調査出土遺物(図 29)

1 は青磁盤。2 は泥岩、表面に細かい刻みが入る、刃物痕か。その他にかわらけ・てづくね・白磁四耳壺・白磁壷・常滑甕・平瓦・ガラス瓶・近世染付製品が破片で出土している。

図 29　確認調査出土遺物

表土～第 1 面出土遺物(図 30)

1～3 はかわらけ。4 は瀬戸瓶子。5 は渥美甕。6 は常滑片口鉢Ⅱ類。7～9 は常滑甕。10 は常滑壺。11 は備前擂鉢。12 は土器甕、縄文期か。13 は鉄製品釘。14 はガラス製品遊具。その他にてづくね・青磁壺・青磁香炉・青白磁合子・褐釉壺・瀬戸折縁深皿・瀬戸線・瀬戸水注・常滑片口鉢Ⅰ類・丸瓦・平瓦・石製品砥石・近世染付製品・近代壺・ガラス瓶・が破片で出土している。

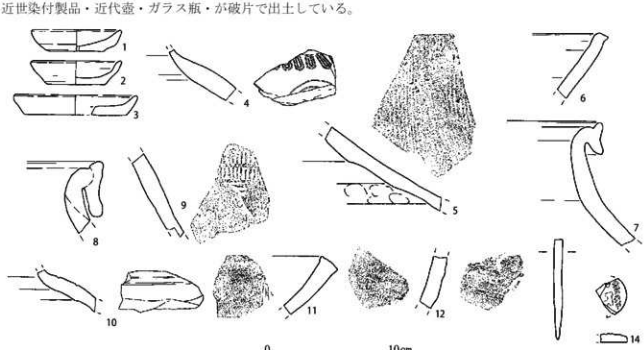


図 30　表土～第 1 面出土遺物

表土・撹乱出土遺物(図 31～図 37)

1～5 はてづくね。6～22 はかわらけ。23 は青磁皿。24～29 は青磁碗。30 は白磁口兀皿。31～33 は白磁皿。

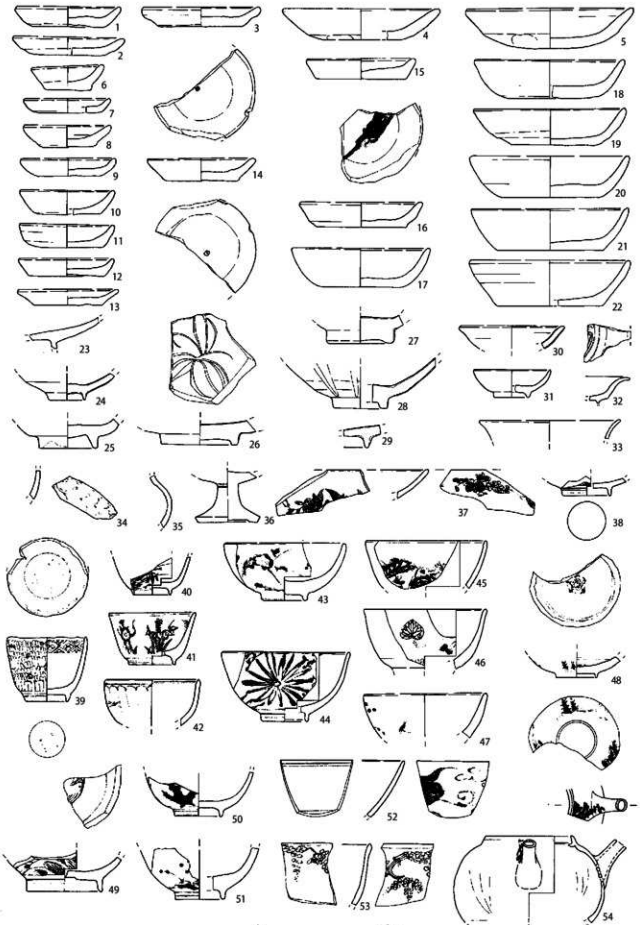


図31　表土・攪乱出土遺物（1）

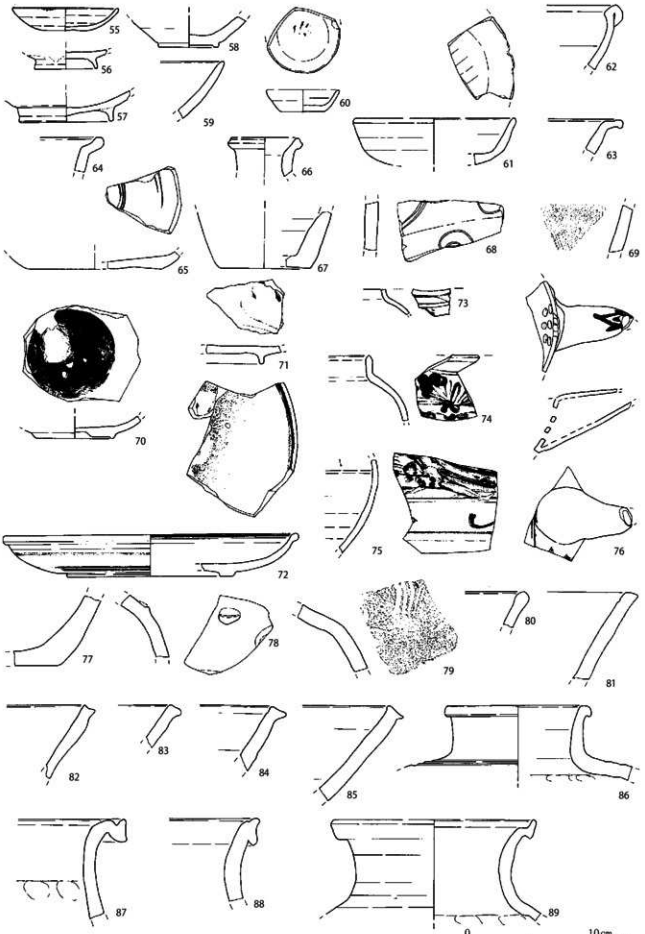


図32　表土・攪乱出土遺物（2）

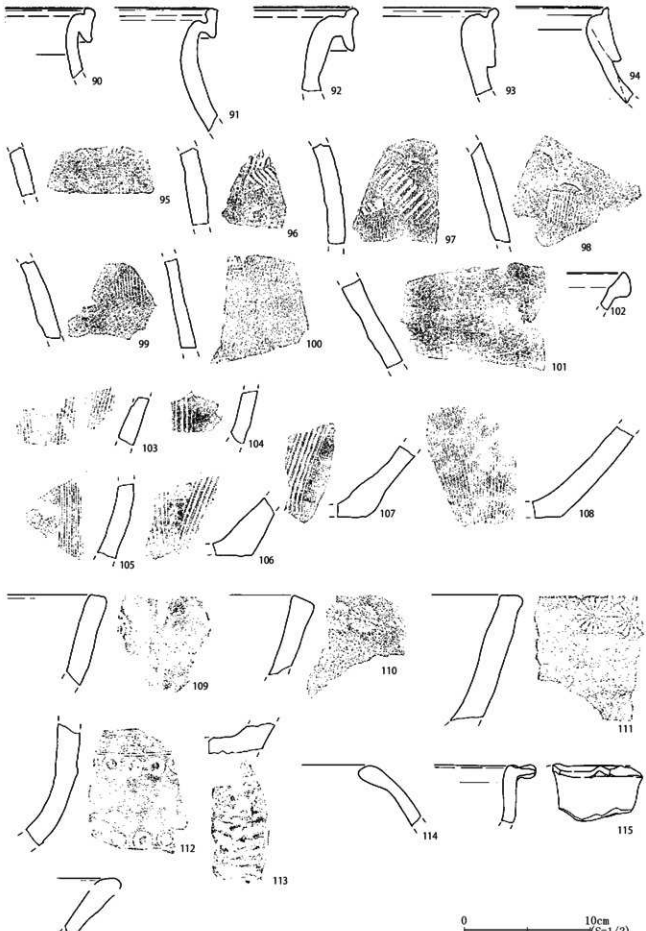


図33　表土・攪乱出土遺物（3）

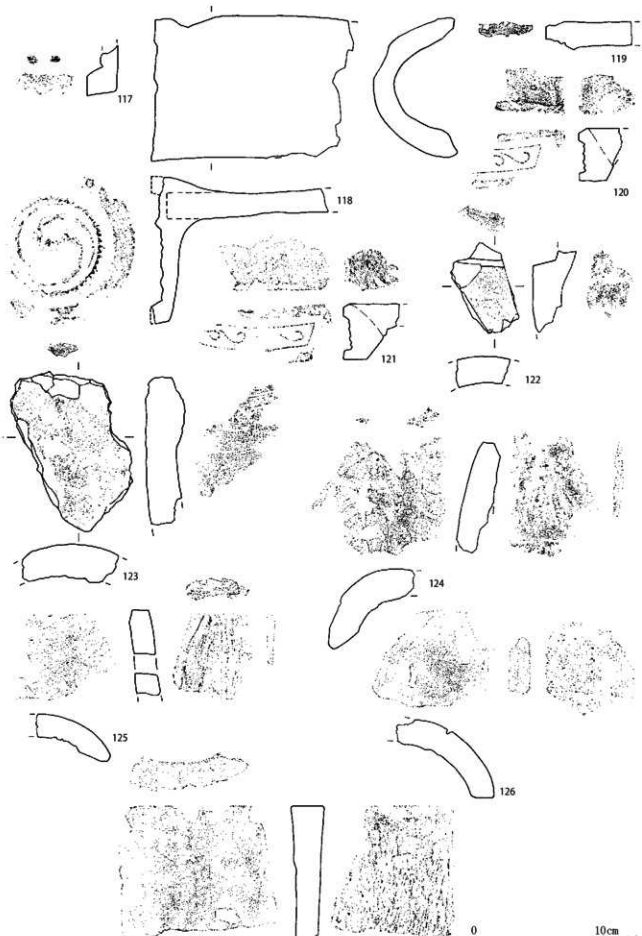


図34　表土・攪乱出土遺物（4）

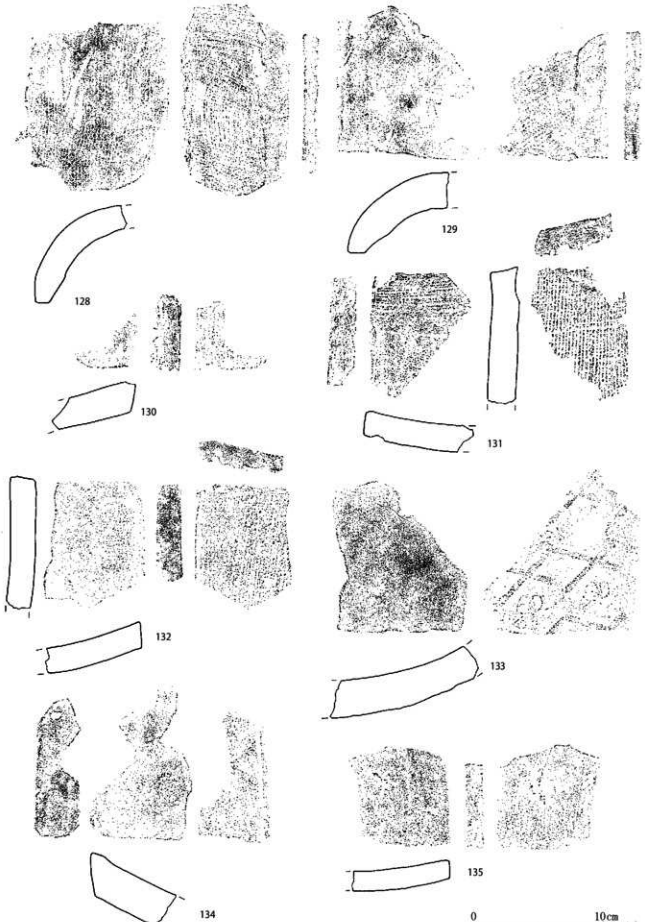


図35　表土・撹乱出土遺物（5）

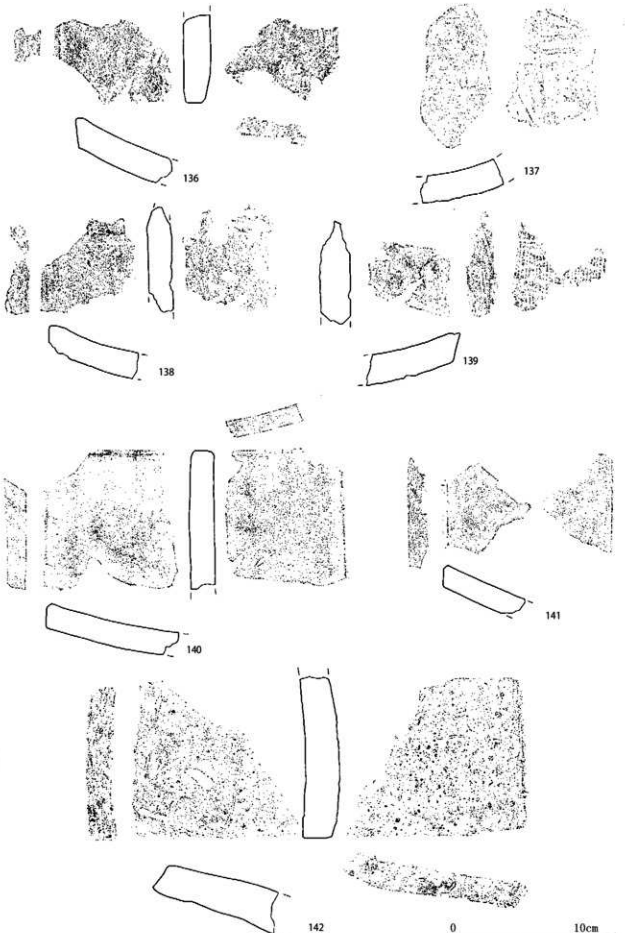


図 36　表土・攪乱出土遺物（6）

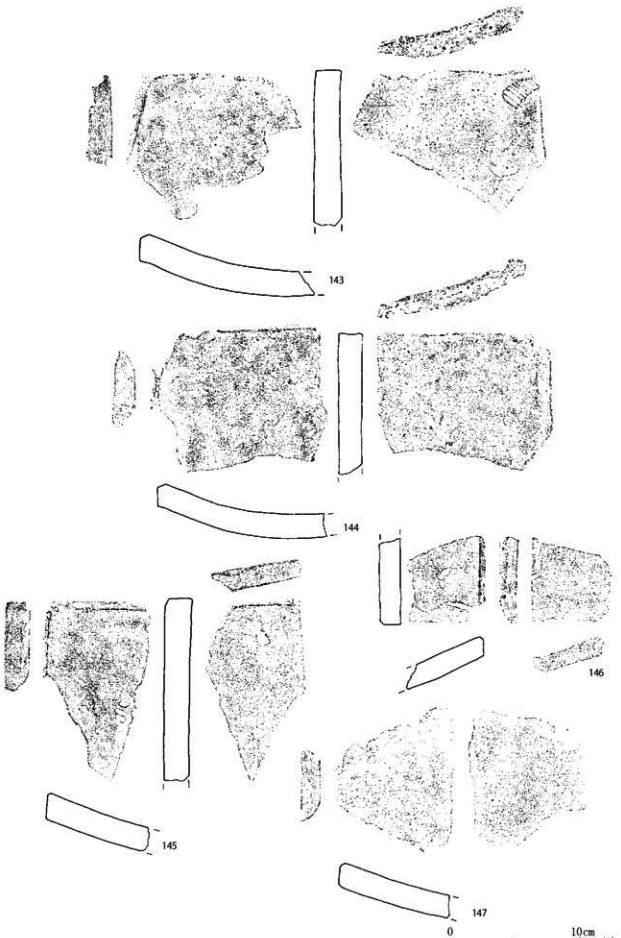


図37　表土・撹乱出土遺物（7）

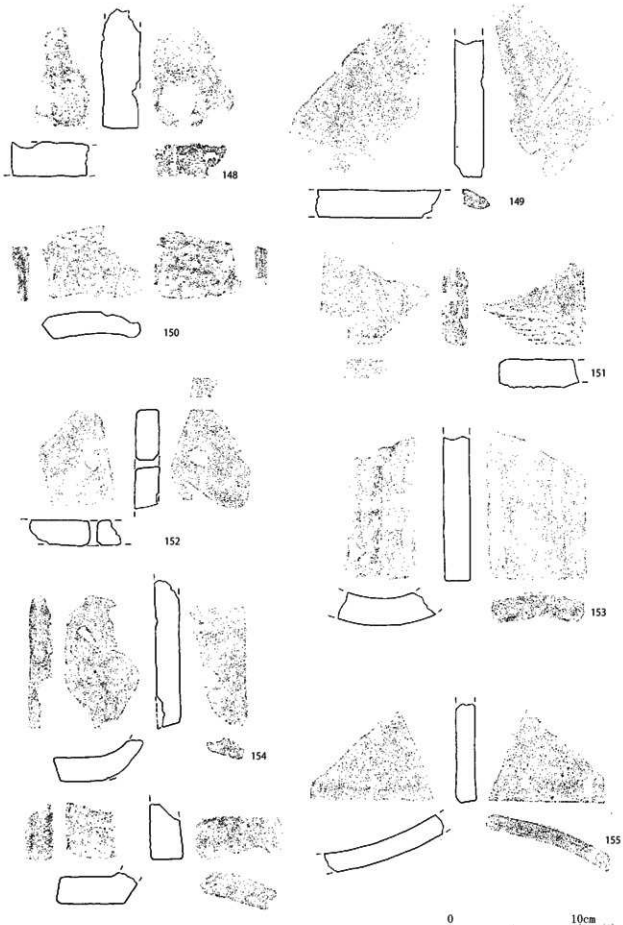


図38　表土・攪乱出土遺物（8）

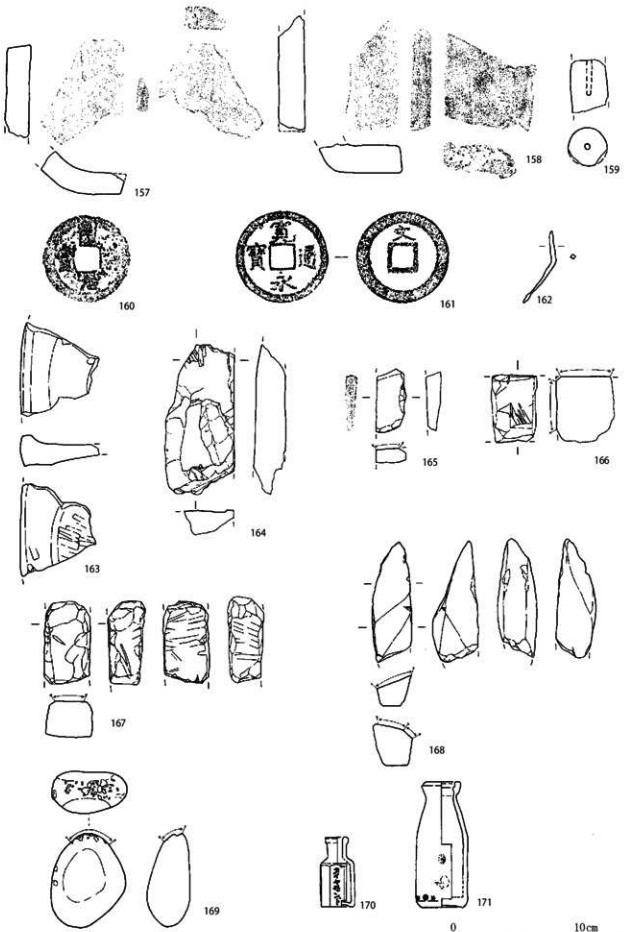


図 39　表土・撹乱出土遺物（9）

34は肥前磁器碗。35は肥前磁器壺。36は肥前仏飯器。37は瀬戸磁器皿。38は瀬戸磁器碗。39は肥前碗。40～53は肥前磁器碗。54は瀬戸急須。55～57は瀬戸皿。58～59は瀬戸平碗。60は瀬戸入子。61は瀬戸卸皿。62は瀬戸洗。63・65は瀬戸折縁皿。64は瀬戸折縁深皿。66～68は瀬戸瓶子。69は瀬戸擂鉢。70～72は瀬戸皿。73・75は益子土瓶。74は瀬戸壺。76は瀬戸土瓶。77は渥美片口注口鉢。78は渥美短頸壺。79は渥美甕壺。80は常滑片口鉢Ⅰ類。81～85は常滑片口鉢Ⅱ類。86は産地不明壺（信楽か）。87～89は常滑広口壺。90～101は常滑甕。102は魚住鉢。103～108は備前擂鉢。109～114は瓦器質火鉢。115は瓦器質香炉か。116は土器質火鉢。117～121は軒丸瓦。122～129は丸瓦。130～147は平瓦。148～153は役瓦。154～158は鳥衾瓦。159は瓦器質土器用途不明。160～161は銅製品銭貨。162は鉄製品釘。163～164は石製品硯。165～168は青製品砥石。169は用途不明自然石。170～171はガラス製品瓶。その他に青磁壺・青白磁梅瓶・白磁碗・白磁水注・白磁口冗皿・褐釉壺・瀬戸洗・軒丸瓦・石製品滑石鍋が破片で出土している。

第四章　まとめ

6面の遺構面が検出された。調査区の東西で表層からの攪乱の度合いが異なり、東側が深くまで及んでいたため、第1面が確認されたのは西側のⅡ区のみである。井戸・土壙・東西溝が確認された。井戸（遺構39）はさらに上層からの遺構で、井戸覆土出土品の年代は14世紀後半と考えられる。井戸の方位は概ねN－60°－Eである。第1面の遺物ではかわらけは糸切のみで、備前すり鉢・常滑Ⅱ類7形式の片口鉢が伴出している。近世以降の攪乱が及んでいる部分が多い。

第2面は東西溝とその北側の泥岩地形の平坦部と東西溝に落ち込む斜面である。泥岩地形面の方位はN－64°－E、東西溝(遺構1)N－36°－E、溝脇のピット列N－35°－Eである。遺構1は上層からの遺物の混入が認められるものの、糸切かわらけの大小、常滑6b相当の広口甕・、Ⅱ期相当の備前すり鉢、瀬戸梅花印花文瓶子のほか、平・丸瓦・砥石が多く出土している。付近に瓦葺きの建物が存在した可能性がある。第2面の遺物のはかわらけは糸切のみで常滑窯片口鉢Ⅱ類6b～7形式・広口壺6b～8型式・備前すり鉢中世Ⅱb期、古瀬戸中期Ⅰ～Ⅱ期・青磁連弁文碗(Ⅲ類)の遺物が出土しており、遺構50もかわらけが大小の組み合わせで出土している。かわらけの組成はやや丸みの多いものが多い。面構成土からは若干の瓦・てづくねかわらけが出土している。遺構50のかわらけ廃棄遺構は13世紀末、面上の遺物の年代は14世紀第2四半期まで、14世紀前半に比定されよう。

第3面も東西溝とその北側の平坦な地形部分と溝に落ち込む斜面である。ピットの組み合わせはN－3°－Wとほぼ正南北方向、溝の肩はN－35°－Eである。第3面の遺物では面・構成土共かわらけは糸切・てづくね両方が出土している。構成土中からは糸切かわらけの方が出土量が多い。また瓦が出土している。遺構109はかわらけの一括廃棄で、図示したかわらけ13点の内、糸切かわらけは2点のみである。是と共伴して白磁合子の身と白釉陶器香炉が出土している。香炉は所謂千鳥手と称される形式である。素地は瀬戸に似ているが、時代的に瀬戸窯でこの手の香炉の生産は開始されていないから、舶載品と考えられる。型作りで釉が融けきっていない状態、所謂生焼けの状態である。構成土中からは青磁劃花紋碗（青磁碗Ⅰ類）・青磁劃花文壺又は瓶・白磁口禿碗（白磁碗Ⅸ類）・白磁口禿皿（白磁皿Ⅸ類）・黄釉盤・瀬戸入子（前Ⅱ期）・東濃窯山茶碗（第6～7型式）・常滑広口壺（第6a型式）が出土しており、13世紀中頃に比定されよう。3面構成土からは砥石と共に縄文時代遺跡から出土するような磨石が出土している。第3面の年代は13世紀中頃から後半にかけてに比定されよう。

第4面はⅠ区が集中豪雨被害で壁面崩落し、調査継続不能となったため詳細を明らかにできなかった部分が多い。井戸の方位は概ねN－57°－E、東西溝N－38°－E、東西溝南のピット列がN－53°－E、土壙60・61およびその北側のピット群は概ねN－52°－E、調査区北西部のピット群はN－4°－Eである。第4面の遺物では井戸（遺構30）覆土からはてづくね・輪幅かわらけ双方が出土し、緑釉盤・東濃窯山茶碗（6型式）・渥美窯甕（2型式）・瓦・木製品(ひしゃく・板草履・箸など)外、白磁の人形の断片が出土している。てづくねかわらけには背のやや高いもの、口縁部に二段のなで整形があるものが含まれている。第4面上からはてづくね・輪幅かわらけ双方が出土し、常滑窯片口鉢(Ⅰ類6a型式・Ⅱ類6a形式)・黄釉盤・瓦が、4面構成土中にはてづくね・輪幅かわらけ双方のほか、常滑窯甕(第5型式)・同安窯碗(Ⅰ類)・瓦・砥石が出土している。13世紀中頃、第2～第3四半期に位置付けられよう。

第5面は南に向かった緩やかな傾斜はあるものの平坦な遺構面で、段差は存在しない。ピット群の方位はN－14°－E、土壙64・65を結んだ方位はN－67°－Eである。第5面からは手づくね・輪幅かわらけ双方、青磁龍泉窯碗(Ⅲ類)・泥岩(所謂土丹)製五輪塔の火輪・敲き石が出土している。てづくねかわらけは背の比較的低いものである。輪幅かわらけには外底部に板状圧痕が残るものが大部分である。従来、この底部の圧痕を簀子状としているが、圧痕がランダムであり、簀子の上に置いたため付いた圧痕ではない。糸切後に底部に行われた打痕で、底部の素地の敲き締めと考えられる。これ以前の輪幅かわらけは静止糸切・弱回転糸切痕を持つ比較的底部の厚いもので、外底面の調整はなかったが、素地を薄くし輪幅の回転を上げて成型するようになったため、底部の強化が必要となり、敲き締めが行われるようになったのであろう。13世紀第1四半期に比定されよう。泥岩製五輪塔火輪は鎌倉に於ける立体的五輪塔の比較的早い時期の遺物として注目される。

第6面は標高14mの水平な遺構面で、薄く炭化物層が堆積していた。沼地状の土層でピットのみの確認となった。ピット群の方位はN－63°－Eである。図示できる遺物はないが、遺構77でてづくねかわらけの破片が出土している。この面を最終面として調査は終了したが、まだ完全に地山と呼べる状態ではなかった。遺構の年代は12世紀末に遡る可能性はあろう。

第4面以降、1面まで瓦が出土している。近世には荏柄天神社・別当一乗院共に瓦葺きであったことが『新編鎌倉志』・『新編相模國風土記稿』の挿絵によって分かる。表土・攪乱の中からも大量の瓦が出土しているが、その一部は近世のものであろう。しかしそれ以前の層からも瓦が出土することから、荏柄天神社・別当坊の建物が瓦葺きであったことが中世まで遡る可能性があろう。実際、後北条氏の鶴岡八幡宮造営に当たっては奈良から瓦師が呼ばれ、瓦が焼かれている（『快元僧都記』）。天文十七（1548）年には荏柄社殿造営のため関が設置されており、鶴岡八幡宮同様、瓦葺きで再興されたと考えられる。荏柄天神社は鶴岡八幡宮寺と共に修理が行われてきた経緯があり、鶴岡八幡宮と同様に修理・造営されてきたのであろう。また元和二年には鶴岡八幡宮若宮殿が荏柄天神社に移されており、これは北条氏康による八幡宮造営に際し瓦葺きで修理されたと考えられ、移築に際し、古い瓦をそのまま使用した可能性もあろう。関東大震災の震災資料には瓦葺きの社殿が写されている。

遺跡の歴史的環境で述べたように、当該地は大倉幕府の東に隣接すると共に荏柄天神社別当坊一乗院にも隣接する。現状では本調査地付近は山裾の一段高い部分に建つ住宅とその下に建つ住宅といった差がみられる。本調査では調査地南辺に南に落ちる斜面と溝が各時期に確認されており、この段差が鎌倉時代から続くものであることが確認された。この段差と溝は『としよりのはなし』に掲載されている「薬

師堂道」とは異なるが、『新編相模國風土記稿』や『鎌倉攬勝考』の荏柄天神社絵図にみられる「二階堂道」であろう。この道は明治時代に大塔宮鎌倉宮が建立され、現在のお宮通が建設されると廃道になったものと考えられる。土層断面では攪乱が多く図示できなかったが、段差の下には硬化面が一部残存していた。これが道の残存であろう。　調査区南側の斜面下には杭列がみられ、溝には側板が設置されていたことが推定されるが、ピットは小さく、間隔もまばらであるため、若宮大路側溝のような堅固なものは想定しにくい。現在「二階堂大路」と称される道は明らかに近代以降の命名である。鎌倉宮造営に伴う周辺の整備、埋立てにより成立したものではないであろうか。

遺構の方位については第1面の井戸（遺構39）がN－29°－W（N—61°—E）、第2面の溝がN－36°－E、北側の杭列がN－35°－E、第3面のピット列がN－87°－W（N－3°－E）、N－83°－W（N－7°－E）、溝がN－35°－E、第4面のピット組合せがN－52°－E，N－3°－E、溝がN－38°－E、溝下のピット列がN－53.5°－E、第5面のピット組合せがN－14°－E、第6面のピット組合せがN－27.5°－W（N－62.5°－E）である。調査区南端で確認された溝は第2面がN－36°－E、第3面がN－35°－E、第4面がN－38°－Eと同じところに掘られたため共通性が確認される。一方、面上の遺構には第2面の溝に即した杭列がN－35°－Eと溝に並行している以外、これと類似した方向性は見られない。この事から、土地区画と遺構の方向性が異なることが指摘できよう。第1面の井戸（N—61°—E）と第6面のピット組合せ（N－62.5°－E）の方位が類似するのはなぜであろうか、あるいは土地区画を越えたさらに大きな区画、例えば地形によるのかもしれない。第2面と第3面に遺構の方向性に共通性（N－3°－E）がみられるが東西南北の方位を意識したものとみられ、周辺の遺跡と共通している。

13世紀中頃から後半と推定される第3面の遺構109から出土した白色小粘土塊はハロイサイトであった。磁器の焼成原料であるカオリン鉱物の仲間という。出土時に15cm×15cmの粘土塊の中に白色の粘土が混じっていたため、白粉の可能性があるとして採集した。分析から産地は特定できないが、国産であれば有田・瀬戸などの磁器生産地の磁石鉱山やその付近の河床が考えられよう。現在、国内で生産される磁器原料（カオリン）の最優良品は韓国から輸入され、その一部は化粧品（白粉）の原材料となっているという。この白色粘土を白粉と考えた場合、当然中国もその原産地の一つと考えられよう。南宋～元時代には化粧道具とされる子持盒子が生産され。我が国にも輸入されているから、これと併せて高級化粧品として輸入された可能性も考えられよう。出土地が荏柄天神社別当坊一乗院近くという事から、祭礼に伴う稚児の化粧品であった可能性も考えられよう。鎌倉では、現在まで紅皿・お歯黒皿の出土は幾つかあり。科学的な分析は行われてないものの具体的存在を確認してきた。今回、化粧品としては最も一般的な白粉の存在を確認できたのではないかと思う。それがカオリンであったことは重要な発見であったのではないであろうか。

横小路周辺遺跡出土の粘土分析

藤根　久（パレオ・ラボ）

1．はじめに

鎌倉市二階堂字荏柄 81 番 22 地内に所在する横小路周辺遺跡から検出された粘土塊について、蛍光X線分析およびX線回折分析を行い、粘土の材質分析を行った。

2．試料と方法

分析試料は、粘土塊 1 点である（表 1、図版 1-1、2）。分析は、蛍光X線分析およびX線回折分析を行った。

表1　分析試料とその特徴

分析No.	試料	遺構	時期	試料の特徴
1	粘土塊	109	13世紀後葉～14世紀前半	明褐灰色（7.5YR 7/2）、にぶい褐色部が斑状、土壌・炭化材が混じる

化学組成については、エネルギー分散型蛍光X線分析計 XGT-9000（株式会社堀場製作所製）を使用した。装置の仕様は、X線管が最大 50kV、ロジウム（Rh）管球、SDD 検出器である。測定条件は、測定時間が 500 秒間、管電流自動設定、照射径 100 μm、測定箇所 5 点、試料室内雰囲気は真空である。定量計算は、精度 3σ で測定し、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法（FP 法）により定量分析を行った。

定量元素は、酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化ケイ素（SiO_2）、酸化リン（P_2O_5）、酸化イオウ（SO_3）、酸化カリウム（K_2O）、酸化カルシウム（CaO）、酸化チタン（TiO_2）、酸化マンガン（MnO）、酸化鉄（Fe_2O_3）の 11 元素である。

X線回折分析は、X線回折装置（株式会社リガク製の MiniFlex 600）を使用した。試料は、1mm 立方程度をアルミナ乳鉢で粉末にし、少量試料用の試料ホルダーに充填した。X線管が銅（Cu）ターゲット、検出器が一次元半導体検出器（D/teX Ultra）である。測定条件は、40kV、15mA、走査速度 2.0°/min、ステップ幅 0.02°、走査範囲 3～65° で、回転試料台で試料を回転させて測定した。

3．結果

以下に、蛍光X線分析およびX線回折分析の結果について述べる。

表2　蛍光X線分析による化学組成（単位：%）

点No.	測定位置	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	Mn_2O_3	Fe_2O_3	合計
1	明褐灰色部	0.09	0.28	40.20	50.92	4.12	0.29	0.55	0.82	1.28	0.01	1.45	100.00
2	明褐灰色部	0.01	0.30	40.65	52.72	0.67	1.52	0.64	0.42	1.33	0.00	1.74	100.00
3	明褐灰色部	0.05	0.24	38.98	47.67	6.71	0.37	0.54	1.16	1.36	0.01	2.92	100.00
4	にぶい褐色部	0.01	0.27	39.13	43.71	11.43	0.37	0.53	1.60	1.51	0.01	1.43	100.00
5	にぶい褐色部	0.03	0.25	38.45	37.84	15.88	0.26	0.55	2.37	1.59	0.02	2.85	100.00
最小値		0.01	0.24	38.45	37.84	0.67	0.26	0.53	0.42	1.28	0.00	1.43	
最大値		0.09	0.30	40.65	52.72	15.88	1.52	0.64	2.37	1.51	0.02	2.92	
平均値		0.04	0.27	39.48	46.57	7.76	0.56	0.56	1.27	1.39	0.01	2.08	

試料は、明褐灰色（7.5YR 7/2）で、にぶい褐色を斑状に含む粘土質塊である。一部を溶かして偏光顕微鏡で観察すると、石英あるいは輝石あるいは骨針化石を極少量含むものの、概ね粘土粒子から構成される（図版 1-3）。

蛍光X線分析では、平均値として酸化ナトリウム(Na_2O)が0.04%、酸化マグネシウム(MgO)が0.27%、酸化アルミニウム(Al_2O_3)が39.48%、酸化ケイ素(SiO_2)が46.57%、酸化リン(P_2O_5)が7.76%、酸化イオウ(SO_3)が0.56%、酸化カリウム(K_2O)が0.56%、酸化カルシウム(CaO)が1.27%、酸化チタン(TiO_2)が1.39%、酸化マンガン(MnO)が0.01%、酸化鉄(FeO)が2.08%であった(表2)。

X線回折分析では、ハロイサイト(Halloysite:化学式$Al_2Si_2O_5(OH)_4$)のピークが明瞭に検出され、その他に石英(Quartz:化学式SiO_2)やカオリナイト-モンモリロナイト(Kaolinite-montmorillonite:化学式$Na_{0.3}Al_8Si_8O_{15}(OH)_6 4H_2O$)のピークも確認された(図版1-4)。

4. 考察

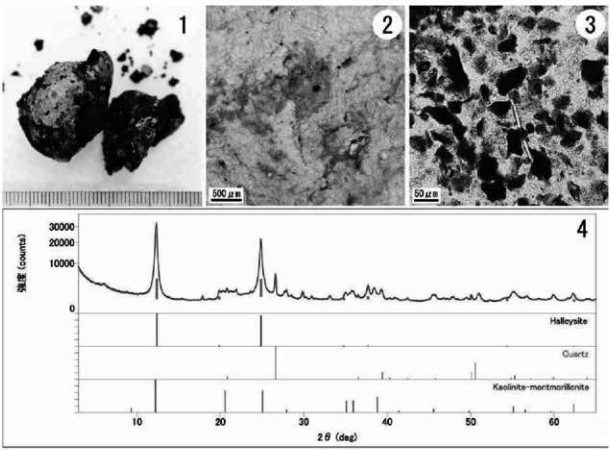
検出された粘土塊のX線回折分析により、ハロイサイト(Halloysite:化学式$Al_2Si_2O_5(OH)_4$)であることが判明した。検出された粘土塊は、土壌や炭化物が混在するものであるが、1cm立方程度の小塊を観察すると、極めて混じり物が少ない純度の高いハロイサイトであり、蛍光X線分析においても化学的に平均的な組成を示す。なお、斑状に含まれるにぶい褐色部では、酸化リン(P_2O_5)が高い。

ハロイサイトは、カオリン鉱物の仲間であり、陶磁器用材料、紙繊維の間を埋める充填材や表面を滑らかにするコーティング材としての製紙用材料、白色顔料の代用品として利用されている。一般的に、カオリン鉱床は、珪長質岩石(花崗岩や流紋岩)が風化作用や熱水作用・続成作用を受けて形成される。また、火山灰や軽石層が風化した場合にも形成される(日本粘土学会, 2009)。

検出されたハロイサイトからなる粘土塊が、具体的にどのような用途で使用されたかは不明であるが、特定の場所(産地)で採取された可能性が高く、遺跡周辺での採取は考え難いと思われる。

引用・参考文献

牧野和孝(1998)鉱物資源百科辞典. 1390p, 日刊工業新聞社.
日本粘土学会(2009)粘土ハンドブック(第三版). 990p, 技法堂出版株式会社.
白水晴雄(1988)粘土鉱物学—粘土科学の基礎—. 185p, 朝倉書店.



図版1　白色粘土塊とX線回折スペクトル図

1. 出土した白色粘土塊　2. 粘土塊の表面　3. 粘土塊の顕微鏡写真（中央：骨針化石）

4. X線回折スペクトル図

遺構計測表

面	遺構名	種別	長軸	面	深さ		備考
1	39	井戸	(220)	77	(210)		
1	40	溝	(275)	136	31		
1	41	溝	(33)	(300)	(30)		
1	42	土坑	118	(57)	19		
2	1	溝	(760)	(105)	32		
2	2	ピット	37	(17)	11		
2	3	ピット	34	32	16		
2	4	土坑	102	(63)	19		
2	43	ピット	33	32	12		
2	44	ピット	48	35	6		
2	45	土坑	119	(61)	44		
2	47	土坑	53	(36)	7		
2	48	土坑	149	73	23		
2	50	かわらけ廃棄	208	130			範囲のみ
2	73	ピット	25	24	6		
2	74	ピット	9	9	12	杭痕	
2	75	ピット	11	10	8	杭痕	
2	76	ピット	10	8	11	杭痕	
2	93	ピット	8	8	10	杭痕	
2	94	ピット	8	6	11	杭痕	
2	95	ピット	12	9	5	杭痕	
2	97	ピット	14	14	18		
2	98	ピット	21	13	12	杭痕	
2	99	ピット	15	14	18	杭痕	
2	100	ピット	9	7	8	杭痕	
2	101	ピット	12	10	8	杭痕	
2	102	ピット	10	9	3	杭痕	
2	103	ピット	13	9	14	杭痕	
2	104	ピット	16	16	20	杭痕	
2	105	ピット	32	19	14	杭痕	
2	106	ピット	22	19	16	杭痕	
3	5	ピット	36	28	10		
3	6	ピット	30	24	13		
3	7	ピット	27	25	12		
3	8	土坑	(64)	(46)	14		
3	9	ピット	31	20	31		底面付近に泥岩遺存
3	10	ピット	25	23	29		
3	11	ピット	19	19	4	杭痕	
3	12	ピット	13	12	12	杭痕	
3	13	ピット	15	14	24	杭痕	
3	14	土坑	65	61	13		
3	15	ピット	23	21	9		
3	16	ピット	(69)	23	8		
3	17	ピット	12	11	10		
3	18	土坑	(105)	(52)	12		
3	19	ピット	28	23	12		
3	107	ピット	(41)	(16)	9		
3	108	ピット	29	(22)	4		
3	109	かわらけ廃棄	220	80			範囲のみ
4	23	ピット	(20)	(16)	10		
4	24	ピット	50	32	22		
4	25	ピット	32	(23)	23		遺構26に切られる
4	26	ピット	26	20	22		
4	27	ピット	29	20	22		
4	28	ピット	30	28	9		
4	30	井戸	231	214	185		
4	31	ピット	30	29	20		
4	32	ピット	19	17	10		
4	33	ピット	16	14	34	杭痕	
4	51	ピット	32	22	6		
4	52	ピット	24	21	40	杭痕	
4	54	ピット	43	25	10		
4	55	ピット	33	33	8		
4	56	ピット	40	40	7		
4	57	ピット	37	30	6		
4	58	ピット	30	27	6		
4	59	ピット	28	25	24	杭痕	
4	60	土坑	(117)	(28)	13		
4	61	土坑	(132)	(28)	14		
4	62	炭化物堆積範囲	(245)	(210)	(1～20)		堆積の厚さは均一ではない
4	63	ピット	25	21	11		
5	64	土坑	124	(53)	55		
5	65	土坑	(71)	78	14		
5	66	ピット	28	(23)	17		柱穴か
5	67	ピット	43	36	7		
5	68	ピット	20	17	12		
5	69	ピット	25	25	9		
5	70	ピット	40	36	16		
5	71	ピット	47	(35)	9		
5	72	ピット	(48)	(13)	6		
6	77	ピット	31	30	28		
6	78	ピット	50	39	22		
6	80	ピット	19	18	15		遺構78を切る
6	81	ピット	21	17	11		
6	82	ピット	45	35	5		遺構83を切る
6	83	ピット	18	(17)	32		
6	84	ピット	21	17	17		
6	85	ピット	16	15	5		
6	86	ピット	21	19	21		
6	87	ピット	30	27	12		
6	88	ピット	44	34	14		
6	96	ピット	34	(22)	14		

単位 (cm)

出土遺物観察表

図版番号	枝番	出土層位 出土遺構	種別 産地	器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
					単位:cm/復元値[ ]/残存値( )			a:成形・調整 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:残存率 f:備考 g:重量
9	1	第1面 遺構39	土器	てづくね	(9.00)	—	1.20	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 良土 c:黄灰色 e:1/4 g:14.8g
9	2	第1面 遺構39	土器	かわらけ	6.70	4.05	1.65	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 やや良土 c:黄橙色 e:2/3 g:23.7g
9	3	第1面 遺構39	土器	かわらけ	(7.80)	(4.80)	2.00	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 良土 c:橙色 e:1/3 g:12.2g
9	4	第1面 遺構39	土器	かわらけ	11.90	7.60	3.00	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明瞭・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 やや粗土 c:黄橙色 e:2/3 g:89.0g
9	5	第1面 遺構39	土器	かわらけ	(12.90)	(8.20)	3.10	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/4 g:60.3g
9	6	第1面 遺構39	土器	かわらけ	(12.00)	(6.20)	3.95	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/3 g:68.5g
9	7	第1面 遺構39	磁器 舶載品	青磁 碗	—	(4.00)	[1.9]	a:ロクロ・底部糸切痕 b:精良堅緻 c:灰色 d:淡青色・半透明・高台畳付き及び高台内露胎 e:底部片 f:碗Ⅰ類・竜泉窯
9	8	第1面 遺構39	陶器 常滑	片口鉢 Ⅰ類	—	(10.80)	[3.6]	a:輪積み・内面摩耗・外面横位のナデ b:微砂・白色粒・雲母・小石粒 c:灰色 d:灰色・自然降灰 e:底部片 f:型式不明・底部平底を張り付けている・ナデ等の整形痕はない・胎土、外面体部の整形等からⅠ類と判断したが高台はつかない
9	9	第1面 遺構39	金属製品	鉄製品 釘	[5.0]	0.60	0.40	a:鍛造 f:錆付着・断面方形
9	10	第1面 遺構39 裏込め	木製品	調度具 部材	[16.3]	1.50	0.90	f:貫通していない孔あり
9	11	第1面 遺構39 裏込め	木製品	棒状	[13.4]	1.25	0.77	f:断面方形
9	12	第1面 遺構39 裏込め	木製品	串状	[29.2]	1.10	0.47	f:断面長方形
10	1	第1面 遺構40	土器	かわらけ	—	6.00	[1.25]	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕 b:微砂・雲母・黒色粒・赤色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:底部片 f:内面見込み中央からややずれた位置に貫通しない孔有り。径約3㎜の孔中央にさらに深く径約1㎜の孔が開けられる・外底面にも約1.5㎜の貫通しない孔が開く・内外面の孔はともに器形の中心からずれお互いの位置もずれる・内面摩耗し整形痕不明 g:44.9g
10	2	第1面 遺構40	土器	かわらけ	(13.10)	(8.80)	3.25	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 粗土 c:橙色 e:1/3 g:74.0g
10	3	第1面 遺構40	陶器 常滑	甕	—	—	[8.6]	a:輪積み b:微砂・白色粒 c:暗褐色 d:暗褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:7型式
10	4	第1面 遺構40	陶器 常滑	甕	—	—	[8.4]	a:輪積み b:微砂・黒色粒・白色粒 c:褐色 d:灰白色・自然降灰 e:口縁部片 f:6a型式
10	5	第1面 遺構40	土製品	瓦器質 火鉢	—	—	[3.9]	a:輪積み・口縁形輪花型 b:微砂・海綿骨針・小石粒 c:明褐色 e:口縁部片 f:Ⅲ類・体部外面口唇部下片に2本の沈線間に5弁の菊花文押印・表面黒色処理
10	6	第1面 遺構40	土製品	瓦器質 火鉢	—	—	[5.9]	a:輪積み・口縁形輪花型 b:微砂・黒色粒 c:暗褐色 e:口縁部片 f:Ⅲ類・内外面ともに横位のナデ・表面黒色処理・内面口唇部下枠3. 5㎝下方は被熱を受け灰褐色を呈する
10	7	第1面 遺構40	土製品	瓦 軒平瓦	—	—	—	瓦当部幅-[3.95] 上外区幅-0.85 下外区幅-不明 内区幅-[2.2] 顎面幅-不明 瓦当文様-均整唐草文 a:女瓦部凹面-無文・瓦当上部に横位削りを施した後ナデ整形・細長い縦位の叩き 女瓦部凸面-横位の指頭によるナデ整形 瓦当部-内区と外区を画する沈線が廻り内区に唐草文 瓦当貼付け式段顎 b:微砂・泥岩粒・小石粒 硬質 c:灰橙色 e:小片
10	8	第1面 遺構40	土製品	瓦 軒丸桟瓦 か	—	—	—	瓦当径-(7.6) 外区幅-1.27 内区径-4.8 外縁高さ-0.55 瓦当文様-中心に左廻り巴文を置き外周に8個の珠文を配する・巴頭部は大きい a:女瓦部は遺存しない 瓦当を平瓦に張り付けるために裏面に刻みが残る b:微砂 硬質 c:黒褐色 e:瓦当部片 f:近代
10	9	第1面 遺構40	土製品	瓦 丸瓦	[14.1]	[6.3]	1.90	a:筒部凸面-側面と平行のナデ 筒部凹面-細かい布目痕・布引き上げ痕によるシワ 筒部側縁-ヘラ削り 筒部側面-ヘラ削り b:微砂・白色粒 c:灰橙色 軟質 e:筒部片 f:A類
10	10	第1面 遺構41	土器	かわらけ	12.50	8.00	3.15	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明瞭・内底強くナデ b:微砂・雲母・黒色粒・赤色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:4/5 g:144.6g
10	11	第1面 遺構41	陶器 瀬戸	平碗	—	(5.40)	[3.3]	a:ロクロ・底部回転糸切 b:微砂 c:灰色 d:灰緑色・透明・底部露胎 e:底部片 f:後期Ⅲか
11	1	第1面 面上	土器	かわらけ	(6.90)	(4.80)	1.85	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明 b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 やや粗土 c:黄灰色 e:2/3 f:全体に器肌摩耗し整形痕不明瞭 g:19.3g
11	2	第1面 面上	土器	かわらけ	(7.10)	(5.10)	1.55	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄灰色 e:1/4 g:14.3g
11	3	第1面 面上	土器	かわらけ	7.40	3.90	2.30	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:4/5 f:内外面口唇部2ヶ所に油煤痕 g:49.8g
11	4	第1面 面上	土器	かわらけ	(7.50)	(5.80)	1.70	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:橙色 e:1/3 g:19.6g
11	5	第1面 面上	土器	かわらけ	(7.70)	(5.00)	1.80	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針 c:橙色 e:1/2 g:28.9g
11	6	第1面 面上	土器	かわらけ	(7.70)	(6.20)	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄灰色 e:2/3 f:内外面薄く黒色に変色 g:13.3g
11	7	第1面 面上	土器	かわらけ	(8.00)	(5.80)	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄灰色 e:2/3 f:内外面、外底部薄く黒色に変
11	8	第1面 面上	土器	かわらけ	(11.30)	(6.60)	2.95	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕 b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針 c:黄灰色 e:2/3 f:全体に器肌摩耗・整形痕不明 g:49.3g
11	9	第1面 面上	土器	かわらけ	(12.50)	(7.50)	3.00	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・器壁回転ナデの後内底強くナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:3/4 g:108.2g
11	10	第1面 面上	土器	かわらけ	(12.60)	(7.80)	3.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針 やや粗土 c:橙色 e:2/3 g:114.6g
11	11	第1面 面上	陶器 常滑	片口鉢 Ⅰ類	—	—	[7.9]	a:輪積み・外面横位のナデ b:微砂・白色粒・小石粒 c:灰褐色 d:内面灰緑色・自然降灰 e:口縁部片 f:4型式か
11	12	第1面 面上	陶器 常滑	片口鉢 Ⅱ類	—	—	[3.4]	a:輪積み・内面摩耗・外面横位のナデ b:微砂・石英・雲母・小石粒 c:褐色 d:口唇部のみ暗褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:7～8型式
11	13	第1面 面上	陶器 常滑	甕	[6.3]	(6.10)	[1.4～1.6]	a:輪積み・内面横位のナデ・外面12弁の菊花と細かい格子文の押印 b:微砂・白色粒 c:褐色 d:黄褐色・自然降灰 e:胴部片
11	14	第1面 面上	陶器 備前	擂鉢	[7.5]	[7.4]	[1.3～2.8]	a:輪積み・内面横位の整形・外底面雑な整形 b:白色粒・小石粒 c:褐色 d:暗黄褐色・自然降灰 e:底部片 f:内面線状の刻み目は一単位6条
11	15	第1面 面上	土製品	土器質 火鉢	—	—	[4.1]	a:輪積み・内面指頭による斜位のナデ痕・口縁部外方に角ばる b:微砂 c:灰黄色 e:口縁部片 f:ⅡD類・外側面器壁剥離・内面、口唇部薄く黒色に変色

単位(cm)

出土遺物観察表

図版番号	枝番	出土層位 出土遺構	種別 産地	器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
					単位:cm/復元値[ ]/残存値( )			a:成形・調整 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:残存率 f:備考 g:重量
11	16	第1面 面上	金属製品	鉄製品 釘	[4.9]	0.50	0.60	a:鍛造 f:錆付着・断面方形
11	17	第1面 面上	金属製品	鉄製品 釘	[6.1]	0.50	0.50	a:鍛造 f:錆付着・断面方形
11	18	第1面 面上	金属製品	用途不明	[18.3]	[1.8]	[1.6]	a:鍛造 f:錆付着・断面錆付着のため不整形・工具か
11	19	第1面 面上	石製品	硯	[4.3]	[4.3]	[1.0]	a:側面−切り出し痕 c:明茶褐色 f:海部と側面(一部)底部(一部)が遺存
11	20	第1面 構成土	土器	てづくね	(8.80)	—	1.55	a:てづくね・外底部指頭によるナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄灰色 e:1/4 f:全体に器肌摩耗し整形痕不明 g:18.3g
11	21	第1面 構成土	土器	かわらけ	7.30	4.70	1.80	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:3/4 g:42.8g
11	22	第1面 構成土	土器	かわらけ	(8.00)	6.00	1.75	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/4 g:12.7g
11	23	第1面 構成土	土器	かわらけ	(10.70)	(6.80)	3.35	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 粗土 c:黄橙色 e:1/4 g:66.0g
11	24	第1面 構成土	金属製品	鉄製品 釘	[3.7]	[0.7]	[0.7]	a:鍛造 f:錆付着・切断面から見える釘本体の断面形は方形・断面値−幅0.2cm、厚さ0.2cm
11	25	第1面 構成土	金属製品	鉄製品 釘	[4.4]	0.50	0.40	a:鍛造 f:錆付着・断面方形
12	1	第2面 遺構1	土器	てづくね	(7.90)	—	1.40	a:てづくね・外底部指頭によるナデ b:微砂・雲母 良土 c:灰黄色 e:1/4 g:13.3g
12	2	第2面 遺構1	土器	かわらけ	(7.50)	(5.40)	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨針 c:橙色 e:1/4 g:7.6g
12	3	第2面 遺構1	土器	かわらけ	7.75	5.05	1.40	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:灰黄色 e:ほぼ完形 g:46.1g
12	4	第2面 遺構1	土器	かわらけ	(7.90)	(5.90)	1.30	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/5 f:歪み大・底部外縁に粘土付着 g:13.0g
12	5	第2面 遺構1	土器	かわらけ	(8.00)	(5.10)	1.30	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/3 f:歪み大 g:23.2g
12	6	第2面 遺構1	土器	かわらけ	(8.00)	(5.20)	1.80	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:1/5 g:11.2g
12	7	第2面 遺構1	土器	かわらけ	(8.60)	(5.80)	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 粗土 c:橙色 e:1/5 g:12.4g
12	8	第2面 遺構1	土器	かわらけ	(10.00)	(7.80)	2.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底回転ナデ b:微砂・雲母 硬質 c:橙色 e:1/4 f:見込み中央に指頭痕 g:37.8g
12	9	第2面 遺構1	土器	かわらけ	(10.60)	(7.40)	3.00	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 c:黄灰色 e:1/3 g:41.2g
12	10	第2面 遺構1	土器	かわらけ	(12.00)	(6.80)	3.00	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明 b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄灰色 e:1/5 f:全体に器肌摩耗のため整形痕不明 g:43.5g
12	11	第2面 遺構1	土器	かわらけ	12.45	8.20	3.15	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 c:黄橙色 e:完形 g:145.0g
12	12	第2面 遺構1	土器	かわらけ	12.50	9.30	3.30	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:4/5 g:178.7g
12	13	第2面 遺構1	土器	かわらけ	(12.90)	(8.90)	3.45	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:1/4 g:47.2g
12	14	第2面 遺構1	磁器 肥前	皿	—	(6.80)	[0.9]	a:ロクロ・染付・呉須・筆描き・見込みに草花文・畳付露胎 b:精良堅緻 c:白色 d:透明・薄く均一 e:底部片
12	15	第2面 遺構1	陶器 瀬戸	入子	—	—	[1.8]	a:ロクロ b:精良 c:灰白色 d:降灰釉・透明 e:口縁部片 f:前Ⅱ期
12	16	第2面 遺構1	陶器 瀬戸	香炉	—	—	[1.3]	a:ロクロ b:精良 c:灰色 d:濃緑色 e:口縁部片 f:外面頸部片に二重の竹管文が廻る・中Ⅰ～Ⅱ期・14世紀代
12	17	第2面 遺構1	陶器 瀬戸	壺	—	—	[4.4]	a:ロクロ b:微砂 c:灰白色 d:淡緑色 e:肩部片 f:肩部上位に指頭痕・下部はヘラ状工具による粗い整形痕・外面肩部上位に三条の沈線・体部に径約0.6cmの竹管文の周りに径約1.1cmの竹管文を5つ配し梅文を意匠している・中Ⅱ期・14世紀代
12	18	第2面 遺構1	陶器 渥美	甕	—	—	[6.8]	a:輪積み・内面ヘラ状工具による横位のナデ・外面縦線文の押印 b:白色粒・粘性あり c:明茶褐色 d:灰色・自然降灰 e:胴部片
12	19	第2面 遺構1	陶器 常滑	片口鉢 Ⅱ類	—	—	[5.3]	a:輪積み・内面横位のナデ・外面口縁部下位は強く横位のナデ・体部中位から下位に指頭痕 b:微砂・白色粒・小石粒 c:明茶褐色 d:明茶褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:6b～7型式
12	20	第2面 遺構1	陶器 常滑	広口壺	—	—	[6.6]	a:輪積み・内面横位のナデ b:微砂・白色粒 c:褐色 d:明茶褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:6b～8型式
12	21	第2面 遺構1	陶器 備前	擂鉢	—	—	[4.6]	a:輪積み・内外面横位のナデ b:精良・白色粒 c:茶褐色 d:明茶褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:内面線状の刻みは一単位8本
13	22	第2面 遺構1	土製品	瓦器質 火鉢	—	—	[7.3]	a:輪積み・口縁部外反気味で丸みを帯びる・内外面横位のナデ・外面下位残存していないため整形痕不明・焼成前に口縁下に内面から外面に穿孔している b:微砂・白色粒 やや硬質 c:灰色 e:口縁部片 f:ⅠB類・表面黒色処理・側面観—逆台形を呈する
13	23	第2面 遺構1	土製品	瓦器質 火鉢	—	—	[5.6]	a:輪積み・外面口縁部下に8弁の花文(菊花文か)スタンプが廻る・内面縦位のナデ b:微砂 軟質 c:灰色 e:口縁部片 f:Ⅲ類・表面黒色処理
13	24	第2面 遺構1	陶器 瀬戸	擂鉢	—	—	—	a:ロクロ・内外面横位のナデ b:微砂 c:明褐色 d:紫色がかった褐色 e:口縁部片 f:大窯
13	25	第2面 遺構1	土製品	瓦 丸瓦	[12.3]	[7.1]	2.80	a:筒部凸面−無文・縦位のヘラナデ 筒部凹面−布目痕・糸切痕 筒部側面−ヘラ削り 側縁−ヘラ削り 端面−ヘラ整形 b:微砂 軟質 c:灰黒色 e:小片 f:A類
13	26	第2面 遺構1	土製品	瓦 平瓦	[11.4]	[8.8]	2.00	a:凹面−離れ砂付着 凸面−側面に平行した叩き痕 側縁−ヘラ削り b:微砂・白色粒 軟質 c:灰色 e:小片 f:A類・内外面黒色を呈する
13	27	第2面 遺構1	土製品	瓦 平瓦	[7.7]	[8.8]	2.20	a:凹面−離れ砂付着 凸面−「×」状の斜格子の叩き痕・離れ砂付着 側縁−一部遺存・ヘラ削り b:微砂・白色粒 軟質 c:灰黄色 e:小片 f:D類・断面一部を故意に磨っている可能性有り
13	28	第2面 遺構1	土製品	瓦 平瓦	[9.4]	[12.1]	2.20	a:凹面−無文・調整痕をナデ消している 凸面−叩き目の幅が狭い 側面−ヘラ削り 側縁−ナデ整形 狭端面−ヘラ削り b:微砂・白色粒 軟質 c:灰色 e:小片 f:A類
13	29	第2面 遺構1	金属製品	鉄製品 釘	[3.4]	0.50	0.50	a:鍛造 f:錆付着・断面方形
13	30	第2面 遺構1	金属製品	鉄製品 釘	[3.7]	0.55	0.50	a:鍛造 f:錆付着・断面方形
13	31	第2面 遺構1	金属製品	鉄製品 釘	[5.0]	0.80	0.80	a:鍛造 f:錆付着・断面方形
13	32	第2面 遺構1	金属製品	鉄製品 釘	[7.8]	0.70	0.90	a:鍛造 f:錆付着・断面方形

単位(cm)

図版番号	枝番	出土層位 出土遺構	種別 産地	器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
					単位:cm/復元値[ ]/残存値( )			a:成形・調整 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:残存率 f:備考 g:重量
13	33	第2面 遺構1	石製品	砥石 中砥	[5.0]	2.9～4.0	0.6～0.7	c:白色 e:小片 f:伊予産・砥面2面遺存・側面切り出し痕
13	34	第2面 遺構1	石製品	砥石 中砥	[4.8]	3.70	1.0～1.7	c:白色 e:小片 f:伊予産・砥面2面遺存・側面切り出し痕
13	35	第2面 遺構1	石製品	砥石 中砥	[8.2]	[3.9]	[3.9]	c:灰赤色 e:小片 f:天草産・砥面1面遺存・側面切り出し痕
14	1	第2面 遺構50	土器	かわらけ	5.55	3.95	1.10	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ・口唇部内折れ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:橙色 e:完形 f:歪み大 g:20.8g
14	2	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(7.00)	(4.40)	1.55	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/4 g:15.6g
14	3	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(7.00)	(4.40)	1.80	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ不明瞭 b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄灰色 e:1/4 g:22.1g
14	4	第2面 遺構50	土器	かわらけ	7.40	4.90	1.45	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底強くナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄橙色 e:完形 f:歪み大 g:45.3g
14	5	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(7.40)	(5.80)	1.20	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・器壁回転ナデの後内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:1/2 g:18.8g
14	6	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(7.40)	(4.00)	1.55	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕 b:微砂・雲母・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/4 f:全体に器肌摩耗し整形痕不明 g:12.1g
14	7	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(7.40)	(5.80)	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 やや粗土 c:橙色 e:3/4 f:全体に器壁摩耗 g:26.3g
14	8	第2面 遺構50	土器	かわらけ	7.50	5.80	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:4/5 g:44.6g
14	9	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(7.60)	(5.20)	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/3 g:17.3g
14	10	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(7.60)	(6.20)	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/2 g:20.7g
14	11	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(7.80)	(6.20)	1.45	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭 b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄灰色 e:1/3 f:全体に器肌摩耗し整形痕不明 g:16.3g
14	12	第2面 遺構50	土器	かわらけ	7.90	5.80	1.30	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/2 g:22.3g
14	13	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(7.95)	(5.50)	1.65	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明瞭・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:2/3 g:54.2g
14	14	第2面 遺構50	土器	かわらけ	8.10	5.30	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明瞭・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:黄灰色 e:4/5 g:53.5g
14	15	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(8.10)	(6.00)	2.00	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・見込み回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/3 g:20.7g
14	16	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(8.30)	(5.60)	1.65	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/3 g:14.3g
14	17	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(8.40)	(6.40)	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:黄灰色 e:2/3 g:36.4g
14	18	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(11.60)	(7.80)	3.30	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明瞭・内底強くナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:2/3 f:歪み大 g:124.7g
14	19	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(11.80)	(7.00)	3.00	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデ不明 b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:4/5 f:口唇部内外1ヶ所に油煤痕 g:34.5g
14	20	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(12.00)	(6.80)	3.40	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/4 f:底部粘土板貼付けの可能性有り g:57.3g
14	21	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(12.00)	(7.00)	3.40	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ不明瞭 b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:黄橙色 e:1/5 g:42.0g
14	22	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(12.00)	(7.40)	3.30	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/3 g:56.2g
14	23	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(12.20)	(7.40)	3.40	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 粗土 c:橙色 e:4/5 g:109.3g
14	24	第2面 遺構50	土器	かわらけ	12.30	8.00	3.10	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:黄灰色 e:4/5 f:口唇部内外1ヶ所に油煤痕・口唇部一部欠けた断面にも油煤痕が見える、口唇部を打ち掻いた痕か・歪み大 g:116.8g
14	25	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(12.30)	(7.80)	3.15	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:黄灰色 e:1/2 g:117.6g
14	26	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(12.40)	(8.40)	3.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内面全体を横ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 c:橙色 e:3/4 g:128.3g
14	27	第2面 遺構50	土器	かわらけ	12.50	8.60	3.35	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:4/5 g:135.0g
14	28	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(12.60)	(8.20)	2.55	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:1/3 g:81.0g
14	29	第2面 遺構50	土器	かわらけ	(12.60)	(6.80)	3.40	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:橙色 e:4/5 g:96.5g
14	30	第2面 遺構50	土器	かわらけ	12.90	8.45	5.15	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 粗土 c:黄橙色 e:4/5 f:歪み大 g:160.6g
14	31	第2面 遺構50	土器	かわらけ	13.00	4.10	3.35	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 粗土 c:橙色 e:4/5 g:121.1g
14	32	第2面 遺構50	土器	かわらけ	13.20	8.90	3.30	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明瞭・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:橙色 e:4/5 f:全体に器肌摩耗しており整形痕不明瞭 g:131.9g
14	33	第2面 遺構50	金属製品	鉄製品 釘	[3.65]	0.60	0.50	a:鍛造 f:錆付着・断面方形
14	34	第2面 遺構50	金属製品	鉄製品 釘	6.70	[0.8]	0.70	a:鍛造 f:錆付着・断面方形
14	35	第2面 遺構50	石製品	砥石 仕上砥	[4.0]	3.90	0.60	c:灰白色 e:小片 f:鳴滝産・砥面1面遺存・側面切り出し痕
15	1	第2面 遺構45	土器	かわらけ	8.25	5.10	2.20	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明 b:微砂・雲母・黒色粒 c:灰黄色 e:4/5 f:全体に器肌摩耗し整形痕不明・薄手の器壁を持つ g:40.7g
15	2	第2面 遺構45	土器	かわらけ	(12.60)	(8.40)	2.90	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・黒色粒・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/3 g:65.1g
15	3	第2面 遺構45	磁器 舶載品	青白磁 小壺	—	—	[4.0]	a:ロクロ b:精良堅緻 c:白色 d:淡青色・漬けがけ e:胴部片 f:徳化窯か・外面-印花芭蕉唐草文・最大径(8.9)cm
15	4	第2面 遺構48	陶器 常滑	片口鉢Ⅱ類	—	—	[4.0]	a:輪積み・外面口縁部下位横位のナデ・下位は縦位のナデ b:微砂・雲母・白色粒 c:茶褐色 d:黄褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:6b型式
15	5	第2面 面上	土器	かわらけ	7.00	4.90	2.05	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・赤色粒・雲母・海綿骨針 やや良土 c:黄橙色 e:4/5 f:薄手の内彎する器壁を持つ g:27.3g
15	6	第2面 面上	土器	かわらけ	(7.30)	(4.60)	2.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:橙色 e:1/3 g:20.7g
15	7	第2面 面上	土器	かわらけ	(7.40)	(5.60)	1.95	a:ロクロ・底部緩い回転糸切・板状圧痕不明・器壁回転ナデの後内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 c:黄橙色 e:1/2 f:全体に器肌摩耗 g:31.6g

単位(cm)

出土遺物観察表

図版番号	挿番	出土層位 出土遺構	種別 産地	器種	口径/長さ 単位 cm/復元値[ ]/残存値( )	底径/幅	器高/厚さ	観察内容 a 成形・調整 b 胎土・素地・材質 c 色調 d 釉調 e 残存率 f 備考 g 重量
15	8	第2面 面上	土器	かわらけ	(7.50)	(5.80)	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・器壁回転ナデの後内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄灰色 e:1/4 f:内外面口縁部1ヶ所に油煙痕 g:12.3g
15	9	第2面 面上	土器	かわらけ	7.60	4.30	2.30	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・器壁回転ナデの後内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:4/5 f:歪み大 g:44.6g
15	10	第2面 面上	土器	かわらけ	7.80	5.40	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒粒・海綿骨針 c:黄灰色 e:4/5 g:43.2g
15	11	第2面 面上	土器	かわらけ	(8.00)	(6.10)	1.80	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・器壁回転ナデの後内底強ケナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/3 f:全体に器肌摩耗 g:19.7g
15	12	第2面 面上	土器	かわらけ	(11.60)	(8.10)	3.40	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明 b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:黄橙色 e:1/4 g:36.1g
15	13	第2面 面上	土器	かわらけ	(12.30)	(7.60)	3.35	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/4 f:内外面ススと黒色に変色 g:37.4g
15	14	第2面 面上	土器	かわらけ	(13.40)	(7.40)	2.95	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 やや粗土 c:黄灰色 e:1/3 f:外反するやや薄手の器壁を持つ g:52.5g
15	15	第2面 面上	土器	かわらけ	13.85	8.00	3.80	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕 b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針 やや粗土 c:黄橙色 e:3/4 f:やや薄手の器壁を持つ・全体に器肌摩耗し整形痕不明瞭 g:159.6g
15	16	第2面 面上	磁器 舶載品	青磁 碗	—	—	[2.8]	a:ロクロ b:精良緻密 c:灰白色 d:淡青色 e:口縁部片 f:碗II類・竜泉窯・外面鎬蓮弁文・内面無文
15	17	第2面 面上	陶器 常滑	片口鉢 I 類	—	—	[2.3]	a:輪積み・内面横位の十デ・外面口縁部下位横位のナデ b:微砂・白色粒 c:灰色 d:炭色・自然釉斑 e:口縁部片 f:5型式
15	18	第2面 面上	陶器 常滑	甕	—	—	[7.7]	a:輪積み・内面横位のナデ・外面口縁部下位横位のナデ b:微砂・白色粒・雲母・小石粒 c:灰褐色 d:茶褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:型式不明・内面被熱受壁けたため器肌剥離
15	19	第2面 面上	金属製品	鉄製品 釘	3.10	0.20	0.30	a:鍛造 f:錆付着・断面方形
15	20	第2面 面上	金属製品	鉄製品 釘	[3.2]	0.50	0.60	a:鍛造 f:錆付着・断面方形
15	21	第2面 面上	金属製品	鉄製品 釘	[4.7]	0.70	0.50	a:鍛造 f:錆付着・断面方形
15	22	第2面 面上	金属製品	鉄製品 釘	[5.9]	0.50	0.50	a:鍛造 f:錆付着・断面方形
15	23	第2面 面上	金属製品	鉄製品 釘	[8.2]	0.60	0.70	a:鍛造 f:錆付着・断面方形
15	24	第2面 面上	金属製品	銅製品 銭	外径2.4・内径0.6×0.6・厚0.18			e:完形 f:淳祐元寶 真書 北宋 初鋳年-1241年 g:2.9g
16	1	第2面 構成土	土器	てづくね	(8.60)	—	1.70	a:てづくね・外底部浅く指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:1/4 g:33.0g
16	2	第2面 構成土	土器	てづくね	(9.00)	—	1.65	a:てづくね・外底部浅く指頭によるナデ・内底ナデ不明 b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/5 g:16.6g
16	3	第2面 構成土	土器	てづくね	(9.60)	—	2.10	a:てづくね・外底部浅く指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/5 g:15.4g
16	4	第2面 構成土	土器	てづくね	12.80	—	3.30	a:てづくね・外底部浅く指頭によるナデ・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 やや粗土 c:黄橙色 e:ほぼ完形 g:199.3g
16	5	第2面 構成土	土器	てづくね	(13.80)	—	3.10	a:てづくね・外底部浅く指頭によるナデ・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 粗土 c:灰黄色 e:1/2 g:76.9g
16	6	第2面 構成土	土器	かわらけ	6.70	4.10	2.10	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・赤色粒・雲母 c:黄橙色 e:完形 f:口唇部油煙痕 g:38.4g
16	7	第2面 構成土	土器	かわらけ	(6.80)	(4.60)	1.30	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:1/4 g:10.7g
16	8	第2面 構成土	土器	かわらけ	(6.80)	(5.00)	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕 b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/4 f:内底見込み、内外面口器部薄く黒色に変色 g:14.0g
16	9	第2面 構成土	土器	かわらけ	(7.00)	(5.50)	1.30	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/3 g:14.3g
16	10	第2面 構成土	土器	かわらけ	(7.30)	(5.40)	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強ケナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・小石粒・泥岩粒 c:灰黄色 e:2/3 g:40.6g
16	11	第2面 構成土	土器	かわらけ	7.70	5.20	1.85	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・器壁回転ナデの後内底強ケナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:完形 f:内外面鈍分付着 g:60.2g
16	12	第2面 構成土	土器	かわらけ	(7.70)	(5.60)	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/3 g:24.7g
16	13	第2面 構成土	土器	かわらけ	(7.70)	(5.80)	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・赤色粒・海綿骨針・小石粒 c:黄橙色 e:1/3 g:18.6g
16	14	第2面 構成土	土器	かわらけ	(7.80)	(5.60)	1.30	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・器壁回転ナデの後内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:橙色 e:1/2 g:18.7g
16	15	第2面 構成土	土器	かわらけ	(7.80)	(5.70)	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕 b:微砂・雲母・黒色粒・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:黄橙色 e:1/4 g:14.2g
16	16	第2面 構成土	土器	かわらけ	(7.80)	(5.70)	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強ケナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/3 g:29.5g
16	17	第2面 構成土	土器	かわらけ	(7.80)	(5.70)	1.65	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/3 g:15.0g
16	18	第2面 構成土	土器	かわらけ	(7.80)	(5.80)	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/2 g:20.6g
16	19	第2面 構成土	土器	かわらけ	(7.80)	(6.00)	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明瞭・内底強ケナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:黄橙色 e:1/4 f:底部整形痕をナデ消しかg:15.2g
16	20	第2面 構成土	土器	かわらけ	7.90	5.00	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・器壁回転ナデの後内底強ケナデ b:微砂・雲母・泥岩粒 c:灰黄色 e:完形 f:内外面鈍分付着 g:58.0g
16	21	第2面 構成土	土器	かわらけ	7.90	5.40	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・小石粒 やや粗土 c:灰黄色 e:ほぼ完形 g:52.1g
16	22	第2面 構成土	土器	かわらけ	7.90	5.50	1.90	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強ケナデ b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針・小石粒 粗土 c:黄橙色 e:3/4 g:40.0g
16	23	第2面 構成土	土器	かわらけ	(7.90)	(5.60)	1.90	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨針 c:黄灰色 e:1/4 g:19.4g
16	24	第2面 構成土	土器	かわらけ	(8.00)	(5.80)	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/2 g:27.4g
16	25	第2面 構成土	土器	かわらけ	(8.10)	(6.40)	1.95	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/4 f:底部に粘土塊が付着して取り歪み大 g:18.0g
16	26	第2面 構成土	土器	かわらけ	(8.20)	(5.00)	1.65	a:ロクロ・底部縦い回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/2 g:27.3g

単位 (cm)

出土遺物観察表

図版番号	枝番	出土層位 出土遺構	種別 産地	器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
					単位:cm/復元値[ ]/残存値( )			a:成形・調整 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:残存率 f:備考 g:重量
16	27	第2面 構成土	土器	かわらけ	(8.30)	(5.00)	1.40	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・赤色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/3 g:20.2g
16	28	第2面 構成土	土器	かわらけ	8.30	6.30	2.10	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・器壁回転ナデ後内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨針 c:橙色 e:ほぼ完形 g:79.6g
16	29	第2面 構成土	土器	かわらけ	(8.40)	(6.40)	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨針・小石粒・泥岩粒 粗土 c:黄灰色 e:3/4 f:内外面口唇部辺薄く黒色に変色 g:43.5g
16	30	第2面 構成土	土器	かわらけ	8.40	5.10	1.75	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 やや粗土 c:橙色 e:完形 g:68.9g
16	31	第2面 構成土	土器	かわらけ	(9.00)	(6.80)	2.00	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・器壁回転ナデの後内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/4 g:17.3g
16	32	第2面 構成土	土器	かわらけ	(9.40)	(7.20)	1.80	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/2 g:29.4g
16	33	第2面 構成土	土器	かわらけ	(10.60)	(6.60)	3.00	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・器壁回転ナデの後内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・小石粒 c:橙色 e:1/4 g:47.0g
16	34	第2面 構成土	土器	かわらけ	(11.50)	(7.40)	3.45	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデ不明瞭 b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針 やや粗土 c:黄灰色 e:1/3 f:全体に器肌摩耗 g:42.0g
16	35	第2面 構成土	土器	かわらけ	(11.60)	8.20	3.55	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・赤色粒・海綿骨針・小石粒 c:黄橙色 e:2/3 g:75.2g
16	36	第2面 構成土	土器	かわらけ	(12.00)	(7.60)	3.20	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 やや粗土 c:黄橙色 e:1/4 g:46.7g
16	37	第2面 構成土	土器	かわらけ	(12.10)	7.40	3.10	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:黄灰色 e:2/3 f:口唇部1ヶ所に僅かに油煤痕 g:103.4g
16	38	第2面 構成土	土器	かわらけ	(12.50)	(8.00)	3.70	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・黒色粒・赤色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:2/3 g:81.9g
16	39	第2面 構成土	土器	かわらけ	12.50	8.10	3.65	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:橙色 e:2/3 g:113.3g
16	40	第2面 構成土	土器	かわらけ	12.60	7.90	3.30	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 粗土 c:黄橙色 e:4/5 f:薄い器壁を持つが胎土は粗土である g:148.9g
16	41	第2面 構成土	土器	かわらけ	(12.60)	(8.60)	3.90	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明瞭・内底強くナデ b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針 c:橙色 e:4/5 f:器体の約1/2が内外面ともに黒色に変
16	42	第2面 構成土	土器	かわらけ	12.70	8.40	3.00	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 粗土 c:灰黄色 e:2/3 g:143.7g
16	43	第2面 構成土	土器	かわらけ	(13.30)	(8.20)	3.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・赤色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/2 g:79.0g
16	44	第2面 構成土	土器	かわらけ	(13.40)	(8.40)	3.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:橙色 e:1/4 g:47.5g
16	45	第2面 構成土	土器	かわらけ	(13.70)	(8.40)	4.00	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:黄橙色 e:1/3 g:80.2g
16	46	第2面 構成土	磁器 舶載品	青磁 鉢	—	—	[2.1]	a:ロクロ・内外面無文 b:精良堅緻 c:黄灰色 d:淡緑色・不透明 e:底部片 f:坏Ⅲ類・竜泉窯・やや大きめの器形
16	47	第2面 構成土	陶器 瀬戸	入子	(10.00)	—	[2.4]	a:ロクロ b:微砂 c:灰黄色 d:薄緑色・漬けがけ e:口縁部片 f:前Ⅱ期
16	48	第2面 構成土	陶器 渥美	甕	—	—	[3.2]	a:輪積み b:微砂 c:灰色 d:灰色・自然降灰 e:胴部片 f:縦線文の押印
16	49	第2面 構成土	陶器 常滑	甕	—	—	[6.0]	a:輪積み・内外面横位のナデ b:微砂・白色粒・黒色粒 c:灰色 d:透明・自然降灰 e:口縁部片 f:6a型式
16	50	第2面 構成土	陶器 常滑	片口鉢 Ⅰ類	—	—	[6.9]	a:輪積み・内外面横位のナデ・外面下位は箆状工具による横位のナデ b:微砂・白色粒・雲母 c:暗灰色 d:灰色・自然降灰 e:口縁部片 f:6a型式 f:内面
16	51	第2面 構成土	陶器 常滑	片口鉢 Ⅰ類	—	—	[7.4]	a:輪積み・外側面上位横位のナデ・中部縦位のナデ・内側面横位のナデ b:微砂・白色粒・雲母 c:暗灰色 d:明茶褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:6a～6b型式
16	52	第2面 構成土	陶器 常滑	片口鉢 Ⅱ類	—	—	[7.2]	a:輪積み b:微砂・白色粒・小石粒 c:灰褐色 d:明茶褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:7型式
16	53	第2面 構成土	陶器 渥美	甕	—	—	[7.2]	a:輪積み b:微砂・白色粒 c:灰色 d:暗灰色・自然降灰 e:胴部片 f:縦長格子文の押印
16	54	第2面 構成土	陶器 渥美	甕	—	—	[8.2]	a:輪積み b:微砂・白色粒・小石粒 c:灰褐色 d:灰色・自然降灰 e:胴部片 f:複数×文+縦線文の押印(変形の花菱文か)・内面が平滑に磨かれている
16	55	第2面 構成土	土製品	瓦 平瓦	(10.90)	(11.10)	2.40	a:凹面-薄く布目痕・離れ砂付着 凸面-斜格子の叩き目・離れ砂付着 側面-ヘラ削りの面取りの後側縁端をナデて丸く仕上げている b:微砂・雲母・小石粒 c:灰白色 e:小片 f:C類
16	56	第2面 構成土	土器	不明	[3.8]	[2.7]	1.00	b:微砂・黒色粒・雲母・海綿骨針 c:灰褐色 f:内面ナデ 外面縄目痕 縄文期か
16	57	第2面 構成土	金属製品	鉄製品 釘	5.55	0.50	0.40	a:鍛造 f:錆付着
16	58	第2面 構成土	金属製品	鉄製品 釘	7.10	0.80	0.70	a:鍛造 f:錆付着
16	59	第2面 構成土	金属製品	銅製品 銭	外径2.5・内孔0.6×0.6・厚0.14			e:完形 f:判読不明 g:3.3g
16	60	第2面 構成土	石製品	滑石製品 用途不明	[3.6]	[2.9]	[1.1]	f:滑石鍋転用品か・側面両面に菱形の文様が掘り込まれる
18	1	第3面 遺構9	土器	てづくね	(10.80)	—	2.00	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 やや良土 c:灰黄色 e:1/3 g:35.4g
18	2	第3面 遺構109 一括	土器	てづくね	(8.80)	—	1.60	a:てづくね b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄灰色 e:1/4 f:全体に器肌摩耗し整形痕不明 g:12.1g
18	3	第3面 遺構109 一括	土器	てづくね	(8.80)	—	1.70	a:てづくね・内底指頭による押さえ・外底部弱く指頭痕 b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄灰色 e:1/4 g:15.2g
18	4	第3面 遺構109	土器	てづくね	(8.80)	—	1.90	a:てづくね・外底部浅く指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:灰白色 e:1/3 f:器肌全体に摩耗 g:31.7g
18	5	第3面 遺構109 一括	土器	てづくね	(8.90)	—	1.50	a:てづくね・底部指頭によるナデ b:微砂・海綿骨針・雲母 c:橙色 e:1/4 g:10.9g
18	6	第3面 遺構109 一括	土器	てづくね	(9.10)	—	1.60	a:てづくね・外底部浅く指頭痕 b:微砂・雲母・海綿骨針 良土 硬質 c:黄橙色 e:1/3 g:21.6g

単位(cm)

出土遺物観察表

図版番号	枝番	出土層位 出土遺構	種別 産地	器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
					単位:cm/復元値[ ]/残存値( )			a:成形・調整 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:残存率 f:備考 g:重量
18	7	第3面 遺構109 一括	土器	てづくね	(9.60)	—	1.50	a:てづくね・外底部指頭によるナデ b:微砂・黒色粒・雲母・海綿骨針 c:黄灰色 e:1/3 f:全体に器肌摩耗し整形痕不明 g:24.5g
18	8	第3面 遺構109	土器	てづくね	9.10	—	1.70	a:てづくね・外底部指頭によるナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄灰色 e:完形 f:歪み大・器肌全体に摩耗 g:61.9g
18	9	第3面 遺構109	土器	てづくね	12.90	—	3.15	a:てづくね・外底部指頭痕・内底ナデ b:微砂・黒色粒・赤色粒・雲母・海綿骨針 c:灰黄色 e:2/3 g:122.9g
18	10	第3面 遺構109	土器	てづくね	13.40	—	3.20	a:てづくね・外底部浅く指頭痕 b:微砂・黒色粒・赤色粒・雲母・海綿骨針 c:黄橙色 e:4/5 g:136.8g
18	11	第3面 遺構109	土器	てづくね	13.50	—	3.05	a:てづくね・外底部指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:2/3 g:92.0g
18	12	第3面 遺構109	土器	てづくね	13.80	—	2.95	a:てづくね・外底部指頭痕・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 硬質 c:黄橙色 e:4/5 f:歪み大 g:147.6g
18	13	第3面 遺構109	土器	かわらけ	9.60	7.00	1.80	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕 b:微砂・黒色粒・雲母・海綿骨針 c:黄灰色 e:3/4 f:整形痕不明瞭 g:52.2g
18	14	第3面 遺構109	土器	かわらけ	12.40	7.90	3.25	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・器壁回転ナデの後見込み横ナデ・口唇部1ヶ所打ち掻け b:微砂・黒色粒・雲母・海綿骨針 粗土 c:黄灰色 e:4/5 f:口唇部油煤痕 g:137.7g
18	15	第3面 遺構109	磁器 舶載品	白磁 合子	5.30	4.60	2.85	a:型押し・外面蓮弁文・底部露胎・ b:精良堅緻 c:白色 d:灰白色・口唇部釉拭き取り e:1/2 f:徳化窯か
18	16	第3面 遺構109	白磁 舶載品	香炉	(11.40)	(10.20)	7.70	a:型による成形 b:微砂 c:灰白色 d:灰色・漬けがけ e:1/3 f:白磁の低中火度焼成品(生焼け)か
19	1	第3面 面上	土器	てづくね	(8.80)	—	1.85	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 やや粗土 c:黄橙色 e:2/3 g:44.0g
19	2	第3面 面上	土器	かわらけ	7.70	4.70	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強く横ナデ b:微砂・黒色粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 c:橙色 e:4/5 g:41.7g
19	3	第3面 面上	土器	かわらけ	(12.00)	(7.40)	3.20	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底横ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・黒色粒・雲母・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/2 f:外側面薄く黒色に変色・内側面及び口唇部片に油煤痕 g:68.2g
19	4	第3面 面上	土器	かわらけ	12.10	7.50	3.30	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕 b:微砂・黒色粒・雲母・海綿骨針・小石粒・泥岩粒 c:橙色 e:4/5 f:内外側面及び口唇部片に黒色に変色 g:162.9g
19	5	第3面 面上	土器	かわらけ	12.70	8.90	3.20	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強く横ナデ b:微砂・黒色粒・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:ほぼ完形 f:歪み大 g:171.0g
19	6	第3面 面上	土器	瓦器質 火鉢	—	—	[4.2]	a:内外面横位の整形痕 b:微砂・雲母 c:灰色 e:口縁部片 f:瓦器質・内面被熱を受け黒色に変色・外面白色に変色
19	7	第3面 構成土	土器	てづくね	(7.30)	—	1.75	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・雲母・白色粒・海綿骨針 硬質 c:黄橙色 e:1/4 g:10.5g
19	8	第3面 構成土	土器	てづくね	(8.20)	—	1.60	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/3 g:15.9g
19	9	第3面 構成土	土器	てづくね	(8.40)	—	1.60	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ不明 b:微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/3 g:19.1g
19	10	第3面 構成土	土器	てづくね	(8.40)	—	1.60	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/3 g:20.9g
19	11	第3面 構成土	土器	てづくね	(8.60)	—	1.15	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・雲母・白色粒・海綿骨針 c:橙色 e:1/4 g:10.6g
19	12	第3面 構成土	土器	てづくね	(8.80)	—	1.40	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:赤橙色 e:1/3 g:31.0g
19	13	第3面 構成土	土器	てづくね	(9.00)	—	1.85	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・雲母 c:黄橙色 e:1/4 g:11.6g
19	14	第3面 構成土	土器	てづくね	(9.00)	—	2.30	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:黄橙色 e:1/2 g:42.5g
19	15	第3面 構成土	土器	てづくね	9.10	—	2.25	a:てづくね・外底部浅く指頭痕・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・白色粒・海綿骨針 c:橙色 e:3/4 g:67.9g
19	16	第3面 構成土	土器	てづくね	(9.80)	—	1.75	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄灰色 e:1/4 g:17.6g
19	17	第3面 構成土	土器	てづくね	(11.30)	—	3.20	a:てづくね・外底部指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:橙色 e:1/4 g:40.7g
19	18	第3面 構成土	土器	てづくね	(13.00)	—	3.20	a:てづくね・外底部指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:黄橙色 e:1/4 g:34.8g
19	19	第3面 構成土	土器	てづくね	13.20	—	3.30	a:てづくね・外底部浅く指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:橙色 e:1/2 f:歪み大 g:128.6g
19	20	第3面 構成土	土器	てづくね	13.30	—	[3.3]	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ不明 b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/2 g:81.0g
19	21	第3面 構成土	土器	てづくね	(13.50)	—	2.90	a:てづくね・外底部指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・赤色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/2 g:127.7g
19	22	第3面 構成土	土器	てづくね	13.50	—	3.30	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:ほぼ完形 g:196.5g
19	23	第3面 構成土	土器	てづくね	(14.40)	—	2.70	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・雲母・白色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/4 g:43.6g
19	24	第3面 構成土	土器	かわらけ	(4.80)	(3.20)	1.00	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底回転ナデ b:微砂・雲母 硬質 c:橙色 e:1/4 f:口唇部内折れ g:6.4g
19	25	第3面 構成土	土器	かわらけ	(6.40)	(2.80)	1.90	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・赤色粒 c:灰黄色 e:1/4 f:全体に器肌摩耗し整形痕不明瞭 g:7.4g
19	26	第3面 構成土	土器	かわらけ	(7.30)	(5.80)	1.55	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/3 g:16.6g
19	27	第3面 構成土	土器	かわらけ	7.40	5.20	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:2/3 g:29.7g
19	28	第3面 構成土	土器	かわらけ	(7.40)	(5.30)	1.40	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 c:灰黄色 e:1/3 g:18.1g
19	29	第3面 構成土	土器	かわらけ	7.40	6.10	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:ほぼ完形 g:40.1g
19	30	第3面 構成土	土器	かわらけ	7.50	5.40	1.10	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:ほぼ完形 g:55.1g
19	31	第3面 構成土	土器	かわらけ	7.60	5.40	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明瞭・内底強くナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 c:灰黄色 f:歪み大 e:4/5 g:42.7g
19	32	第3面 構成土	土器	かわらけ	(7.60)	(5.40)	1.55	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/2 g:22.9g
19	33	第3面 構成土	土器	かわらけ	(7.60)	(5.60)	1.55	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:黄橙色 e:4/5 g:35.2g
19	34	第3面 構成土	土器	かわらけ	(7.60)	(5.80)	1.85	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/3 g:20.3g

単位(cm)

図版番号	枝番	出土層位 出土遺構	種別 産地	器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
					単位:cm/復元値[ ]/残存値( )			a:成形・調整 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:残存率 f:備考 g:重量
19	35	第3面 構成土	土器	かわらけ	(7.70)	(5.60)	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/3 g:16.6g
19	36	第3面 構成土	土器	かわらけ	7.70	5.60	1.70	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・器壁回転ナデの後内底強くナデ b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:黄橙色 e:3/4 g:37.6g
19	37	第3面 構成土	土器	かわらけ	(7.80)	(5.20)	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰白色 e:1/3 g:19.4g
19	38	第3面 構成土	土器	かわらけ	(7.80)	(6.20)	1.40	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/4 g:13.0g
19	39	第3面 構成土	土器	かわらけ	7.80	5.95	1.90	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・器壁回転ナデの後内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:5/6 g:51.7g
19	40	第3面 構成土	土器	かわらけ	7.80	6.60	1.45	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:ほぼ完形 g:60.2g
19	41	第3面 構成土	土器	かわらけ	8.00	5.80	1.45	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 f:歪み大 e:ほぼ完形 g:55.2g
19	42	第3面 構成土	土器	かわらけ	8.00	6.00	1.35	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰白色 e:ほぼ完形 f:歪み大 g:48.2g
19	43	第3面 構成土	土器	かわらけ	8.00	6.10	1.65	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:3/4 g:45.1g
19	44	第3面 構成土	土器	かわらけ	8.10	5.20	1.65	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 c:灰黄色 e:ほぼ完形 g:57.7g
19	45	第3面 構成土	土器	かわらけ	8.10	5.80	1.75	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/2 f:底部に粘土塊付着・歪み大 g:31.7g
19	46	第3面 構成土	土器	かわらけ	(8.10)	(6.25)	1.55	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/2 g:23.6g
19	47	第3面 構成土	土器	かわらけ	(8.10)	(6.50)	1.45	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄灰色 e:1/2 g:32.8g
19	48	第3面 構成土	土器	かわらけ	(8.20)	5.40	2.15	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰白色 e:1/3 f:全体に器壁摩耗し整形痕不明瞭 g:34.0g
19	49	第3面 構成土	土器	かわらけ	8.30	6.80	1.70	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明瞭・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・白色粒・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:2/3 g:52.1g
19	50	第3面 構成土	土器	かわらけ	(8.40)	(5.80)	1.65	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/3 g:22.9g
19	51	第3面 構成土	土器	かわらけ	(8.40)	(5.90)	1.85	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:橙色 e:1/2 g:34.8g
19	52	第3面 構成土	土器	かわらけ	(8.60)	(6.80)	2.00	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/2 g:42.0g
19	53	第3面 構成土	土器	かわらけ	(8.60)	(7.15)	1.70	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/4 g:27.3g
19	54	第3面 構成土	土器	かわらけ	(8.80)	(6.20)	1.90	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/3 g:29.0g
19	55	第3面 構成土	土器	かわらけ	(9.15)	(7.20)	1.70	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:2/5 g:34.2g
19	56	第3面 構成土	土器	かわらけ	—	(8.20)	[2.2]	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:2/3 f:口唇部を欠いているが断面、内外面に油煤痕が広がる g:112.1g
19	57	第3面 構成土	土器	かわらけ	(10.60)	(8.00)	2.90	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 c:灰白色 e:1/3 g:45.2g
19	58	第3面 構成土	土器	かわらけ	(11.40)	(7.00)	3.15	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:黄橙色 e:1/3 g:69.0g
19	59	第3面 構成土	土器	かわらけ	(11.80)	(7.20)	3.80	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:黄灰色 e:1/3 f:全体に器壁摩耗し整形痕不明瞭 g:65.9g
19	60	第3面 構成土	土器	かわらけ	11.80	7.80	3.05	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・器壁回転ナデの後内底強くナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:黄橙色 e:2/3 g:106.8g
19	61	第3面 構成土	土器	かわらけ	(12.00)	(7.00)	3.65	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明・底部糸切痕をナデか・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針 硬質 c:黄橙色 e:1/3 f:薄手の器壁を持つ g:42.9g
19	62	第3面 構成土	土器	かわらけ	(12.50)	6.70	3.55	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明瞭・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:黄橙色 e:2/3 f:薄手の器壁を持つが胎土は粗い g:86.0g
19	63	第3面 構成土	土器	かわらけ	(12.60)	(7.40)	3.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:橙色 e:3/4 f:全体に器壁摩耗し整形痕不明瞭 g:95.6g
19	64	第3面 構成土	土器	かわらけ	(12.70)	7.30	3.45	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:黄橙色 e:3/4 g:79.3g
19	65	第3面 構成土	土器	かわらけ	(12.70)	(9.40)	2.95	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:3/4 g:63.2g
19	66	第3面 構成土	土器	かわらけ	(13.00)	(7.60)	2.70	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明・内底ナデ不明瞭 b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:橙色 e:1/4 f:内外面口唇部に油煤痕・被熱のためか器肌剥離 g:61.3g
20	67	第3面 構成土	磁器 舶載品	青磁 碗	—	(5.60)	[2.3]	a:ロクロ b:精良堅緻 c:灰白色 d:淡青色・半透明 e:底部片 f:碗Ⅰ類・竜泉窯・高台畳付から高台内まで露胎・高台内部の刳りは浅い・内面見込み片彫文・文様種不明
20	68	第3面 構成土	磁器 舶載品	高麗青磁 瓶	—	—	[4.4]	a:ロクロ b:精良堅緻 c:暗灰色 d:暗青色 e:胴部片 f:外面彫荷花文・無文
20	69	第3面 構成土	磁器 舶載品	白磁 皿	—	—	[1.8]	a:ロクロ b:精良堅緻 c:灰白色 d:淡青色・不透明 e:口縁部片 f:皿Ⅸ類・口縁端部部露胎・内面圏線が廻る
20	70	第3面 構成土	磁器 舶載品	白磁 碗	—	—	[4.4]	a:ロクロ b:精良堅緻 c:灰白色 d:淡青色・不透明 e:口縁部片 f:碗Ⅸ類・口縁端部部露胎・内面圏線が廻る
20	71	第3面 構成土	磁器 舶載品	白磁 合子	—	(5.40)	[1.2]	a:型作り b:精良堅緻 c:灰白色 d:透明 e:底部片 f:徳化窯か
20	72	第3面 構成土	陶器 舶載	緑釉 盤	—	—	[2.4]	a:ロクロ b:微砂・黒色粒・石英・雲母 c:緑色・銀化 d:淡緑色 e:底部片 f:内面下部浅く二条の圏線・泉州窯
20	73	第3面 構成土	陶器 舶載	緑釉 盤	—	—	[3.7]	a:ロクロ b:微砂・石英・雲母 硬質 c:灰色 d:緑色 e:胴部片 f:外面線刻による文様あり・文様種不明・内面露胎・泉州窯
20	74	第3面 構成土	陶器 舶載	緑釉 盤	—	—	[3.8]	a:ロクロ b:微砂・石英 硬質 c:灰色 d:被熱を受け銀化した淡緑色 e:胴部片 f:外面線刻による文様あり・文様種不明・内面露胎・泉州窯
20	75	第3面 構成土	陶器 瀬戸	入子	(9.60)	(4.60)	2.90	a:ロクロ・底部回転糸切・内底ナデ b:微砂 c:灰色 d:自然降灰・口唇部のみ緑褐色 e:1/5 f:前Ⅱ期
20	76	第3面 構成土	陶器 常滑	山茶碗	(14.60)	(6.60)	5.20	a:底部緩い回転糸切・内底ナデ b:微砂・小石粒 c:灰色 d:自然降灰 e:1/3 f:高台部粘土貼付け・高台畳付に籾殻痕・内面見込み黒色に変色・常滑5型式か・内底面磨滅
20	77	第3面 構成土	陶器 常滑	広口壺	—	—	[6.9]	a:輪積み b:微砂・石英・小石粒 c:灰褐色 d:暗茶褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:6a型式

単位 (cm)

出土遺物観察表

図版番号	枝番	出土層位 出土遺構	種別 産地	器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
					単位:cm/復元値[ ]/残存値( )			a:成形・調整 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:残存率 f:備考 g:重量
20	78	第3面 構成土	土器	瓦器質 火鉢	(28.00)	(23.40)	[5.4]	a:輪積み・器壁はやや外反する様に立ち上がる・内外面ともに横位のミガキ・脚部貼付け b:微砂・雲母・泥岩粒・小石粒 軟質 c:灰白色 e:1/5 f:被熱を受け内外面ともに白色化・器表は黒色処理・脚は一部しか遺存していなかった・12世紀後半～13世紀前半
20	79	第3面 構成土	土器	瓦 平瓦	[9.2]	[7.4]	2.20	a:凹面-離れ砂 凸面-斜位の細かい縄目の叩き痕 側面-ヘラ削り b:微砂・白色粒 硬質 c:暗灰色 e:小片 f:A類
20	80	第3面 構成土	土器	瓦 平瓦	[11.1]	[13.3]	2.40	a:凹面-離れ砂・糸切痕 凸面-縦位の縄目叩き痕 b:微砂・雲母 軟質 c:灰白色 e:小片 f:A類
20	81	第3面 構成土	土器	皿	(7.70)	3.60	1.45	a:ロクロ・底部回転糸切・内底ナデ b:微砂・雲母 精良 c:暗灰色 d:暗灰色 e:1/3 f:器表は灰色を呈し瓦器質にも似る・白かわらけ質皿
20	82	第3面 構成土	金属製品	鉄製品 釘	[3.0]	[0.6]	0.40	a:鍛造 f:錆付着・断面方形
20	83	第3面 構成土	金属製品	鉄製品 釘	[3.4]	[0.7]	0.40	a:鍛造 f:錆付着・断面不整形
20	84	第3面 構成土	金属製品	鉄製品 釘	[4.0]	[0.5]	0.40	a:鍛造 f:錆付着・断面方形
20	85	第3面 構成土	金属製品	鉄製品 釘	[4.9]	[0.8]	0.70	a:鍛造 f:錆付着・断面不明
20	86	第3面 構成土	金属製品	鉄製品 用途不明	[10.1]	[1.3]	0.70	a:鍛造 f:錆付着・工具か
20	87	第3面 構成土	金属製品	銅製品 銭	外径2.5・内孔0.75×0.75・厚0.13			e:完形 f:皇宋通寳 北宋 1038年 g:2.3g
20	88	第3面 構成土	石製品	砥石 中砥	[5.9]	[2.9]	1.80	c:灰黄色 e:小片 f:天草産・砥面2面遺存・側面切り出し痕・手持ちの砥石か
20	89	第3面 構成土	石製品	磨石 用途不明	[3.6]	[7.4]	[2.1]	f:頁岩・側面摩耗
20	90	第3面 構成土	石製品	磨石 用途不明	8.30	5.10	3.30	f:端部打痕・側面擦った痕かやや平坦を呈する
21	1	第4面 遺構30	土器	てづくね	(8.60)	—	1.45	a:てづくね・外底部指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒 硬質 良土 c:橙色 e:1/6 g:9.4g
21	2	第4面 遺構30	土器	てづくね	9.20	—	1.90	a:てづくね・外底部指頭痕・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:ほぼ完形 g:67.8g
21	3	第4面 遺構30	土器	てづくね	(12.30)	—	3.10	a:てづくね・外底部指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 良土 c:灰色 e:1/4 g:46.0g
21	4	第4面 遺構30	土器	てづくね	(12.60)	—	3.20	a:てづくね・外底部指頭痕をナデ消している・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・小石粒 粗土 c:橙色 e:1/3 g:74.8g
21	5	第4面 遺構30	土器	てづくね	(13.20)	—	2.40	a:てづくね・外底部指頭痕・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:1/3 f:内外側面薄く黒色に変色 g:58.6g
21	6	第4面 遺構30	土器	かわらけ	(8.60)	(6.30)	2.65	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底横ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・黒色粒・雲母・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/2 g:43.2g
21	7	第4面 遺構30	土器	かわらけ	9.00	5.40	1.40	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・器壁回転ナデの後内底ナデ b:微砂・黒色粒・雲母・海綿骨針 粗土 c:褐色 e:ほぼ完形 f:歪み大・楕円形を呈する器形 g:66.3g
21	8	第4面 遺構30	土器	かわらけ	(9.10)	(7.50)	2.40	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底横ナデ b:微砂・黒色粒・雲母・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/3 g:29.7g
21	9	第4面 遺構30	土器	かわらけ	11.95	8.50	3.05	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・器壁回転ナデの後内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・小石粒 やや粗土 c:橙色 e:1/3 g:148.3g
21	10	第4面 遺構30	土器	かわらけ	(12.60)	(8.70)	2.90	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・小石粒 やや粗土 c:灰黄色 e:1/3 g:59.2g
21	11	第4面 遺構30	磁器 舶載品	白磁 人形	[7.2]	[3.5]	[3.8]	a:手びねりか b:精良堅緻 c:白色 d:白色・透明 e:小片 f:座位の人形か・景徳鎮窯
21	12	第4面 遺構30	陶器 舶載品	緑釉 盤	—	—	[2.1]	a:ロクロ b:微砂・白色粒・海綿骨針 c:暗褐色 d:濃緑色・底部露胎 e:底部片 f:内面見込みに花文の暗文・側面下部に2条の沈線・泉州窯
21	13	第4面 遺構30	陶器	山茶碗 東濃型	—	—	[4.7]	a:ロクロ b:微砂・雲母 やや粗土 c:灰色 d:自然降灰 e:口縁部片 f:6a型式・内底下部摩耗
21	14	第4面 遺構30	陶器 渥美	甕	—	—	[7.5]	a:粘土巻き上げ・内面指頭痕・外面丸に縦線文の押印 b:微砂・白色粒・小石粒 c:灰色 d:灰白色・ハケ塗り e:胴部片 f:2a・1b型式か
21	15	第4面 遺構30	陶器 常滑	甕	—	—	[6.2]	a:輪積み b:微砂 c:灰色 d:明褐色・自然降灰 e:胴部片 f:縦長格子の叩き痕
21	16	第4面 遺構30	陶器 常滑	甕	—	—	[7.2]	a:輪積み・内面ヘラによる横位のナデ整形・内面一部黒色に変色 b:微砂・雲母・白色粒 c:暗灰色 d:暗褐色・自然降灰 e:胴部片 f:縦線文と横線文の叩き痕・桁型か
21	17	第4面 遺構30	土製品	瓦 平瓦	[7.8]	[6.4]	2.20	a:凹面-布目痕・糸切痕 凸面-細かい格子の叩き目・離れ砂付着 側面-摩耗しているため拓影は採集していない b:微砂・雲母・石英 c:灰橙色 e:小片 f:B類-2
22	18	第4面 遺構30	木製品	串状	[13.6]	0.90	0.45	f:断面楕円形・丁寧な整形
22	19	第4面 遺構30	木製品	箸状	[13.8]	0.70	0.30	f:丁寧な整形
22	20	第4面 遺構30	木製品	箸状	[15.5]	0.70	0.50	f:丁寧な整形
22	21	第4面 遺構30	木製品	箸状	[15.7]	0.60	0.50	f:丁寧な整形
22	22	第4面 遺構30	木製品	箸状	16.50	0.70	0.35	f:断面方形
22	23	第4面 遺構30	木製品	箸状	17.40	0.70	0.40	f:断面方形
22	24	第4面 遺構30	木製品	箸状	[18.8]	0.70	0.50	f:断面方形
22	25	第4面 遺構30	木製品	箸状	20.90	0.50	0.50	f:丁寧な整形
22	26	第4面 遺構30	木製品	箸状	[20.9]	0.70	0.40	f:雑な整形
22	27	第4面 遺構30	木製品	草履芯	22.70	5.00	0.30	f:側縁部-曲線的 端部-合わせの部分が最先端となり側縁部にかけて丸みを帯びる 切り取り部-遺存していないため形状不明 両面に茎痕・一部刃物痕も残る
22	28	第4面 遺構30	木製品	用途不明	[18.9]	2.10	1.40	f:二カ所刃物痕・不整形な断面を呈する
22	29	第4面 遺構30	木製品	端材	[3.6]	[1.7]	[0.6～1.5]	f:断面不整台形
22	30	第4面 遺構30	木製品	部材 用途不明	[20.6]	2.40	0.80	f:断面楕円形・丁寧な整形

単位(cm)

出土遺物観察表

図版番号	挂番	出土層位 出土遺構	種別 産地	器種	口径/長さ 底径/幅 器高/厚さ 単位：cm/復元値（）/残存値（）			観察内容 a:成形・調整 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:触調 e:残存率 f:備考 g:重量
22	31	第4面 遺構30	木製品	建材	[36.3]	[5.7]	0.60	f:転用材か
22	32	第4面 遺構30	木製品	建材	[41.9]	11.00	[1.7]	f:やや雑な整形・転用材か
22	33	第4面 遺構30	木製品	棒状	[11.7]	0.70	0.60	f:断面不整円形
22	34	第4面 遺構30	木製品	棒状	[12.5]	0.70	0.50	f:断面方形
22	35	第4面 遺構30	木製品	棒状	[18.8]	0.80	1.00	f:不整形
22	36	第4面 遺構30	木製品	用途不明	[12.0]	1.80	0.80	f:断面方形
22	37	第4面 遺構30	木製品	用途不明	[15.0]	2.10	1.70	f:一部刃物痕・不整形な断面を呈する
23	1	第4面 遺構23	土器	かわらけ	(9.20)	(7.40)	1.40	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・海綿骨針 硬質 良土 c:橙色 e:1/3 g:210.6g
23	2	第4面 遺構24	金属製品	鉄鏃 不明	[6.8]	1.4〜2.8	0.60	a:鏃造 f:鏑，泥岩付着・断面長方形・工具か
23	3	第4面 遺構28	土器	てづくね	8.50	—	2.25	a:てづくね・外底部指頭によるナデ b:微砂・雲母・黒色粒・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 粗土 c:黄橙色 e:2/3 f:全体に厚手であり整形痕不明瞭 g:65.1g
23	4	第4面 遺構28	土器	てづくね	9.20	—	2.70	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 やや粗土 c:灰黄色 e:完形 g:96.0g
23	5	第4面 遺構56	土器	瓦器質 火鉢	—	—	[3.9]	a:口縁端が外方に強く出す・内外面横位のナデ b:微砂・雲母 硬質 c:灰橙色 e:口縁部片 f:口A類・土器質・内外面被熱を受け黒色に変色
23	6	第4面 遺構57	土器	かわらけ	(7.70)	(6.50)	1.35	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒 c:黄灰色 e:1/5 g:7g
23	7	第4面 遺構60	土器	かわらけ	(13.00)	(8.80)	3.15	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明瞭・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 c:黄灰色 e:1/2 g:92g
23	8	第4面 遺構61	土器	かわらけ	(12.00)	(8.80)	2.95	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明瞭・器壁回転ナデの後内底強くナデ b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針 c:黄灰色 e:1/4 f:内外面口唇部油煤痕，口唇部打ち欠け，外面器肌摩耗し整形痕不明瞭g:42g
23	9	第4面 遺構61	陶器 常滑	片口鉢 I 類	—	(12.80)	[5.0]	a:輪積み b:微砂・雲母・白色粒・石英・小石粒 c:灰色 d:器肌降灰 e:1/5 f:6a型式・高台部貼り付け・外側面下部箆状工具による横位の整形痕・内面下部及び内底面摩耗，使用痕か
23	10	第4面 遺構62	土器	てづくね	(9.00)	—	2.20	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂 硬質 c:白色 e:1/4 f:白かわらけ g:16.0g
23	11	第4面 遺構62	土器	てづくね	7.60	—	1.65	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底から後器壁にかけて回転ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:3/4 g:38.3g
23	12	第4面 遺構62	土器	てづくね	(8.20)	—	1.80	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/3 g:24.2g
23	13	第4面 遺構62	土器	てづくね	(8.90)	—	1.85	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/3 g:33.1g
23	14	第4面 遺構62	土器	てづくね	9.15	—	2.10	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄橙色 e:3/4 g:50.9g
23	15	第4面 遺構62	土器	かわらけ	(5.60)	(4.50)	0.95	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデ不明 b:微砂・雲母 c:灰黄色 e:1/4 f:全体に器肌摩耗し整形痕不明瞭・口唇部内折れを呈する g:5.9g
23	16	第4面 遺構62	土器	かわらけ	8.00	6.15	1.70	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・泥岩粒 c:灰黄色 e:2/3 g:46.4g
23	17	第4面 遺構62	土器	かわらけ	8.05	6.00	1.40	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒 c:灰黄色 e:ほぼ完形 g:45.9g
23	18	第4面 遺構62	土器	かわらけ	(8.10)	(5.60)	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:2/3 g:46.0g
23	19	第4面 遺構62	土器	かわらけ	(8.10)	(6.80)	1.70	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・小石粒 c:灰黄色 e:1/5 g:17.9g
23	20	第4面 遺構62	土器	かわらけ	(8.40)	(6.60)	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ不明 b:微砂・雲母・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/5 g:10.7g
23	21	第4面 遺構62	土器	かわらけ	(8.40)	(6.80)	1.35	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰色 e:1/4 g:13.1g
23	22	第4面 遺構62	土器	かわらけ	(8.50)	(6.00)	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明瞭・内底ナデ不明瞭 b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/4 g:14.0g
23	23	第4面 遺構62	土器	かわらけ	(12.30)	(7.80)	3.05	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・器壁回転ナデの後内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/4 g:39.4g
23	24	第4面 遺構62	土器	かわらけ	12.20	8.75	3.30	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 c:灰黄色 e:ほぼ完形 f:内外面口唇部全体に厚く油煤痕 g:175.4g
23	25	第4面 遺構62	土器	かわらけ	12.95	8.10	3.30	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ不明 b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 c:灰黄色 e:3/4 g:214.7g
23	26	第4面 遺構62	陶器 船載 壺	黄釉	—	—	[3.8]	a:ロクロ b:微砂・黒色粒 c:灰色 d:淡黄色 e:口縁部片 f:口縁先端がやや角ばった玉縁状を呈する・泉州窯
23	27	第4面 遺構62	陶器 渥美	壺	—	—	[8.4]	a:輪積み b:微砂 c:灰色 d:黒褐色・自然降灰 e:胴部片 f:10〜12本単位の条線の押印
23	28	第4面 遺構62	陶器 常滑	片口鉢 II 類	—	—	[2.7]	a:輪積み b:微砂・白色粒 c:褐色 d:黄茶褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:6b型式
23	29	第4面 遺構62	土器	瓦 丸瓦	[9.7]	[6.8]	[5.1]	a:端部凹面→布目痕 簡部凸面→縦位の縄目痕 簡部側面→ヘラ削り 簡部側縁→ヘラ削り b:灰白色 微砂・小石粒 軟質 c:暗灰色 e:小片 f:A類
23	30	第4面 遺構62	石製品	砥石 凝灰質石か	1.45	1.50	0.60	f:黒色，円形を呈するが，甚石として使用するにはやや小さく不整形
24	1	第4面 面上	土器	かわらけ	(8.10)	(6.20)	1.45	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:2/3 f:全体に器肌摩耗し整形痕不明 g:32g
24	2	第4面 面上	土器	かわらけ	11.70	7.75	3.25	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 c:黄橙色 e:4/5 f:内外面口唇部に油煤痕 g:136g
24	3	第4面 面上	土器	かわらけ	12.10	8.70	2.90	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 c:灰黄色 e:ほぼ完形 f:内外面口唇部下に厚く褐鉄状の付着物有り g:202g
24	4	第4面 構成土	土器	てづくね	(9.80)	—	[2.0]	a:てづくね・外面体部下位の整形ど箆・外底部弱く指頭痕・内底ナデ不明 b:精良 硬質 c:白色 e:1/4 f:白かわらけ・全体に器肌摩耗しており整形痕不明瞭 g:16.1g

単位 (cm)

出土遺物観察表

図版番号	枝番	出土層位 出土遺構	種別 産地	器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
					単位:cm/復元値[ ]/残存値( )			a:成形・調整 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:残存率 f:備考 g:重量
24	5	第4面 構成土	土器	てづくね	(4.60)	—	1.65	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ不明 b:微砂・海綿骨針 硬質 c:橙色 e:1/4 g:15.7g
24	6	第4面 構成土	土器	てづくね	(8.70)	—	1.60	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ不明 b:微砂・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/2 f:全体に器肌摩耗し整形痕不明瞭 g:22.6g
24	7	第4面 構成土	土器	てづくね	(8.70)	—	1.60	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:1/3 g:28.0g
24	8	第4面 構成土	土器	てづくね	(9.00)	—	1.35	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/2 f:歪み大 f:全体に器肌摩耗し整形痕不明瞭 g:35.6g
24	9	第4面 構成土	土器	てづくね	(9.10)	—	1.55	a:てづくね・外底部指頭による雑な整形・内底ナデ・内底に爪痕有り b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:1/3 f:歪み大 g:28.1g
24	10	第4面 構成土	土器	てづくね	(9.20)	—	1.45	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂 硬質 c:黄橙色 e:1/4 g:18.7g
24	11	第4面 構成土	土器	てづくね	9.60	—	1.85	a:てづくね・外底部弱く指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄橙色 e:2/3 g:53.5g
24	12	第4面 構成土	土器	てづくね	(12.20)	—	3.00	a:てづくね・外底部指頭痕・内底ナデ不明 b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/4 g:37.3g
24	13	第4面 構成土	土器	てづくね	(12.80)	—	3.00	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:黄橙色 e:1/4 g:44.3g
24	14	第4面 構成土	土器	てづくね	12.95	—	3.00	a:てづくね・外底部指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:黄灰色 e:1/2 f:歪み大 g:101.0g
24	15	第4面 構成土	土器	てづくね	(13.00)	—	2.85	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ不明 b:微砂・雲母・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/5 g:39.1g
24	16	第4面 構成土	土器	てづくね	(13.00)	—	[3.2]	a:てづくね・外底部弱く指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:1/4 g:69.0g
24	17	第4面 構成土	土器	てづくね	(13.20)	—	[3.0]	a:てづくね・外底部指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 硬質 c:黄橙色 e:1/4 g:44.3g
24	18	第4面 構成土	土器	てづくね	(13.40)	—	[3.0]	a:てづくね・外底部弱く指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/4 f:口唇部1ヶ所油煤痕 g:53.8g
24	19	第4面 構成土	土器	てづくね	(14.20)	—	2.90	a:てづくね・外底部指頭痕・内底ナデ不明 b:微砂・雲母 硬質 c:黄橙色 e:1/4 f:歪み大 g:22.9g
24	20	第4面 構成土	土器	かわらけ	(5.25)	—	[1.2]	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒 c:灰白色 e:2/3 g:39.0g
24	21	第4面 構成土	土器	かわらけ	(6.40)	(4.50)	1.95	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/3 g:13.3g
24	22	第4面 構成土	土器	かわらけ	(7.70)	(6.00)	1.40	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:1/5 g:9.9g
24	23	第4面 構成土	土器	かわらけ	(7.80)	(6.20)	1.35	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/4 g:13.4g
24	24	第4面 構成土	土器	かわらけ	(8.00)	(5.90)	1.15	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄灰色 e:1/4 f:全体に器肌摩耗し整形痕不明瞭 g:11.8g
24	25	第4面 構成土	土器	かわらけ	(8.20)	(6.30)	1.35	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ不明 b:微砂・雲母・黒色粒 c:灰白色 e:2/3 f:全体に器肌摩耗のため整形痕不明瞭 g:36.5g
24	26	第4面 構成土	土器	かわらけ	(8.60)	(6.80)	1.45	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・小石粒 c:灰黄色 e:1/3 g:16.08g
24	27	第4面 構成土	土器	かわらけ	(11.50)	(6.70)	3.25	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:2/3 f:歪み大 g:94.0g
24	28	第4面 構成土	土器	かわらけ	(12.60)	(7.00)	3.30	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデ不明瞭 b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/3 f:薄手の器壁を持つが胎土はやや粗土 g:48.2g
24	29	第4面 構成土	土器	かわらけ	(12.70)	(9.00)	3.00	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明・内底ナデ不明 b:微砂・雲母・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/3 f:全体に器肌摩耗のため整形痕不明瞭 g:53.3g
24	30	第4面 構成土	土器	かわらけ	(13.20)	(8.80)	3.10	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/2 f:歪み大 g:78.6g
24	31	第4面 構成土	磁器 舶載品	青磁 碗	—	—	[2.6]	a:ロクロ b:精良堅緻 c:灰白色 d:淡緑色・半透明 e:口縁部片 f:同安窯・碗Ⅰ類 外面縦位の櫛目文・器壁内面中位に沈線が廻る
24	32	第4面 構成土	陶器 湖西	山皿	—	—	[2.9]	a:ロクロ b:微砂・石英・白色粒 c:灰黒色 d:自然降灰 e:口縁部片・1/8 f:内外面口唇部油煤痕・湖西型6型式
24	33	第4面 構成土	陶器 渥美	片口山茶碗	—	6.20	[2.6]	a:ロクロ b:微砂・小石粒・白色粒 c:灰色 d:自然降灰 e:底部片・1/4 f:2型式か・高台粘土貼付け・畳付に籾痕なし
24	34	第4面 構成土	陶器 常滑	片口鉢 Ⅱ類	—	—	[4.2]	a:輪積み・内面横位のナデ・外面口縁部下は指頭による横位のナデ・外面下位は縦位のヘラ状工具によるナデ b:微砂 白色粒 c:赤色 d:赤褐色・自然降灰 e:口縁部片
24	35	第4面 構成土	陶器 常滑	甕	—	—	[2.2]	a:輪積み b:微砂・白色粒 c:灰色 d:茶褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:5型式
24	36	第4面 構成土	陶器 常滑	甕	—	—	[4.7]	a:輪積み b:微砂・白色粒 c:灰褐色 d:茶褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:5型式
24	37	第4面 構成土	陶器 常滑	甕	—	—	[7.5]	a:輪積み b:微砂・白色粒・石英 c:灰褐色 d:緑褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:5型式
24	38	第4面 構成土	陶器 常滑	甕	—	—	[8.0]	a:輪積み b:微砂 硬質 c:灰色 d:緑色・自然降灰 e:胴部片 f:細かい格子文の叩き痕
24	39	第4面 構成土	土器	瓦 丸瓦	[7.2]	[10.1]	2.20	a:筒部凹面−布目痕 筒部凸面−縄目の叩き痕がナデ消されている 筒部側縁−ヘラ削り b:灰色 微砂・雲母・白色粒 軟質 c:灰色 e:小片 f:A類
24	40	第4面 構成土	土器	瓦 平瓦	[7.2]	[5.9]	2.50	a:凹面−離れ砂付着・布目痕 凸面−離れ砂付着・細かい縄目の叩き痕 b:灰色 微砂・雲母・白色粒 硬質 c:灰色 e:小片 f:A類・凹面黒色に変色
24	41	第4面 構成土	土器	瓦 平瓦	[6.6]	[6.0]	2.20	a:凹面−糸切痕・布目痕 凸面−表面に自然降灰 b:灰褐色 微砂・雲母・白色粒・石英・小石粒 硬質 c:茶褐色 e:小片 f:F類・陶質
24	42	第4面 構成土	土器	瓦 平瓦	[5.5]	[8.8]	2.00	a:凹面−離れ砂付着・糸切痕 凸面−砂付着・細かい縄目の叩き痕 側面−ヘラ削り b:灰色 微砂・精良 軟質 c:灰色 e:小片 f:A類
24	43	第4面 構成土	須恵器	甕	—	—	[6.4]	a:輪積み b:微砂 c:灰色 d:灰色・自然降灰 e:胴部片
24	44	第4面 構成土	金属製品	鉄製品 釘	[4.4]	0.40	0.30	a:鍛造 f:錆付着・断面方形
24	45	第4面 構成土	石製品	滑石 温石か	[2.8]	[2.5]	[1.2]	e:小片 f:温石として使用後に破損したものと思われる・外面黒色に変色
24	46	第4面 構成土	石製品	砥石 仕上砥	[6.3]	[3.6]	[1.6]	b:灰赤色 f:砥面は遺存していない・鳴滝産
24	47	第4面 構成土	石製品	砥石 中砥	[11.5]	[4.8]	[4.2]	b:淡緑色 f:砥面3面残存・上野産・断面三角形を呈する・手持ちの砥石か
26	1	第5面 遺構64	土器	てづくね	8.35	—	1.15	a:てづくね・外底部浅く指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:3/4 g:50.3g

単位(cm)

図版番号	枝番	出土層位 出土遺構	種別 産地	器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
					単位:cm/復元値[ ]/残存値( )			a:成形・調整 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:残存率 f:備考 g:重量
26	2	第5面 遺構64	土器	てづくね	(8.40)	—	1.70	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:黄橙色 e:1/2 f:内面口唇部下に横位の筋状に黒色に変色・外面一部薄く黒色に変色 g:14g
26	3	第5面 遺構64	土器	てづくね	(8.60)	—	1.15	a:てづくね・外底部指頭による丁寧なナデ・内底ナデ不明 b:微砂・雲母・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/5 g:12g
26	4	第5面 遺構64	土器	てづくね	(8.70)	—	1.55	a:てづくね・外底部指頭による丁寧なナデ・内底ナデ不明 b:微砂・雲母・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/5 g:12g
26	5	第5面 遺構64	土器	てづくね	(8.90)	—	1.80	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/3 g:21g
26	6	第5面 遺構64	土器	てづくね	8.90	—	1.85	a:てづくね・外底部浅く指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄橙色 e:4/5 g:61.4g
26	7	第5面 遺構64	土器	てづくね	(9.10)	—	1.90	a:てづくね・外底部指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・黒色粒 c:灰黄色 e:1/3 g:31g
26	8	第5面 遺構64	土器	てづくね	(9.10)	—	1.90	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・海綿骨針 硬質 c:赤橙色 e:2/3 f:内外面に鉄分が厚く付着 g:51.6g
26	9	第5面 遺構64	土器	てづくね	(9.30)	—	1.45	a:てづくね・外底部浅く指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/2 g:35.7g
26	10	第5面 遺構64	土器	てづくね	(9.40)	—	1.35	a:てづくね・外底部指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・黒色粒 c:灰黄色 e:2/5 g:36g
26	11	第5面 遺構64	土器	てづくね	12.60	—	3.00	a:てづくね・外底部浅く指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:完形 f:歪み大 g:165.0g
26	12	第5面 遺構64	土器	てづくね	(13.10)	—	2.75	a:てづくね・外底部浅く指頭痕・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/3 f:内外面口唇部油煤痕・雑な整形 g:95.8g
26	13	第5面 遺構64	土器	てづくね	13.15	—	3.35	a:てづくね・外底部浅く指頭痕・板状圧痕・・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:黄橙色 e:ほぼ完形 f:歪み大・内面全体にに鉄分付着 g:209.0g
26	14	第5面 遺構64	土器	てづくね	13.25	—	3.15	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:2/3 g:125.0g
26	15	第5面 遺構64	土器	てづくね	13.30	—	3.05	a:てづくね・外底部浅く指頭痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:ほぼ完形 f:歪み大・口唇部油煤痕・鉄分付着・雑な整形 g:231.5g
26	16	第5面 遺構64	土器	てづくね	13.50	—	3.10	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・板状圧痕・・内底強くナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:黄橙色 e:ほぼ完形 f:歪み大・口唇部から外面体部に鉄分付着 g:199.0g
26	17	第5面 遺構64	土器	てづくね	13.60	—	3.30	a:てづくね・外底部浅く指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:黄橙色 e:4/5 f:歪み大 g:188.9g
26	18	第5面 遺構64	土器	かわらけ	8.40	7.30	1.55	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:2/3 f:歪み大 g:47g
26	19	第5面 遺構64	土器	かわらけ	(8.50)	(7.50)	1.75	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/5 g:14g
26	20	第5面 遺構64	土器	かわらけ	8.70	7.75	1.90	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄橙色 e:3/4 f:歪み大 g:54g
26	21	第5面 遺構64	土器	かわらけ	(8.80)	(6.30)	1.65	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/2 f:内外面器肌摩耗し整形痕不明瞭 g:27g
26	22	第5面 遺構64	土器	かわらけ	(9.10)	(8.20)	1.25	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/3 f:歪み大 g:27g
26	23	第5面 遺構64	土器	かわらけ	12.60	8.90	3.40	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:灰黄色 e:3/4 f:歪み大 f:外面下部を強く横位に回転ナデしている g:208g
26	24	第5面 遺構64	土器	かわらけ	(12.60)	(9.40)	3.30	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・器壁回転ナデの後内底強くナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 c:黄橙色 e:1/2 g:114g
26	25	第5面 遺構64	磁器 舶載品	青磁 碗	—	—	[3.6]	a:ロクロ b:精良堅緻 c:灰色 d:淡緑色 e:口縁部片 f:碗皿類・竜泉窯・内面片彫蓮華文と口縁下に二条の沈線・外面口縁下に一条の稜線が廻る
26	26	第5面 遺構64	陶器	山茶碗	—	6.50	[2.1]	a:ロクロ・高台内外底回転糸切 b:灰白色 微砂・白色粒・小石粒 c:灰色 d:口唇部灰緑色・自然降灰 e:底部片 f:尾張型7型式か・高台部貼付け・見込みに重ね焼き痕残る
26	27	第5面 遺構64	石製品	五輪塔	4.20	4.20	1.70	f:泥岩製・火輪部分・全体に摩耗している
26	28	第5面 遺構64	石製品	敲き石	9.00	2.90	3.50	先端部に打痕有り
27	29	第5面 遺構65	土器	かわらけ	(5.50)	(4.80)	1.00	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/4 f:口唇部雑な整形の内折れを呈する・外底面に粘土塊付着、脚の可能性もあり g:4.6g
27	30	第5面 遺構65	土器	かわらけ	(7.00)	(5.20)	1.05	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:2/5 g:19.6g
27	31	第5面 遺構65	土器	かわらけ	7.10	5.70	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明瞭・内底ナデ不明 b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:ほぼ完形 f:全体に器肌摩耗し整形痕不明瞭 g:40.3g
27	32	第5面 遺構65	土器	かわらけ	7.30	5.80	1.35	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ不明 b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・泥岩粒 c:灰黄色 e:ほぼ完形 f:全体に器肌摩耗し整形痕不明瞭 g:35.1g
27	33	第5面 遺構65	土器	かわらけ	7.35	4.70	1.55	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:ほぼ完形 g:43.8g
27	34	第5面 遺構65	土器	かわらけ	7.40	5.50	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:2/3 g:35.9g
27	35	第5面 遺構65	土器	かわらけ	7.40	5.50	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:2/3 g:34.9g
27	36	第5面 遺構65	土器	かわらけ	(7.40)	(6.30)	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:2/3 g:28.2g
27	37	第5面 遺構65	土器	かわらけ	7.45	6.40	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・器壁回転ナデの後内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:ほぼ完形 g:53.9g
27	38	第5面 遺構65	土器	かわらけ	(7.50)	(5.20)	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ不明瞭 b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/2 g:19.5g
27	39	第5面 遺構65	土器	かわらけ	7.50	6.00	1.45	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明・内底ナデ不明瞭 b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:3/4 f:全体に器肌摩耗し整形痕不明瞭 g:31.9g
27	40	第5面 遺構65	土器	かわらけ	7.50	6.00	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明・内底ナデ不明瞭 b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:ほぼ完形 g:41.9g
27	41	第5面 遺構65	土器	かわらけ	7.50	6.20	1.35	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明瞭・内底ナデ不明 b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:3/4 f:全体に器肌摩耗し整形痕不明瞭 g:36.4g

単位 (cm)

出土遺物観察表

図版番号	枝番	出土層位 出土遺構	種別 産地	器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
					単位:cm/復元値[ ]/残存値( )			a: 成形・調整 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:残存率 f:備考 g:重量
27	42	第5面 遺構65	土器	かわらけ	(7.50)	(7.70)	1.40	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:橙色 e:2/3 g:17.8g
27	43	第5面 遺構65	土器	かわらけ	7.60	5.30	1.45	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:ほぼ完形 g:47.2g
27	44	第5面 遺構65	土器	かわらけ	7.60	5.45	1.40	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明・内底強くナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:ほぼ完形 g:47.4g
27	45	第5面 遺構65	土器	かわらけ	7.65	6.00	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:ほぼ完形 g:48.4g
27	46	第5面 遺構65	土器	かわらけ	7.70	5.60	1.70	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:ほぼ完形 g:55.5g
27	47	第5面 遺構65	土器	かわらけ	(7.75)	(5.05)	1.45	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明瞭・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:3/4 g:39.3g
27	48	第5面 遺構65	土器	かわらけ	7.90	5.25	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ不明瞭 b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:3/4 g:45.0g
27	49	第5面 遺構65	土器	かわらけ	(7.90)	(6.40)	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/3 g:17.8g
27	50	第5面 遺構65	土器	かわらけ	8.10	6.15	1.65	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:ほぼ完形 g:50.4g
27	51	第5面 遺構65	土器	かわらけ	8.15	5.80	1.55	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:ほぼ完形 g:51.4g
27	52	第5面 遺構65	土器	かわらけ	(8.30)	(6.30)	1.35	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:3/4 g:34.5g
27	53	第5面 遺構65	土器	かわらけ	(12.20)	(8.00)	3.35	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:橙色 e:1/2 g:92.5g
27	54	第5面 遺構65	土器	かわらけ	(13.10)	(9.50)	3.10	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/3 f:内面のみ黒色に変色 g:67.3g
27	55	第5面 遺構65	土器	かわらけ	12.25	6.70	3.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ不明瞭 b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒 c:灰黄色 e:3/4 f:器肌摩耗し整形痕不明瞭・薄手の器壁を持つ g:111.9g
27	56	第5面 遺構65	土器	かわらけ	(12.30)	(6.30)	3.80	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/3 f:器肌摩耗し整形痕不明瞭・薄手の器壁を持つ g:104.6g
27	57	第5面 遺構65	土器	かわらけ	(12.40)	(7.60)	3.65	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ不明瞭 b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/3 f:薄手の器壁を持つ g:72.4g
27	58	第5面 遺構65	土器	かわらけ	(12.50)	(7.00)	3.75	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭・板状圧痕不明・内底ナデ不明瞭 b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/2 f:薄手の器壁を持つ g:87.4g
27	59	第5面 遺構65	土器	かわらけ	(13.00)	(6.20)	3.65	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデ不明瞭 b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒 c:灰黄色 e:1/2 f:器肌摩耗し整形痕不明瞭・薄手の器壁を持つ・外底部に粘土付着 g:84.2g
27	60	第5面 遺構65	土器	かわらけ	13.10	6.90	3.80	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕不明・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針 c:橙色 e:3/4 f:薄手の器壁を持つ g:125.3g
27	61	第5面 遺構65	土器	かわらけ	13.40	7.80	3.45	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ不明瞭 b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:ほぼ完形 f:器肌摩耗し整形痕不明瞭・薄手の器壁を持つ g:128.7g
27	62	第5面 遺構65	土器	かわらけ	(13.60)	(8.00)	3.90	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/3 f:底部に薄く粘土付着・器肌摩耗し整形痕不明瞭・薄手の器壁を持つ g:58.4g
27	63	第5面 遺構70	土器	かわらけ	(6.00)	(4.40)	1.50	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・泥岩粒・小石粒 c:黄橙色 e:1/5 g:10.0g
27	64	第5面 遺構70	土器	かわらけ	(6.90)	(4.90)	1.75	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・泥岩粒 c:黄橙色 e:1/6 g:9.5g
27	65	第5面 遺構71	土器	かわらけ	(6.80)	(4.50)	1.85	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄灰色 e:1/4 g:12.1g
27	66	第5面 構成土	木製品	箸状	[16.4]	0.60	0.70	f:丁寧な整形
27	67	第5面 構成土	漆製品	調度具 部材	[8.7]	1.00	0.69	f:片面に黒色系漆採漆・断面平行四辺形
27	68	第5面 構成土	木製品	用途不明 部材	[15.3]	1.4～1.5	0.49	f:断面方形・3ヶ書貫通しない孔が残る。口部分には白濁した付着物有り
29	1	確認調査	磁器 舶載品	青磁 盤	[4.8]	[6.0]	0.6～1.0	a:ロクロ b:精良堅緻 c:灰色 d:濃緑色 外底高台内にも施釉 e:底部片 f:竜泉窯・見込みに龍と魚を貼付け
29	2	確認調査	自然石 (泥岩)	用途不明	[6.1]	[3.9]	[0.8～1.8]	f:表面に細かい線状の刻みが入る・刃物痕か
30	1	表土～ 第1面	土器	かわらけ	(7.00)	(4.80)	1.70	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/3 g:17.0g
30	2	表土～ 第1面	土器	かわらけ	7.00	4.70	1.85	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・小石粒 c:黄橙色 e:4/5 g:33.0g
30	3	表土～ 第1面	土器	かわらけ	(9.80)	(8.00)	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/3 g:19.0g
30	4	表土～ 第1面	陶器 瀬戸	瓶子	—	—	[3.9]	a:ロクロ・内面横位の粗い整形痕 b:微砂・精良 c:灰色 d:緑灰色 e:胴部片 f:頸部下位に剣頭文・体部に文様種は不明だが二重曲線状の押印
30	5	表土～ 第1面	陶器 渥美	甕	—	—	[6.6]	a:輪積み・外面串状工具による縦位のナデ・内面横位のナデと指頭痕 b:微砂・白色粒 c:灰色 d:黒褐色・自然降灰 e:口縁部片
30	6	表土～ 第1面	陶器 常滑	片口鉢 Ⅱ類	—	—	[5.1]	a:輪積み・外面口唇部下は横位のナデ・外面中部は縦位のナデ b:微砂・雲母・白色粒 c:灰色 d:明茶褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:8型式
30	7	表土～ 第1面	陶器 常滑	甕	—	—	[9.5]	a:輪積み b:微砂・雲母・白色粒 c:灰色 d:緑色・自然降灰 e:口縁部片 f:6b型式
30	8	表土～ 第1面	陶器 常滑	甕	—	—	[5.7]	a:輪積み b:微砂・雲母・白色粒・石英 c:灰褐色 d:暗茶褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:8型式
30	9	表土～ 第1面	陶器 常滑	甕	—	—	[5.6]	a:輪積み b:微砂・白色粒 c:灰色 d:黄褐色・自然降灰 e:胴部片 f:外面縦長格子の押印
30	10	表土～ 第1面	陶器 常滑	壺	—	—	[3.2]	a:輪積み・内面指頭による横位のナデ b:微砂・雲母・白色粒 c:赤褐色 d:明褐色・自然降灰 e:胴部片 f:内面頸部下やや黒色に変色・頸部に2筋の沈線が廻る
30	11	表土～ 第1面	陶器 備前	擂鉢	—	—	[4.6]	a:輪積み・内面横位のナデ・外面不規則な指頭によるナデ痕 b:石英・白色粒粘性あり c:灰褐色 d:明茶褐色・自然降灰 e:底部片 f:内面線状の刻みは単位不明・中世Ⅲ期
30	12	表土～ 第1面	土器	甕	—	—	[4.1]	a:内面横位のナデ b:微砂・雲母・白色粒 c:灰褐色 体部色調-下位茶褐色 e:胴部片 f:縄文期か

単位 (cm)

出土遺物観察表

図版番号	枝番	出土層位 出土遺構	種別 産地	器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
					単位:cm/復元値[ ]/残存値( )			a:成形・調整 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:残存率 f:備考 g:重量
30	13	表土～ 第1面	金属製品	鉄製品 釘	7.90	0.70	0.60	a:鍛造 f:錆付着・工具(楔)か
30	14	表土～ 第1面	ガラス 製品	遊具 石けり	直径(3.3)	—	0.60	f:中央に読売巨人軍(日本の野球チーム)の略「G」のマーク・外周に野球ボールの縫い目を表すマークを表す型作り
31	1	表土・撹乱	土器	てづくね	(8.20)	—	1.60	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・内底回転ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針良土 硬質 c:黄橙色 e:1/3 g:28.1g
31	2	表土・撹乱	土器	てづくね	(8.70)	—	1.50	a:てづくね・外底部指頭によるナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/4 g:17.8g
31	3	表土・撹乱	土器	てづくね	(9.00)	—	1.55	a:てづくね・外底部指頭によるナデ・板状圧痕・内底回転ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/4 g:22.8g
31	4	表土・撹乱	土器	てづくね	(12.40)	—	[2.5]	a:てづくね・外底部薄く指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/5 g:26.8g
31	5	表土・撹乱	土器	てづくね	(13.00)	—	3.20	a:てづくね・外底部薄く指頭痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・小石粒 c:黄橙色 e:1/3 g:66.6g
31	6	表土・撹乱	土器	かわらけ	5.60	3.70	1.90	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・器壁回転ナデの後内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:3/4 f:歪み大 g:28.8g
31	7	表土・撹乱	土器	かわらけ	(6.80)	(5.30)	1.10	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕 b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:褐色 e:1/5 f:全体に器肌摩耗し整形痕不明 g:7.2g
31	8	表土・撹乱	土器	かわらけ	(6.80)	(3.80)	1.75	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 c:灰黄色 e:1/3 g:21.0g
31	9	表土・撹乱	土器	かわらけ	(7.40)	(5.20)	1.35	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・器壁回転ナデの後内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄灰色 e:1/3 g:13.9g
31	10	表土・撹乱	土器	かわらけ	(7.40)	(5.60)	1.90	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:黄灰色 e:1/3 g:14.7g
31	11	表土・撹乱	土器	かわらけ	7.40	5.90	1.85	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:灰黄色 e:完形 g:57.4g
31	12	表土・撹乱	土器	かわらけ	(7.60)	(6.10)	1.40	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・泥岩粒 c:灰黄色 e:1/3 g:22.9g
31	13	表土・撹乱	土器	かわらけ	(7.80)	(5.40)	1.25	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針 c:灰黄色 e:1/3 g:17.5g
31	14	表土・撹乱	土器	かわらけ	(8.40)	(5.80)	1.75	a:ロクロ・底部回転糸切不明瞭 b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/2 f:全体に器壁摩耗し整形痕不明瞭・内外両面に貫通していない方形を呈する穿孔あり・内底孔-3mm×3mm・外底孔-4mm×3mm g:41.0g
31	15	表土・撹乱	土器	かわらけ	(8.40)	(7.20)	1.60	a:ロクロ・底部回転糸切 b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・小石粒 c:橙色 e:1/4 f:全体に器肌摩耗し整形痕不明瞭 g:22.2g
31	16	表土・撹乱	土器	かわらけ	(9.60)	(7.20)	2.00	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底強くナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:1/3 f:内面見込みと外底部に黒色の付着物あり、油煤痕か g:30.5g
31	17	表土・撹乱	土器	かわらけ	(10.80)	(6.00)	3.10	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・器壁回転ナデの後内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:黄橙色 e:1/3 g:61.1g
31	18	表土・撹乱	土器	かわらけ	(11.80)	(8.20)	3.10	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・黒色粒・海綿骨針・小石粒 c:灰黄色 e:1/3 f:全体に器肌摩耗 g:66.0g
31	19	表土・撹乱	土器	かわらけ	12.00	7.00	2.95	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒・小石粒 c:黄灰色 e:2/3 g:116.1g
31	20	表土・撹乱	土器	かわらけ	(12.30)	(8.00)	3.30	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・泥岩粒 c:黄橙色 e:2/3 g:118.6g
31	21	表土・撹乱	土器	かわらけ	(12.40)	(8.40)	3.30	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・内底ナデの後器壁回転ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:1/2 g:63.0g
31	22	表土・撹乱	土器	かわらけ	(12.60)	(8.40)	3.60	a:ロクロ・底部回転糸切・板状圧痕・器壁回転ナデの後内底強くナデ b:微砂・雲母・海綿骨針 c:橙色 e:1/3 g:48.9g
31	23	表土・撹乱	磁器 京焼か	青磁 皿	—	—	[2.5]	a:ロクロ・内外面無文・体部外面下部、高台及び高台内露胎・釉ツケガケ b:精良堅緻 c:灰黄色 d:透明・灰黄色 e:底部片
31	24	表土・撹乱	磁器 舶載品	青磁 碗	—	(3.00)	[2.1]	a:ロクロ b:精良堅緻 c:灰白色 d:淡緑色・半透明 畳付露胎 e:底部片 f:竜泉窯・碗Ⅲ類
31	25	表土・撹乱	磁器 肥前	青磁 碗	—	(4.80)	[1.9]	a:ロクロ・内外面無文 b:黒色粒・粗土 c:灰白色 d:淡青色・畳付及び高台内露胎 e:底部片 f:Ⅱ-2期
31	26	表土・撹乱	磁器 舶載品	青磁 碗	—	(6.00)	[1.9]	a:ロクロ b:精良堅緻 c:灰色 d:緑色・半透明 畳付と高台内露胎 e:底部片 f:竜泉窯・碗Ⅰ類・高台断面形四角を呈する・高台内部の刳りが浅く底部肉厚・内面見込みに片刃の花文有り
31	27	表土・撹乱	磁器 舶載品	青磁 碗	—	(2.80)	[2.2]	a:ロクロ b:精良堅緻 c:灰色 d:青緑色・薄く半透明 畳付露胎 e:底部片 f:竜泉窯・碗Ⅲ類・内面見込みに沈線が廻る・小片のため文様意匠不明
31	28	表土・撹乱	磁器 舶載品	青磁 碗	—	(4.20)	[4.0]	a:ロクロ・内面見込みに沈線が廻る・外面鎬蓮弁文-雑な広弁 b:精良堅緻 c:灰白色 d:緑色・半透明 畳付と高台内部露胎 e:底部片 f:竜泉窯・碗Ⅲ類・高台断面形四角を呈する
31	29	表土・撹乱	磁器 舶載品	青磁 碗	—	—	[1.8]	a:ロクロ b:精良堅緻 c:灰白色 d:水色・半透明 畳付露胎 e:底部片 f:竜泉窯・碗Ⅲ類？
31	30	表土・撹乱	磁器 舶載品	白磁 口兀皿	(8.20)	—	[1.85]	a:ロクロ b:精良堅緻 c:灰白色 d:淡緑色・半透明 口唇部露胎 e:口縁部片 f:竜泉窯・皿Ⅸ類
31	31	表土・撹乱	磁器 肥前	白磁 小皿	(6.00)	(2.80)	2.20	a:ロクロ・内外面無文・畳付に砂付着 b:精良堅緻 c:薄青色 d:透明 e:1/2 f:紅猪口
31	32	表土・撹乱	磁器 瀬戸	白磁 皿	—	—	[2.1]	a:型作り・見込みにスタンプ文・雷文か b:精良堅緻 c:白色 d:透明 e:口縁部片 f:明治初期
31	33	表土・撹乱	磁器 舶載品	白磁 皿	(11.10)	—	[1.5]	a:ロクロ b:精良堅緻 c:白色 d:淡水色・透明 e:口縁部片
31	34	表土・撹乱	磁器 肥前	碗	—	—	[2.2]	a:ロクロ・染付・赤絵・筆描き・外面草花文・内面無文 b:精良 c:白色 d:透明 e:胴部部片 f:Ⅳ～Ⅴ基
31	35	表土・撹乱	磁器 肥前	仏華瓶	—	—	[4.1]	a:ロクロ・外面無文 b:精良堅緻 c:白色 d:群青色・内面露胎・一部釉垂れあり e:胴部片
31	36	表土・撹乱	磁器 肥前	仏飯器	—	5.10	[4.1]	a:ロクロ・コバルト・筆描き・外面高台上位に一本の圏線 b:精良堅緻 硬質 c:白色 d:透明・口唇部露胎・内外面施釉・畳付露胎 e:底部片
31	37	表土・撹乱	磁器 瀬戸？	皿	—	—	[2.3]	a:ロクロ・染付・コバルト・筆描き・内面草花文・外面葡萄文 b:精良 c:白色 d:透明 e:口縁部片
31	38	表土・撹乱	磁器 瀬戸？	碗	—	(5.80)	[1.3]	a:ロクロ・染付・酸化コバルト・筆描き・外面小片のため文様種不明、草花文か・高台部に二条の圏線が廻る・高台内に一条の圏線が廻る・内面無文 b:精良 c:白色 d:透明 e:底部片
31	39	表土・撹乱	磁器 肥前	向付？	(6.20)	3.20	5.10	a:ロクロ・輪花・染付・コバルト・筆描き・外面蓮弁文+微塵唐草文・口縁部菱文・見込み内に蓬莱文様・高台内「成化年製」・口縁部6弁の輪花型・ b:精良 c:白色 d:透明 e:4/5
31	40	表土・撹乱	磁器 瀬戸	碗	—	(3.00)	[3.0]	a:ロクロ・染付・合成コバルト・筆描き・外面草花文+胴部下位に二本の圏線が廻る・内面無文・畳付露胎 b:精良 c:白色 d:透明 e:底部片
31	41	表土・撹乱	磁器 波佐見	碗	(6.80)	(3.60)	4.10	a:ロクロ・染付・コバルト・筆描き・外面口唇部下に圏線が1本巡る・外面下部に二本の圏線が廻る・圏線の間に草花文・高台部に二本の圏線が廻る・内面無文・畳付露胎 b:精良 c:白色 d:透明 e:1/3 f:近代

単位(cm)

出土遺物観察表

図版番号	枝番	出土層位 出土遺構	種別 産地	器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
					単位:cm/復元値[ ]/残存値( )			a:成形・調整 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:残存率 f:備考 g:重量
31	42	表土・撹乱	磁器 肥前	碗	(7.30)	—	[3.7]	a:ロクロ・染付・コバルト・筆描き・外面上下の界線の間に蓮弁文+草花文・内面口唇部下に二本の圏線が廻る b:精良 c:白色 d:透明 e:口縁部片
31	43	表土・撹乱	磁器 瀬戸	碗	(9.40)	3.40	4.60	a:ロクロ・染付・コバルト・筆描き・外面草花文・外面下部に一条の圏線・外面高台部二条の圏線・外面高台内に松葉文の筆描き・内面無文・畳付露胎 b:精良 c:白色 d:透明 e:2/3
31	44	表土・撹乱	磁器 瀬戸	碗	(10.00)	(3.40)	5.60	a:ロクロ・染付・コバルト・筆描き・外面菊花文・体部下部1条の圏線・高台部二条の圏線が廻る・高台畳付露胎 b:精良 c:白色 d:透明 e:1/3
31	45	表土・撹乱	磁器 肥前	碗	(9.40)	—	[3.8]	a:ロクロ・染付・コバルト・筆描き・外面草花文・内面無文 b:精良 c:白色 d:透明 e:口縁部片
31	46	表土・撹乱	磁器 瀬戸	碗	(9.60)	—	[4.7]	a:ロクロ・染付・コバルト・外面-胴に蓮華、胴下部に松葉文を印刻後呉須を塗り茎・葉を描く b:精良 c:白色 d:透明 e:口縁部片 f:明治
31	47	表土・撹乱	磁器 瀬戸	碗	(9.60)	—	[3.5]	a:ロクロ・染付・コバルト・筆描き・文様種不明・畳付露胎 b:微砂 c:灰白色 d:透明 e:底部片 f:中期Ⅰ
31	48	表土・撹乱	磁器 肥前	碗	—	3.20	[1.7]	a:ロクロ・染付・コバルト・外面筆描き(タケノコ+人物+文様不明)・体部下位に一本の圏線が巡る・内面見込み周囲に2本の圏線・中央に花文か・畳付露胎 b:精良 硬質 c:白色 d:透明 e:底部片
31	49	表土・撹乱	磁器 肥前	碗	—	(5.80)	[2.5]	a:ロクロ・染付・コバルト・筆描き・外面草花文・内面見込み外周に一条の圏線が廻る・見込み中央に吉祥文・蛇の目凹型高台 b:精良 c:白色 d:透明 e:1/4底部片
31	50	表土・撹乱	磁器 瀬戸	碗	—	(3.60)	[3.5]	a:ロクロ・染付・コバルト・筆描き・外面松文・外面下部に一条の圏線・外面高台部二条の圏線・内面無文・畳付露胎 b:精良 c:白色 d:透明 e:1/4底部片
31	51	表土・撹乱	磁器 瀬戸	碗	—	(3.90)	[4.0]	a:ロクロ・染付・コバルト・筆描き・外面文様種不明・畳付露胎 b:微砂 c:灰白色 d:透明 e:底部片 f:中期Ⅰ
31	52	表土・撹乱	磁器 肥前	碗	—	—	[4.5]	a:ロクロ・染付・コバルトで筆描き・外面雲文・内面上位に2条の圏線 下位に1条の圏線 b:精良 c:灰白色 d:透明 e:体部片
31	53	表土・撹乱	磁器 肥前	碗	—	—	[4.9]	a:ロクロ・染付・コバルト・筆描き・内外面藤文・内外面ともに口縁部下に二条の圏線が廻る b:精良 c:白色 d:透明 e:口縁部片
31	54	表土・撹乱	磁器 瀬戸	急須	(6.60)	—	[6.8]	a:ロクロ・染付・コバルト・筆描き・外面口唇部下に1本の圏線・体部下位に二本の圏線・注口上に草花文 b:精良堅緻 硬質 c:白色 d:透明・口唇部露胎・内外面施釉 e:胴部片
32	55	表土・撹乱	陶器 京焼か	皿	(8.40)	(3.40)	1.80	a:ロクロ・底部回転糸切 b:微砂 良土 c:淡黄色 d:透明 内面のみ施釉 口唇部黒色の付着物残る、油煤痕か e:1/2 f:18c g:41.8g
32	56	表土・撹乱	陶器 瀬戸	皿	—	(5.00)	[1.5]	a:ロクロ・底部糸切・内外面文様不明・高台貼付け・高台及び高台内露胎 b:微砂 c:灰白色 d:透明 e:底部片
32	57	表土・撹乱	陶器 瀬戸	皿	—	(7.60)	[2.4]	a:ロクロ・底部糸切・高台部貼付け・内外面無文・見込み中央のみ施釉・蛇目か b:微砂 c:灰白色 d:透明・灰緑色 e:底部片
32	58	表土・撹乱	陶器 瀬戸	平碗	—	(4.80)	[2.4]	a:ロクロ・底部糸切・高台貼付け b:精良 c:灰色 d:内面-緑色・降灰釉 外面露胎 e:底部片 f:中Ⅲ期
32	59	表土・撹乱	陶器 瀬戸	平碗	—	—	[4.5]	a:ロクロ・外面下位横位のヘラ削り b:微砂・精良 c:灰色 d:淡緑色・透明 漬けがけ e:口縁部片 f:中Ⅲ期か
32	60	表土・撹乱	陶器 瀬戸	入子	(5.80)	(5.40)	1.75	a:ロクロ・底部ヘラによって整形し糸切痕を消している b:精良 c:灰色 d:降灰釉・灰緑色 e:3/4 f:前Ⅱ期?・内面見込みに薄く赤色の付着物あり、紅か?
32	61	表土・撹乱	陶器 瀬戸	卸皿	(12.60)	—	[3.7]	a:ロクロ b:微砂 軟質 c:灰黄色 d:灰緑色・ハケ塗り e:1/6 f:中Ⅱ期?・粗い卸目
32	62	表土・撹乱	陶器 瀬戸	洗	—	—	[5.1]	a:ロクロ b:微砂 精良 c:褐色 d:緑褐色 e:口縁部片 f:前Ⅰ期?・口唇部釉剥離
32	63	表土・撹乱	陶器 瀬戸	折縁皿	—	—	[2.9]	a:ロクロ b:微砂・精良 c:灰色 d:淡緑色 e:口縁部片 f:後Ⅳ期・内外面被熱を受け釉が白濁してしまっていた
32	64	表土・撹乱	陶器 瀬戸	折縁深皿	—	—	[2.7]	a:ロクロ b:微砂・精良 c:灰色 d:灰緑色 e:口縁部片 f:中Ⅰ期・内外面被熱を受け釉が白濁してしまっていた
32	65	表土・撹乱	陶器 瀬戸	折縁皿	—	(10.80)	[1.3]	a:ロクロ・底部回転糸切・見込み周囲に2本、中央に3本の沈線が廻る b:微砂・白色粒・精良 c:灰色 d:淡緑色・底部露胎 e:底部片 f:釉だれが多く見込み周囲の沈線が消えてしまっている
32	66	表土・撹乱	陶器 瀬戸	瓶子	(5.20)	—	[3.1]	a:ロクロ b:微砂・軟質 c:灰色 d:淡緑色 e:口縁部片 f:前Ⅲ～Ⅳ期
32	67	表土・撹乱	陶器 瀬戸	瓶子	—	(7.00)	[4.5]	a:ロクロ b:微砂 精良 c:灰白色 d:緑褐色・厚くガラス質の釉だれが底部まで流れていた e:1/5底部片
32	68	表土・撹乱	陶器 瀬戸	瓶子	—	—	[3.8]	a:ロクロ・内面ヘラ状工具によるナデ・外面押印、文様種不明 b:微砂 軟質 c:灰白色 d:灰緑色 e:胴部片
32	69	表土・撹乱	陶器 瀬戸	擂鉢	—	—	[3.7]	a:ロクロ b:微砂・石英 軟質 c:灰褐色 d:内外面暗茶褐色・ハケ塗り e:胴部片 f:内面線状の刻みは一単位7本
32	70	表土・撹乱	陶器 瀬戸	皿	—	6.20	[1.7]	a:型作り・内面海老文のスタンプ上に合成コバルトを塗布 高台形-削り蛇の目高台 b:微砂 c:灰白色 d:透明 e:底部片 f:明治初期
32	71	表土・撹乱	陶器 瀬戸	石皿	—	—	[1.5]	a:ロクロ・染付・コバルト・筆描き・外面文様種不明・畳付露胎 b:微砂 c:灰白色 d:透明 e:底部片
32	72	表土・撹乱	陶器 瀬戸	石皿	(23.20)	(13.00)	3.30	a:ロクロ・内面-鉄絵・型紙を置き吹き墨文様・口縁部2条の圏線 外面上位に1条の圏線・下位に2条の圏線 高台形-削り高台 b:微砂 c:灰白色 d:透明 e:底部片 f:18世紀? 内面に2ヶ所重ね焼き痕有り 全体に貫入が入る
32	73	表土・撹乱	陶器 益子	土瓶	—	—	[2.0]	a:ロクロ・外面鉄絵・筆描き・文様種不明・口唇部釉掻き取り b:微砂 c:灰色 d:淡黄色 e:口縁部片
32	74	表土・撹乱	陶器 瀬戸	壺	—	—	[5.2]	a:ロクロ・染付・筆描き・外面草花文・口唇部釉掻き取り b:微砂 c:淡黄色 d:灰白色 e:口縁部片
32	75	表土・撹乱	陶器 益子	土瓶	—	—	[7.0]	a:ロクロ・染付・乳白色の地に合成コバルトで筆描き・外面草花文・外面体部下位に2条の圏線 体部下位露胎 b:微砂 c:灰色 d:透明 e:体部片 f:76と同一個体 f:明治期
32	76	表土・撹乱	陶器 瀬戸	土瓶	[8.5]	[7.2]	[5.0]	a:ロクロ・染付・乳白色の地に合成コバルトで筆描き・外面草花文・外面体部下位に2条の圏線 注ぎ口部貼付け b:微砂 c:灰色 d:透明 e:体部片 f:75と同一個体 f:明治期
32	77	表土・撹乱	陶器 渥美	片口注口鉢	—	—	[5.5]	a:輪積み・内外面横位のナデ b:微砂・石英 硬質 c:灰黒色 d:自然降灰 e:底部片 f:内面下部から内底にかけて器肌剥離、摩耗
32	78	表土・撹乱	陶器 渥美	短頸壺	—	—	[4.9]	a:輪積み・内外面横位のナデ b:微砂・白色粒 c:灰褐色 d:灰色・自然降灰 e:胴部片 f:耳環部分が破損し一部遺存
32	79	表土・撹乱	陶器 渥美	甕	—	—	[5.4]	a:輪積み・内外面横位のナデ b:微砂・雲母・白色粒 c:灰色 d:灰黒色・自然降灰 e:胴部片 f:肩部に押印有り(文様種不明)
32	80	表土・撹乱	陶器 常滑	片口鉢 Ⅰ類	—	—	[2.8]	a:輪積み b:微砂・白色粒 c:灰色 d:灰色・口唇部上部に薄く自然降灰 e:口縁部片 f:6a形式
32	81	表土・撹乱	陶器 常滑	片口鉢 Ⅱ類	—	—	[6.9]	a:輪積み b:微砂・白色粒・石英・小石粒 c:茶褐色 d:赤褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:6b形式・外面白色の付着物有り・内面使用痕なし

単位(cm)

出土遺物観察表

図版番号	枝番	出土層位 出土遺構	種別 産地	器種	口径/長さ 単位:cm/復元値[ ]/残存値( )	底径/幅	器高/厚さ	観察内容 a:成形・調整 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:残存率 f:備考 g:重量
32	82	表土・撹乱	陶器 常滑	片口鉢 Ⅱ類	—	—	[5.8]	a:輪積み b:微砂・白色粒・石英・小石粒 c:茶褐色 d:明茶褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:8形式・内面摩耗
32	83	表土・撹乱	陶器 常滑	片口鉢 Ⅱ類	—	—	[3.4]	a:輪積み b:微砂・白色粒・小石粒 c:灰褐色 d:茶褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:9形式
32	84	表土・撹乱	陶器 常滑	片口鉢 Ⅱ類	—	—	[5.2]	a:輪積み b:微砂・白色粒・小石粒 c:灰黒色 d:白濁した茶褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:9形式・内面摩耗
32	85	表土・撹乱	陶器 常滑	片口鉢 Ⅱ類	—	—	[7.6]	a:輪積み b:微砂・白色粒・小石粒 c:赤褐色 d:赤褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:9形式・内面摩耗
32	86	表土・撹乱	陶器 産地不明	壷	(10.60)	—	[4.9]	a:輪積み・頸部下に2条の圏線・内面雑な指頭による整形痕 b:微砂・白色粒・雲母 c:灰色 d:暗茶褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:9形式・信楽か
32	87	表土・撹乱	陶器 常滑	広口壷	—	—	[7.9]	a:輪積み b:微砂・雲母・白色粒・小石粒 軟質 c:褐色 d:褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:5型式
32	88	表土・撹乱	陶器 常滑	広口壷	—	—	[6.5]	a:輪積み b:微砂・雲母・白色粒 c:灰褐色 d:灰緑色・自然降灰 被熱を受けたためか釉の一部が白色化している e:口縁部片 f:6a型式
32	89	表土・撹乱	陶器 常滑	広口壷	(16.00)	—	[8.1]	a:輪積み b:微砂・白色粒 c:灰色 d:灰緑色・自然降灰 e:1/6口縁部片 f:6a型式
33	90	表土・撹乱	陶器 常滑	甕	—	—	[5.6]	a:輪積み b:微砂・精良 c:灰褐色 d:緑褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:6a型式
33	91	表土・撹乱	陶器 常滑	甕	—	—	[9.7]	a:輪積み b:微砂・雲母・白色粒・小石粒 c:褐色 d:灰褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:6a型式
33	92	表土・撹乱	陶器 常滑	甕	—	—	[6.5]	a:輪積み b:微砂・雲母・白色粒 c:灰褐色 d:褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:6a～6b型式
33	93	表土・撹乱	陶器 常滑	甕	—	—	[6.9]	a:輪積み b:微砂・雲母・白色粒・石英・小石粒 c:灰色 d:明茶褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:9型式
33	94	表土・撹乱	陶器 常滑	甕	—	—	[7.7]	a:輪積み b:微砂・白色粒 c:灰色 d:緑褐色・自然降灰 e:口縁部片 f:10型式
33	95	表土・撹乱	陶器 常滑	甕	—	—	[3.8]	a:輪積み b:微砂・白色粒・石英 c:灰色 d:淡褐色・自然降灰 e:胴部片 f:胴部外面縦線文+横線文+×文の押印
33	96	表土・撹乱	陶器 常滑	甕	—	—	[7.1]	a:輪積み b:微砂・白色粒 c:灰色 d:灰緑色・自然降灰 e:胴部片 f:胴部外面矢羽根文の押印
33	97	表土・撹乱	陶器 常滑	甕	—	—	[7.8]	a:輪積み b:微砂・白色粒 硬質 c:灰黒色 d:灰褐色・自然降灰 e:胴部片 f:胴部外面縦線文の押印
33	98	表土・撹乱	陶器 常滑	甕	—	—	[7.9]	a:輪積み b:微砂・白色粒・石英 c:灰色 d:淡褐色・自然降灰 e:胴部片 f:胴部外面縦線文+横線文+×文の押印
33	99	表土・撹乱	陶器 常滑	甕	—	—	[6.0]	a:輪積み b:微砂・白色粒 硬質 c:灰黒色 d:灰褐色・自然降灰 e:胴部片 f:胴部外面縦線文の押印
33	100	表土・撹乱	陶器 常滑	甕	—	—	[7.0]	a:輪積み b:微砂・白色粒 軟質 c:淡褐色 d:淡褐色・自然降灰 e:胴部片 f:胴部外面縦線文+横線文+×文の押印
33	101	表土・撹乱	陶器 常滑	甕	—	—	[7.1]	a:輪積み b:微砂・白色粒 c:灰色 d:灰緑色・自然降灰 e:胴部片 f:胴部外面縦線文+米文の押印
33	102	表土・撹乱	陶器 魚住	鉢	—	—	[3.0]	a:輪積み b:微砂・白色粒・雲母 c:暗褐色 d:暗灰色・口唇部外面のみ自然降灰 e:口縁部片 f:Ⅲ期(13世紀代)
33	103	表土・撹乱	陶器 備前	擂鉢	—	—	[3.7]	a:輪積み b:白色粒・小石粒 硬質 c:赤褐色 d:赤褐色・自然降灰 e:胴部片 f:内面線状の刻みは一単位4本・内面摩耗、使用痕か
33	104	表土・撹乱	陶器 備前	擂鉢	—	—	[3.1]	a:輪積み b:精良・白色粒・小石粒 硬質 c:赤褐色 d:赤褐色・自然降灰 e:胴部片 f:内面線状の刻みは一単位数不明
33	105	表土・撹乱	陶器 備前	擂鉢	—	—	[5.8]	a:輪積み b:白色粒 硬質 c:黒色 d:黒褐色・自然降灰 e:胴部片 f:内面線状の刻みは一単位不明・10本遺存
33	106	表土・撹乱	陶器 備前	擂鉢	—	—	[4.6]	a:輪積み b:精良・白色粒 c:灰色 d:灰褐色・自然降灰 e:底部片 f:内面線状の刻みは一単位4本
33	107	表土・撹乱	陶器 備前	擂鉢	—	—	[5.7]	a:輪積み b:精良・白色粒 c:灰色 d:灰褐色・自然降灰 e:底部片 f:内面線状の刻みは一単位5本
33	108	表土・撹乱	陶器 備前	擂鉢	—	—	[7.1]	a:輪積み b:白色粒・小石粒 硬質 c:赤褐色 d:赤褐色・自然降灰 e:胴部片 f:内面線状の刻みは器面全体に廻る・内面磨り目は摩耗している
33	109	表土・撹乱	土器	瓦器質 火鉢	—	—	[7.1]	a:輪積み・口唇部輪花状を呈する・外面スタンプが僅かに遺存・界線の中に珠文、中心に巴文か・外面縦位の磨き b:微砂・白色粒 c:赤灰色 e:口縁部片 f:Ⅲ類・外面黒色処理・内面被熱を受け器肌剥離
33	110	表土・撹乱	土器	瓦器質 火鉢	—	—	[6.3]	a:輪積み・内面横位のナデ・外面上部に16弁の菊花文が捺される b:微砂・雲母・白色粒 軟質 c:灰色 e:口縁部片 f:Ⅲ類・内外面被熱を受け器肌剥離
33	111	表土・撹乱	土器	瓦器質 火鉢	—	—	[10.0]	a:輪積み・外面口唇部下に16弁の大型の菊花文が捺される・外面横位のナデ・内面斜位のナデ b:微砂・白色粒・小石粒 軟質 c:灰色 e:口縁部片 f:Ⅲ類・内外面黒色処理
33	112	表土・撹乱	土器	瓦器質 火鉢	—	—	[9.7]	a:輪積み・胴部上位横位沈線帯の間に13弁の菊花文・その下部に連珠貼付け文・下位にも連珠貼付け文と沈線が遺存しており沈線下位に菊花文が捺されていたと思われる・内面横位のナデ b:微砂・小石粒 軟質 c:灰色 e:胴部片 f:ⅣA類・内外面黒色処理
33	113	表土・撹乱	土器	瓦器質 火鉢	—	—	[2.1]	a:輪積み b:微砂・白色粒・小石粒 c:灰色 e:底部片 f:Ⅳ類か・脚部貼付けのための刻み痕が底部に遺存していたため拓影を添付している・内外面黒色処理
33	114	表土・撹乱	土器	瓦器質 火鉢	—	—	[5.2]	a:輪積み・内外面横位のナデ b:微砂・雲母 c:黒・表面灰黒色 e:口縁部片 f:外面被熱を受け器肌剥離
33	115	表土・撹乱	土器	瓦器質 香炉か	—	—	[4.5]	a:輪積み・内外面横位のミガキ・口唇部輪花型を呈する b:微砂 軟質 c:灰白色 e:口縁部片 f:内外面黒色処理
33	116	表土・撹乱	土器	土器質 火鉢	—	—	[5.0]	a:輪積み・口縁外反し丸みを帯びる・外面口縁下は横位のナデ・下位は縦位のハケ目・内面横位のナデ b:微砂・雲母・白色粒・海綿骨針 軟質 c:灰黒色・外面橙色を呈する e:口縁部片 f:ⅠB類
34	117	表土・撹乱	土製品	瓦 軒丸瓦	—	—	—	外区幅-1.6 瓦当文様-内縁の珠文のみ遺存 a:小片のため整形痕不明 b:白色粒・黒色粒・雲母 良土 c:橙色 e:小片
34	118	表土・撹乱	土製品	瓦 軒丸瓦	—	—	—	瓦当径-[12.36] 外区幅-2.7～2.9 内区径-6.7 筒部幅-11.0 瓦当文様-内区に巴文(巴頭部はやや細く尾を長く出している)・内縁は雑な鋸歯文 a:男瓦部凸面-縦位のヘラ整形 男瓦部凹面-離れ砂付着・縦位、横位不規則なナデ 瓦当裏面-ナデ整形 b:白色粒・黒色粒・雲母・小石粒 やや粗土 c:黄橙色 e:小片 f:Ⅲ期か鎌倉後期
34	119	表土・撹乱	土製品	瓦 軒平瓦	—	—	—	女瓦部幅-1.8 a:女瓦部凹面-無文 女瓦部凸面-無文 薄いクスベ風か 顎部-瓦当貼付け痕 b:白色粒・黒色粒 良土 c:灰色 e:小片
34	120	表土・撹乱	土製品	瓦 軒平瓦	—	—	—	瓦当部幅-4.2 上外区幅-1.2 下外区幅-0.8 内区幅-2.2 額面幅-2.1 瓦当文様-均整唐草文 a:女瓦部凹面-無文 女瓦部凸面-破片のため整形痕跡不明 顎部-瓦当貼付け b:白色粒・黒色粒・小石粒 やや粗土 c:灰色 e:小片 f:Ⅲ期か鎌倉後期

単位 (cm)

図版番号	枝番	出土層位 出土遺構	種別 産地	器種	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
					単位:cm/復元値[ ]/残存値( )			a:成形・調整 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:残存率 f:備考 g:重量
34	121	表土・撹乱	土製品	瓦 軒平瓦	—	—	—	瓦当部幅-4.4 上外区幅-1.2 下外区幅-0.8 内区幅-2.4 女瓦部厚-1.7 額面幅-1.8 瓦当文様-均整唐草文 a:女瓦部凹面-無文 女瓦部凸面-破片のため整形痕橙不明 顎部-瓦当貼付け b:白色粒・黒色粒・小石粒 やや粗土 c:黄灰色 e:小片 f:Ⅲ期鎌倉後期
34	122	表土・撹乱	土製品	瓦 丸瓦	[6.9]	[5.7]	3.10	a:玉縁部凸面-無文 玉縁部凹面-布目痕と布の引き上げ痕が残る b:白色粒・黒色粒・雲母 良土 硬質 c:灰色 e:小片 f:C類
34	123	表土・撹乱	土製品	瓦 丸瓦	[12.6]	[9.5]	3.10	a:筒部凸面-布目痕をナデ消している 筒部凹面-布目痕 b:白色粒・黒色粒・小石粒 やや粗土 c:灰黒色 e:小片 f:B類
34	124	表土・撹乱	土製品	瓦 丸瓦	[9.2]	[8.9]	2.70	a:玉縁部凸面-無文 玉縁部凹面-布目痕 筒部側面-側縁の面取り幅が広い 筒部端面-側面の面取り幅が広い b:白色粒・黒色粒・小石粒・雲母 良土 c:灰色 e:小片 f:B類
34	125	表土・撹乱	土製品	瓦 丸瓦	[7.5]	[7.6]	1.90	a:筒部凸面-無文・横位のナデ 筒部凹面-布目痕・布の絞り痕有り 筒部側面-側縁の面取り幅が広い 筒部端面-側面だけの面取り 1ヶ所穿孔あり b:白色粒・黒色粒 良土 硬質 c:灰色 e:小片 f:C類
34	126	表土・撹乱	土製品	瓦 丸瓦	[8.4]	[9.5]	2.10	a:筒部凸面-無文 筒部凹面-横位のナデ 筒部側面-側縁の面取り幅が狭い b:白色粒・黒色粒・雲母・小石粒 やや粗土 c:灰色 e:小片
34	127	表土・撹乱	土製品	瓦 丸瓦	[11.1]	[11.5]	2.60	a:玉縁部凸面-縦位のヘラナデ 玉縁部凹面-粗い布目痕 玉縁部端面-側面だけの面取り b:白色粒・黒色粒 良土 c:灰色 e:小片
35	128	表土・撹乱	土製品	瓦 丸瓦	[15.6]	10.7[]	2.30	a:筒部凸面-縄目痕をナデで整形 筒部凹面-布目痕 筒部側面-側面の面取り幅が広い b:白色粒・黒色粒・小石粒・雲母 良土 c:黄灰色 e:小片 f:A類
35	129	表土・撹乱	土製品	瓦 丸瓦	[12.6]	[10.8]	2.90	a:筒部凸面-無文・縦位のヘラナデ 筒部凹面-布目痕 筒部側面-側縁の面取り幅が広い b:白色粒・黒色粒・雲母・小石粒 やや粗土 c:灰色 e:小片 f:C類
35	130	表土・撹乱	土製品	瓦 平瓦	[6.3]	[7.1]	2.50	a:凹面-無文 凸面-縄目痕 側面-ヘラ削りの面取りの後側縁端面をナデで丸く仕上げている b:白色粒・黒色粒 硬質 c:灰色 e:小片 f:A類
35	131	表土・撹乱	土製品	瓦 平瓦	[10.3]	[9.1]	2.20	a:凹面-離れ砂付着・糸切痕 凸面-細かな縄目痕 狭端面-側面だけの面取り 側面-側面ヘラ削りの面取りの後側端面をナデで丸く仕上げている b:白色粒・黒色粒・小石粒 やや粗土 硬質 c:灰黒色 e:小片 f:A類
35	132	表土・撹乱	土製品	瓦 平瓦	[10.6]	[8.3]	2.00	a:凹面-離れ砂付着・布目痕をナデている 凸面-縄目痕をナデ消している箇所あり 狭端面-側面だけの面取り 側面-側面だけ1面の面取り b:白色粒・黒色粒・小石粒 やや粗土 硬質 c:灰色 e:小片 f:A類
35	133	表土・撹乱	土製品	瓦 平瓦	[13.7]	[12.7]	2.90	a:凹面-僅かに布目痕が残るが全体にナデ消している 凸面-斜格子文中に花押の叩き目 b:白色粒・黒色粒・小石粒 やや粗土 c:灰色 e:小片 f:C類
35	134	表土・撹乱	土製品	瓦 平瓦	[12.7]	[8.2]	3.40	a:凹面-僅かに布目痕が残るが全体にナデ消している 凸面-離れ砂付着・斜格子の叩き目痕 側面-側面ヘラ削りの面取りの後側端面をナデで丸く仕上げている b:白色粒・黒色粒・小石粒 やや粗土 c:灰色 e:小片 f:C類か
35	135	表土・撹乱	土製品	瓦 平瓦	[9.0]	[8.4]	1.60	a:凹面-細かい離れ砂付着 凸面-離れ砂付着・無文 側面-側面ヘラ削りの面取りの後側端面をナデで丸く仕上げている b:白色粒・黒色粒 良土 軟質 c:橙色 e:小片 f:C類
36	136	表土・撹乱	土製品	瓦 平瓦	[7.3]	[10.0]	2.10	a:凹面-離れ砂付着・縦位のナデ 凸面-離れ砂付着・無文 側面-側面ヘラ削りの面取りの後側端面をナデで丸く仕上げている 広端面-側面だけの面取り b:白色粒・黒色粒・小石粒 やや粗土 軟質 c:灰黄色 e:小片 f:D類
36	137	表土・撹乱	土製品	瓦 平瓦	[11.7]	[7.7]	2.20	a:凹面-縦位のナデ・破片のため一部しか遺存していないが寺名あるいは人名のスタンプ有り 凸面-叩き板で文様を型押ししている・文様種不明 b:白色粒・黒色粒・小石粒 やや粗土 c:灰白色 e:小片 f:D類・鎌倉中期
36	138	撹乱	土製品	瓦 平瓦	[8.9]	[8.0]	2.10	a:凹面-離れ砂付着・縦位のナデ。狭端面近くは横位のナデ 凸面-離れ砂付着・無文 側面-側面の他に側縁をヘラ削りで2面の面取り 狭端面-側面面取り・側縁を広く面取りしている b:白色粒・黒色粒・小石粒 粗土 軟質 c:灰白色 e:小片 f:E類
36	139	表土・撹乱	土製品	瓦 平瓦	[8.8]	[8.9]	2.40	a:凹面-無文 凸面-縄目痕 狭端面-部分的に遺存 側面-側面だけ1面の面取り 凹面と側面に刃物痕のような傷が残る b:白色粒・黒色粒・小石粒・雲母 軟質 c:灰色 e:小片 f:A類
36	140	表土・撹乱	土製品	瓦 平瓦	[11.5]	[10.9]	2.00	a:凹面-無文 凸面-無文 側面-側面ヘラ削り面取り後側縁端をナデで丸く仕上げている 狭端面-側面へらけずりのあと側縁を狭く面取り b:白色粒・黒色粒・小石粒・雲母 やや粗土 c:灰色 e:小片
36	141	表土・撹乱	土製品	瓦 平瓦	[9.3]	[7.4]	1.70	a:凹面-無文 凸面-無文 側面-側面の他に側縁をヘラ削りで2面の面取り b:白色粒・黒色粒・雲母 良土 c:灰色 e:小片
36	142	表土・撹乱	土製品	瓦 平瓦	[12.8]	[14.4]	3.20	a:凹面-無文 凸面-無文 側面-側面だけの1面の面取り 広端面-側面だけの面取り b:白色粒・黒色粒・小石粒 やや粗土 c:灰色 e:小片
37	143	表土・撹乱	土製品	瓦 平瓦	[12.2]	[15.8]	2.20	a:凹面-無文 凸面-無文・横位のナデ 側面-側面だけ2面の面取り 狭端面-側面だけの面取り b:白色粒・黒色粒・小石粒・雲母 やや粗土 c:灰色 e:小
37	144	表土・撹乱	土製品	瓦 平瓦	[11.5]	[14.5]	1.90	a:凹面-無文 凸面-無文・横位のナデ 側面-側面だけ1面の面取り 狭端面-側面だけの面取り b:白色粒・黒色粒・小石粒・雲母 やや粗土 c:灰色 e:小片
37	145	表土・撹乱	土製品	瓦 平瓦	[14.7]	[9.0]	2.00	a:凹面-無文 凸面-無文・横位のナデ 側面-側面の他に側縁をヘラ削りで2面の面取り・面取り幅は狭い 狭端面-側縁を狭く面取り b:白色粒・黒色粒・小石粒 やや粗土 c:灰色 e:小片
37	146	表土・撹乱	土製品	瓦 平瓦	[7.2]	[7.3]	1.80	a:凹面-無文 凸面-無文 側面-側面の他に側縁をヘラ削りで2面の面取り 狭端面-側面だけの面取り b:白色粒・黒色粒・雲母 良土 c:灰黒色 e:小片 f:桟瓦
37	147	表土・撹乱	土製品	瓦 平瓦	[12.6]	[9.7]	2.00	a:凹面-無文 凸面-無文 側面-側面ヘラ削りの面取りの後側端面をナデで丸く仕上げている 1ヶ所穿孔あり b:白色粒・黒色粒・雲母 良土 軟質 c:灰色 e:小片 f:江戸期・桟瓦
38	148	表土・撹乱	土製品	瓦 役瓦	[9.3]	[6.8]	3.10	a:凸面-無文 凹面-無文 b:白色粒・雲母・黒色粒 良土 c:灰色 e:小片
38	149	表土・撹乱	土製品	瓦 役瓦	[14.6]	[12.0]	2.30	a:凸面-無文 凹面-無文 文様貼付けのためか円形状になった刻み有り 1ヶ所穿孔あり 鬼瓦か b:白色粒・雲母・黒色粒 良土 c:灰黒色 e:小片 f:?類
38	150	表土・撹乱	土製品	瓦 役瓦	[7.0]	[7.7]	1.80	a:凸面-無文 凹面-指頭によるナデ 側面-指頭によって丸くナデられている b:白色粒・雲母・黒色粒 良土 c:灰色 e:小片
38	151	表土・撹乱	土製品	瓦 役瓦	*	*	*	女瓦部幅-2.2 a:女瓦部凹面-瓦当を鍔貼付けした痕跡か、細かい刻みが残る b:白色粒・黒色粒・ 良土 c:灰色 e:小片
38	152	表土・撹乱	土製品	瓦 役瓦	[7.9]	[7.0]	2.00	a:凸面-無文 凹面-無文 端面-側面面取りの後凹面側を緩く丸く仕上げている 1ヶ所穿孔あり b:白色粒・黒色粒 良土 c:灰色 e:小片
38	153	表土・撹乱	土製品	瓦 役瓦	[12.0]	[8.1]	2.10	a:凸面-無文・縦位のナデ 凹面-無文・縦位のナデ 端面-側面だけ1面の面取り 両側面を意図的に割っている、のし瓦として使用か b:白色粒・雲母・黒色粒 良土 c:灰黒色 e:小片
38	154	表土・撹乱	土製品	瓦 鳥衾瓦	[11.7]	[6.9]	1.90	a:凸面-無文 凹面-無文 側面-側面面取りの後、角をナデて丸く仕上げている b:白色粒・黒色粒 良土 c:灰色 e:小片

単位(cm)

出土遺物観察表

図版番号	挂番	出土層位 出土遺構	種別 産地	器種	口径/長さ 単位:cm/復元値[ ]/残存値( )	底径/幅	器高/厚さ	観察内容 a 成形・調整 b 胎土・素地・材質 c 色調 d 釉調 e 残存率 f 備考 g 重量
38	155	表土・撹乱	土製品	瓦 鳥舎瓦	[7.8]	[104]	1.60	a:凸面-無文 凹面-無文 端面-側縁を狭く面取り b:白色粒・黒色粒・小石粒やや混土 c:灰黒色 e:小片
38	156	表土・撹乱	土製品	瓦 鳥舎瓦	[4.8]	[6.6]	2.60	a:凸面-無文 凹面-無文 端面-側面面取りの後、凹面側を緩く丸く仕上げている b:白色粒・黒色粒 良土 c:灰色 e:小片
39	157	表土・撹乱	土製品	瓦 鳥舎瓦	[8.3]	[8.1]	1.80	a:凸面-無文 凹面-無文 端面-側縁を丸く仕上げている b:白色粒・黒色粒・小石粒 c:灰黒色 e:小片
39	158	表土・撹乱	土製品	瓦 鳥舎瓦	[9.1]	[6.5]	2.20	a:凸面-無文 凹面-無文 側面-側面面取りの後、角をナデで丸く仕上げている b:白色粒・黒色粒 良土 c:灰黒色 e:小片
39	159	表土・撹乱	土器	瓦質 用途不明	[4.2]	外径 3.05	孔径 0.4	b:微砂・白色粒 軟質 c:灰色 e:脚部片 f:外面黒色処理・縦位のミガキ・中央に孔が開く
39	160	表土・撹乱	金属製品	銅製品 銭	外径2.4・内孔0.7×0.7・厚0.13			e:完形 f:〇元通寶 篆書 g:3.2g
39	161	表土・撹乱	金属製品	銅製品 銭	外径2.4・内孔0.55×0.55・厚0.15			e:完形 f:新寛永銭 一文銭 文銭 背文「文」 1688年 寛文八年 g:2.5g
39	162	表土・撹乱	金属製品	鉄製品 釘	[6.6]	(0.30)	(0.30)	a:鍛造 f:断面方形・付着した鏽を削除した状態のため器肉が復せてしまっている c:赤褐色 e:小片 f:赤間産・墨堂が僅かに胸辺まで残存・横縁の一部及び頭背の一部残存
39	163	表土・撹乱	石製品	硯	[11.8]	[5.4]	[2.4]	c:黒色 e:小片 f:硯背に脚があった痕跡あり・硯面使用痕・硯背、くぼみに薄くのみ痕・横縁上面は擦れて灰色に変色
39	164	表土・撹乱	石製品	硯	[7.5]	[6.2]	0.9～[2.4]	c:淡赤色 e:小片 f:鳴滝産・硯面1面遺存・側面切り取り痕(生産地加工痕か)
39	165	表土・撹乱	石製品	砥石 仕上砥	[4.9]	[2.3]	[1.1]	c:灰色 e:小片 f:天草産・砥面2面遺存・砥面黒色に変色
39	166	表土・撹乱	石製品	砥石 中砥	[4.4]	[3.6]	[4.6]	c:青灰色 e:小片 f:伊予産・砥面1面遺存・側面3面にのみによる加工痕が遺存
39	167	表土・撹乱	石製品	砥石 中砥	[6.6]	[3.7]	[2.9]	c:灰緑色 e:小片 f:上野産・砥面1面遺存・手持ちの砥石か
39	168	表土・撹乱	石製品	砥石 中砥	[9.6]	(2.6～3.0)	(1.4～3.5)	a:石種不明 f:自然礫の端部に打痕有り
39	169	表土・撹乱	石器	用途不明	7.50	6.00	3.30	a:石種不明 f:自然礫の端部に打痕有り
39	170	表土・撹乱	ガラス 製品	瓶	5.50	2.80	0.25～0.5	f:体部型は八角形を呈する 底は上げ底を呈する
39	171	表土・撹乱	ガラス 製品	瓶	9.95	3.40	0.3～0.7	f:明治乳業 1940年以降 下部に60mlの刻印あり 商品名は「バイゲンC」か 底は上げ底を呈する

単位 (cm)

出土遺物破片数表

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V
1				第1面			第2面			第3面			第4面			第5面		確認調査	試掘坑	表土	合計	%
2				面上	遺構	構成土	面上	遺構	構成土	面上	遺構	構成土	面上	遺構	構成土	遺構	構成土					
3	かわらけ	手づくね	大	27	110	26	0	376	154	7	373	780	0	255	1073	226	0	11	0	59	3477	18.81
4			小	0	20	3	0	36	32	4	66	61	0	29	120	35	0	2	0	8	416	2.24
5		白かわらけ		0	2	0	0	2	2	0	3	2	0	7	4	2	0	0	0	0	24	0.13
6		糸切り	大	76	276	80	1715	5836	926	15	180	570	2	112	160	161	0	3	6	136	10254	54.88
7			小	25	27	17	27	962	162	1	18	133	1	17	44	64	0	0	4	47	1549	8.29
8		内折		0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.01
9	陶器陶磁器	青磁	碗	0	0	0	1	27	5	0	0	9	0	1	3	1	0	3	0	17	67	0.36
10			皿	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0.01
11			壺	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.01
12			鉢平	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	3	6	0.03
13			不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	1	4	0.02
14		白磁	口元碗・皿	0	2	0	0	2	1	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	2	11	0.06
15			碗・皿	1	1	0	1	2	0	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	1	10	0.05
16			皿	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	4	0.02
17			不明	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.01
18		青白磁	梅瓶	0	0	0	0	5	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	8	0.04
19			水注	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.01
20			香炉	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.01
21			合子	0	0	1	0	2	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	1	7	0.04
22			碗・皿	0	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0.02
23		在村窯系青磁	壺	1	0	0	0	0	1	0	1	4	0	2	0	0	0	0	0	0	9	0.05
24		褐釉	壺	2	2	0	0	11	0	0	0	3	0	0	1	0	0	0	0	2	21	0.11
25			茶入れ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.01
26	国産陶器	瀬戸	碗	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3	0.02
27			折縁皿	0	5	1	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	31	0.17
28			卸皿	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0.02
29			入子	0	1	0	1	3	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	1	9	0.05
30			浅	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	5	0.03
31			壺	0	4	0	0	21	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	7	34	0.18
32			水注	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0.01
33			香炉	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.01
34			擂鉢	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	4	0.02
35			不明	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.01
36		常滑	壺	1	6	0	0	9	3	0	0	2	0	3	6	0	0	0	0	8	40	0.21
37			甕	21	59	13	13	890	40	1	9	81	0	39	37	4	0	6	0	59	1272	6.81
38			片口鉢Ⅰ類	0	2	0	3	26	3		1	5	0	5	2	6	0	0	0	6	60	0.32
39			片口鉢Ⅱ類	0	7	0	0	62	4		1	5	0	1	1	0	0	0	0	7	88	0.47
40		山茶碗	山茶碗	1	0	0	0	3	0	0	0	1	0	1	2	2	0	0	0	0	10	0.05
41		渥美	壺	0	1	0	0	11	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	14	0.07
42			甕	0	0	0	0	11	0	0	0	2	0	0	1	3	0	0	0	1	24	0.13
43			片口鉢	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.01
44		擂鉢	擂鉢	3	9	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	97	116	0.62
45		魚住	鉢	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0.02
46		不明		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	0.01
47	土器・土製品	南伊勢系	土鍋	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0.01
48		瓦器質	火鉢	1	6	0	2	32	1	1	3	2	0	1	0	0	0	0	0	6	55	0.29
49			碗・皿	0	1	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	5	0.03
50			鍋か	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0.02
51		土師質	火鉢	0	1	0	0	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	20	0.11
52		土器	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.01
53		瓦	平瓦	1	117	1	0	136	4	0	1	16	0	6	8	1	0	1	0	117	409	2.19
54			丸瓦	0	32	0	1	36	1	0	1	3	0	2	5	0	0	0	0	32	113	0.60
55			軒丸瓦	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0.02
56			軒平瓦	0	3	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	9	0.05
57			役瓦	0	6	0	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	23	0.12
58			鳥衾	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0.01
59			桟瓦	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4	0.02
60	金属製品	銭貨品	釘	4	4	2	4	11	6	0	1	9	0	3	1	2	0	0	0	4	51	0.27
61			不明	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.01
62		銅製品	鏡	0	2	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	6	0.04
63	石製品	滑石	鍋	0	2	0	0	3	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	2	10	0.05
64			温石	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.01
65			転用不明品	0	0	0	2	1	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0.04
66		硯		1	2	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	8	0.04
67		砥石		0	8	0	0	8	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	6	23	0.12
68		碁石		0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.01
69		泥岩	加工品	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4	0.02
70		磨石		0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.01
71		泥塔		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.01
72		不明		0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	0	1	6	0.03
73	木製品	木製品		0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	17	0	0	12	0	0	0	30	0.16
74	自然遺物	獣骨・魚骨類		0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3	0.02
75		人骨		0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.01
76	中世以前	土師器	壺蓋類	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0.02
77		須恵器	壺	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.01
78	縄文期	土器	壺	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0.02
79	近世	陶器		1	10	0	0	37	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	58	0.31
80		磁器		0	6	0	0	58	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	68	0.36
81		染付		0	24	0	0	33	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	24	82	0.44
82		土器		0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4	0.02
83		不明		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4	0.02
84	近代	陶器	壺	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0.01
85			鉢	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.01
86		ガラス製品	瓶	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	5	0.03
87			皿具	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0.01
88			不明	0	1	0	0	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	27	0.14
89	合計			170	796	144	1771	8755	1354	30	669	1714	3	503	1495	502	12	32	10	724	18684	
90	%			0.91	4.26	0.77	9.48	46.86	7.25	0.16	3.58	9.17	0.02	2.69	8.00	2.69	0.06	0.17	0.05	3.87	100.00	100.00

1. 調査前全景（南から）

2. 調査区周辺（西から）

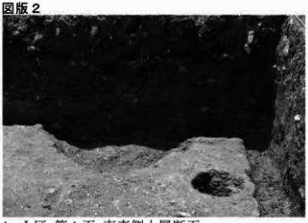
4. Ⅰ区 第1・第2面全景（南から）

3. 調査区周辺（南から）

5. Ⅰ区 第1・第2面全景（西から）

6. Ⅰ区 第2面 遺構1（西から）

図版２



1. Ⅰ区 第１面 南東側土層断面

2. Ⅰ区 第１・第２面 試掘坑・トレンチ

3. Ⅰ区 第３面 遺構出土状況 遺構９（北から）

4. Ⅰ区 第３面 遺構出土状況（遺構９・11 ～ 13）

5. Ⅰ区 第３面 かわらけ出土状況

6. Ⅰ区 第３面全景

7. Ⅰ区 第３面 遺構 109

1. Ⅰ区 第３面 遺構 109

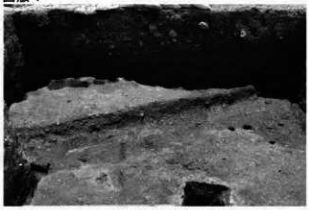
2. Ⅰ区 第４面 遺構 30

3. Ⅰ区 第４面 遺構 30 柄杓出土状況

4. Ⅰ区 第４面 遺構 30 検出状況

5. Ⅰ区 第４面 南側遺構検出状況

図版4



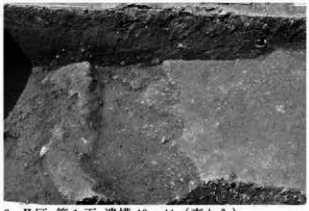
1. Ⅰ区 第4面 南側遺構検出状況

2. Ⅰ区 集中豪雨による調査区崩落状況

3. Ⅰ区 崩落よる埋戻し

4. Ⅱ区 第1面全景（北から）

5. Ⅱ区 第1面全景（東から）



6. Ⅱ区 第1面 遺構40・41（東から）

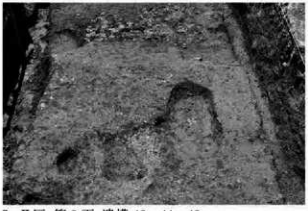
7. Ⅱ区 第1面全景（南から）

1. Ⅱ区 第2面 遺構45（西から）

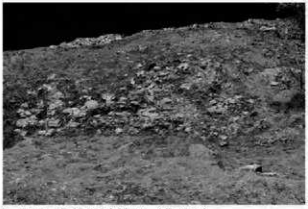
2. Ⅱ区 第2面上層全景（北から）

3. Ⅱ区 第2面上層全景（南から）

4. Ⅱ区 第2面 遺構39（北から）

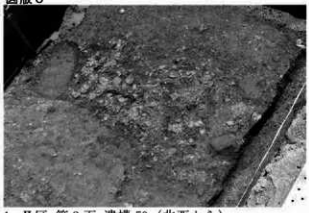


5. Ⅱ区 第2面 遺構43・44・48



6. Ⅱ区 第2面 遺構50（北から）

図版6



1. Ⅱ区 第2面 遺構50（北西から）

2. Ⅱ区 第3面全景（東から）

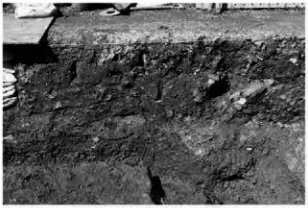
3. Ⅱ区 第3面全景（南から）

4. Ⅱ区 第3面（西南から）

5. Ⅱ区 第4面全景（西から）

6. Ⅱ区 第4面 遺構62

7. Ⅱ区 西壁セクション 南側



1. Ⅱ区 西壁セクション 北側

2. Ⅱ区 第 1 面 遺構 39（井戸）北壁セクション

3. Ⅱ区 第 4 面全景（南から）

4. Ⅱ区 第 4 面 遺構 58・59

5. Ⅱ区 第 4 面全景（北から）

6. Ⅱ区 第 4 面南側（北から）

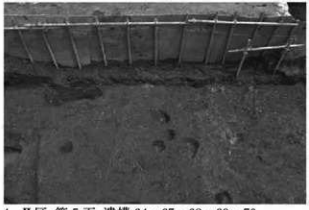
7. Ⅱ区 第 5 面全景（東から）

図版８

1. Ⅱ区 第５面全景（南から）

2. Ⅱ区 第５面 遺構65（南から）

3. Ⅱ区 第５面 遺構65（西から）



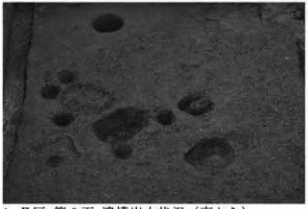
4. Ⅱ区 第５面 遺構64・67・68・69・70

5. Ⅱ区 第５面 遺構64（西から）

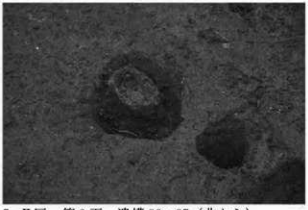
1. Ⅱ区 第６面全景（北から）

2. Ⅱ区 第６面 遺構 39

3. Ⅱ区 第６面全景（南から）



4. Ⅱ区 第６面 遺構出土状況（南から）



5. Ⅱ区　第６面　遺構 86・87（北から）

図版 10

1. Ⅱ区 第 1 面 遺構 39（西から）

2. Ⅱ区 第 1 面 遺構 39（北から）

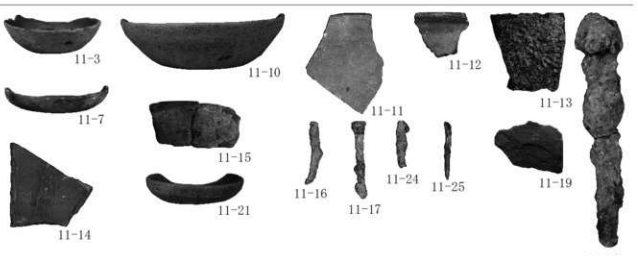
3. Ⅱ区 第 1 面 遺構 39（北から）

4. Ⅱ区 第 1 面 遺構 39（南から）

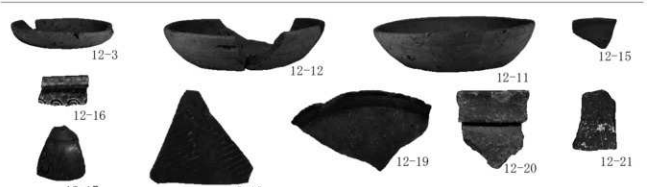
5. Ⅱ区 第 1 面 遺構 39（東から）

第 1 面 遺構 39

第 1 面 遺構 41



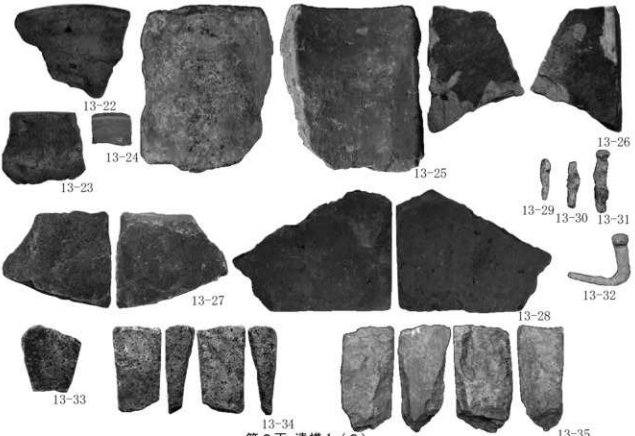
第 1 面 面上・構成土



第 2 面 遺構 1（1）

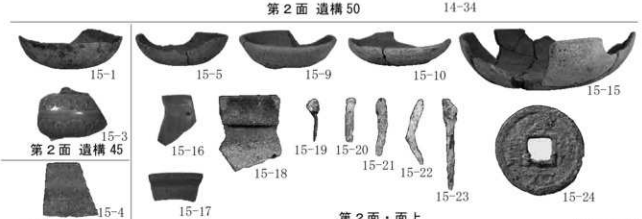
縮尺：約 1/3

図版 12



第２面 遺構１（２）

第２面 遺構 50

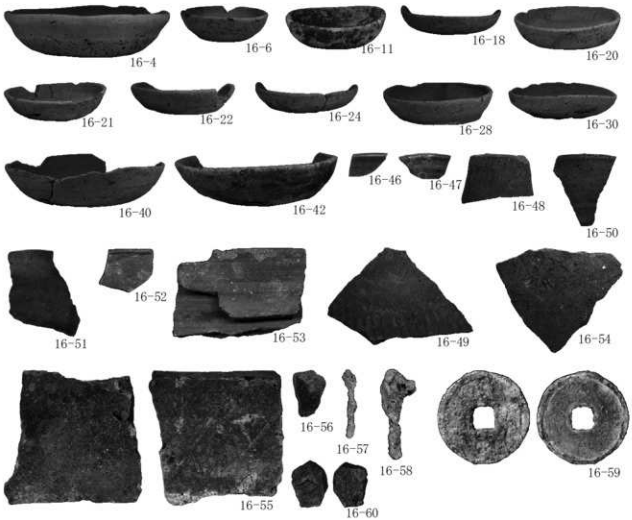


第２面 遺構 45

第２面 遺構 48

第２面・面上

縮尺：約 1/3

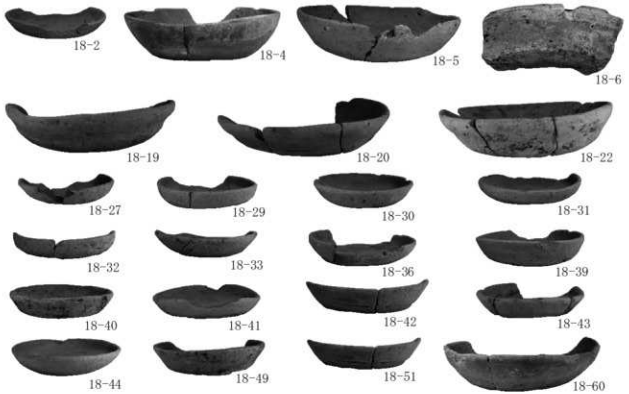


第２面構成土

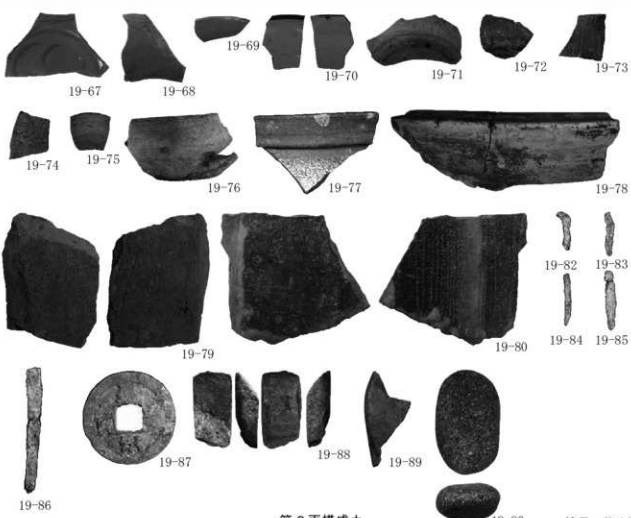
第３面 遺構 109

縮尺：約 1/3

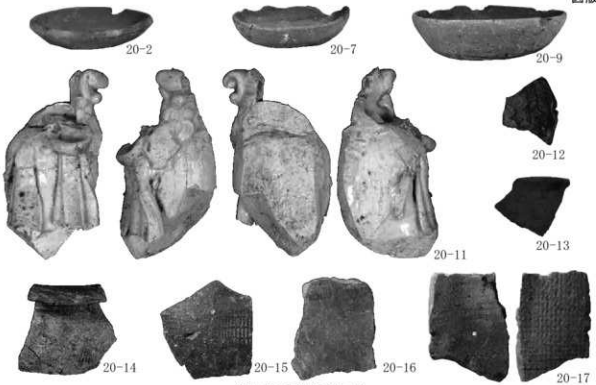
図版 14



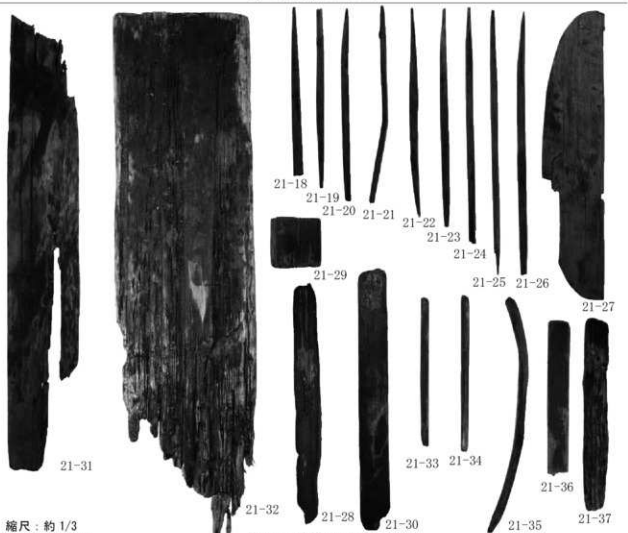
第 3 面面上



第 3 面構成土　　縮尺：約 1/3



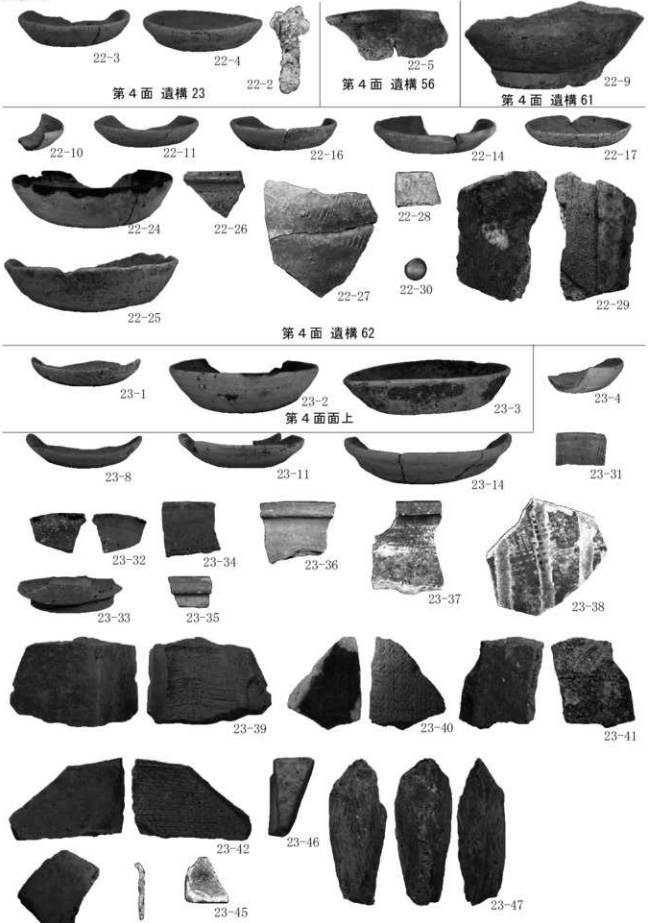
第４面 遺構 30（１）

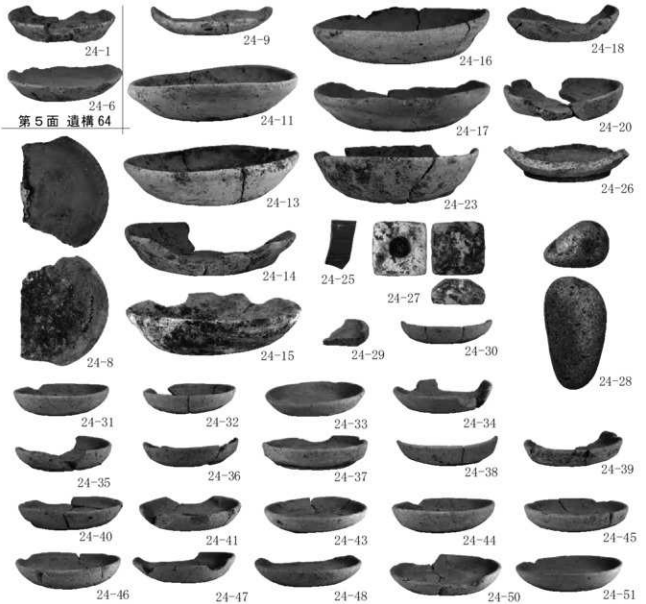


縮尺：約 1/3
(20-11 のみ約 2/3)

第４面 遺構 30（２）

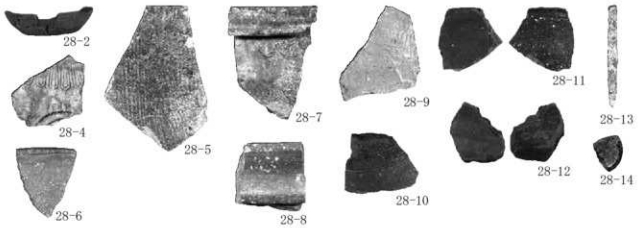
図版 16


22-3
22-4
22-2
第 4 面 遺構 23
22-5
第 4 面 遺構 56
22-9
第 4 面 遺構 61
22-10
22-11
22-16
22-14
22-17
22-24
22-26
22-28
22-27
22-30
22-29
22-25
第 4 面 遺構 62
23-1
23-2
第 4 面面上
23-3
23-4
23-8
23-11
23-14
23-31
23-32
23-34
23-36
23-37
23-38
23-33
23-35
23-39
23-40
23-41
23-42
23-46
23-47
23-43
23-44
23-45
第 4 面構成土
縮尺：約 1/3

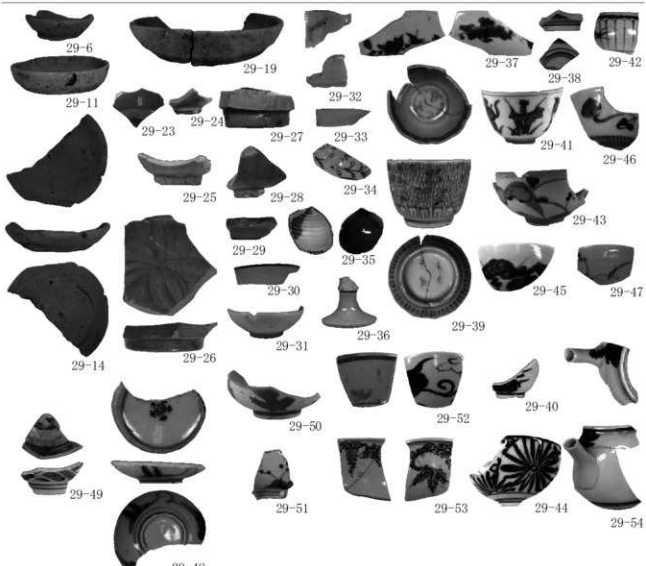

24-1
24-9
24-16
24-18
24-6
24-11
24-17
24-20
第５面 遺構 64
24-13
24-23
24-26
24-14
24-25
24-27
24-8
24-15
24-29
24-30
24-28
24-31
24-32
24-33
24-34
24-35
24-36
24-37
24-38
24-39
24-40
24-41
24-43
24-44
24-45
24-46
24-47
24-48
24-50
24-51
25-54
25-57
25-59
25-58
25-61
第５面 遺構 65
25-67
25-68
25-66
第５面構成土
27-1
27-2
確認調査

縮尺：約 1/3

図版 18

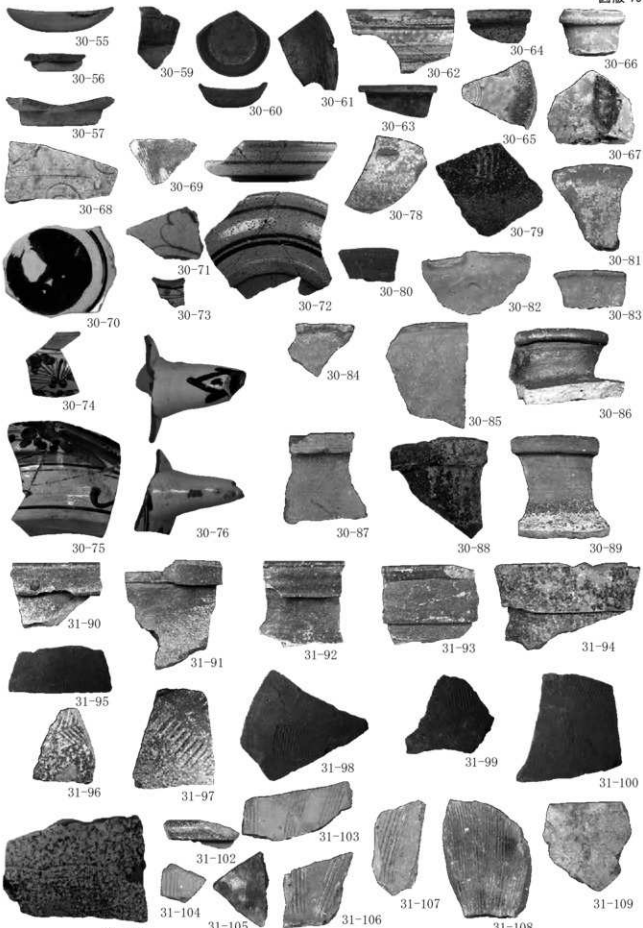


表土～第 1 面



表土・撹乱（1）

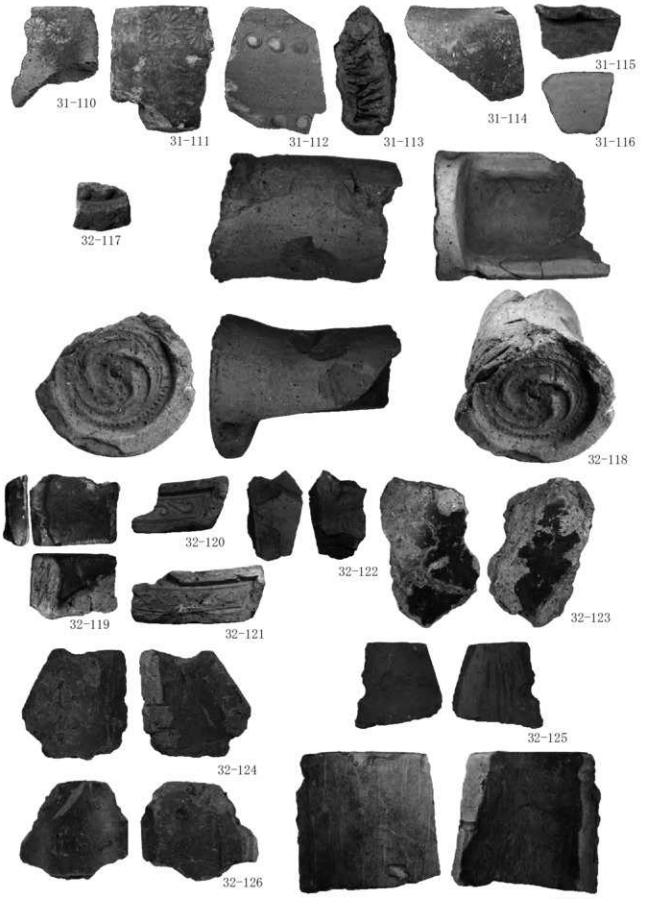
縮尺：約 1/3


30-55
30-56
30-57
30-59
30-60
30-61
30-62
30-63
30-64
30-65
30-66
30-67
30-68
30-69
30-70
30-71
30-72
30-73
30-78
30-79
30-80
30-81
30-82
30-83
30-74
30-84
30-85
30-86
30-75
30-76
30-87
30-88
30-89
31-90
31-91
31-92
31-93
31-94
31-95
31-96
31-97
31-98
31-99
31-100
31-101
31-102
31-103
31-104
31-105
31-106
31-107
31-108
31-109

表土・撹乱（2）

縮尺：約 1/3

図版 20



表土・攪乱（3）　　縮尺：約 1/3

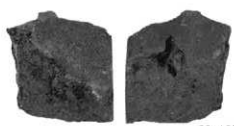
33-128

33-133

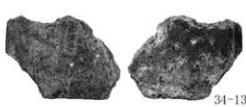
33-129

33-134

33-130


33-135

33-131


34-136

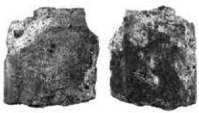
33-132

34-137

表土・攪乱（4）

縮尺：約 1/3

図版 22



34-138

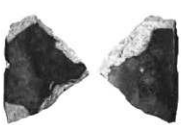
35-143

34-139

35-144

34-140

35-145



34-141

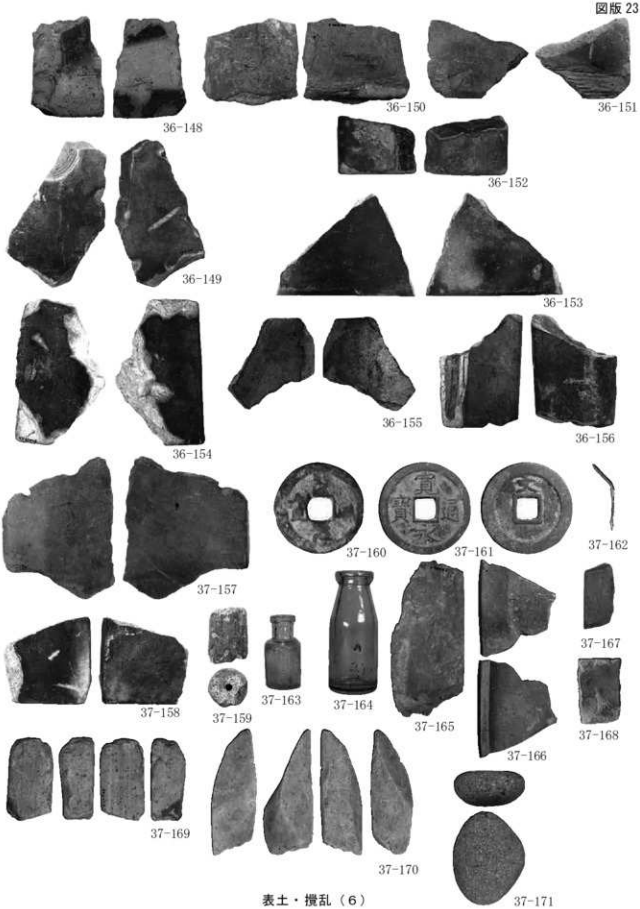
35-146

34-142

35-147

表土・撹乱（５）

縮尺：約 1/3


36-148
36-150
36-151
36-152
36-149
36-153
36-154
36-155
36-156
37-160
37-161
37-162
37-157
37-167
37-158
37-159
37-163
37-164
37-165
37-166
37-168
37-169
37-170
37-171

表土・攪乱（6）

縮尺：約 1/3

甘縄神社遺跡群（No.177）

長谷一丁目236番1地点

例　言

1．本編は、鎌倉市長谷一丁目 236 番 1 において実施した、「甘縄神社遺跡群」（鎌倉市 No. 177 遺跡）の発掘調査報告である。

2．発掘調査は令和 3 年 6 月 28 日から同年 10 月 5 日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。調査の対象面積は、56. 39 ㎡である。

3．発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査担当者　　押木弘己
調　査　員　　菅野知子、神田倫子
作　業　員　　加茂俊夫、森野　修、松澤和通、酒井浩司
（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター 文化財班）
調 査 協 力　　株式会社 斉藤建設（重機掘削・埋め戻し）
資料整理・報告書作成　　押木、菅野、神田、吉田桂子

4．本報告の執筆は、第一章を米澤雅美が、第二章～第六章を押木が行った。

5．資料整理および本報告の作成は、鎌倉市文化財課分室で行った。

6．本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は市教育委員会の統一基準に従って「ＡＪ２１０３」とし、出土品への注記などに使用した。

凡　例

1．挿図の縮尺は、遺構・遺物ともに図中に表示している。

2．本書中に記載した国土座標値は、世界測地系（JGD2011- 第Ⅸ系）に基づいている。

3．挿図に示した方位標は座標北（Ｙ軸）で、真北はこれより 0° 09′ 25″ ほど東に振れている。

4．遺構挿図中の水糸高は、海抜値を示す。

5．出土遺物の年代観は以下の文献を参考としたが、 筆者が各所見を理解し切れていない部分もある。

◆かわらけ・遺物全体の様相：宗基秀明　2019「鎌倉出土かわらけの系譜と編年―東国社会の変質と中世の成立（後）：かわらけの編年と中世社会」『鶴見大学紀要　第 56 号　第 4 部　人文・社会・自然科学編』鶴見大学

◆瓦質土器：河野眞知郎　1993「中世鎌倉火鉢考」『考古論叢神奈河　第 2 集』神奈川県考古学会

◆輸入陶磁器：『大宰府条坊跡ＸＶ―陶磁器分類編―』太宰府市教育委員会　2000

◆瀬戸窯製品：藤澤良祐　2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

◆常滑・渥美窯製品：『愛知県史　別編窯業 3　中世・近世常滑系』愛知県　2012

◆遺物観察表（図 6 下段）のうち、かわらけ胎土の分類記号（Ａ～Ｅ）は以下の内容を示す。

Ａ：粉質　Ｂ：泥質　Ｃ：精良・硬質　Ｄ：泥質・精良　Ｅ：砂質・硬質

これらはいずれも在地産土器であり、基本的に白色針状物質（骨針化石）・泥岩粒・雲母片などの混入物を含むが、 個体ごとに有無・多寡もある。大よそＥ・Ｄ→Ｂ・Ｃ→Ａという順で新しくなり、Ｃは所謂「薄手丸深型」に、Ａは所謂「戦国タイプ」に使用される。

本文目次

第一章　調査に至る経緯・・・116
第二章　遺跡周辺の発掘成果と歴史的環境・・・116
第三章　調査の方法と経過・・・122
第四章　基本土層・・・123
第五章　検出遺構と出土遺物
　第1節　検出遺構・・・125
　第2節　出土遺物・・・128
第六章　調査成果のまとめ・・・147

挿図目次

図1　調査地点の位置（1）・・・117
図2　調査地点の位置（2）・・・118
図3　調査区配置図・・・123
図4　調査区壁土層断面図・・・124
図5　1面全体図・・・125
図6　2面全体図
　・東西柱穴列エレベーション図・・・126
図7　3面全体図・・・127
図8　出土遺物（1）・・・129
図9　出土遺物（2）・・・130
図10　出土遺物（3）・・・131
図11　出土遺物（4）・・・132
図12　出土遺物（5）・・・133
図13　出土遺物（6）・・・134
図14　出土遺物（7）・・・135
図15　出土遺物（8）・・・136
図16　出土遺物（9）・・・137
図17　出土遺物（10）・・・146

表目次

表1　甘縄神社遺跡群（長谷一丁目236番1）
　発掘調査にかかる届出等の文書・・116
表2　周辺の主な調査地点・・・119
表3　出土遺物カウント・計量表・・・138
表4　出土遺物観察表・・・142
表5　出土遺物観察表（補）・・・146

写真図版目次

図版1・・・149
1. 調査前（北東から）
2. Ⅰ区　表土掘削（南東から）
3. Ⅰ区北部　2面全景（東から）
4. Ⅰ区北部　3面全景（東から）
5. Ⅰ区西部　2面全景（北西から）
6. Ⅰ区西部　2面柱穴列（3面時、東から）
7. Ⅰ区西部　2面柱穴礎板（3面時、西から）
8. Ⅰ区西部　3面全景（西から）

図版2・・・150
1. Ⅰ区東部　1面全景（南から）
2. Ⅰ区東部　2面　遺構プラン（北から）
3. Ⅰ区東部　2面全景（東から）
4. Ⅰ区東部　2面柱穴列（北から）
5. Ⅰ区東部　3面全景（北から）
6. Ⅰ区東部　調査区南壁断面（北から）
7. Ⅰ区西部　調査区南壁断面（北から）
8. 同左　測量作業（北西から）

図版3・・・151
1. Ⅱ区　1面全景①（北から）
2. Ⅱ区　1面全景②（北から）
3. Ⅱ区　1面耕作痕（南東から）
4. Ⅱ区　1面溝1（西から）
5. Ⅱ区　2面遺構プラン（北から）
6. Ⅱ区　2面全景（南西から）
7. Ⅱ区　2面南北柱穴列（南から）

図版4・・・152
1. Ⅱ区　3面全景（北から）
2. Ⅱ区　2面柱穴礎板（3面時、南から）
3. Ⅱ区　2面柱穴礎板（3面時、南から）
4. Ⅱ区　2面柱穴礎板（3面時、南から）
5. Ⅱ区　調査区南壁断面（北から）
6. Ⅱ区　調査区西壁断面（南東から）
7. Ⅱ区　埋め戻し（南西から）
8. 調査完了後（南東から）

図版5～12　出土遺物・・・153～160

第一章　調査に至る経緯

令和２年２月、当該地における土木工事について事業者より鎌倉市教育委員会文化財課へ相談があった。その内容は、現地表下250cmに達する柱状改良工事を行う個人専用住宅建設の計画であった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、事前に行なった確認調査の結果、現況地盤面より深さ60cmで中世遺物包含層、80cmで遺構を確認し、更に下層まで遺跡が残存していることが確認された。その結果により、当該工事計画が埋蔵文化財に影響を及ぼすことが避けられないとの判断に至った。

令和２年10月12日付で事業者より文化財保護法第93条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出を受理した。これに対して、令和２年10月27日付で神奈川県教育委員会教育長より発掘調査を実施する旨の指示が通知され、当該地の埋蔵文化財については発掘調査を実施して、記録保存の措置を図ることとなった。事業者は令和３年６月８日付で鎌倉市教育委員会に発掘調査依頼書を提出し、発掘調査は令和３年６月28日に開始し、令和３年10月５日に終了した。

表１　甘縄神社遺跡群（長谷一丁目236番１）発掘調査にかかる届出等の文書

文書種別・内容		文書番号	日付	発信者	受信者	備考
確認調査	依頼		令和２年２月17日	事業者	鎌倉市教育委員会	
	実施		令和２年10月７日・８日			
文化財保護法93条	提出		令和２年10月12日	事業者	神奈川県教育委員会	
	通知	文遺第61086号	令和２年10月27日	神奈川県教育委員会	事業者	
出土品の手続き	発見届		令和３年10月13日	鎌倉市教育委員会	神奈川県警	
	保管証		令和３年10月13日	鎌倉市教育委員会	神奈川県教育委員会	
	認定と帰属	文遺第51026号	令和３年10月28日	神奈川県教育委員会	鎌倉市教育委員会・土地所有者	

＊令和5年8月22日正誤表の内容を追記
(鎌倉市教育委員会)

第二章　遺跡地周辺の発掘成果と歴史的環境

甘縄神社遺跡群（鎌倉市No.177遺跡）は鎌倉市街地の南西部に位置し、由比ガ浜砂丘と北側の丘陵に挟まれた後背湿地に所在する。丘陵の中腹には甘縄神明社が鎮座し、この参道を挟んで東西300ｍ、南北130ｍが遺跡範囲となる。（図１・２）。本遺跡内では、これまでに８地点で発掘調査が実施され、今回の調査地は９地点目となる（表２）。❶では宅地造成にともなう調査が行われ、「伝安達泰盛邸跡」や「諸戸邸内遺跡」といった名称で略報が残されている。旧長谷子ども会館（旧諸戸邸）の南面住宅地が調査対象であったようだが、遺構関係の図面一切が未公表のため、具体的な調査位置は不明である。中世では板塀または溝の護岸壁と目される木組み遺構が検出され、陶磁器・漆器など多様な遺物が出土している中、完形に接合・復元された舶載陶器の褐釉有耳壺は器高が70cmを超える逸品である。竈を付設した竪穴住居も検出されたといい、縄文時代後期～平安時代の遺物も出土している。本地点の西隣に位置する❷では、住宅建設にともなう調査により、掘立柱建物や井戸などの遺構が検出されており、弥生時代～中世の遺物が出土しているという。❸では消防出張所建設に先立つ調査で３枚の中世遺構面が確認され、２・３面では底面に礎板を据えた柱穴多数が検出されている。柱穴はほぼ２ｍ間隔で一定方向に並び、桁行３～４間規模の掘立柱建物20棟が復元されている。遺物様相から２・３面が14世紀初頭～前半、１面が14世紀中頃～後半に時期比定されている。中世最下面は標高4.3～4.4ｍで確認

Japan
Kanagawa Pref.
Kamakura City
鎌倉市
由比ヶ浜
湘南道路
0
0.5
1km
(1/20000)
国土地理院地図を一部改変

図１　調査地点の位置（１）

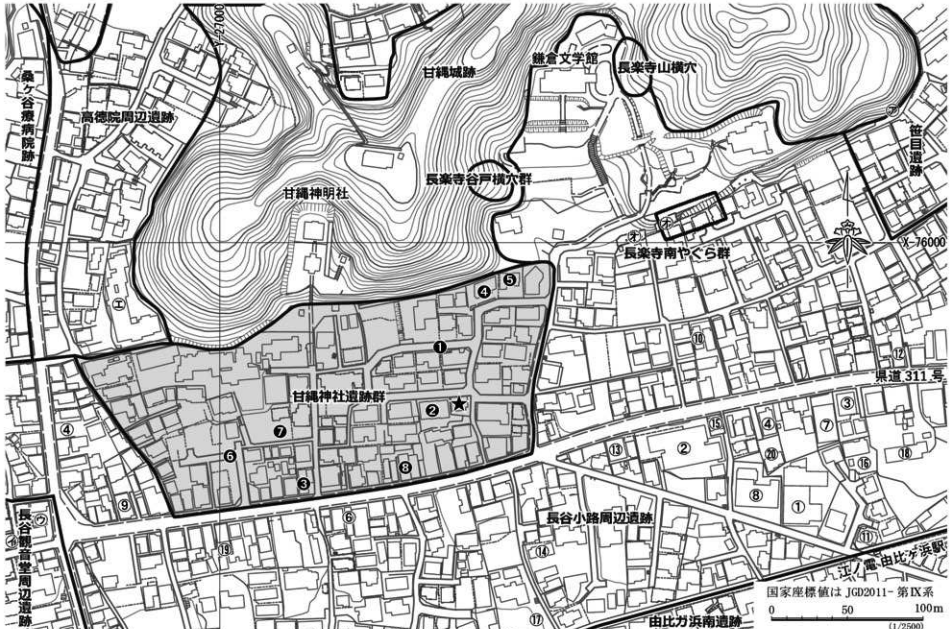

甘縄城跡
鎌倉文学館
長楽寺山横穴
高徳院周辺遺跡
笹目遺跡
甘縄神明社
長楽寺谷戸横穴群
長楽寺南やぐら群
甘縄神社遺跡群
県道 311 号
長谷小路周辺遺跡
由比ガ浜南遺跡
国家座標値は JGD2011- 第Ⅸ系
0 50 100m
(1/2500)

図２　調査地点の位置（２）

表２　周辺の主な調査地点（番号は図２に対応）

No.	地番	調査年度	面積(㎡)	所収文献
甘縄神社遺跡群（No. 177）				
★	**長谷一丁目 236 番 1**	**2021 年度**	**56. 39**	**本報告**
❶	長谷一丁目 227 番	1977 年度		未報告 『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 1』鎌倉市教育委員会　松尾宣方 1983 ・「諸戸邸内遺跡出土の土器概要」『鎌倉考古』No. 22　鎌倉考古学研究所　菊川英政 1992
❷	長谷一丁目 236 番 6、11、12	1991 年度 ～ 1992 年度	180	未報告 『神奈川県埋蔵文化財調査報告 34』神奈川県教育委員会　福田　誠 1992
❸	長谷一丁目 271 番 10	1992 年度	160	『甘縄神社遺跡群発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会　木村美代治・佐藤仁彦 1995
❹	長谷一丁目 227 番 5	2003 年度	36. 2	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 23（第 1 分冊）』鎌倉市教育委員会　馬淵和雄 2007
❺	長谷一丁目 227 番 24	2005 年度 ～ 2006 年度	60	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29（第 1 分冊）』鎌倉市教育委員会　福田　誠 2013
❻	長谷一丁目 271 番 1 外 4 筆	2007 年度 ～ 2008 年度	289	『甘縄神社遺跡群（No. 177）発掘調査報告書』斉藤建設　長澤保弘・田畑衣里 2008
❼	長谷一丁目 262 番 14 外	2010 年度	36	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 36（第 4 分冊）』鎌倉市教育委員会　永田史子・米澤雅美 2020
❽	長谷一丁目 238 番 10	2015 年度	43	『甘縄神社遺跡群（No. 177）発掘調査報告書』博通　小野田宏 2019
長谷小路周辺遺跡（No. 290）				
①	由比ガ浜三丁目 200 番 6	1979 年度		未報告
②	由比ガ浜三丁目 202 番 2	1984 年度 ～ 1985 年度	1100	『長谷小路南遺跡』長谷小路南遺跡発掘調査団　窪木秀雄・ほか 1992
③	由比ガ浜三丁目 194 番 25 外	1987 年度	180	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 5』鎌倉市教育委員会　窪木秀雄 1989 『由比ヶ浜三丁目 194 番 25 外遺跡調査報告』長谷小路遺跡発掘調査団　窪木秀雄 1990
④	由比ガ浜三丁目 199 番 1	1987 年度	115	『由比ヶ浜三丁目 199 番 1 地点遺跡調査報告』長谷小路遺跡発掘調査団　窪木秀雄 1990
⑤	長谷一丁目 284 番 1	1987 年度	150	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4』鎌倉市教育委員会　玉林美男 1988
⑥	長谷二丁目 252 番 1	1989 年度	60	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7』鎌倉市教育委員会　宗基秀明・宗基富貴子 1991
⑦	由比ガ浜三丁目 194 番 24	1989 年度	460	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7』鎌倉市教育委員会　宗基秀明・宗基富貴子 1991
⑧	由比ガ浜三丁目 202 番 2	1995 年度	900	『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』長谷小路周辺遺跡発掘調査団　宮田　眞・森　孝子 1997
⑨	長谷一丁目 33 番 3	1997 年度	76	『長谷小路周辺遺跡 13』長谷小路周辺遺跡発掘調査団　伊丹まどか 1998 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会　伊丹まどか 1999
⑩	長谷一丁目 205 番 12	2000 年度	32	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会　沙見一夫・田畑衣里 2002
⑪	由比ガ浜三丁目 194 番 50	2002 年度	52	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会　沙見一夫・ほか 2004
⑫	長谷一丁目 265 番 19	2004 年度 ～ 2005 年度	56	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会　伊丹まどか・ほか 2010
⑬	由比ガ浜三丁目 206 番 6 外	2008 年度	99	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 31（第 1 分冊）』鎌倉市教育委員会　森　孝子・赤堀祐子 2015
⑭	長谷二丁目 171 番 4	2008 年度	156	『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』鎌倉遺跡調査会　降矢順子・ほか 2012
⑮	由比ガ浜三丁目 204 番 5	2010 年度	72	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 36（第 4 分冊）』鎌倉市教育委員会　永田史子・米澤雅美 2020
⑯	由比ガ浜三丁目 194 番 71	2013 年度	140	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 33（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会　松吉里永子・ほか 2017
⑰	長谷二丁目 148 番 1 の一部、 148 番 3、149 番 1	2014 年度	100	未報告 『鎌倉の埋蔵文化財 19』鎌倉市教育委員会 2015・「長谷小路周辺遺跡の調査」『第 25 回鎌倉市遺跡調査・研究発表会　発表要旨』鎌倉考古学研究所　窪木秀雄 2015
⑱	由比ガ浜三丁目 194 番 1、 262 番 1	2015 年度 ～ 2016 年度	1307	『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』斉藤建設　降矢順子・ほか 2016
⑲	長谷二丁目 274 番 1 の一部、 274 番 2、275 番 6	2018 年度	69	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 37（第 1 分冊）』鎌倉市教育委員会　後藤　健 2021
⑳	由比ガ浜三丁目 199 番 37、42	2020 年度	185	未報告 『鎌倉市遺跡調査・研究速報』鎌倉考古学研究所　降矢順子・窪木秀雄 2021
笹目遺跡（No. 207）				
㉑	笹目町 324 番、311 番 3	1988 年度	—	『昭和 63 年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』 笹目遺跡内やぐら発掘調査団・ほか　原　廣志・田代郁夫 1990
長谷観音堂周辺遺跡（No. 296）				
㉒	長谷三丁目 41 番イ	1992 年度	100	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会　瀬田哲夫 1994
㉓	長谷三丁目 39 番 4 外	1993 年度	190	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 11（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会　宗基秀明・ほか 1995
高徳院周辺遺跡（No. 327）				
㉔	長谷一丁目 290 番 1 外	1988 年度	1300	『長谷一丁目 290－1 地点遺跡』高徳院周辺遺跡発掘調査団　窪木秀雄・宗基秀明 1989
長谷寺南やぐら群（No. 446）				
㉕	長谷一丁目	1993 年度		『中世石窟遺構の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所　田代郁夫・大坪聖子 1998

され（中世３面）、以下は部分的なトレンチ調査によるが、北と西に向けて緩やかに下がる砂質土層の堆積と、その下位の標高 3.1 ｍではフラットな岩盤面（波食台か）が検出されている。トレンチや３面遺構から弥生後期～平安時代の遺物片が出土し、奈良～平安時代の資料が時期的に主体をなす。丘陵裾

の❹・❺でも複数枚の中世遺構面が検出され、ともに鎌倉時代後半の資料が中心であった。❹では常滑5～6型式の甕口縁部片が22個体分出土し、❺では出土遺物全体における瓦の比率が高いことが特記されている。長楽寺谷の開口部に接する位置にあることから、寺院との関わりも想定されよう。❻では宅地造成にともなう道路新設部分を対象とした調査が行われ、中世の埋没河川上に構築された道路跡や土坑、古代以前の竪穴住居にともなうとみられる竈などの遺構が検出されている。中世は、13世紀末～14世紀前半の3面と、14世紀中葉～後半の2面とに大別される。古代以前では、古墳時代～奈良・平安時代に属する遺物が図示されている。❼では中世3枚と古代2枚の遺構面が検出されている。中世のうち、13世紀後葉頃の2面では礎石建物が、13世紀中葉～後葉の3面では底面に礎板を据えた柱穴多数が確認されている。古代の5面では、9世紀後半と推定される竪穴状遺構2基や南北方向の旧河道が検出されている。確認面の標高は4.3～4.5mを測り、この下位の標高3.7mでは岩盤（波食台か）が確認されている。❽では13世紀後半～14世紀前半にかかる、3枚の中世遺構面が検出されている。3面では東西方向に延びる砂質土による硬化面が検出され、この南辺には杭と板材による土留め施設が遺存していた。中世最下面（4面）は、標高3.5m付近で確認されている。

甘縄神社遺跡群の東西と南を囲む形では、長谷小路周辺遺跡（No.290）が所在する。砂丘・後背湿地・稲瀬川（美奈能瀬川）旧氾濫原などの諸地形を含むため遺跡様相は一定でないが、鎌倉後期以降にはほぼ満遍なく土地利用の痕跡が認められ、重複する竪穴建物群や、土坑を主体とする遺構が検出されている。江ノ電由比ヶ浜駅の北西、県道311号（由比ガ浜大通り）との間のエリアでは調査件数が多く、比較的まとまった面積の調査も行われている。

②の中世面では40棟近くの竪穴建物が検出され、特に調査区北側の県道に近い部分では、他の竪穴建物や井戸・土坑と重複した、濃密な遺構展開が確認されている。古代以前の遺物包含層は調査区北端と東端部のみに遺存しており、他の大部分では削平された可能性が高く、現在よりも起伏の激しい地形であったことを物語っている。調査区南東隅付近で8世紀初頃頃と9世紀後半頃の竪穴住居3軒が確認され、北西隅付近では古墳時代前期の小壺・鉢・高坏とアワビ殻を置いた「祭祀遺構」が検出されている。この他、時期は不詳ながら、ウシの肩甲骨の上に安置された伸展葬墓や散乱骨も発見されている。

中世における竪穴建物を主体とする遺構展開は③④⑦⑱などでも同様の状況が認められ、基礎構造に切石列や根太木材、安山岩の礎石を据えた例などバリエーションはあるものの、基本的に倉庫群としての機能を推察し得る調査成果が蓄積されている。狭小な調査でも、概ね共通した遺構展開が確認されている。図1の東外でも大よそ同様の遺構展開が続き、製作途中の骨角製品や切削痕の残る獣骨、鋳型や輪羽口といった鋳造関連遺物の出土が目立つ点など、手工業生産を職能とする人々の居住・生産空間であったいう見方も定着している。また、竪穴建物群と近接した場所にまで葬送や遺体処理関連の遺構が展開する事例もあり、中世都市鎌倉が拡大期に入る13世紀後半以降、「生と死」の空間が背中合わせの状態で土地利用が進んでいたことが推察できる。

古代以前では、図1東外に位置する由比ヶ浜駅の北西地点で10軒以上の竪穴住居が発見され、この6号住居は出土した台付甕から古墳時代前期に位置付けられている。当該期の遺物は周辺でも出土例が多いが、住居としての確実な検出例は今のところ唯一である。同地点では伸展葬の土坑墓も検出され、両膝の間から鉄鏃・骨鏃と北宋銭が、左脛上から骨製柄をもつ刀子が出土している。北宋銭の存在から11世紀末～12世紀末という時期比定がされてはいるものの、報告書の出土状況写真には銅銭が写っていないことから、中世竪穴建物からの混入資料と考える方が無難かもしれない。伸展葬墓は⑧⑱㉑でも検出されており、⑱では近年、石組み施設（石棺）に納められた十代後半女性の埋葬例が確認され注目

を集めた。⑧の事例は下半身を削平で失っていたが、金銅製の耳環が装着されていた。上述の鉄鏃などの共伴例とともに古墳時代後期～終末期に比定させ得る資料であり、同時期に盛行した横穴墓との関係など、興味深い検討材料を提供してくれる。⑱の石組み墓も層位的にみて近似した時期に属しようが、副葬品など伴出遺物がないために断定はできていない。放射性炭素による年代測定など、理化学的分析手法にも期待したい。⑬では、土師器甕に焼骨を納めた9～10世紀の火葬墓2例が検出されている。同時期の火葬墓は和田塚駅南西の地点でも2例が検出され、1例は泥岩製の石櫃に、もう1例は土師器小型甕に焼骨を納めて伏せた須恵器皿で蓋をし、さらに土師器長胴甕を合わせ口にした（1点は口縁を欠く）外容器に納めるものであった。同地点では、8世紀代の茶毘所と考えられる遺構も2ヶ所で確認されている。②⑯⑱では平安時代の竪穴住居も確認されており、この時期における集落居住域と墓域の分布状況や、当地域の古代社会における墓制の変遷を考える上で示唆的な資料が蓄積されつつある。

砂丘上では7世紀後葉を皮切りに、10世紀前半まで継続的な集落展開が見て取れる。特に開始期については、前代（古墳後期）の生活痕跡が見えないところに集落が形成されることから、律令制の成立過程における鎌倉郡家（郡衙：今小路西遺跡・御成小学校地点）や隣接寺院（「千葉地廃寺」）の造営、あるいは人民掌握を目的とした編戸などの社会動向を背景に考えるべきだろう。

写真が紹介されているのみだが、❶では竈をもつ平安時代の竪穴住居も検出されている。砂丘後背地を挟んだ丘陵裾部にも集落展開があったことを窺わせる希少な事例である。

一方、稲瀬川の氾濫原に近い⑰では古代の河川が発見され、17点に上る墨書土器や「田」字の焼きゴテ、卜骨などの遺物が出土しているという。正式報告が未刊のため詳細は不明だが、旧地形を考慮すれば、同地点付近が東方から続く砂丘上古代集落の西限であった可能性は十分に考えられよう。『吾妻鏡』の治承四年（1180）十月十一日条は、北条政子の鎌倉入りに際して日次が考慮された結果「止宿稲瀬河辺民居」したことを伝えるが、中世の人々にとっても稲瀬川は、鎌倉の内と外とを分かつ境界として認識されていた様子が窺える。

遺跡名にもなっている甘縄神社は、縁起によれば和銅三年（710）に行基が創建したといい、同時代の伝説的人物である染谷時忠（由比の長者）の建立とする所伝もあるが、もとより史実として鵜呑みにすることはできない。上述した考古資料と時代を同じくするものの、歴史学とは一線を画して扱うべき事項であろう。ただ、『吾妻鏡』文治二年（1186）正月二日条に「二品（源頼朝）并御臺所（北条政子）御参甘縄神明宮」とあることから、頼朝が鎌倉に入る以前の平安時代末期には鎮座していたことが指摘できる点は重要である。また、建久五年（1194）六月二十六日条の「将軍家参甘縄宮、是伊勢別宮也」という記載から、『鎌倉市史』では当宮が伊勢神宮領荘園である大庭御厨の飛地であったとする理解が示されており、開発領主として同御厨を神宮に寄進した鎌倉党の始祖・平景正を祀る坂ノ下の御霊神社（権五郎神社）が近在することも根拠に加えている。『吾妻鏡』建久五年（1194）正月四日条に「甘縄宮御霊社御奉幣」と見えることから、同社も平安末期～鎌倉初期における鎌倉を考究する上で貴重な素材となり得よう。

遺跡地の北東、現在の鎌倉文学館を擁する谷戸は「長楽寺谷」と呼ばれ、長楽寺なる寺院が所在したとされる。『吾妻鏡』は文応元年（1260）に長楽寺前から亀谷に至る大火事があったことを伝えるから、鎌倉時代中期までに創建されていたことは間違いなかろうが、関連史料が少なく、詳細は不明である。谷戸の開口部には長楽寺南やぐら群が展開し、現在までに4基のやぐらが確認・調査されている。出土遺物は鎌倉末～南北朝・室町時代の様相を呈し、4号窟から瀬戸窯および舶載品の花盆3個体分が出土している点は注目される。また、谷戸内崖面の2ヶ所に古墳後期の横穴墓が分布し、長楽寺山横穴1基

では昭和二年（1927）に直刀・金環・土器などが掘り出され、直後の赤星直忠氏による現地確認の結果、断面・奥壁ともアーチ形であることが記録されている。長楽寺谷横穴墓群では２基の存在が確認され、昭和九年には赤星氏らが踏査を行っている。２基ともに断面・奥壁アーチ形で、１号穴は高さ183㎝の高棺座を深さ34㎝に刳り抜いた造り付け石棺であったことが記録されている。また、２号穴内部には火葬骨が散乱していたというが、造営当時のものであるのか、後世の再利用にともなうものであるのかは判然としない。どちらも正式な発掘調査を経ていないので、正確な位置や保存状態など、改めて現地確認が必要かもしれない。

なお、❸・❺の報告書では『吾妻鏡』などに所載の「甘縄」関連記事を網羅的に取り上げているので便覧となる。併せて参照されたい。

参考文献

鎌倉市1959『鎌倉市史』考古編・総説編・社寺編　吉川弘文館
鎌倉考古学研究所1981『掘り出された鎌倉』
鎌倉考古学研究所2021『由比ガ浜・笹目・長谷地域を学ぶ　資料集』

第三章　調査の方法と経過

掘削による発生土置き場を敷地内に確保する都合上、調査区は東半部のⅠ区と西半部のⅡ区とに分割した。また、掘削による崩落の危険性を考慮して隣地境から1.5ｍ以上離れた位置に調査区を設定したことにより、調査対象範囲は当初予定の60.345㎡から、最終的に56.39㎡に減じる結果となった。

Ⅰ・Ⅱ区ともに厚さ80㎝ほどの表土層を重機によって除去し、以下の土については人力で掘削した。

測量・図面作成には国家座標系（JGD2011）に基づく平面直角座標を設定して用い、調査範囲を正確に公共地図上に合成させることを可能とした。標高も含めた国家座標値は、近隣の市道上に打設された都市官民多角点「A01交11」および「A01A01-220-1」との２点間関係を起点とし、光波測距儀を用いた開放トラバース測量法によって調査敷地内に移動した。

測量図の作成は、光波測距儀により計測値を読み上げて、方眼紙上に1/20の縮小図を描き込む方法を取った。写真撮影は主にデジタル一眼レフカメラを用いて行い、補助的にカラーネガフィルムを装填した一眼レフカメラを使用した。

令和３年６月28日にⅠ区の表土掘削を実施し、同30日からは人力掘削による発掘調査に着手した。早くも猛暑の兆しを感じる中での調査となり、掘削土運搬の労を減らす目的もあり、Ⅰ区はさらにA・B・Cに三分割して調査を進めた。Ⅰ区埋め戻しおよびⅡ区表土掘削は８月24日に実施し、翌日から人力掘削に移行した。暑さも落ち着きつつあったことから、Ⅱ区は細分せず全体的に掘り下げを進めた。10月４日にはⅡ区の埋め戻しを行い、翌５日には調査用具を撤収して、現地調査に係る全ての工程を完了した。

この後、出土品および記録類の整理作業と報告書の作成へと移行し、文化財課分室にて約２ヶ月間を要した。

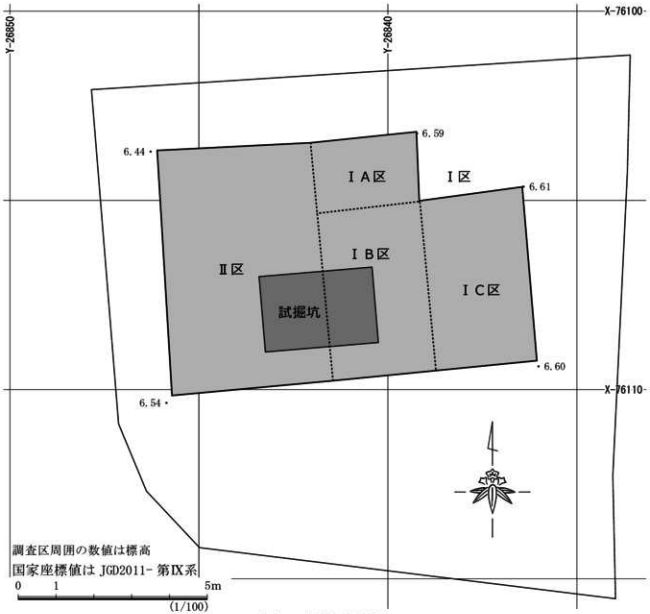


図３　調査区配置図

第四章　基本土層

本地点における土層の堆積状況は、図４に示した。現地表面の標高は6.4～6.6ｍ前後で（図３）、東側がわずかに高い状況であった。表土層（０層）は80㎝ほどの厚さで堆積し、これを重機で除去した標高5.7～5.8ｍ前後で中世の遺物包含層（Ｉ層）が検出された。この上面を１面とし、調査区北部で北に向けたごく緩やかな落ち込み（溝１）などが検出されている。溝１埋土には宝永四年（1707）の富士山火山灰をまとめて廃棄した箇所が見られたことから、江戸時代前期の土地利用にともなう痕跡であったことが分かる。

Ｉ層は泥岩粒を多く含む暗灰褐色土で、かわらけなど細片化した中世遺物を含んでいた。

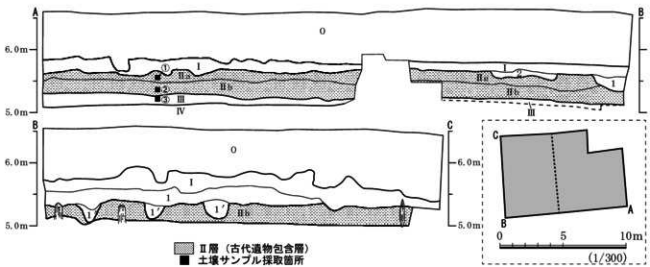
Ⅱａ層は標高5.6ｍ前後で検出された。黒色砂質土で、砂丘背後の低湿な環境下で形成されたものと考えられる。古代～中世の遺物包含層だが、中世遺物は僅少なため、混入品と見なせるかもしれない。本層の上面を２面とし、中世に属する東西溝（溝２）や東西柱穴列といった遺構を確認している。

Ⅱb層は標高5.5m前後で検出された黒褐色砂質土で、Ⅱa層よりわずかに明るい。古代遺物包含層。

Ⅲ層は標高5.3m前後で検出された暗褐色砂質土で、ごく少量の古代遺物を包含する。

Ⅱa～Ⅱb～Ⅲ層は漸移的な様相変化を見せ、堆積過程において突発的イベントがあったとは見なしがたい。各層共通して、指頭大～鶏卵大の灰色軽石が散見された。もれなく水磨しており、人為的研磨の痕跡とは見なせない。一定期間の水流にさらされた後、本地点に到達したことを推察させる。

Ⅳ層は暗黄褐色砂で、標高5.1～5.2mで確認され、北側が低い。Ⅲ層以下では至るところで湧水があり、本層を流出させることで崩落の危険性が高まることから、調査区全域での検出はできなかった。本層の上面を3面と設定したが、上記湧水の影響を懸念した結果、調査区の大部分でⅢ層下位を残した状態で掘削を止め、記録作業に移行した。よって、3面全体図（図7）における標高値も、厳密にⅣ層上面での計測値とはなっていない。3面上では、遺構は確認されていない。



0	灰褐色土	表土。耕作土。宝永スコリア混入。	1	暗灰褐色土	Ⅰ層をベースとする。泥岩粒多い。
Ⅰ	暗灰褐色土	泥岩粒多い。締まりあり。上面が1面。			1面溝3の埋土。
Ⅱa	黒色砂質土	粘性あり。古代～中世遺物包含層。上面が2面。	1′	暗灰褐色土	1層より泥岩粒少ない。
			2	灰褐色砂	Ⅱ層が混入する。
Ⅱb	黒褐色砂質土	粘性あり。炭粒少量。古代遺物包含層。			
Ⅲ	暗褐色砂質土	ごく稀に古代遺物出土。湧水顕著。			
Ⅳ	暗黄褐色砂	無遺物層。			

0　1　2m
(1/60)

図4　調査区壁土層断面図

第五章　検出遺構と出土遺物

第１節　検出遺構

前章で述べたように、今回の調査では土層の違いによる３枚の面に分けて遺構調査を行った。最下層の３面は古代遺物包含層の下位に広がり、遺構は検出されなかった。以下、上層から順に、検出遺構の様相について説明する。

１面は表土直下の中世遺物包含層（Ⅰ層）の上面で検出され、標高５.７～５.８ｍ前後を測る。調査区北半部で表土を埋土とするなだらかな落ち込み（溝１）が検出され、東・西とも調査区外に続く。埋土中では富士山の宝永火山灰をまとめて廃棄した箇所が散見され、噴火・降灰があった宝永四年（1707）以前の落ち込み地形を示していると考えられる。Ｎ83°Ｅで延び、現行の敷地北接道路に近い方向軸を示す。

この他、東西・南北に点々と続く浅い窪み（耕作痕）や、Ⅰ区の東端部では、桟瓦を充填するように廃棄した大型土坑（井戸か）が検出された。桟瓦は燻し焼成されたもので、さらに表面が煤けているものが多く見られた。近代以降の所産と見られ、おそらく大正十二年（1923）の関東大震災の火事場整理に際して廃棄されたものと考えられる。膨大な量が廃棄され、調査対象の時代から外れることから全点を取り上げることはせず、破損の少ない個体３枚をサンプルとして採集するに留めた。

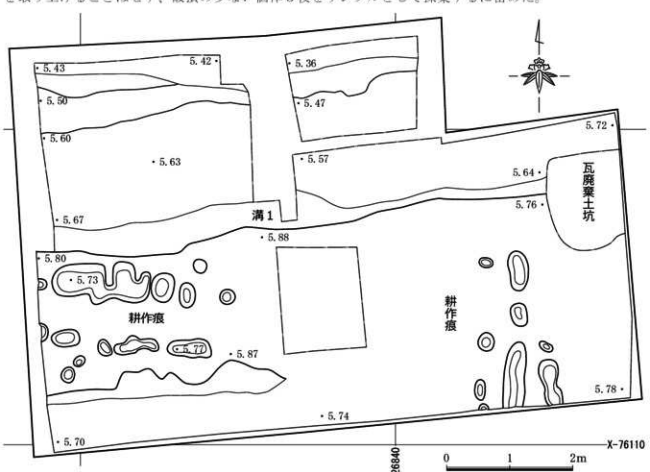


図５　１面全体図

1面下＝Ⅰ層は泥岩粒を多く含む暗灰褐色土で、かわらけ他の中世遺物が混入するが、その大部分が細片であった。

2面はⅡａ層の上面、標高5.6ｍ前後で検出された。調査区の北半部は、1面の溝1によって削平を受けていた。調査区中央を横断する東西柱穴列および各柱穴を繋ぐ溝2の他、これらより新しい時期の溝3、土坑5～7、南北柱穴列などの遺構が検出された。

東西柱穴列と溝2はN 90° Eで延び、柱穴間を浅い溝で繋ぐ形で検出された。両者は一連の構築物と見なせるが、溝がどのような構造的役割を有していたのか、具体的に示す痕跡は確認できなかった。各柱穴・溝2ともⅡ層を埋土のベースとし、拳大程度の泥岩ブロックを疎らに含んでいた。基本的に、柱穴が溝を切る状態の遺構プランを確認している（図版2－2）。柱穴列は8基の並びまでを確認し、東西両端とも、調査範囲の限りでは確認できなかった。各柱穴底には礎板が据えられ、2～3枚を積み重ねた例も見られた。検出最西端のピット〈ク〉では、遺構東半部のみの検出となったためか、礎板の有無は確認できなかった。礎板の中心間≒柱間の間隔は、110cm前後で若干のバラツキはあるものの、半間分に相当し、掘立柱塀（柵列）としては一般的な間隔である。出土遺物は僅少で、中世遺物よりも古代遺物の方が多い。

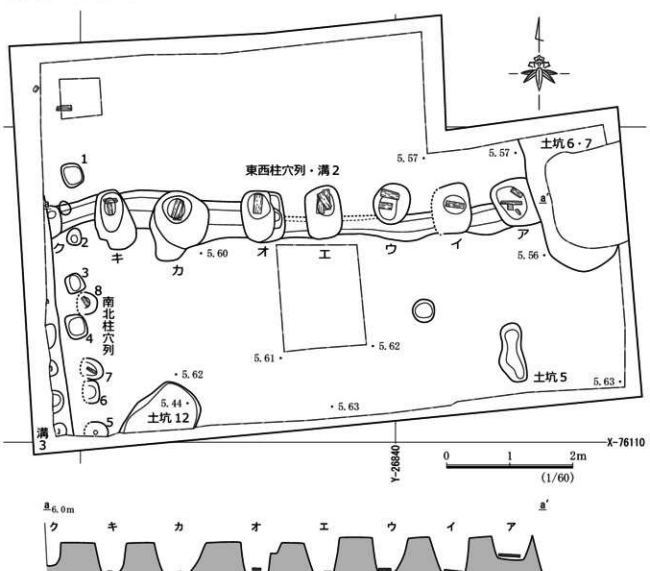


図6　2面全体図・東西柱穴列エレベーション図

土坑12は調査区南西部に位置し、埋土はⅡ層をベースに少量の暗褐色砂をブロック状に含んでいた。浅い落ち込みで人工的要素も希薄に見えることから、自然要因で形成された可能性も考えている。

その他の遺構はⅠ層をベースとする埋土様相で、切り合い関係の上でも東西柱穴列・溝2より新しい遺構であることを確認している。土坑5は、1面耕作痕の掘り残しだろうか。土坑6・7は一つの遺構で、近代の瓦廃棄土坑の直下に入れ子状態で存在することから、この前身遺構として、近世以降の所産と考えることができるかもしれない。

南北柱穴列は調査区の南西隅付近で検出され、N7°W前後で並ぶ。40～50㎝と密な間隔で続くが、造り替えの結果と見なせ、本来は柱穴2－4－6や8－7－5のように、105～110㎝の間隔で並んでいた可能性が考えられる。腐食の進んだ礎板状の板片が遺存しているピットもあり、細い柱列を骨組みとした、柵状の簡素な構造物に復元できるものと考えている。

溝3は南北柱穴列の西側に並行する形で検出された。調査区西・南外に続き、遺構の一部を確認したに過ぎないため、名称のとおり溝であったのか、竪穴状をなしていたのかは確定できない。東西柱穴列ピット〈ク〉を切っており、埋土はⅠ層をベースとする（図4－1層）。落ち込み内には小規模の柱穴が並び、打ち込み杭が遺存する例も見られたことから、簡素な護岸施設をともなっていたことが考えられる。

2面下＝Ⅱa・Ⅱb・Ⅲ層は黒色～暗褐色に漸移する砂質土で、段階的に掘り下げつつ精査を試みたものの、途中、遺構を確認するには至らなかった。8世紀前葉頃の土師器・須恵器を主体とする遺物が出土し、9世紀後半に下る資料も少量ながら認められた。

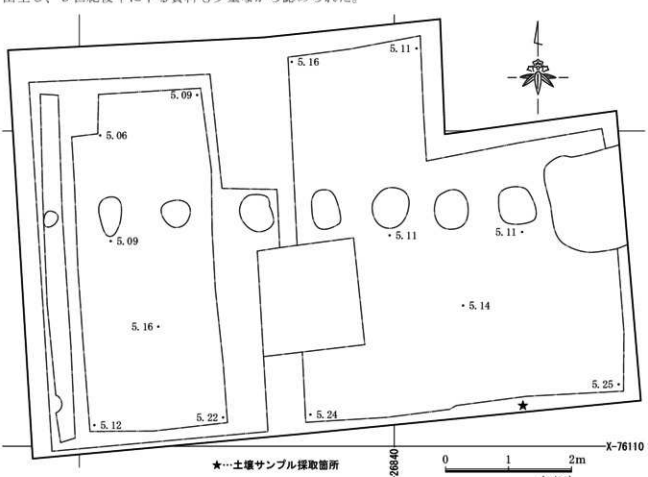


図7　3面全体図

3面はⅣ層の上面に設定したが、湧水による砂の流出を防ぐため、Ⅲ層を一部残した状態で広げた。標高は、5.1～5.2 mを測る。検出遺構はないが、Ⅳ層上面で広げることができれば、流水による浸食の痕跡や、地形上の高低差などが見て取れた可能性がある。

3面下＝Ⅳ層下については、今回は全く調査することができずに終わった。図1－地点❸・❼などの成果を参考とすれば、一定層厚の無遺物層の下に貝殻粒を多く含む砂層が堆積し、この直下の標高4 m前後に波食台岩盤が広がっていたことが推察される。この点、建築工事に先立つボーリング調査の結果を参照すれば、正確な情報が得られるだろう。

第2節　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は少なく、整理作業の着手前では、内寸54×34×15cmの収納箱で10箱を数えたに過ぎない。その内訳は表3のカウント・計量表に示した通りで、中世遺物よりも古代遺物の方が数量・遺存状態ともに主体といえる状況であった。

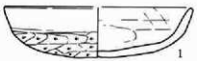
Ⅰ層は中世遺物包含層、Ⅱ・Ⅲ層は古代遺物包含層と考えられ、Ⅱ層からも若干量の中世遺物が出土しているが、掘り残した中世遺構などからの紛れ込み資料と考えている。

図8～17には、出土した遺構・層位ごとに遺物149点を示した。遺物個々の法量や特徴については表4・5の観察表に掲げたので、ここでは概略的な説明にとどめたい。

中世遺物のうち、かわらけはロクロ製品に限られ、手づくねは皆無であった。完形品は皆無で、図示資料の殆どが1/4程度の破片から推定径を復元したため、多少の誤差があるものとして参照されたい。常滑は甕片を転用した研磨具（スリ常滑）しか図示すべき資料がなかった（16～19・37～40など）。研磨痕のない資料中にも掌大の甕片が非常に多くあったことから、研磨具にするため、廃棄後の容器を適度な大きさに破砕（二次加工）していた可能性が考えられる。

31・32・144は、Ⅰ区東端の瓦廃棄土坑から出土した。燻し焼き桟瓦が土坑内に隙間なく充填された状態で出土し、完形に近い瓦も多く含んでいたものの、被熱して表面が荒れた資料が目立った。火事場整理のため一括廃棄されたものと思われ、確証はないものの、大正十二年（1923）関東大地震の被災にともなう可能性が考えられる。144は完形の銅皿で、仏具の一つであろうか。

古代遺物のうち、土師器坏は須恵器坏蓋模倣の有稜坏の系譜を引き、相模型坏成立の前段階にあたる「扁平丸底坏」が主体で、7世紀末～8世紀前葉頃に位置付けられる（50～57・115～119など）。これに、箱形を呈し器表面全体をヘラミガキで仕上げた盤状坏が量的に次ぐ（62～64・120～124）。赤色塗彩を施した62・64を除き全て無彩色で、微砂質の精製された胎土には骨針化石を含む例が多いことから、鎌倉周辺の在地産土器と考えられる。貼付け高台を有する122～124や、同質の胎土・器面調整で製作された皿・盤・蓋・小型壺などのバリエーションが認められる（5・65・69・71・87・125など）。125は皿として図示しているが、5と同形状の蓋になる可能性もある。59・60は相模型坏で、59は9世紀中葉頃の所産となろう。60は大型品で、碗といえるタイプである。61はロクロ土師器の坏で、体部は膨らみをもって肥厚した口縁部へと移る。甲斐型坏の模倣品か。土師器甕は相模型（73・76・78など）が主体で、武蔵型（75・77）がこれに次ぐ。後者は、9世紀代に下る資料となろう。須恵器は湖西窯産の坏（89）、高台付坏（90・92～94・137）、坏蓋（95・111・136）が主体で、8世紀前葉までの年代に収まる。28・45・88・91は底部外面に右回転の糸切り痕を残し、9世紀代中葉以降に下る、埼玉県の窯産品と見られる。135の底部外面には直線の調整痕跡が残るが、静止糸切りかヘラケズリ調整なのか



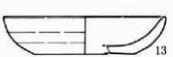
確認調査

1面　溝1

2面　溝2

柱穴－ア

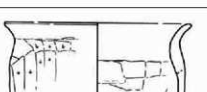
柱穴－イ



2面　土坑6

柱穴－オ

2面　東西柱穴列



2面　南北柱穴列
ピット6

骨角製品（2・6～9）は1/2

図8　出土遺物（1）

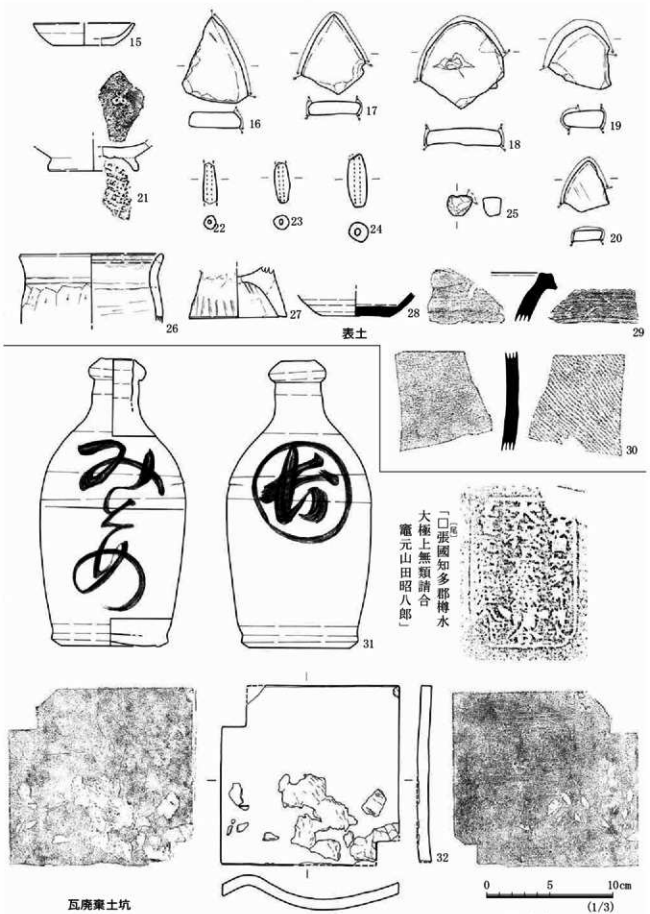

15
16
17
18
19
21
22
23
24
25
20
26
27
表土
28
29
30
31
「□張國知多郡樽水
大極上無類請合
竈元山田昭八郎」
瓦廃棄土坑
32
0
5
10cm
(1/3)
瓦（32）は1/6

図9　出土遺物（2）

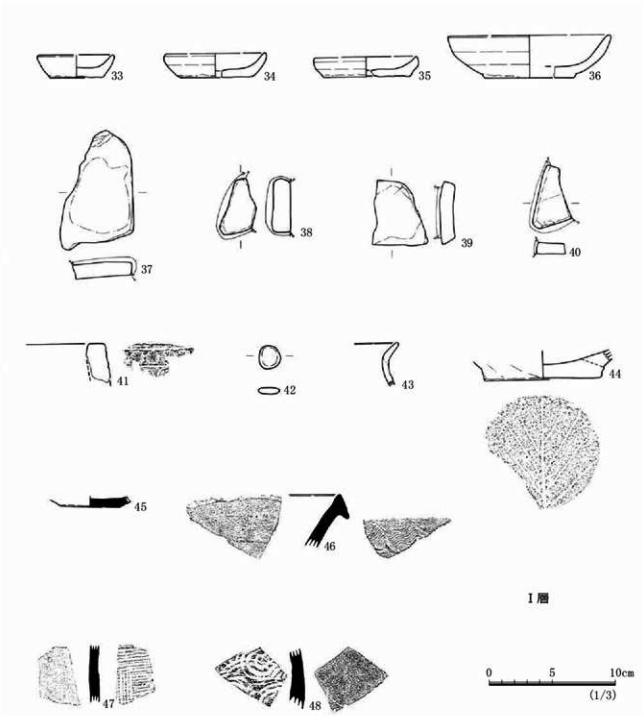


図 10　出土遺物（３）

明確でない。須恵器甕は口縁部（29・46・97・138・139）や胴部（30・47・48・98・140）を掲げたが、いずれも小片であり、全体形状を復元できるだけの破片数も得られなかった。96・143は、須恵器の瓶。資料数は限られるが、須恵器の甕・瓶類も８世紀前葉までの製品が主体と考えて良いだろう。

他の古代遺物としては、卜占に用いた卜骨（２・６～９・100～104・112～114・補１～補４）や、馬具の轡を飾る金銅製長方形鏡板（145）などが特筆される。詳細は、第六章の説明を参照されたい。105は獣骨の表面に無数の小孔を刻んでおり、用途は不明である。これも卜骨の一種となろうか。補１～補４の卜骨は、報告書への掲載資料から一旦除外してしまったが、具に観察すると鑽の片鱗や加工痕がわずかながら確認できたことから、追加で掲図した。

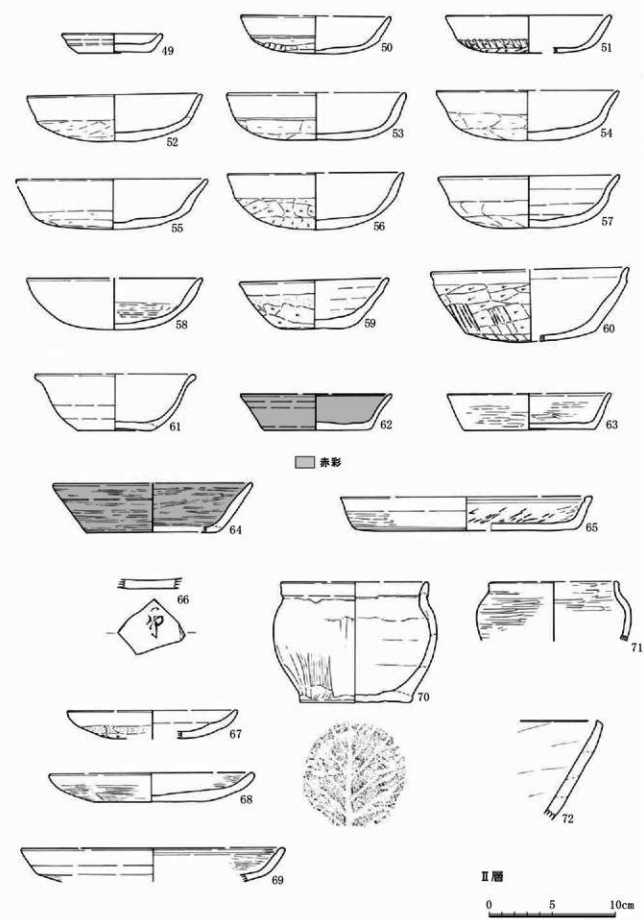

49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
赤彩
64
65
66
70
71
67
68
72
69
Ⅱ層
0
5
10cm
(1/3)

図 11　出土遺物（4）

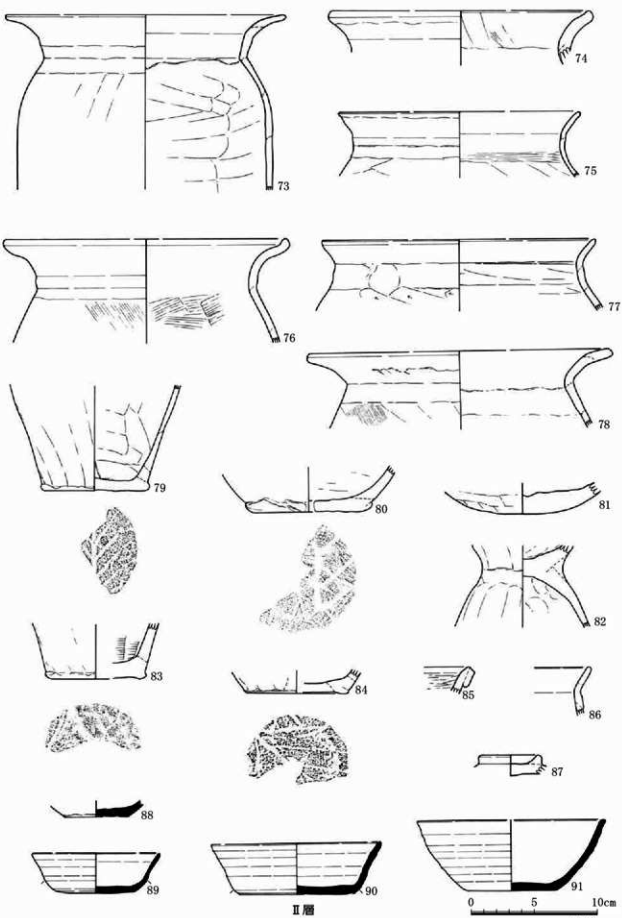
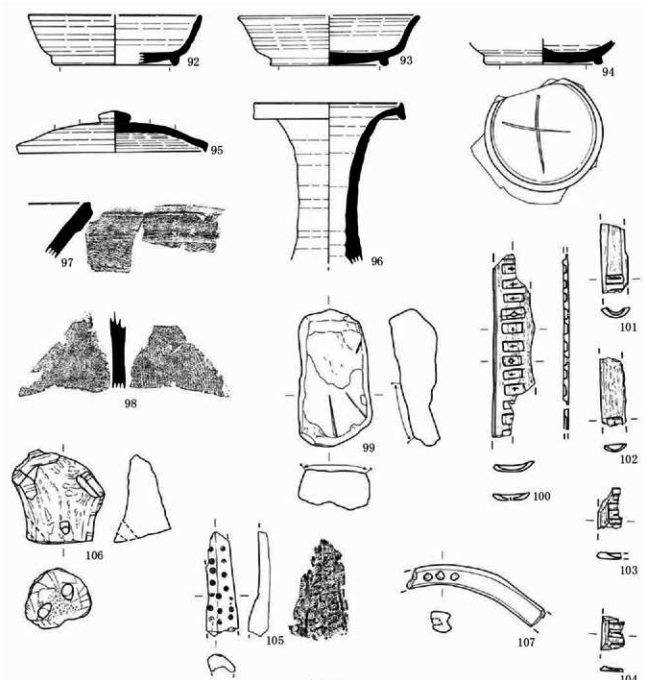


図 12　出土遺物（5）



ⅠC区　Ⅱa層

骨角製品（100～107・112～114）は1/2

図13　出土遺物（6）

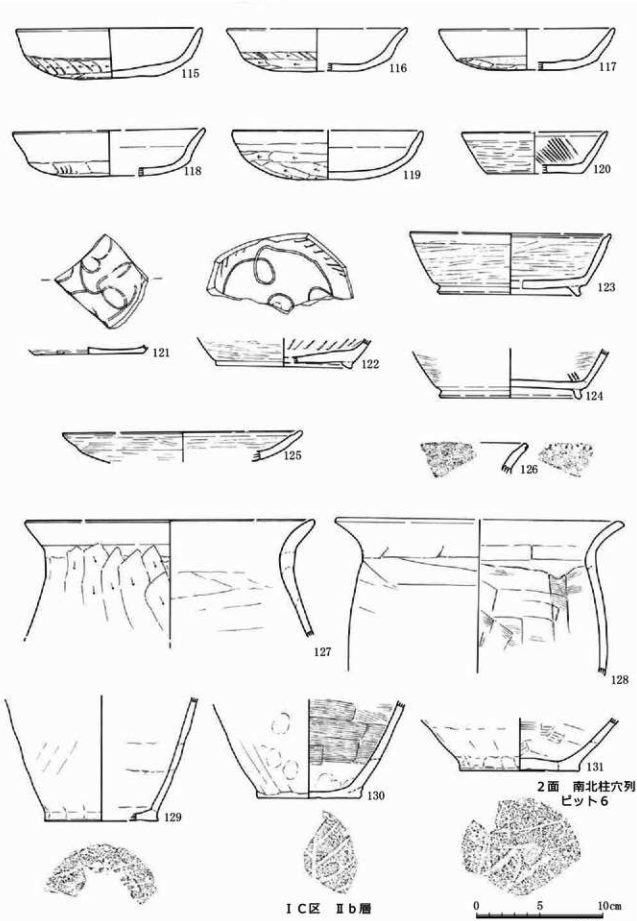

115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
2面　南北柱穴列
ピット6
ⅠC区　Ⅱb層
0
5
10cm
(1/3)

図14　出土遺物（7）

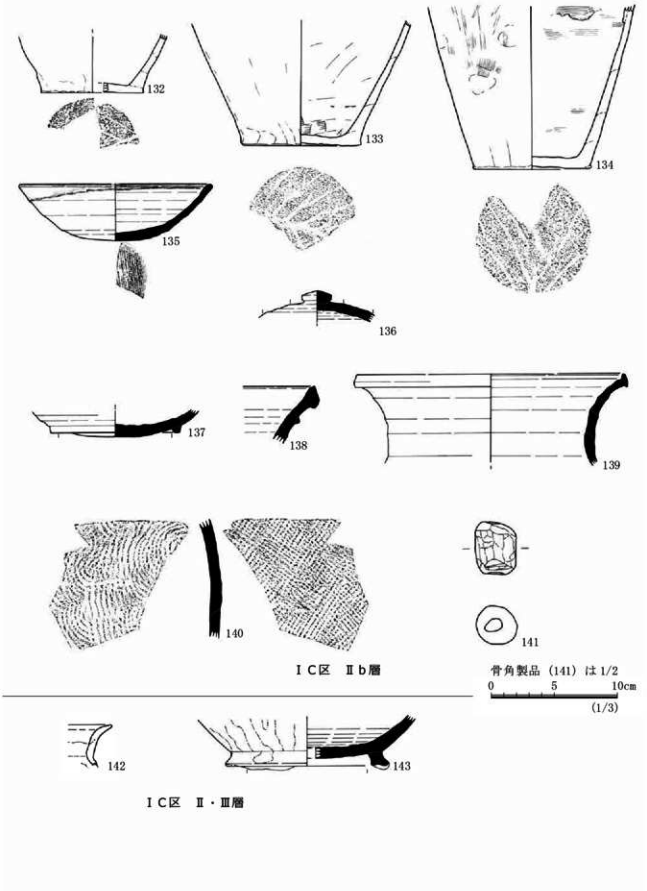
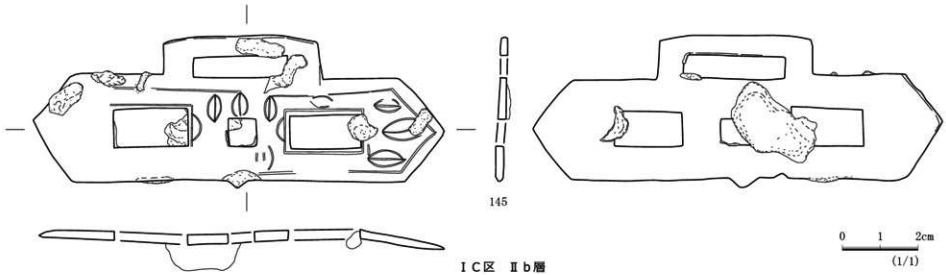

132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
ＩＣ区　Ⅱｂ層
骨角製品（141）は1/2
0　5　10cm
(1/3)
142
143
ＩＣ区　Ⅱ・Ⅲ層

図15　出土遺物（８）

撹乱



ⅠC区 Ⅱb層

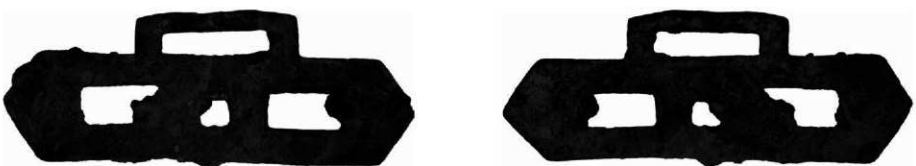


図16 出土遺物（9）

表３　出土遺物カウント・計量表

種別 産地等	器種	分類	破片数	重量(g)
確認調査坑				
ロクロかわらけ	小		1	*10*
	大		32	*288*
土器	小片		17	*55*
白磁	碗		1	*11*
龍泉窯系青磁	碗皿		2	*12*
舶載陶器	褐釉壺		1	*11*
瀬戸	卸皿		1	*3*
	皿		1	*4*
常滑	片口鉢	Ⅰ類	4	*156*
		Ⅱ類	1	*74*
	甕		28	*935*
瓦ヵ			1	*50*
石製品	滑石片		1	*39*
土師器	坏		39	*429*
	盤状坏		8	*103*
	甕（底部1片）		31	*340*
	武蔵型甕		1	*9*
須恵器	坏		3	*34*
	甕		2	*63*
灰釉陶器	瓶類		1	*7*
骨製品	卜骨	Ⅴ型式	5	*1*
獣骨			2	*5*
Ｏ層（表土）				
ロクロかわらけ	小		19	*129*
	大		138	*1229*
土器	小片		308	*1180*
土器ヵ陶器ヵ	不明		1	*8*
白磁	碗皿	Ⅸ類	7	*31*
白磁ヵ瀬戸	碗		1	*15*
青白磁	梅瓶		4	*24*
	梅瓶蓋		1	*6*
龍泉窯系青磁	碗	Ⅱ・Ⅲ類	2	*5*
	碗	Ⅳウ類	1	*12*
	碗皿		14	*47*
	坏・盤	Ⅲ類	7	*80*
	酒会壺蓋		1	*37*
	不明		1	*7*
舶載陶器	天目茶碗ヵ	建窯ヵ	1	*2*
	花盆ヵ	約窯系	1	*7*
	緑釉壺ヵ		1	*6*
	褐釉壺		2	*29*
瀬戸	天目茶碗		1	*7*
	平碗		5	*32*
	入子		5	*12*
	縁釉小皿		4	*12*
	卸皿		4	*31*
	皿		5	*16*
	底卸目皿		1	*33*
	直縁大皿		2	*18*
	折縁深皿		1	*10*
	折縁深皿ヵ洗		14	*185*
	大皿		1	*13*
	壺・瓶		7	*68*
	小片		4	*5*
瀬戸美濃	すり鉢		1	*6*
常滑	片口鉢	Ⅰ類	13	*213*
		Ⅱ類	17	*432*
	甕	8型式まで	359	*12466*
	転用研磨具		10	*456*
備前	すり鉢		1	*86*
瓦器ヵ	坏ヵ		1	*5*
瓦質土器	火鉢	Ⅰ Ｂ類	1	*48*
		Ⅲ類	2	*114*
			9	*180*
瓦	丸瓦ヵ		1	*24*
土製品	管状土錘		4	*30*

種別 産地等	器種	分類	破片数	重量(g)
石製品	仕上げ砥		1	*3*
	硯		1	*75*
	火打石		1	*7*
軽石	自然円磨		1	*10*
染付磁器	小片		4	*7*
磁器	小片		6	*6*
近世陶器	大皿		2	*2*
近代陶器	不明		1	*13*
土師器	坏		78	*647*
	盤状坏		8	*193*
	北武蔵系坏		1	*10*
	甕（底部6片）		114	*1187*
	武蔵型甕		4	*31*
古式土師器	壺		3	*35*
	台付甕		1	*30*
須恵器	坏		12	*131*
	坏壺ヵ		2	*12*
	瓶類		1	*5*
	甕		10	*263*
	転用研磨具		1	*14*
灰釉陶器	碗皿		3	*23*
獣骨			35	*156*
１層				
ロクロかわらけ	大		502	*3924*
	小		32	*254*
土器	鍔付鍋		1	*3*
	器種不明		4	*90*
	小片		464	*1695*
白土器ヵ	不明		1	*5*
白磁	碗		1	*4*
	碗皿	Ⅸ類	6	*34*
	壺		2	*22*
	小片		1	*1*
青白磁	梅瓶		6	*31*
龍泉窯系青磁	碗	Ⅲ類	1	*10*
		Ⅳ類ヵ	1	*10*
			1	*1*
	東口碗	Ⅱｂ類	1	*9*
	碗皿		16	*52*
	坏	Ⅲ類	2	*16*
	瓶類		2	*15*
	不明		1	*8*
舶載陶器	黄釉盤	泉州窯系	1	*10*
	褐釉鉢ヵ		1	*130*
	褐釉壺		1	*10*
瀬戸	天目茶碗		3	*51*
	平碗		1	*15*
	入子		1	*6*
	縁釉小皿		5	*29*
	卸皿		2	*55*
	皿		5	*24*
	柄付片口		1	*13*
	折縁深皿		5	*84*
	折縁深皿ヵ洗		3	*54*
	卸目付大皿ヵ		1	*10*
	香炉		1	*6*
	壺・瓶		13	*254*
	不明		9	*36*
	碗皿		5	*31*
常滑	片口鉢	Ⅰ類	14	*277*
		Ⅱ類	18	*2526*
	鉢		1	*14*
	甕		374	*13113*
	壺		2	*23*
	転用研磨具		7	*215*
備前	すり鉢		4	*241*
瓦器	坏		1	*2*

種別 産地等	器種	分類	破片数	重量 (g)
瓦器質	黒縁坏ヵ		1	*3*
瓦質土器	火鉢	ⅠB類	1	*50*
		ⅡD類	1	*87*
		ⅣA類	1	*30*
			12	*391*
瓦	丸瓦		2	*243*
瓦ヵ	不明		1	*20*
土製品	円盤ヵ		1	*5*
	管状土錘		1	*15*
	輪羽口		1	*14*
鉄製品	釘ヵ		1	*3*
石製品	滑石鍋		4	*303*
	硯石		1	*24*
	砥石		1	*10*
	碁石ヵ		1	*3*
軽石	自然円磨		5	*30*
磁器	染付碗ヵ		1	*2*
志野	皿		1	*9*
陶器	小片		2	*4*
土師器	坏		77	*535*
	皿		1	*13*
	盤状坏		9	*70*
	甕		144	*1281*
	武蔵型甕		13	*196*
古式土師器	壺ヵ		3	*24*
須恵器	坏		44	*308*
	甕		40	*794*
	瓶類		24	*257*
灰釉陶器	碗		2	*10*
	碗皿		5	*17*
	瓶類		6	*75*
獣骨			20	*133*
Ⅰ・Ⅱ層				
ロクロかわらけ	小		1	*3*
	大		6	*54*
土器	小片		2	*4*
龍泉窯系青磁	水注ヵ		1	*16*
瀬戸	卸皿		1	*17*
常滑	甕		4	*142*
石製品	硯石		1	*37*
土師器	坏		14	*159*
	盤状坏		1	*11*
	甕		20	*164*
古式土師器	壺		2	*12*
須恵器	坏		3	*32*
	坏蓋		1	*13*
	甕		2	*33*
灰釉陶器	瓶類		1	*5*
Ⅱ層				
ロクロかわらけ	小		14	*114*
	大		72	*386*
手づくねかわらけ	大		1	*12*
土器	小片		1	*2*
白磁	皿	Ⅸ類	1	*3*
	小片		1	*1*
龍泉窯系青磁	盤ヵ		1	*7*
常滑	片口鉢	Ⅰ類	1	*25*
		Ⅱ類	1	*69*
	甕		11	*793*
瓦質土器	火鉢	ⅠB類ヵ	1	*12*
鉄製品	釘ヵ		1	*5*
石製品	砥石（古代）		1	*225*
軽石	自然円磨		23	*359*
骨製品	卜骨	Ⅴ型式	3	*7*
	卜骨ヵ		2	*13*
獣骨			44	*115*
鹿角	加工痕あり		1	*38*

種別 産地等	器種	分類	破片数	重量 (g)
土師器	坏		1157	*8330*
	皿		3	*135*
	盤状坏		209	*2080*
	盤状坏系坏蓋		3	*143*
	盤状坏系高盤ヵ		1	*52*
	盤状坏系小壺ヵ		6	*100*
	北武蔵系内屈口縁坏		5	*43*
	甲斐型坏	模倣ヵ	22	*139*
	甕（底部52片）		1690	*16972*
	武蔵型甕		36	*298*
	丸底甕		1	*268*
	甑ヵ		3	*65*
古式土師器	壺		3	*31*
	坩ヵ		2	*14*
	甕		2	*25*
	台付甕		8	*318*
	鉢ヵ		4	*52*
須恵器	坏		106	*1378*
	坏蓋		48	*673*
	皿		2	*5*
	瓶類		9	*435*
	甕		47	*757*
	甑ヵ		1	*68*
灰釉陶器	瓶類		4	*24*
	碗皿		5	*36*
木製品	用途不明		1	*20*
Ⅱe層（ⅠC区）				
ロクロかわらけ	小		1	*11*
	大		19	*236*
土器	小片		15	*40*
常滑	甕		3	*157*
渥美	甕		1	*52*
瓦質土器	火鉢		1	*16*
骨製品	卜骨		2	*4*
土師器	坏		84	*577*
	盤状坏		12	*71*
	甕（底部4片）		138	*1000*
	武蔵型甕		20	*106*
古式土師器	壺		3	*51*
須恵器	坏		12	*88*
	坏蓋		4	*88*
	甕		5	*82*
灰釉陶器	瓶類		3	*31*
Ⅱb層（ⅠC区）				
常滑	甕		1	*29*
土師器	甕（底部30片）		644	*8581*
	北武蔵系坏		1	*5*
	甑ヵ		1	*8*
	坏		176	*2830*
	盤状坏		55	*710*
	盤状坏系皿		2	*66*
	比企型坏		1	*4*
	武蔵型甕		6	*58*
	瑕ヵ		1	*17*
古式土師器	甕		1	*9*
	壺		8	*107*
須恵器	坏		8	*227*
	坏蓋		8	*150*
	甕		7	*212*
灰釉陶器	碗皿		2	*7*
土製品	管状土錘		1	*9*
骨製品	玉ヵ		1	*11*
	卜骨	Ⅴ型式	3	*7*
炉壁ヵ			1	*217*
軽石	自然円磨		3	*151*
獣骨			24	*58*

種別 産地等	器種	分類	破片数	重量 (g)
Ⅱ・Ⅲ層				
瓦	平瓦		1	52
古式土師器	壺		1	18
土師器	坏		2	8
	甕		6	59
	武蔵型甕		5	39
須恵器	坏		5	24
	坏蓋		1	13
	瓶類		2	221
	甕		2	18
灰釉陶器	碗皿		1	1
Ⅲ層				
土師器	坏		1	39
層位不明				
ロクロかわらけ	大		3	18
土師器	甕		2	17

種別 産地等	器種	分類	破片数	重量 (g)
1面　溝1				
ロクロかわらけ	小		7	53
	大		79	529
土器	小片		93	339
白磁	碗	Ⅸ類	1	3
白磁	碗皿		2	8
青白磁	水滴ヵ		1	2
	梅瓶		2	4
龍泉窯系青磁	碗	Ⅰ類	4	69
		Ⅲ類	1	7
	皿	Ⅰ類	1	8
	碗皿		2	7
	不明		1	7
舶載陶器	褐釉壺		1	6
瀬戸	天目茶碗		1	5
	平碗		5	18
	卸皿		2	18
	碗皿		4	25
	折縁深皿		1	13
	洗		1	21
	大皿		5	47
	壺・瓶		6	67
	小片		4	22
常滑	片口鉢	Ⅰ類	3	94
		Ⅱ類	5	174
	甕		89	2329
	転用研磨具		4	95
備前	すり鉢		1	33
瓦質土器	火鉢	Ⅱ類ヵ	1	22
			1	24
瓦	丸瓦		1	16
石製品	滑石鍋		1	16
	砥石		1	6
鉄滓			1	159
肥前系染付磁器	小片		1	4
陶器	不明		3	20
獣骨			1	5
土師器	坏		35	211
	盤状坏		4	32
	甕（底部1片）		34	343
	武蔵型甕		1	3
古式土師器	壺		1	10
須恵器	坏		9	63
	坏蓋ヵ		1	6
	甕		3	66
灰釉陶器	瓶類		2	5
2面　東西柱穴列ーア				
ロクロかわらけ	大		9	148
土器	小片		5	12
土師器	坏		3	52
	甕		5	28
須恵器	瓶類		1	11
灰釉陶器	碗		1	8
2面　東西柱穴列ーイ				
土師器	坏		4	25
	盤状坏		1	32
	甕		10	66
須恵器	坏		2	15
2面　東西柱穴列ーウ				
ロクロかわらけ	大		2	10
土器	小片		2	7
龍泉窯系青磁	碗皿		1	2
土師器	坏		1	7
	盤状坏		1	24
	盤状坏系坏蓋ヵ		1	23
	甕		2	12

種別 産地等	器種	分類	破片数	重量 (g)
2面　東西柱穴列－エ				
ロクロかわらけ	大		1	*14*
常滑	甕		1	*12*
古式土師器	壺		1	*10*
	甕		1	*13*
土師器	坏		1	*16*
	甕		2	*9*
2面　東西柱穴列－オ				
ロクロかわらけ	小		3	*17*
	大		6	*35*
軸釉陶器	黄釉鉄絵盤	泉州窯系	1	*19*
常滑	甕		2	*93*
土師器	坏		2	*19*
	盤状坏		2	*22*
	甕		9	*115*
須恵器	坏		2	*8*
	坏蓋		1	*7*
	瓶類		1	*94*
2面　東西柱穴列－カ				
ロクロかわらけ	大		2	*16*
土師器	坏		3	*28*
	盤状坏		3	*29*
	甕		6	*67*
須恵器	坏		2	*8*
	坏蓋		1	*18*
	甕		1	*36*
2面　東西柱穴列－キ				
ロクロかわらけ	大		5	*50*
常滑	片口鉢	II類	1	*70*
	甕		1	*29*
土師器	坏		11	*59*
	甕		9	*70*
	武蔵型甕		1	*21*
須恵器	瓶類		1	*15*
	甕		2	*36*
2面　東西柱穴列－ク				
常滑	甕		1	*56*
土師器	坏		1	*11*
2面　南北柱穴列－1				
龍泉窯系青磁	碗Ⅱ		1	*14*
常滑	甕		1	*18*
瓦質土器	火鉢	IIＤ類ヵ	1	*15*
土師器	坏		2	*12*
	盤状坏		1	*3*
	甕		2	*11*
古式土師器	壺		1	*15*
魚類骨			1	*47*
桃核			1	*1*
2面　南北柱穴列－2				
ロクロかわらけ	大		1	*19*
常滑	甕		1	*18*
土師器	甕		1	*2*
2面　南北柱穴列－3				
土器	小片		1	*2*
土師器	甕		1	*3*
須恵器	坏		1	*15*
2面　南北柱穴列－4				
ロクロかわらけ	大		3	*34*
瀬戸	入子		1	*11*
常滑	甕		1	*21*
土器	小片		5	*14*
土師器	甕		1	*12*
2面　南北柱穴列－6				
土師器	坏		1	*5*
	甕		6	*108*
骨製品	卜骨ヵ		1	*2*

種別 産地等	器種	分類	破片数	重量 (g)
2面　溝2				
ロクロかわらけ	大		19	*129*
土器	小片		17	*36*
白磁	盌		1	*10*
常滑	片口鉢	I～II類	1	*47*
		II類	1	*63*
	甕	6ヶ体成まで	3	*90*
土師器	坏		114	*852*
	皿		1	*18*
	盤状坏		18	*156*
	盤状坏系坏蓋		3	*46*
	盤状坏系盤		1	*23*
	盤状坏系皿ヵ		1	*4*
	甕（底部6片）		185	*1618*
	武蔵型甕		5	*72*
ロクロ土師器	坏		1	*21*
須恵器	坏		5	*39*
	坏蓋		3	*46*
	瓶類		3	*13*
	甕		2	*104*
骨製品	卜骨	V型式	3	*8*
獣骨	加工品ヵ		2	*6*
			8	*10*
2面　溝3				
ロクロかわらけ	小		1	*5*
	大		18	*139*
土器	小片		4	*12*
常滑	甕		2	*77*
瓦質土器	火鉢ヵ		1	*45*
土師器	坏		6	*27*
	盤状坏		2	*38*
	甕		18	*164*
ロクロ土師器ヵ	坏ヵ		1	*3*
須恵器	瓶類		1	*16*
獣骨			5	*10*
2面　土坑5				
常滑	甕		2	*100*
2面　土坑6・7				
ロクロかわらけ	小		1	*6*
	大		120	*101*
土器	小片		6	*17*
白磁	皿	IX類	1	*3*
龍泉窯系青磁	碗	II類	1	*4*
			1	*1*
瀬戸	卸皿		1	*4*
	柄付片口ヵ		1	*8*
	皿		1	*3*
	大皿		1	*8*
尾張型	山茶碗（無台）		1	*31*
常滑	片口鉢	I類	1	*9*
	甕		18	*844*
備前	すり鉢		1	*10*
瓦質土器	火鉢	III類	1	*21*
近世磁器	碗		1	*2*
	坏		7	*62*
土師器	甕		9	*110*
	武蔵型甕		1	*7*
須恵器	坏		2	*15*
	甕		1	*24*
獣骨			4	*16*
2面　土坑12				
土師器	坏		4	*19*
	甕		5	*72*
魚類骨			1	*2*

表４　出土遺物観察表

（　）＝復元値　［　］＝残存値

遺物番号	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径・長さ	底径・幅	器高・厚さ	重量(g)	胎土	色調 素材／表面	内底調整	外底圧痕	出土遺構・胎土ほかの特徴
SB8 1	在地土器	土師器 坏	1/2弱	(14.8)	—	4.0	[84]	密	黄橙			相模型坏と同質の粘土
SB8 2	骨製品	卜骨	不明	長さ [3.2]	幅 2.3	厚さ 0.3	[1]					V型式 擦4、焼灼1
SB8 3	搬入陶器	須恵器 坏	底	—	(4.8)	[1.4]	[24]	密	灰			埼玉県の窯産ヵ
SB8 4	国産陶器	常滑 転用研磨具	—	長さ 4.5	幅 3.7	厚さ 1.0	22	普通	褐			甕胴部片を転用
SB8 5	在地土器	土師器 坏蓋	1/2弱	(17.6)	—	[2.3]	[114]	密 微砂	赤橙			盤状坏系 骨針化石
SB8 6	骨製品	卜骨	不明	長さ [5.0]	幅 1.8	厚さ 0.2	[2.6]					V型式 擦2、焼灼3
SB8 7	骨製品	卜骨	不明	長さ [2.4]	幅 [0.9]	厚さ 0.2	[0.6]					V型式 擦3、焼灼2
SB8 8	獣骨	加工品ヵ	不明	長さ [5.6]	幅 1.3	厚さ 1.1	[4.9]					明瞭な切削・研磨痕はない
SB8 9	骨製品	卜骨	不明	長さ [8.1]	幅 1.5	厚さ 0.5	[5.6]					V型式 擦2
SB8 10	在地土器	ロクロ かわらけ・大	1/3	(12.8)	(8.5)	3.5	[74]	B	黄橙	ナデ		内外面に油煤付着
SB8 11	在地土器	土師器 相模型甕	底1/2	—	(9.8)	[3.3]	[124]	雑砂	淡黄橙			置台痕
SB8 12	搬入陶器	須恵器 瓶	底	—	(12.2)	[3.5]	94	密	灰			内外面に自然釉
SB8 13	在地土器	ロクロ かわらけ・大	1/4	(12.8)	(8.0)	3.0	[39]	B	灰黄	ナデ	板状	
SB8 14	在地土器	土師器 甕	口1/8	(14.5)	—	[6.5]	[54]	やや粗	淡黄橙			胴部外面タテヘラケズリ
SB9 15	在地土器	ロクロ かわらけ・小	1/3	(7.9)	(5.0)	1.8	[10]	B+C	黄橙	ナデ		ﾋﾞ
SB9 16	国産陶器	常滑 転用研磨具	—	長さ 6.3	幅 4.7	厚さ 1.0	31	普通	褐			甕胴部片を転用
SB9 17	国産陶器	常滑 転用研磨具	—	長さ 6.7	幅 5.0	厚さ 1.3	48	普通 長石	褐			甕胴部片を転用
SB9 18	国産陶器	常滑 転用研磨具	—	長さ 6.9	幅 6.6	厚さ 1.4	70	普通	褐			甕胴部片を転用
SB9 19	国産陶器	常滑 転用研磨具	—	長さ 4.8	幅 4.9	厚さ 1.3	34	普通	褐			甕胴部片を転用
SB9 20	搬入陶器	須恵器 転用研磨具	—	長さ 3.8	幅 3.6	厚さ 0.8	14	密	灰			甕胴部片を転用
SB9 21	国産陶器	瀬戸 底卸目皿	底1/4弱	—	(7.2)	[2.2]	[33]	密	灰白			内外面に灰釉 内底面に3花弁の押印
SB9 22	土製品	管状土錘	両端欠	長さ [3.3]	径 1.1	孔径 0.4	[3]	微砂	淡橙			
SB9 23	土製品	管状土錘	一端欠	長さ [3.2]	径 1.1	孔径 0.4	[4]	微砂	淡橙			
SB9 24	土製品	管状土錘	ほぼ完形	長さ 4.2	径 1.5	孔径 0.5	[8]	微砂	淡橙			
SB9 25	石製品	火打石	—	長さ 1.5	幅 1.9	厚さ 1.4	7		白			石英 稜角に打撃痕
SB9 26	在地土器	土師器 小型甕	口1/4	(11.2)	—	[5.5]	[62]	密	黄橙			胴部外面タテヘラケズリ
SB9 27	在地土器	古式土師器 台付甕	脚台	—	7.8	[4.0]	[75]	粗	淡黄橙			角閃石
SB9 28	搬入陶器	須恵器 坏	底	—	(5.4)	[1.8]	[31]	密	灰			埼玉県の窯産ヵ
SB9 29	搬入陶器	須恵器 甕	口小片	—	—	[3.8]	[45]	密	灰			黒色粒子 外面櫛描列点文(7面)
SB9 30	搬入陶器	須恵器 甕	胴小片	—	—	—	[88]	密	灰			黒色粒子 外面平行タタキ 内面当て具痕ナデ消し
SB9 31	国産陶器	産地不詳 四合徳利	完形	2.5	7.8	22.8	807	密	灰広			外全面透明釉一藍色で屋号を筆書き
SB9 32	瓦	桟瓦	ほぼ完形	長さ 28.5	幅 28.3	厚さ 1.7	[2170]	密	灰/灰黒			焼し瓦 二次被熱 凸面「尾張國知多郡樽水/大神上無類清合/鷹元山田屋八郎」の刻印、横方向の櫛歯工具痕

（ ）＝復元値　［ ］＝残存値

遺物番号	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径・長さ	底径・幅	器高・厚さ	重量(g)	胎土	色調 素材／表面	内底調整	外底圧痕	出土遺構・胎土ほかの特徴
図10 33	在地土器	ロクロ かわらけ・小	1/3	(6.0)	(4.0)	1.8	[12]	B	橙	ナデ	板状	
図10 34	在地土器	ロクロ かわらけ・小	1/4	(7.8)	(6.0)	[1.9]	[16]	B	橙	ナデ	板状	
図10 35	在地土器	ロクロ かわらけ・小	1/4	(8.1)	(6.8)	1.6	[15]	B	灰黄	ナデ		
図10 36	在地土器	ロクロ かわらけ・大	1/4	[12.7]	[7.0]	3.4	[33]	B	橙	ナデ		
図10 37	国産陶器	常滑 転用砥石	—	長さ 8.7	幅 5.9	厚さ 1.1	81	普通長石	褐			壺胴部片を転用
図10 38	国産陶器	常滑 転用砥石	—	長さ 4.4	幅 2.5	厚さ 1.4	18	普通長石	褐			壺胴部片を転用
図10 39	国産陶器	常滑 転用砥石	—	長さ 5.0	幅 4.2	厚さ 1.1	30	普通長石	褐			壺胴部片を転用
図10 40	国産陶器	常滑 転用砥石	—	長さ 5.0	幅 2.9	厚さ 0.9	17	普通長石	褐			壺胴部片を転用
図10 41	在地土器	瓦質土器 火鉢	口小片	—	—	[3.1]	[30]	密	灰／暗灰			Ⅳ A類 割れ口摩耗
図10 42	石製品	碁石	完形	径 1.8	—	厚さ 0.5	3		黒			
図10 43	搬入土器	土師器 武蔵型甕	口小片	—	—	[3.4]	[13]	微砂	淡黄橙			
図10 44	在地土器	土師器 甕	3/4	—	[9.2]	[2.2]	[177]	粗	黄橙			口縁部黒変
図10 45	搬入陶器	坏	底3/4	—	4.8	[0.9]	[21]	微砂	灰			底部外面回転糸切り痕 骨針化石 消比企窯産ヵ
図10 46	搬入陶器	須恵器 甕	口小片	—	—	[4.1]	[33]	細砂	黒灰			外面櫛描波状文(12歯)
図10 47	搬入陶器	須恵器 甕	胴小片	—	—	—	[16]	密	灰			外面平行タタキ 内面当て具痕ナデ消し
図10 48	搬入陶器	須恵器 甕	胴小片	—	—	—	[33]	密	灰白			外面ナデ 内面同心円状の当て具痕
図11 49	在地土器	ロクロ かわらけ・小	4/5	7.8	5.8	1.5	[44]	B	淡黄橙	ナデ		
図11 50	在地土器	土師器 坏	1/4弱	(11.8)	—	3.0	[59]	密	赤橙			
図11 51	在地土器	土師器 坏	1/3	(13.0)	—	[3.0]	[36]	密	黄橙			相模型坏と同質の胎土
図11 52	在地土器	土師器 坏	3/4	13.8	—	3.8	[122]	密	黄橙			雲母粒
図11 53	在地土器	土師器 坏	1/4	(14.0)	—	3.8	[68]	密	淡橙			
図11 54	在地土器	土師器 坏	1/2	(14.4)		4.0	[121]	密	淡黄橙			
図11 55	在地土器	土師器 坏	2/3	15.0	—	4.0	[141]	密	橙			雲母粒微量
図11 56	在地土器	土師器 坏	2/3	(14.0)	—	4.5	[105]	密	淡黄橙			雲母粒
図11 57	在地土器	土師器 坏	1/2	14.2	—	4.1	[104]	密	橙			
図11 58	在地土器	土師器 坏	1/4	(13.9)	—	4.1	[67]	密	赤灰褐			微砂質、骨針化石
図11 59	在地土器	土師器 相模型坏	2/3	11.7	6.5	3.9	[116]	密	淡黄橙			スコリア粒
図11 60	在地土器	土師器 相模型坏	1/4弱	(15.5)	(10.3)	5.7	[103]	密	淡黄橙			骨針化石
図11 61	在地土器	ロクロ土師器 甲斐型坏ヵ	2/3	(12.5)	5.8	4.5	[87]	微砂	淡橙			甲斐型模倣坏ヵ
図11 62	在地土器	土師器 盤状坏	2/3	(11.9)	(8.2)	2.9	[91]	密	淡黄灰／赤橙			微砂質 内外面赤色塗彩
図11 63	在地土器	土師器 盤状坏	1/4	(13.0)	(10.3)	2.9	[55]	密	灰黄			微砂質
図11 64	在地土器	土師器 盤状坏	2/3	(15.6)	(10.3)	3.9	[101]	細砂	赤橙			全面赤色塗彩
図11 65	在地土器	土師器 盤状坏	1/6	(19.9)	(17.5)	2.7	[63]	密	淡赤橙			骨針化石

（ ）＝復元値　［ ］＝残存値

遺物番号	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径・長さ	底径・幅	器高・厚さ	重量(g)	胎土	色調 素材／表面	内底調整	外底圧痕	出土遺構・胎土ほかの特徴
図11 66	在地土器	土師器 坏	底小片	—	—	厚さ 0.7	[14]	密	橙			雲母粒 外面に墨書ヵ　判読不可
図11 67	在地土器	土師器 皿	1/4	(13.4)	—	[2.2]	[40]	密	黄橙			雲母粒 相模型坏と同質の胎土
図11 68	在地土器	土師器 皿	1/6	(16.1)	(9.0)	2.3	[51]	微砂	灰黄			復元径は不確実 盤状坏系皿の模倣ヵ
図11 69	在地土器	土師器 皿	1/4	(20.7)	—	[2.7]	[44]	微砂	橙			復元径は不確実
図11 70	在地土器	土師器 小型甕	口1/4 底完存	(11.6)	8.5	9.6	[214]	細砂	赤橙			角閃石 相模型ヵ
図11 71	在地土器	土師器 小型底	上部 1/4	(9.8)	—	[4.7]	[28]	密	橙			盤状坏系 骨針化石
図11 72	在地土器	土師器 鉢ヵ	口小片	—	—	[7.9]	[81]	細砂	淡黄橙			雲母粒、骨針化石 相模型甕と同質の胎土
図12 73	在地土器	土師器 相模型甕	口1/6	(22.0)	—	[14.0]	[202]	細砂	灰黄			長胴甕
図12 74	在地土器	土師器 相模型甕	口1/4	(20.3)	—	[4.3]	[113]	細砂	黄橙			
図12 75	搬入土器	土師器 武蔵型甕	口1/4	(19.0)	—	[.3]	[55]	微砂	赤橙			雲母粒
図12 76	在地土器	土師器 相模型甕	口1/6	(22.3)	—	[8.3]	[86]	細砂	淡黄橙			長胴甕
図12 77	搬入土器	土師器 武蔵型甕	口1/3	(21.6)	—	[5.7]	[76]	細砂	赤橙			
図12 78	在地土器	土師器 相模型甕	口1/3	(23.8)	—	[6.3]	[215]	細砂	赤橙			長胴甕 雲母粒
図12 79	在地土器	土師器 相模型甕	底1/3	—	(8.0)	[8.4]	[85]	細砂	黄灰			長胴甕
図12 80	在地土器	土師器 相模型甕	底1/2	—	(8.5)	[3.6]	[101]	細砂	赤橙			底部の木葉痕は2枚分
図12 81	搬入土器	土師器 甕	底	—	—	[2.5]	[256]	やや粗	淡黄橙			丸底甕
図12 82	在地土器	古式土師器 台付甕	脚大	—	—	[6.5]	[190]	密	淡黄橙			
図12 83	在地土器	土師器 相模型甕	底 1/3	—	(8.0)	[4.4]	[81]	細砂	橙/ 黒灰			底部外面に木葉痕
図12 84	在地土器	土師器 相模型甕	底 1/2	—	(8.4)	[1.9]	[54]	細砂	灰黄			骨針化石 底部外面に木葉痕
図12 85	在地土器	古式土師器 甕	口小片	—	—	[2.1]	[13]	細砂	褐			骨針化石
図12 86	搬入土器	土師器 武蔵型甕	口小片	—	—	[3.8]	[18]	細砂	黄橙			雲母粒
図12 87	在地土器	土師器 蓋ヵ	偏状 ツマミ	ツマミ径 4.8	—	[1.6]	[22]	微砂	橙			盤状坏系 骨針化石
図12 88	搬入陶器	須恵器 坏	底完存	—	5.0	[1.3]	[29]	微砂	灰白			埼玉県の窯産ヵ
図12 89	搬入陶器	須恵器 坏	2/3	(10.1)	(6.3)	3.2	[47]	密	灰			黒色粒子 調西窯産ヵ
図12 90	搬入陶器	須恵器 高台付坏	1/4	(13.4)	(9.2)	4.1	[46]	密	灰			削り出し高台 黒色粒子 調西窯産ヵ
図12 91	搬入陶器	須恵器 坏	1/2弱	(14.8)	(7.5)	5.6	[103]	やや粗	灰			骨針化石 南比企窯産ヵ
図13 92	搬入陶器	須恵器 高台付坏	1/2弱	(13.6)	(10.0)	4.0	[83]	密	灰			貼付け高台 黒色粒子 調西窯産ヵ
図13 93	搬入陶器	須恵器 高台付坏	口1/4 底完存	(14.2)	9.0	4.0	[132]	密	灰			黒色粒子 調西窯産ヵ
図13 94	搬入陶器	須恵器 高台付坏	底完存	—	9.0	[1.9]	[91]	密	灰			黒色粒子 調西窯産ヵ 外底面焼成前線刻「×」
図13 95	搬入陶器	須恵器 坏蓋	3/4	14.8	ツマミ径 2.5	3.3	[174]	密	灰			ツマミ高1.1cm 黒色粒子 調西窯産ヵ
図13 96	搬入陶器	須恵器 長頸瓶	口～頸	11.7	—	[12.8]	[346]	密	灰			口縁部内面に自然釉
図13 97	搬入陶器	須恵器 甕	口小片	—	—	[4.1]	[67]	微砂	黒灰			外面櫛描波状文(8歯)
図13 98	搬入陶器	須恵器 甕	胴小片	—	—	—	[49]	微砂	灰			外面平行タタキ 内面当て具痕ナデ消し

（ ）＝復元値　［ ］＝残存値

遺物番号	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径・長さ	底径・幅	器高・厚さ	重量(g)	胎土	色調 素材／表面	内底調整	外底圧痕	出土遺構・胎土ほかの特徴
図13 99	石製品	砥石	1/2ほど完形	長さ 10.9	幅 5.8	厚さ 3.0	[225]		灰白			凝灰岩製ヵ
図13 100	骨製品	卜骨	不明	長さ [9.7]	幅 [2.2]	厚さ 0.4	[5]					V型式 鎖12、焼灼11
図13 101	骨製品	卜骨	不明	長さ [4.2]	幅 1.4	厚さ 0.5	[2]					V型式 鎖2、焼灼1
図13 102	骨製品	卜骨	不明	長さ [3.6]	幅 1.3	厚さ 0.4	[1]					V型式 鎖1、焼灼1
図13 103	骨製品	卜骨	不明	長さ [2.2]	幅 [1.2]	厚さ 0.4	[1] 未満					V型式 鎖4、焼灼2
図13 104	骨製品	卜骨	不明	長さ [1.7]	幅 [1.1]	厚さ 0.2	[1] 未満					V型式 鎖3、焼灼3
図13 105	骨製品	不明	不明	長さ [5.5]	幅 [1.7]	厚さ [1.1]	[7]					骸骨加工品 表面に直径2～3mmの円形刺突痕が多数
図13 106	骨角製品	鹿角切断片	不明	長さ 4.9	幅 4.5	厚さ 3.0	[38]					貫通孔2ヶ所
図13 107	骨製品	不明	不明	長さ [7.4]	幅 1.2	厚さ 1.1	[7]					非貫通孔3ヶ所
図13 108	在地土器	ロクロかわらけ・火	4/5	(12.5)	8.0	3.3	[126]	B	橙	ナデ	—	内面に黒色の付着物
図13 109	在地土器	土師器 相模型坏	1/5	(14.3)	8.6	4.3	[60]	密	淡黄橙			
図13 110	在地土器	土師器 相模型甕	底1/2	—	5.3	[2.3]	[29]	細砂	淡橙／黒褐			
図13 111	搬入陶器	須恵器 坏蓋	口欠 1/3	—	—	[3.7]	[101]	密	灰			調西窯産ヵ
図13 112	骨製品	卜骨	不明	長さ [4.5]	幅 2.0	厚さ 0.3	[2.0]					V型式 鎖6、焼灼2
図13 113	骨製品	卜骨	不明	長さ [3.6]	幅 2.4	厚さ 0.2	[1.5]					V型式 鎖5、焼灼2
図13 114	骨製品	卜骨	不明	長さ [3.1]	幅 [1.1]	厚さ 0.3	[0.8]					V型式 鎖4、焼灼3
図14 115	在地土器	土師器 坏	3/4	14.6	—	4.0	[174]	密	淡黄橙			
図14 116	在地土器	土師器 坏	1/4	14.2	—	3.4	[71]	密	淡黄橙			
図14 117	在地土器	土師器 坏	1/4弱	(13.8)	—	3.3	[69]	B	淡黄灰			
図14 118	在地土器	土師器 坏	1/3	(15.2)	—	3.7	[54]	密	淡黄橙			
図14 119	在地土器	土師器 坏	1/2	(15.0)	—	3.9	[96]	密	淡黄橙			相模型坏と同質の胎土
図14 120	在地土器	土師器 盤状坏	1/4	(11.5)	(7.6)	3.3	[37]	密	橙			体部内面に斜状暗文
図14 121	在地土器	土師器 盤状坏	底1/4	—	(8.6)	[0.6]	[21]	密	橙			底部内面に螺旋状暗文
図14 122	在地土器	土師器 高台付盤状坏	底2/3	—	(10.8)	[2.3]	[72]	微砂	黄橙			骨針化石 体部内面放射状・底部内面螺旋状の暗文
図14 123	在地土器	土師器 高台付盤状坏	1/4	(15.8)	(11.0)	4.9	[101]	密	橙			骨針化石
図14 124	在地土器	土師器 高台付盤状坏	底1/3	—	11.0	[4.0]	[107]	微砂	黄橙			底部内面に螺旋状暗文
図14 125	在地土器	土師器 盤状坏系皿	口1/4	(18.9)	—	[2.4]	[47]	細砂	赤橙			雲母粒 漆の可能性もあり
図14 126	在地土器	古式土師器 甕	口小片	—	—	[2.5]	[9]	細砂	灰褐			口縁端部外面に工具刺突による キザミ
図14 127	在地土器	土師器 甕	口1/6	(22.8)	—	[9.3]	[152]	密	黄橙			胴部外面タテハラケズリ
図14 128	在地土器	土師器 相模型甕	口1/3	(22.2)	—	[12.2]	[242]	細砂	黄橙			長胴甕 雲母微粒
図14 129	在地土器	土師器 相模型甕	底3/5	—	(9.1)	[9.8]	[120]	細砂	淡黄橙			長胴甕 外面底部付近が黒変
図14 130	在地土器	土師器 相模型甕	底1/3	—	(8.0)	[7.8]	[121]	細砂	橙			長胴甕 角閃石
図14 131	在地土器	土師器 相模型甕	底3/5	—	(9.6)	[4.2]	[134]	細砂	灰／黒灰			胴張甕 強い被熱のため還元化

（ ）＝復元値　［ ］＝残存値

遺物番号	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径・長さ	底径・幅	器高・厚さ	重量(g)	胎土	色調 素材/表面	内底調整	外底圧痕	出土遺構・胎土ほかの特徴
図15 132	在地土器	土師器 相模型甕	底1/3	—	(8.2)	[4.5]	[48]	細砂	淡黄橙			長胴甕 雲母微粒
図15 133	在地土器	土師器 相模型甕	底1/4	—	(9.5)	[10.0]	[163]	細砂	黄橙			長胴甕 外面底部付近が黒変
図15 134	在地土器	土師器 相模型甕	底3/4	—	9.2	[13.0]	[233]	細砂	淡黄橙			長胴甕
図15 135	搬入陶器	須恵器 坏	1/3	15.2	(3.8)	3.4	[85]	やや粗	灰			黒色粒子 口縁部内外面後成時黒変
図15 136	搬入陶器	須恵器 坏蓋	口欠	—	ツマミ径 2.4	[2.5]	[66]	密	灰			湖西窯産ヵ
図15 137	搬入陶器	須恵器 高台付坏	底	—	10.3	[2.0]	[126]	密	灰			黒色粒子 湖西窯産ヵ
図15 138	搬入陶器	須恵器 甕	口小片	—	—	[4.6]	[33]	密	灰			内面に自然釉 黒色粒子 湖西窯産ヵ
図15 139	搬入陶器	須恵器 甕	口1/8	(21.2)	—	[7.3]	[65]	密	灰	ナデ		長石 復元径は不確実
図15 140	搬入陶器	須恵器 甕	胴小片	—	—	—	[117]	密	灰	ナデ	板状	外面格子状平行タタキ 内面同心円状当て具痕
図15 141	骨製品	玉ヶ	完形	長さ 2.7	最大径 2.2	孔径 0.9	11		赤			刀物で面取り整形 表面に赤色塗彩
図15 142	搬入土器	土師器 武蔵型甕	口小片	—	—	[3.4]	[11]	細砂	赤橙			
図15 143	搬入陶器	須恵器 瓶	底1/4	—	(12.7)	[4.3]	[210]	やや粗	灰/緑灰			高台内まで自然釉
図16 144	銅製品	小皿	完形	5.8	2.1	1.2	27					仏具ヵ
図16 145	銅製品	馬具 轡鏡板	完形	全長 10.8	全幅 4.0	厚さ 0.3	35					金銅製 表面木の葉文を毛彫り

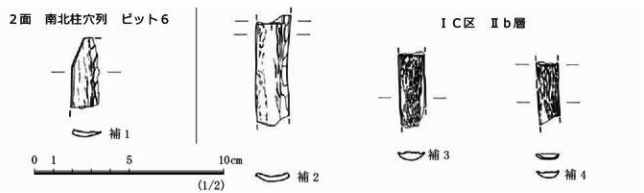


図 17　出土遺物（10）

表 5　出土遺物観察表（補）

遺物番号	種別	器種	残存率	法量(cm) 口径・長さ	底径・幅	器高・厚さ	重量(g)	胎土	色調 素材/表面	内底調整	外底圧痕	出土遺構・胎土ほかの特徴
図17 補1	骨製品	卜骨ヵ	不明	長さ [3.7]	幅 [1.5]	厚さ 0.2	[2.0]					V型式ヵ、擦1ヵ
図17 補2	骨製品	卜骨	不明	長さ [5.8]	幅 1.8	厚さ 0.3	[3.8]					V型式 擦1
図17 補3	骨製品	卜骨	不明	長さ [4.0]	幅 1.3	厚さ 0.5	[1.6]					V型式 擦1
図17 補4	骨製品	卜骨	不明	長さ [3.4]	幅 1.1	厚さ 0.3	[0.9]					V型式 擦1

第六章　調査成果のまとめ

以上、本地点の調査成果について述べてきた。遺構を確認できたのは１面と２面のみで、３面は湧水のため十全な調査が叶わなかったものの、おそらく無遺物層となろう、Ⅳ層の堆積を標高 5.1 m前後で確認することができた。図１－❸・❼地点などの成果から、さらに１m前後の深さで渡食台の岩盤面に達することが推察される。

１面では北に向かう落ち込み（溝１）が検出され、現行の敷地北接道路と概ね同じ方向で延びていた。埋土中には富士山の宝永火山灰がまとまって廃棄されており、江戸時代前期以降となる土地利用の痕跡を確認したことになる。また、詳細な調査対象には含めなかったものの、調査区の東端部で検出された、被熱した桟瓦を充填するように廃棄した大型土坑は、大正の関東大地震にともなう火事場整理を窺わせる事例として注目される。

２面では溝２で連結された東西柱穴列を確認し、各柱穴の底面には１～３枚の礎板が遺存していた。110 ㎝≒半間スパンで並び、南北への展開が見られなかったことから、板塀などの基礎部分と見なせる。僅少な出土遺物からは、鎌倉時代後期、13 世紀中頃～後半の遺構であったと考えられる。これらより新しい溝３、土坑５～７、南北柱穴列といった遺構が確認され、埋土や出土遺物の様相から考えると、東西柱穴列とは時代を隔てた、中世後期～近世初頭の所産の可能性が高いだろう。

２面下＝Ⅱ層～Ⅲ層の掘り下げに際しては、確実な遺構を検出することはなかったものの、遺存度の高い古代遺物が一定量出土している。中心となるのは８世紀前葉の資料で、９世紀後半～ 10 世紀前葉の遺物も少量ながら含まれる。また、若干量の中世遺物も見られたが、上層遺構の掘り残しなどによる混入品と考えている。Ⅱ層～Ⅲ層は黒色～暗褐色に漸移する腐植土を含む砂質土で、低湿地的環境下で堆積したと考えられる。由比ガ浜大通り（県道 311 号）を挟んだ南東側は砂丘地形となり、図１－②⑬⑯⑱などでは標高７～９mの砂層上に竪穴住居や埋葬遺構が営まれていることを考えると、本調査地の古代層＝Ⅱ・Ⅲ層が標高 5.1 ～ 5.6 mに堆積している点は如何にも低く、土質を見ても居住・生活空間としては適地ではなかったことが推察できる。本地点北方の地点❶でも平安時代の竪穴住居が確認されていること（鎌倉考古学研究所 1981）を勘案すれば、居住空間は丘陵裾と砂丘上の微高地に設定され、低湿地や砂丘斜面はその限りではなかったと考えるのが妥当であろう。こうした砂丘背後の湿地帯には笹目谷や長谷方面からの旧流路＝稲瀬川・美奈能瀬川に繋がる前身河川があったことも想定され、こうした旧地形の復元と合わせて、古代遺跡の分布や特質を考える必要があるだろう。

古代の出土遺物は土師器・須恵器を主体とし、大よその器形復元が可能な個体も一定量あったものの、完形にまで接合・復元できた資料は皆無であった。この点も、当地周辺が居住域でなかったことを示唆していよう。上述のように８世紀前葉の資料が主体で、土師器坏は古墳後期の有稜坏からの系譜を継ぎ相模型坏の前身に位置付く「扁平丸底坏」が最も多く、畿内産暗文土器の模倣系である盤状坏がこれに次ぐ。盤状坏は出土量の多寡はあるものの、当該期の鎌倉郡域では官衙・寺院や集落を問わず普遍的に出土する土器で、同質の胎土・成整形技法を用いた盤・坏蓋などの器種がある。胎土に骨針化石を含む特徴から、搬入品ではなく鎌倉周辺の在地産と考えられる。土師器煮炊具は、底部外面に木葉痕を残し胴部外面をナデ調整した相模型甕が主体で、胴部外面をヘラケズリ調整して薄手・硬質に仕上げた武蔵型甕の出土量が次ぐ。武蔵型甕は⑬⑯⑱で住居・火葬墓における使用例があり、平安時代に下ると目立つ印象がある。今回の調査では、三浦型甕と呼ばれる短頸の粗製土器は確認できなかった。９世紀に顕

在化する土器であることと、日常使いの煮炊具というよりは海産物の加熱処理といった用途を想定できる土器であることが、こうした出土傾向に関係しているのかもしれない。

須恵器では湖西窯産と見られる「出尻」高台付坏や、これとセットをなす坏蓋などの供膳具が大半を占め、甕・瓶などの貯蔵具は少量の小破片が出土しているに過ぎない。

本地点では、獣骨を加工して祭祀具として用いた卜骨も何点か出土している。すべて半截した管状骨の海綿体を整形して長方形鑿を削り込み、その底面に「一」や「十」形の焼灼痕が残る。神澤勇一氏の分類では第Ⅴ型式に位置付けられるもので、三浦市間口洞窟や横須賀市鉈切遺跡の卜甲例などにより、古墳時代後期以降の所産と見なせる（神澤 1990）。由比ガ浜の砂丘上では７世紀後葉～末葉の遺構から出土しており、８世紀前半に盛行する点、本地点の遺物様相とも整合する。鎌倉における出土エリアが海浜部に限定される点は三浦半島とも共通する要素で、ともに漁労活動や海産物加工を窺わせる用具・動物遺体が出土していることから、私見では、卜骨は海上・海辺を主たる生業の舞台とした集団特有の祭具と考えている（押木 2004）。本地点は砂丘後背湿地のため古代の生活遺構は確認できなかったが、出土遺物の特徴を鑑みるに、海浜部での生活・生業を行う集団の活動範囲に含まれていたと考えて大過ないだろう。

今回、神奈川県でも初の出土例として、馬具の轡を装飾する金銅製長方形鏡板が特筆される。東日本を中心に終末期古墳への副葬例が知られ、ａ）金銅製一枚板を素材とし、ｂ）周縁を毛彫り文様で囲む特徴から、佐藤信孝氏の「３類」に相当する。千葉県六孫王原古墳や山梨県御崎古墳で類例が出土し、前者に７世紀後半の須恵器大甕がともなっている点、年代の根拠に置かれている（佐藤 2005）。本地点の主体となる土器群は７世紀後葉まで遡る資料も含むので、鏡板と年代上の誤差はないように思える。問題は当資料の出自・来歴であるが、類例の在り方を見れば、本来は古墳（墳墓）への副葬であったと考えるのが自然だろう。ただし、当地点周辺に限ってみると高塚墳の徴証となる考古学的知見はなく、砂丘上東方の采女塚（向原古墳群）とは 700 m近くの距離があり、同古墳の出土とされる形象埴輪とも年代に開きがある。鎌倉文学館の敷地内で横穴墓が発見されているので（長楽寺谷戸横穴群・長楽寺山横穴＝図２参照）、近傍の丘陵崖面に穿たれた横穴墓への副葬品であった可能性も考慮すべきだろう。一般に高塚墳よりも低い被葬者階層が想定される横穴墓ではあるが、県下では威信財ともいえるような装飾付きの武具・馬具を副葬した横穴墓が少なくない点、参考となろう。当資料については現在、保存処理を施した際の化学的分析結果を得ている。その内容については、改めて報告の機会を設けたい。

参考文献

神澤勇一 1990「呪術の世界―骨卜のまつり」『弥生人とまつり』六興出版

鎌倉考古学研究所 1981『掘り出された鎌倉』

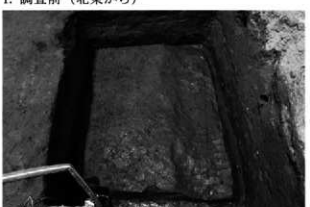
押木弘己 2004「古代鎌倉の卜骨と三浦半島―律令期における海浜部集落の一側面―」『考古論叢　神奈河』第 12 集　神奈川県考古学会

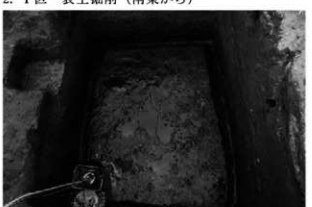
佐藤信孝 2005「終末期古墳出土馬具の変遷―長方形鏡板付轡の変遷―」『電子考古学』第１号（web 公開）

大谷宏治 2018「第４章　第３節　東平１号墳副葬馬具と大刀の特徴からみた被葬者像」『伝法　東平１号墳』富士市教育委員会

1. 調査前（北東から）

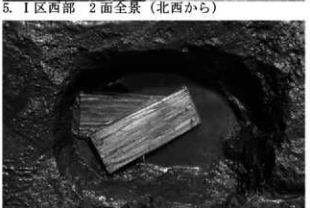
2. Ⅰ区　表土掘削（南東から）


3. Ⅰ区北部　2 面全景（東から）


4. Ⅰ区北部　3 面全景（東から）

5. Ⅰ区西部　2 面全景（北西から）

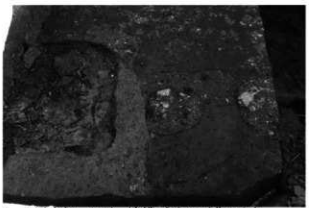
6. Ⅰ区西部　2 面柱穴列（3 面時、東から）


7. Ⅰ区西部　2 面柱穴礎板（3 面時、西から）

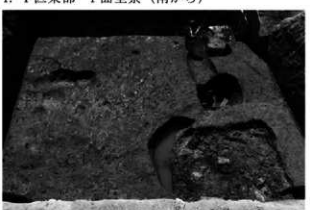
8. Ⅰ区西部　3 面全景（西から）

図版２

1. Ⅰ区東部　1面全景（南から）

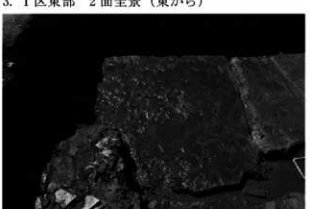


2. Ⅰ区東部　2面　遺構プラン（北から）

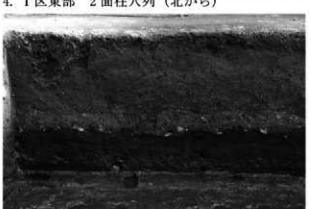


3. Ⅰ区東部　2面全景（東から）

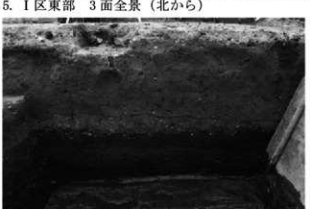
4. Ⅰ区東部　2面柱穴列（北から）



5. Ⅰ区東部　3面全景（北から）



6. Ⅰ区東部　調査区南壁断面（北から）

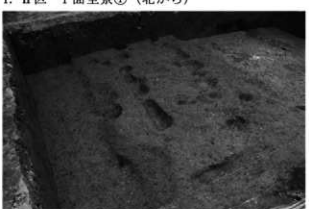


7. Ⅰ区西部　調査区南壁断面（北から）

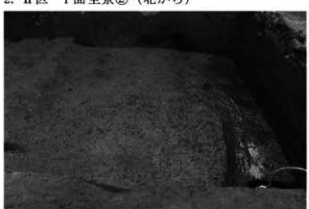
8. 同左　測量作業（北西から）

1. Ⅱ区　1面全景①（北から）

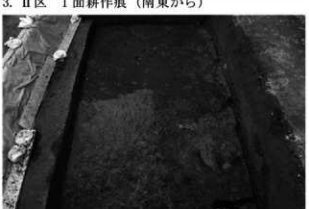
2. Ⅱ区　1面全景②（北から）



3. Ⅱ区　1面耕作痕（南東から）



4. Ⅱ区　1面溝1（西から）



5. Ⅱ区　2面遺構プラン（北から）

6. Ⅱ区　2面全景（南西から）

7. Ⅱ区　2面南北柱穴列（南から）

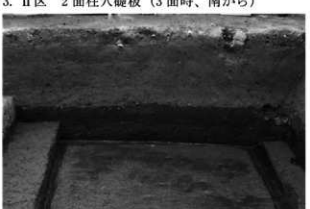
図版4

1. Ⅱ区　3面全景（北から）

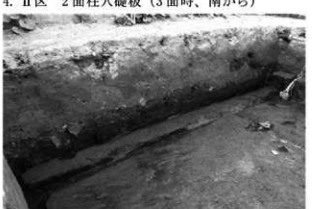
2. Ⅱ区　2面柱穴礎板（3面時、南から）

3. Ⅱ区　2面柱穴礎板（3面時、南から）

4. Ⅱ区　2面柱穴礎板（3面時、南から）



5. Ⅱ区　調査区南壁断面（北から）



6. Ⅱ区　調査区西壁断面（南東から）

7. Ⅱ区　埋め戻し（南西から）

8. 調査完了後（南東から）

図 8-1

確認調査

図 8-2

図 8-4

1面　溝1

図 8-5

図 8-6

図 8-7

図 8-8

図 8-9

2面　溝2

図 8-14

2面　南北柱穴列　ピット6

図 9-16

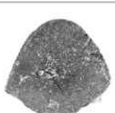


図 9-18

図 9-19

図 9-20

図 9-22

図 9-23

図 9-24

図 9-25

図 9-26

図 9-27

図 9-29

表土

縮尺＝約 2/5
（骨角製品＝ほぼ実寸大）

図 9-31

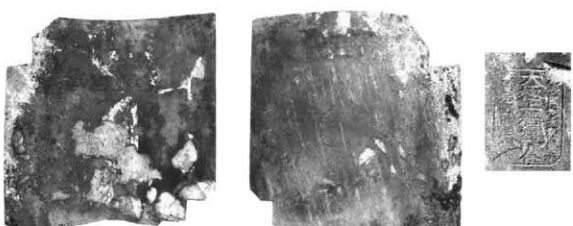


図 9-32

瓦廃棄土坑

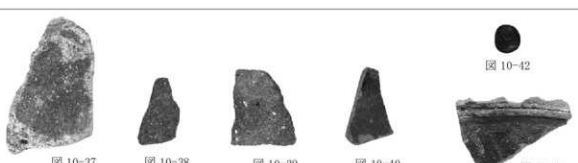


図 10-37　図 10-38　図 10-39　図 10-40　図 10-42　図 10-46

I 層

縮尺＝約 2/5

図 11-49

図 11-50

図 11-51

図 11-52

図 11-55

図 11-56

図 11-57

図 11-58

図 11-59

図 11-60

図 11-61

図 11-62

図 11-63

図 11-64

図 11-65

図 11-66

図 11-71

図 11-70

Ⅱ層

図 11-72

縮尺＝約 2/5

図版8

図 12-77

図 12-78

図 12-82

図 12-85

図 12-87

図 12-89

図 12-91

図 13-92

図 13-93

図 13-94

図 13-95

図 13-96

Ⅱ層

図 13-97

図 13-99

縮尺＝約 2/5

図 13-100

図 13-101

図 13-102

図 13-103

図 13-104

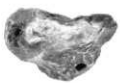


図 13-106

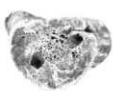


図 13-105

図 13-107

Ⅱ層

図 13-108

図 13-109

図 13-110

図 13-111

図 13-112

図 13-113

図 13-114

IC区　Ⅱa層

縮尺＝約 2/5
（骨角製品＝約 3/5）

図版 10

図 14-115

図 14-116

図 14-117

図 14-118

図 14-119

図 14-120

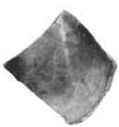


図 14-121

図 14-122

図 14-123

図 14-124

図 14-125

図 14-126

図 14-127

図 14-128

IC区　Ⅱb層

縮尺＝約 2/5

図 15-134

図 15-135

図 15-136

図 15-141

図 15-137

図 15-138

図 15-139

IC区　Ⅱb層

図 15-143

IC区　Ⅱ・Ⅲ層

縮尺＝約 2/5
（骨角製品＝約 3/5）

図 16-144

瓦廃棄土坑

図 16-145

IC区　Ⅱb層

縮尺＝ほぼ実寸大

大慶寺旧境内遺跡（No.361）

寺分一丁目810番1地点

例　言

1．本編は、鎌倉市寺分一丁目810番1において実施した、「大慶寺旧境内遺跡」（鎌倉市No.361遺跡）の発掘調査報告である。

2．発掘調査は令和4年2月22日から同年4月22日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。調査の対象面積は、39.75㎡である。

3．発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査担当者　押木弘己

調　査　員　関　健吾、岡田慶子、吉田桂子、小川さやか

作　業　員　吉澤　功、石田光久、岡　利文、小林貞明、大滝信治、新倉恒勝、関塚　通、高橋裕喜、斎藤新二、鈴木敏郎、松岡文昭

（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター 文化財班）

調査協力　株式会社 斉藤建設（重機掘削・埋め戻し）

資料整理・報告書作成　押木、吉田、岡田

4．本報告の執筆は、第一章を米澤雅美が、第二章～第六章を押木が行った。

5．資料整理および本報告の作成は、鎌倉市文化財課分室で行った。

6．本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は市教育委員会の統一基準に従って「ＤＴ２１０４」とし、出土品への注記などに使用した。

凡　例

1．挿図の縮尺は、遺構・遺物ともに図中に表示している。

2．本書中に記載した国土座標値は、世界測地系（JGD2011-第Ⅸ系）に基づいている。

3．挿図に示した方位標は座標北（Ｙ軸）で、真北はこれより0°09′25″ほど東に振れている。

4．遺構挿図中の水糸高は、海抜値を示す。

5．出土遺物の年代観は以下の文献を参考としたが、筆者が各所見を理解し切れていない部分もある。

◆かわらけ・遺物全体の様相：宗基秀明　2019「鎌倉出土かわらけの系譜と編年―東国社会の変質と中世の成立（後）：かわらけの編年と中世社会」『鶴見大学紀要　第56号　第4部　人文・社会・自然科学編』鶴見大学

◆瓦質土器：河野眞知郎　1993「中世鎌倉火鉢考」『考古論叢神奈河　第2集』神奈川県考古学会

◆輸入陶磁器：『大宰府条坊跡ⅩⅤ―陶磁器分類編―』太宰府市教育委員会　2000

◆瀬戸窯製品：藤澤良祐　2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

◆常滑・渥美窯製品：『愛知県史　別編窯業3　中世・近世常滑系』愛知県　2012

◆遺物観察表（図6下段）のうち、かわらけ胎土の分類記号（Ａ～Ｅ）は以下の内容を示す。

Ａ：粉質　Ｂ：泥質　Ｃ：精良・硬質　Ｄ：泥質・精良　Ｅ：砂質・硬質

これらはいずれも在地産土器であり、基本的に白色針状物質（骨針化石）・泥岩粒・雲母片などの混入物を含むが、個体ごとに有無・多寡もある。大よそＥ・Ｄ→Ｂ・Ｃ→Ａという順で新しくなり、Ｃは所謂「薄手丸深型」に、Ａは所謂「戦国タイプ」に使用される。

本文目次

第一章　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 164
第二章　遺跡の位置と周辺の発掘成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 164
第三章　調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 168
第四章　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 169
第五章　検出遺構と出土遺物
　第1節　検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 171
　第2節　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 175
第六章　調査成果のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 177

挿図目次

図1　調査地点の位置（1）・・・・・・・・・165
図2　調査地点の位置（2）・・・・・・・・・166
図3　調査区配置図・・・・・・・・・・・・・169
図4　調査区壁土層断面図・・・・・・・・・170
図5　1面（Ⅱa層上）全体図・・・・・・・171
図6　2面（Ⅱb層上）全体図・・・・・・・172
図7　3面（Ⅱd層上）全体図・・・・・・・173
図8　4面（Ⅲ層上）全体図・・・・・・・・174
図9　5面（Ⅴ層上）全体図・・・・・・・・175
図10　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・176
図11　2面遺構合成図・・・・・・・・・・・177
図12　4面遺構合成図・・・・・・・・・・・180

表目次

表1　大慶寺旧境内遺跡（寺分一丁目810番1）
　　　発掘調査にかかる届出等の文書・・164
表2　周辺の主な調査地点・・・・・・・・・167
表3　出土遺物カウント・計量表・・・・・178
表4　出土遺物観察表・・・・・・・・・・・179

写真図版目次

図版1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・181
1．Ⅰ区　表土掘削状況（東から）
2．Ⅰ区北東部　2面プラン（北東から）
3．Ⅰ区中央部　2面プラン（北東から）
4．Ⅰ区南部　2面プラン（南西から）
5．Ⅰ区北東部　3面全景（北東から）
6．Ⅰ区中央部　3面（北東から）
7．Ⅰ区南西部　3面（南西から）
8．Ⅰ区南西部　4面（南西から）
図版2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・182
1．Ⅰ区南西壁　土層断面（北東から）
2．Ⅱ区　表土掘削状況（北東から）
3．Ⅱ区　2面プラン（南西から）
4．Ⅱ区　1～2面　銅銭出土状況
5．Ⅱ区　2面　遺構掘削状況（南から）
6．Ⅱ区　2面全景（南西から）
7．Ⅱ区　2面 竪穴遺構1　土層断面（北から）
8．Ⅱ区南西部　3面全景　（南西から）
図版3・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・183
1．Ⅱ区南西部　4面全景（北東から）
2．Ⅱ区南西部　5面全景（北東から）
3．Ⅱ区南西部　3～5面　土層断面（北東から）
4．Ⅱ区南西部　3～5面　土層断面（北西から）
5．Ⅱ区北東部　3面全景（北東から）
6．Ⅱ区北東部　4面プラン（南西から）
7．Ⅱ区北東部　4面全景（南西から）
8．Ⅰ－Ⅱ区間中央ベルト　2面全景（南から）
図版4・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・184
出土遺物

第一章　調査に至る経緯

令和３年６月、当該地における土木工事について事業者より鎌倉市教育委員会文化財課へ相談があった。その内容は、現地表下 1000cm に達する柱状改良工事を行う個人専用住宅建設の計画であった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、当該地を含めた宅地造成に伴い行われた発掘調査では、地表下 64cm で遺物包含層、80cm で遺構が確認されている。それにより、当該工事計画が埋蔵文化財に影響を及ぼすことが避けられないとの判断に至った。

令和３年６月 11 日付で事業者より文化財保護法第 93 条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出を受理した。これに対して、令和３年６月 24 日付で神奈川県教育委員会教育長より発掘調査を実施する旨の指示が通知され、当該地の埋蔵文化財については発掘調査を実施して、記録保存の措置を図ることとなった。事業者は令和４年１月 24 日付で鎌倉市教育委員会に発掘調査依頼書を提出し、発掘調査は令和４年２月 18 日に開始し、令和４年４月 22 日に終了した。

表１　大慶寺旧境内遺跡（寺分一丁目 810 番１）発掘調査にかかる届出等の文書

文書種別・内容		文書番号	日付	発信者	受信者	備考
文化財保護法 93 条	提出		令和３年６月 11 日	事業者	神奈川県教育委員会	
	通知	文遺第 61024 号	令和３年６月 24 日	神奈川県教育委員会	事業者	
出土品の手続き	発見届		令和４年４月 21 日	鎌倉市教育委員会	鎌倉警察署	
	保管証		令和４年４月 21 日	鎌倉市教育委員会	神奈川県教育員会	

第二章　遺跡の位置と周辺の発掘成果

大慶寺旧境内遺跡（鎌倉市 No. 361）は、鎌倉市の寺分地区に所在する。湘南モノレール湘南町屋駅および湘南深沢駅の中間東側に位置し、丘陵の西先端～裾部に立地している。遺跡範囲は、南西～北東に 440 m、北西～南東に 270 m ほどを測る。

遺跡名称に入っている大慶寺は臨済宗円覚寺派に属し、霊照山を号す。鎌倉時代後期の創建というが、詳しい年次を伝える史料はない。元亨三年（1323）の北条貞時十三年忌供養に際しては道顕長老を筆頭に僧 83 人が当寺から参加していることをみると、鎌倉末期にはかなりの寺容を誇っていたことが推察され、後、関東十刹に列せられた。戦国～近世の荒廃を経て、かつて塔頭の一つであった方外庵が名跡を復興して現在の大慶寺に至る（図２－Ⓐ）。

本遺跡地の南東範囲外には、応永年間（1394 ～ 1428）の創建と伝わる休場山弥勒院等覚寺と、永享三年（1431）の中興という天照山薬王院東光寺が所在する（図２－Ⓑ）。ともに古義真言宗の寺院で、もと青蓮寺末、今は高野山宝寿院末である。大慶寺の南東背後の丘陵には、梶原の鎮守である御霊神社が鎮座する（図２－Ⓒ）。等覚寺は元々、当社に南接する深沢中学校辺にあったという。寺分の鎮守神は駒形神社で、治承年間（1177 ～ 1181）に大庭景親の所領に鎮座していたと伝えられている（図２－Ⓓ）。各社の創建年代がどこまで遡るかは定かにできないが、平安時代末期に鎌倉党武士団の勢力圏となった地域に御霊神社が多いことは事実で、駒形神社が鎌倉党本流である大庭氏との関連で語られている点も

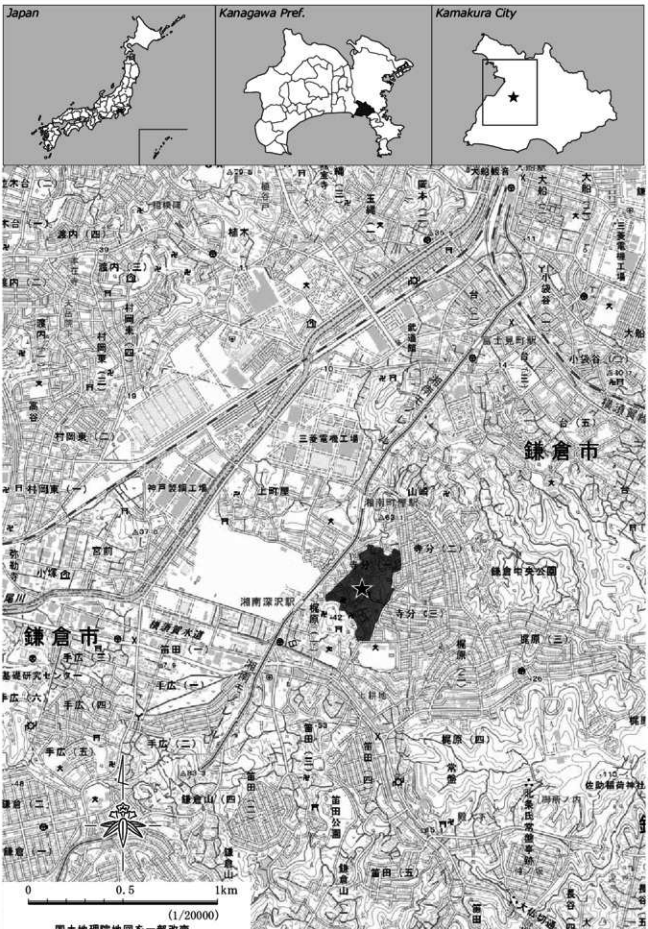

Japan
Kanagawa Pref.
Kamakura City
鎌倉市
鎌倉市
湘南深沢駅
鎌倉山
0
0.5
1km
(1/20000)
国土地理院地図を一部改変

図1　調査地点の位置（1）

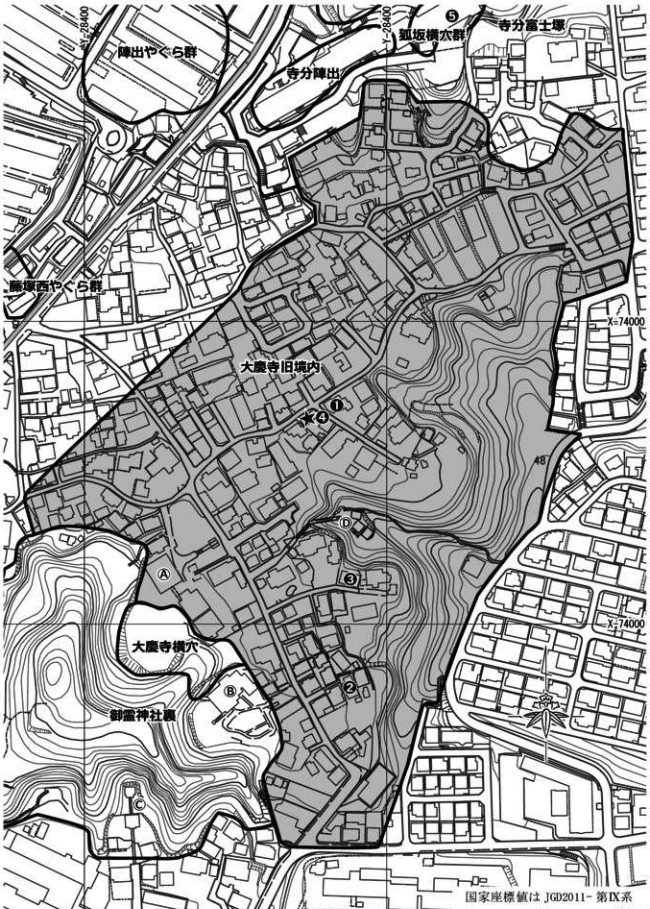

陣出やぐら群
寺分陣出
弧坂横穴群
寺分富士塚
藤塚西やぐら群
大慶寺旧境内
大慶寺横穴
御霊神社裏
X=74000
X=74000
国家座標値はJGD2011-第Ⅸ系
0
50
100m
(1/2500)

図２　調査地点の位置（２）

表２　周辺の主な調査地点（番号は図２に対応）

No.	地番	調査年度	面積（㎡）	所収文献
大慶寺旧境内遺跡（No. 361）				
★	寺分一丁目 810 番 1	2021 年度	39. 75	本報告
❶	寺分一丁目 819 番 1	1998 年度	172	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16（第２分冊）』鎌倉市教育委員会　瀬田哲夫・押木弘己 2000
❷	寺分一丁目 943 番 2 外	2006 年度	56	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 30（第１分冊）』鎌倉市教育委員会　馬淵和雄・神元　遥 2014
❸	寺分一丁目 939 番 1	2014 年度	60	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 31（第２分冊）』鎌倉市教育委員会　齋木秀雄 2015
❹	寺分一丁目 810 番 1	2019 年度	45	『大慶寺旧境内遺跡（No. 361）発掘調査報告書』斉藤建設　三ツ橋正夫・降矢順子 2020
狐坂横穴群（No. 37）ほか				
❺	寺分一丁目 502 番 1 外 19 筆	1996 年度	2000	『鎌倉の横穴墓』東国歴史考古学研究所　土屋浩美・継　実 2002
寺社				
Ⓐ	大慶寺			
Ⓑ	東光寺			
Ⓒ	御霊神社			
Ⓓ	駒形神社			

含め、彼らが当地区の地域史を考える上で欠かせない要素となっていることは間違いない。御霊神社の西側、尾根を挟んだ丘陵山腹には、やはり鎌倉党に属する梶原景時墓と伝承される石塔群がある。

寺分・梶原地区における発掘調査例は少なく、大慶寺旧境内遺跡では、本地点が５例目となる（図２－❶～❹・★）。ほか、狐坂横穴群で１群７基の横穴墓が調査され（❺）、図２の北側範囲外となる寺分富士塚遺跡では縄文中期後葉・加曽利Ｅ式期の竪穴住居が確認されている。

地点❶は、市道を挟んで当地点の北東隣地に当たる。平成 10 年に 172 ㎡が発掘調査され、遺構面が４枚検出されている。最下層の第４面では弥生末～古墳初頭の小規模な溝が、谷戸地形に沿う形で検出されている。これより上位の第３面～第１面では中・近世の遺物が出土し、小規模な溝や土坑・ピットを主体とする、散漫な遺構展開が確認されている。第３面では厚手・外反器形の「戦国タイプ」ロクロかわらけが出土しており、第４面の時期からは大きく時間を隔てて、中世末～近世初頭になって再度の土地利用がなされたかの印象を抱かせる。ただ、出土遺物の中には東海地方産の灰釉陶器碗など、平安時代の所産品も微小ながら含まれるので、近辺に当該時期の生活空間があった可能性は指摘できよう。

地点❷は、駒形神社南西の谷戸内に位置し、平成 18 年に 56 ㎡が調査されている。中世に属する５枚の遺構面が確認され、最上層のⅠ面で南北に延びる土塁状遺構、最深部のⅤ面で井戸が検出されている。各面とも散漫な遺構展開で、出土遺物も希少であったが、概ね鎌倉時代後半～南北朝時代の土地利用の痕跡と見なせるだろう。

地点❸は、駒形神社の南眼下の尾根裾に所在する。平成 26 年に 60 ㎡が調査され、３枚の中世遺構面が確認されている。駒形神社に近い北側は平坦な岩盤面が検出され、１面以降のある時期に削平された可能性を窺わせる。岩盤以南は斜面堆積土にピットを中心とする遺構が営まれ、最上層の１面では岩盤の落ち込み際に沿ってかわらけが集中して遺存していた。内湾器形の資料のみで構成され、Ｃ類「薄手丸深」形態のものも含まれる。重量による個体数換算の結果、248 個体に上る量が出土したことになるという。同かわらけ集中からは、地蔵菩薩と思しき鋳鉄製の仏像上半身片も出土している。３面の出土かわらけは手づくね製品が主体で、鎌倉時代前期には一定の土地利用が営まれていた可能性が窺え、注目される。また、中世層および中世遺構からは須恵器や灰釉・緑釉陶器など平安時代前期の遺物片もわずかながら出土しており、『和名類聚抄』に見える古代鎌倉郡「梶原郷」、またはその隣接地域を考える上で新たな考古学的知見が追加された。

地点❹は、元々は今回の調査地と同じ敷地内にあり、令和元年、宅地造成にともなう擁壁新設部分45㎡を対象に調査が実施されている。遺構が確認されたのはⅢ層上およびⅣ層上の２枚で、溝や方形の竪穴状遺構など、極めて散漫な遺構分布であった。出土遺物も僅少で、かわらけ片や16世紀の瀬戸美濃製品などが遺構から出土している。また、掘削最下層のⅦ層中からは須恵器の小片が出土している。

以上の少ない調査成果を総合すると、北西に開口する谷戸地形の奥（南東）に近い尾根裾に鎌倉期の人的営為の痕が窺え（❷・❸）、開口部近くの❶・❹では、宝町・戦国～近世に低調な土地利用（耕作など）が行われた情景が浮かんでくる。ただ、各地点で弥生末～平安時代に遡る遺物片も少量ながら出土しているので、やはり尾根裾の微高地を中心とする、限定的な土地利用が古くから営まれていたことが推察できよう。

なお、地点❹報告書（表２参照）の「第４章　まとめ」には、同地の南東70ｍの谷戸奥が「天台庵」と地元で呼称されている旨が見え、他に「ひげつ」・「かっけん」・「だいどう」・「かねつきどう」など、大慶寺の塔頭に由来しそうな小地名についても言及されている。今後、発掘調査の成果も踏まえながら地名の考証・比定作業が必要となってこよう。

参考文献

鎌倉市 1959『鎌倉市史』考古編・総説編・社寺編　吉川弘文館

第三章　調査の方法と経過

掘削による発生土置き場を敷地内に確保する都合上、調査区は北西部のⅠ区と南東部のⅡ区とに分割した。また、掘削による崩落の危険性を考慮して、隣地境、または既設のコンクリート擁壁から1.5ｍ以上離れた位置に調査区を設定したため、調査対象範囲は当初予定の42.47㎡から、最終的に39.75㎡に減じる結果となった。

Ⅰ・Ⅱ区ともに厚さ20㎝ほどの表土層を重機によって除去し、以下の土については人力で掘削した。

測量・図面作成には調査区の形状に沿った平面直角座標を設定して用い、この基準点に世界測地系の国家座標値（JGD2011）を移すことで、調査範囲を公共地図上に合成した。標高も含めた国家座標値は、近隣の市道上に打設された都市再生街区多角点「10B66」と「1A442」との２点間関係を起点にし、光波測距儀を用いて調査敷地内に移動した。

測量図の作成は、光波測距儀により計測値を読み上げて方眼紙上に1/20の縮小図を描き込む方法で行った。写真の撮影は主としてデジタル一眼レフカメラを用い、補助的にカラーネガフィルムを装填した一眼レフカメラを使用した。

令和４年２月18日にⅠ区の表土掘削を実施し、同22日からは人力掘削による発掘調査に着手した。敷地内に掘削による発生土を仮置きする必要があるため、土量を見ながらⅠ区は三分割、Ⅱ区は二分割して調査を進めた。Ⅰ区の埋め戻しおよびⅡ区表土掘削は３月17日に、Ⅱ区の埋め戻しは４月19日に行い、22日には調査用具を撤収して現地調査に係る全ての工程を終えた

この後、出土品および記録類の整理作業と報告書作成に移行し、文化財課分室にて約２週間を要した。

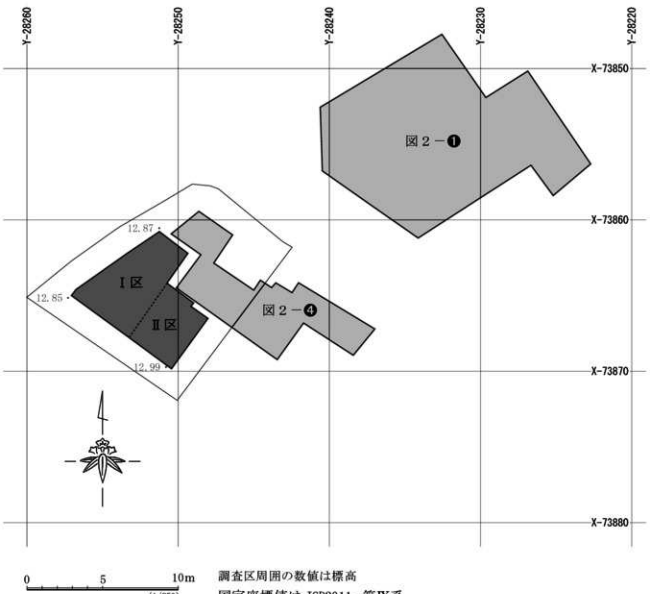
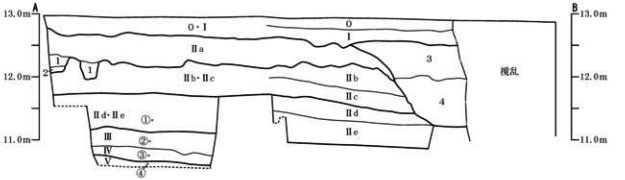
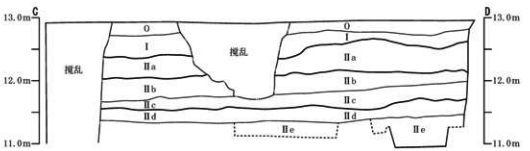


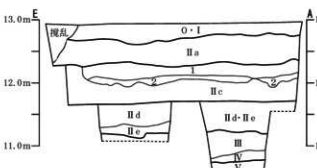
図３　調査区配置図

第四章　基本土層

本地点における土層の堆積状況は、図４に示した。現地表面の標高は 12.8 ～ 13.0 m前後で（図３）、南東側がわずかに高い状況であった。表土層（０層）は20cmほどの厚さで堆積し、これを重機で除去した標高 12.7 m前後で旧表土であるⅠ層が検出された。Ⅰ層は近世以降の耕作土と考えられ、富士山の宝永火山灰と見られる砂粒を多く含んでいる。Ⅰ層を除去した標高 12.6 m前後で中世の遺物包含層であるⅡａ層が検出され、この上面を１面としたが、検出遺構はなかった。標高 12.1 m前後のⅡｂ層上面を２面とし、Ⅱ区では竪穴状・溝状などの遺構が散漫に分布していた。Ⅱｂ・Ⅱｃ層を取り除いた標高 11.4 m前後で検出されたⅡｄ層の面は鉄分の酸化のため硬化しており、ここを３面としたが検出遺構はなかった。Ⅱｄ・Ⅱｅ層を除去した標高 10.9 m前後でⅢ層が検出され、この上面を４面とした。地表面から２m近い深さがあるため、安全面への配慮から部分的な検出にとどまったが、Ⅱ区では南東～北西に延びるごく浅い溝状の落ち込みが確認されている。Ⅲ・Ⅳ層を取り除いた標高 10.6 m前後で

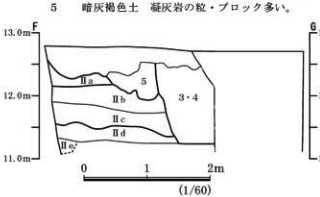






0	暗褐色土	表土。コンクリート片。
Ⅰ	暗灰褐色土	砂質土。上面が１面（欠番）。
Ⅱa	暗褐色土	中世遺物包含層。上面が２面。
Ⅱb	暗褐色土	締まりあり。橙色粒少量。
Ⅱc	黒褐色土	締まり・粘性強い。橙色粒微量。
Ⅱd	黒色土	締まり・粘性強い。橙色粒ごく微量。上面が３面（鉄分酸化）。
Ⅱe	黒色土	黒色味を増す。締まり・粘性強い。
Ⅲ	青灰色土	シルト質土。締まり強い。
Ⅳ	黒色土	粘性強い。
Ⅴ	青灰色土	シルト質土。締まり強い。

1	暗褐色土	Ⅱa層をベースとする。
2	暗灰褐色土	きめ細かい。
3	暗褐色土	Ⅱa層をベースとする。
4	黒褐色土	Ⅱb・Ⅱc層をベースとする。
5	暗灰褐色土	凝灰岩の粒・ブロック多い。



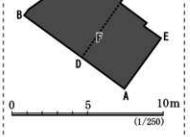


図４　調査区壁土層断面図

Ⅴ層を確認し、この上面を５面とした。やはり安全面への配慮により、Ⅱ区南西部での部分的な検出にとどまった。

Ⅱｂ～Ⅱｅ層は漸移的変化を示し、下層に向かうほど黒色味と締まりが増して混入物が少なくなる。弥生末～平安時代の土器細片が、ごく稀に出土し、Ⅱｅ層までは遺物の包含を確認している。４面下のⅢ・Ⅳ層についてはⅡ区南西部で掘削を試みたのみだが、細心の注意を払いながら掘削しても出土遺物は皆無であったため、無遺物層と判断した。

各土層の上面は谷戸内の地形に順じ、基本的に南東側が高く北西側が低くなっていた。

第五章　検出遺構と出土遺物

第１節　検出遺構

今回の調査対象範囲は、第２章で挙げた図２－地点❹の残余部分となる。❹では宅地造成に伴う擁壁設置部分を対象に発掘調査が実施されているが、調査後の工事にともなう余掘り部分が今回の調査範囲まで大きく入り込んでいることが確認された。擁壁の裏込め土として強く転圧されていたこともあり、

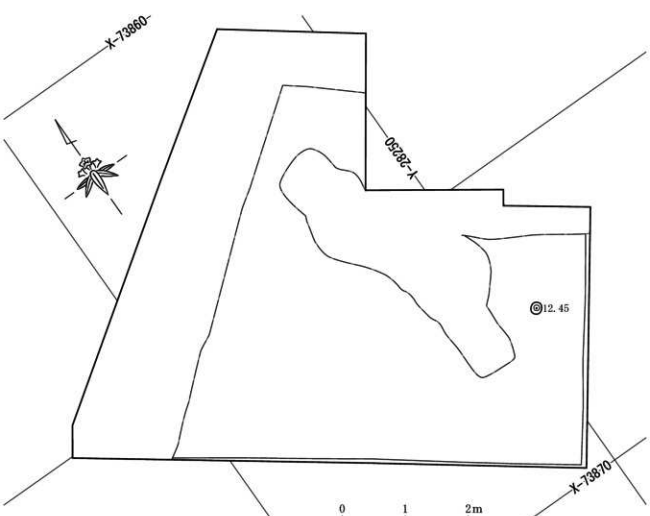


図５　１面（Ⅱａ層上）全体図

この部分については調査による掘削の対象外としたが、土層断面の観察箇所では余掘りの落ち込み方と深さを把握すべく、部分的に掘削を進めた。

1面は、標高12.3～12.7mのⅡa層上面で検出された。

Ⅰ区では、調査区北西辺に沿って延びる落ち込みが検出された（溝1）。埋土はⅡa～Ⅱd層が層序の順に水平堆積を示し、最上層には凝灰岩のブロックが多く含まれていた。土層断面の観察では如上の所見を提示でき、平面的にも色調・硬度などの点でベース土との違いを認識できたものの、掘削段階に入るとベース土との見分けは困難を来たした。漸次的なレンズ状の堆積を呈さない一方、人為的に一挙に埋め戻されたような様相も見て取れなかったことから、北西に向けた地滑り痕と判断した。地震などの自然要因によるものか、もしくは擁壁工事での掘削にともなってひび割れを起こしたものか、断定が難しい。

Ⅱ区では、1層を埋土とする小穴が1基検出されている。確認面からの深さは5cm、底面標高は12.45mを測る。

2面は、標高12.0～12.3m前後のⅡb層上面で検出された。

Ⅰ区には1面でも確認された地滑り状痕跡が延び、Ⅱ区では竪穴状遺構や細い溝状遺構、小穴などが確認された。いずれの遺構も、暗灰褐色の同質土を埋土とする。

竪穴状遺構1はⅡ区の南東部に位置し、調査区外に続くため全体形状は確認できなかった。北西辺は

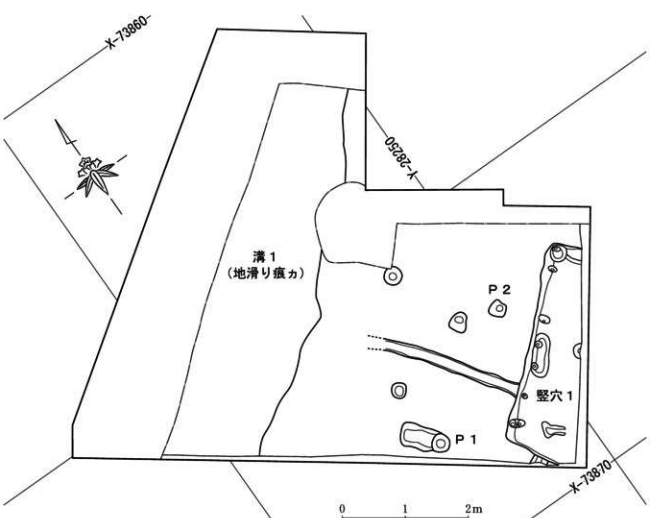


図6　2面（Ⅱb層上）全体図

調査範囲内で両端を確認でき、長さは3.3mを計測した。基本的には、方形または長方形の平面プランを呈していたものと考えられる。土層断面の観察による深さは最大で40cmほどを測り、埋土は二層に分層できた（図4－1・2層）。掘方底面は、酸化により硬化していた。北西辺の掘方底面には粘質土を埋土とする小穴がめぐる。上場径・深さともに10～20cmと小規模で、木杭が腐朽して粘質土化した痕跡と考えられる。本遺構の用途は不明だが、簡素な建物や水溜め施設といった可能性が推測できる。杭穴については壁板または護岸板の抑え材の痕跡と見なせよう。本遺構からの出土遺物は表3に掲げたものが全てで僅少ではあるが、北宋銭を主体とする銅銭6枚が重なった状態で出土している。この他、ロクロかわらけや平瓦の小片など、器形は不明であるものの中世の資料が中心となる。おそらく、遺構の埋没時期を特定する材料と考えて大過ないだろう。

竪穴状遺構1の北西辺および南西辺には、それぞれに直交方向に延びる溝状遺構が取り付いていた。竪穴状と同質の埋土様相を示し、切り合いによる新旧関係は見て取れなかった。南西辺に取り付くものは調査区壁際での検出となったためごく部分的に確認できたに過ぎず、溝ではなく小穴であった可能性もある。北西辺に取り付く溝は、上幅20cm、底面幅15cmほどで確認面からの深さは5cm前後と非常に小規模なものであった。竪穴状遺構1と掘り込み面が同じであった蓋然性が高く、本来は30cmほどの深さを有していたものと考えられる。底面の標高は11.96～12.06mを計測し、自然地形と同様、北西に向け緩やかに下降する。竪穴状遺構からの排水を目的に開削されたものであろうか。Ⅰ区にも続いて

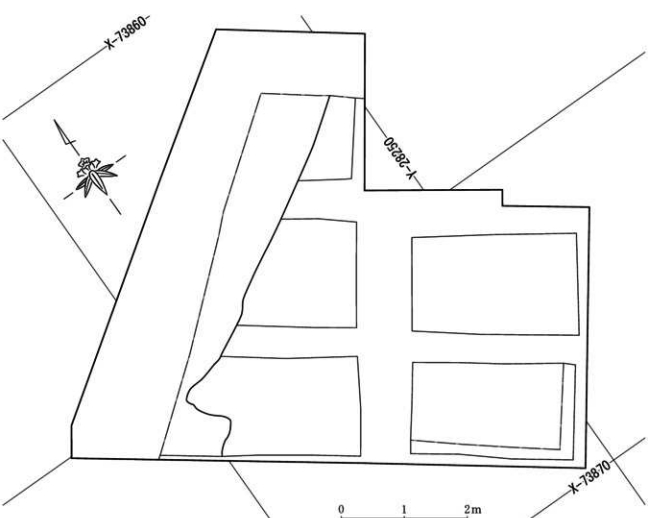


図7　3面（Ⅱd層上）全体図

いた可能性が高いが、確実な遺構としては把握できなかった。

この他の小穴は上場径30cm前後、確認面からの深さ5～30cmと小規模なものばかりで、調査範囲の限りでは柱穴列としての並びを確認するには至らなかった。遺物が出土した小穴については、P1・2の遺構名を付した。

3面は、標高11.4～11.7mのⅡd層上面で検出された。上面は酸化のため硬化しており、地下水位の影響を受けたものと見られる。検出遺構は皆無であった。Ⅱd層上に堆積するⅡb・Ⅱc層中からは、ごく稀に土器細片が出土している。

4面は、標高10.9～11.15mのⅢ層上面で検出された。現地表面から2m近い深さを測ることからⅠ区の北東部では検出することができなかった。Ⅱ区の北東部では面上から3cm程度のごく浅い溝状の落ち込みが確認された。上幅30～40cmで南東～北西に延び、北西側の底面が低い。直上に堆積するⅡe層が埋土で、人為的に開削されたものというよりは流水など自然営為によって生じた窪みと考えている。同様の浅い溝状遺構は図2－❶地点でも標高11.1～11.6m前後の4面＝暗緑灰色土層の上面で確認されている。

5面は、標高10.5～10.8mのⅤ層上面で検出された。地表面から2.5m近くの深さとなり、また上位に堆積するⅢ・Ⅳ層中からは出土遺物が皆無であったため、5面までの掘り下げは、Ⅱ区の南東部のみに限った。

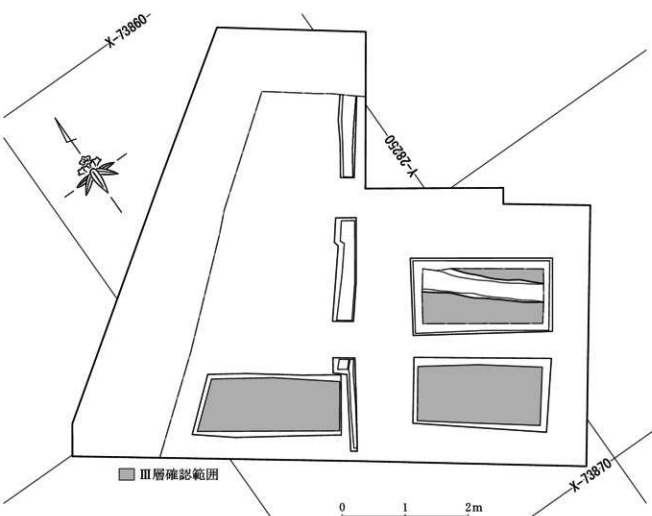


図8　4面（Ⅲ層上）全体図

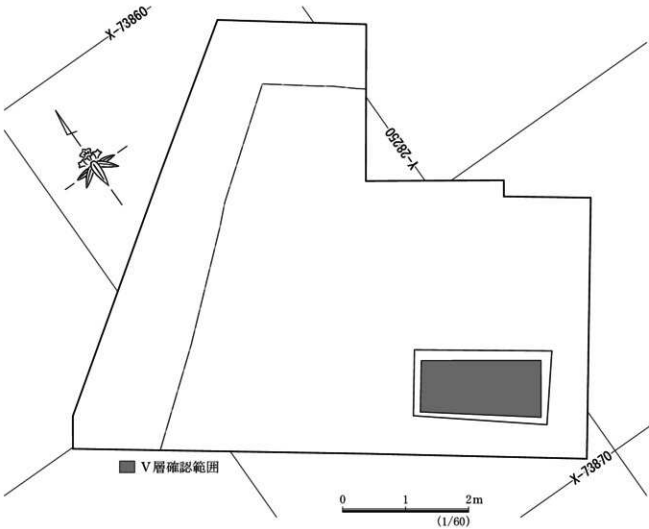


図９　５面（Ⅴ層上）全体図

第２節　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は非常に少なく、内寸 54 × 34 × 10㎝の収納箱で１箱に留まる。その内訳は表３のカウント・計量表に示した通りで、所産時期を問わず、土器・陶磁器の細片が大部分を占めていた。

この中から、ある程度の形状が復元・推定可能な 29 点を図 10 に掲載した。資料個々の特徴については、表４の観察表を参照されたい。

表土～１面までの遺物について、１・２のロクロかわらけ小皿は体部の器壁が厚く、口縁部に向けて直線的に開く。内底にナデ調整、外底面に板状圧痕が残る。４は常滑片口鉢Ⅱ類の口縁部片で、８～９型式か。14 世紀後半～ 15 世紀前半に比定可能で、さらに新しい型式である可能性もある。鎌倉時代の所産・搬入資料も含まれるが、１面には、概ね上記年代観を前後する時期を当てることができようか。

１面下～２面掘り下げ時に出土した遺物については、10 の瓦質土器（風炉か）が最も新しい様相を示していようか。14 ～ 19 の銅銭は北宋銭が主体で、６枚まとまって出土した。出土位置・レベルから２面の竪穴状遺構１埋土に包含されていた可能性が高い。

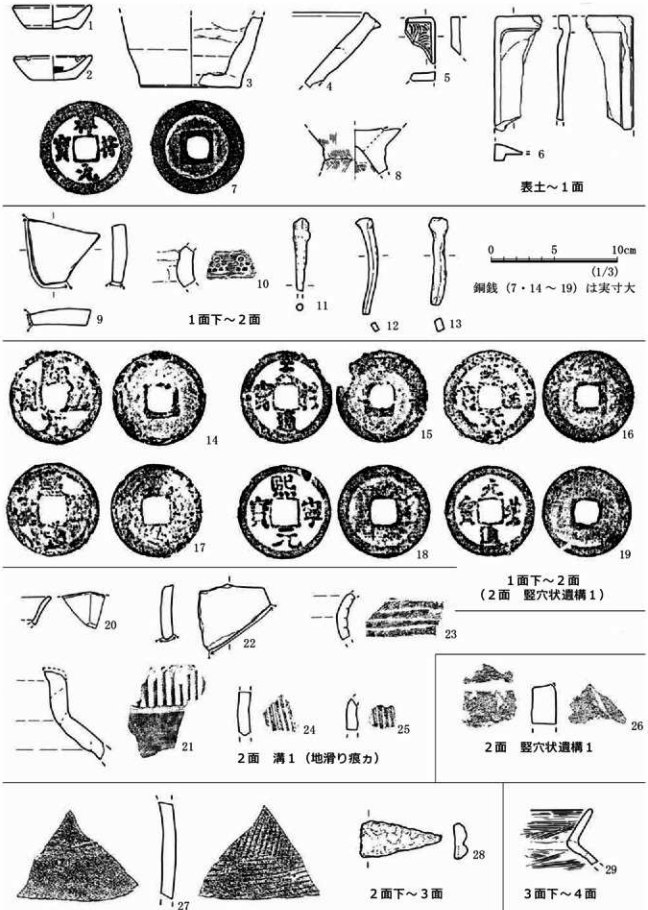

表土～1面
0 5 10cm
(1/3)
銅銭（7・14～19）は実寸大
1面下～2面
1面下～2面
（2面 竪穴状遺構1）
2面 溝1（地滑り痕カ）
2面 竪穴状遺構1
2面下～3面
3面下～4面

図10 出土遺物

2面遺構の出土遺物について、20～25は地滑り痕と見なした溝状遺構1から出土した。前述のように埋土は基本土層の層序と対応した様相を示しており、上層の出土遺物ほど新しい特徴を備えていた。20は白磁坏の口縁部小片で、上面観は六角または八角形を呈するか。中国明代、15～16世紀の所産品と目される。21は瓦質土器の風炉で、肩～口頸部片。23は弥生後期～古墳前期の土師器甕。頸部のみの小片で、外面に粘土紐痕を無調整で残す「輪積み甕」である。24・25は時期不明の土器片。小片のため、本来の天地・傾きも分からない。

26は竪穴状遺構1で出土した平瓦の小片。燻し焼成か。上述したように、14～19も竪穴状遺構1に帰属する可能性が高い。

2面下～3面掘り下げ時の遺物は、27・28に示した。27は須恵器甕の胴部片。28は用途不明鉄製品である。

3面下～4面掘り下げ時の遺物は、29に示した。古墳時代前期頃の土師器甕で、図示したのは頸部のみだが、同一個体と思しき胴部片も出土している。

4面下～5面掘り下げ時には、遺物は全く出土しなかった。

第六章　調査成果のまとめ

以上、本地点の調査成果について述べてきた。今回の調査では堆積土の様相変化に応じて1～5面を確認したが、いずれも人為的な整地面として認識できるものではなかった。このうち遺構が検出されたのは2面と4面で、2面では竪穴状遺構や溝状遺構、並びの見出せない小穴などが確認され、4面では流水など自然営為の痕跡である可能性が高い、ごく浅い溝状の落ち込みが検出されている。それぞれ、標高や土層堆積状況の類似性に基づいて周辺調査成果との合成図を示した（図11・12）。

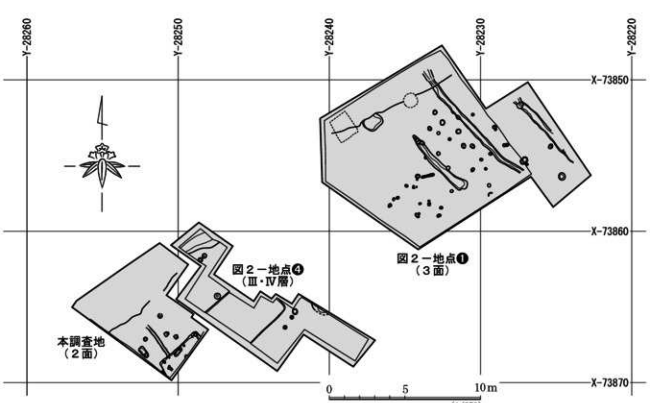


図11　２面遺構合成図

表３　出土遺物カウント・計量表

種別・産地等	器種	分類	破片数	重量（g）
表面採集				
土器	小片		6	35
撹乱				
常滑	甕		1	31
瓦質土器	火鉢ヵ		1	12
古式土師器	壺		1	20
	高坏ヵ		1	5
土器	小片		11	38
表土～１面				
ロクロかわらけ	小		3	53
	大		12	95
瀬戸	瓶子		1	100
	すり鉢		2	39
常滑	片口鉢	Ⅱ	2	126
	甕		3	131
陶器	鉢		1	13
	不明		1	6
土製品	不明		1	12
石製品	硯		2	43
鋼製品	銭		1	3
	釘		1	5
肥前系磁器	染付皿		1	24
近代陶器	甕		1	46
近代瓦			1	99
ガラス製品	瓶		1	8
古式土師器	甕		4	80
土器	小片		36	99
自然遺物	カキ殻		1	4
	二枚貝		1	10
１面下～２面				
ロクロかわらけ	小		11	56
	大		29	188
	大	C	1	17
	小片		3	13
搬入土器	鍋・釜		1	2
白磁	口禿皿	Ⅸ	1	2
龍泉窯系青磁	碗	Ⅲヵ	1	4
常滑	片口鉢	Ⅰ	1	14
	甕		3	190
	転用研磨具		1	38
陶器	鉢ヵ		1	14
瓦質土器	風炉ヵ		1	17
瓦ヵ			1	8
鉄製品	釘		6	68
土師器	坏		1	3
	甕		1	6
古式土師器	壺		3	26
	甕		4	29
土器	小片		90	209
２面　溝１（地滑り痕ヵ）				
ロクロかわらけ	大		12	113
白磁	角形坏ヵ		1	4
瀬戸	灰釉大皿		1	5
常滑	片口鉢	Ⅰ	1	62
瓦質土器	鉢ヵ		2	40
	風炉		1	60
土師器	坏		1	3
須恵器	壺ヵ		2	22
	甕		1	28
灰釉陶器	碗		1	3
古式土師器	壺		1	8
	甕		8	118
土器	小片		33	89

種別・産地等	器種	分類	破片数	重量（g）
２面　竪穴状遺構１				
ロクロかわらけ	大		4	32
	小片		11	28
瓦	平瓦		1	30
鋼製品	銭		6	21
古式土師器	甕		2	21
土器	小片		3	5
２面　ピット１				
土器	小片		1	2
２面　ピット２				
土器	小片		1	1未満
石製品	仕上げ砥		1	2
２面下～３面				
土師器	有穂坏		5	16
	坏		4	20
	甕		1	4
ロクロ土師器	坏ヵ		1	10
須恵器	甕		1	82
古式土師器	壺		6	60
	甕		27	268
土器	小片		71	240
鉄製品	不明		2	87
自然遺物	獣骨		1	3
３面下～４面				
土師器	有穂坏		1	12
	坏		1	7
	坏ヵ		1	3
	甕		1	30
古式土師器	壺		3	58
	甕		30	278
土器	小片		11	27

表４　出土遺物観察表

（　）＝復元値　［　］＝残存値

遺物番号	種別	産地 器種	残存率	法量(cm) 口径・長さ	底径・幅	器高・厚さ	重量 (g)	胎土	色調 素材／表面	内底調整	外底圧痕	出土遺構・胎土ほかの特徴
図10 1	在地土器	ロクロ かわらけ・大	1/2弱	(6.0)	4.4	1.8	[22]	B	橙～ 黄橙	ﾅﾃﾞ	板状	
図10 2	在地土器	ロクロ かわらけ・大	1/3	(6.0)	(3.8)	1.9	[19]	B	橙	ﾅﾃﾞ	板状	口縁部に後成後の切り込み 内面一部黒変（灯明ヵ）
図10 3	国産陶器	瀬戸 瓶子Ⅱ類	底1/3	—	(7.8)	[5.6]	[100]	微砂	淡灰褐 /灰緑			胴部外面灰釉
図10 4	国産陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	口片	—	—	[6.0]	[110]	長石 石英	暗紫～ 暗褐			8～9型式ヵ 体部内面摩耗
図10 5	石製品	硯	小片	長さ [3.7]	幅 [2.3]	厚さ [0.7]	[7]		黒灰			外縁上面に文様
図10 6	石製品	硯	1/2弱	長さ [9.1]	幅 [3.8]	厚さ [1.3]	[36]		灰黄			材質：鳴滝産仕上げ砥に近似
図10 7	銅製品	銭 祥符元寶	完形	外径 2.5	孔径 0.6	厚さ 0.1	3					中国北宋代　1009年初鋳
図10 8	在地土器	古式土師器 台付甕	台基部 1/3	—	—	[3.5]	[54]	やや 粗	淡黄橙			内外面ハケメ
図10 9	国産陶器	常滑 転用研磨具	甕片	長さ 5.6	幅 5.0	厚さ 1.3	38	長石 石英	灰褐			割れ口二辺を研磨に使用
図10 10	瓦質土器	風炉	頸片	—	—	[5.6]	[17]	微砂	褐			外面梅花文スタンプ
図10 11	鉄製品	釘	—	長さ [5.8]	—	厚さ 0.6	[8]					錆化顕著
図10 12	鉄製品	釘	—	長さ 7.6	—	厚さ 0.6	34	普通	褐			錆化顕著
図10 13	鉄製品	釘	—	長さ 7.0	—	厚さ 0.5	18					錆化顕著
図10 14	銅製品	銭 開元通寶	完形	外径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	4					中国唐代　621年初鋳
図10 15	銅製品	銭 天禧通寶	完形	外径 2.5	孔径 0.6	厚さ 0.1	3					中国北宋代　1017年初鋳
図10 16	銅製品	銭 天聖元寶	完形	外径 2.5	孔径 0.6	厚さ 0.1	4					中国北宋代　1023年初鋳
図10 17	銅製品	銭 皇宋通寶	完形	外径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	4					中国北宋代　1038年初鋳
図10 18	銅製品	銭 熙寧元寶	完形	外径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	3					中国北宋代　1068年初鋳
図10 19	銅製品	銭 元豊通寶	完形	外径 2.4	孔径 0.6	厚さ 0.1						中国北宋代　1078年初鋳
図10 20	舶載磁器	白磁 角形坏	口片	—	—	[2.2]	[4]	粗	乳白／ 白失透			八角形ヵ 明代14c後葉～15c代ヵ
図10 21	在地土器	瓦質土器 風炉	頸～ 胴片	—	—	[6.9]	[60]	粗	灰白／ 黒灰			内外面黒色処理 頸外面タテ連子文
図10 22	搬入陶器	須恵器 転用研磨具	甕頸片	長さ 5.8	幅 4.8	厚さ 0.8	28	微砂	暗灰			割れ口一辺を研磨に使用 （中世以降の再利用ヵ）
図10 23	在地土器	古式土師器 甕	頸片	—	—	[3.6]	[24]	粗 雲母	橙			輪積み痕 弥生後期～古墳前期ヵ
図10 24	在地土器	縄文土器ヵ 深鉢ヵ	胴片	—	—	—	[9]	粗	褐			外面タテ条痕 25と同一個体ヵ
図10 25	在地土器	縄文土器ヵ 深鉢ヵ	胴片	—	—	—	[6]	粗	褐			外面タテ条痕 24と同一個体ヵ
図10 26	瓦	平瓦	小片	長さ [3.2]	幅 [4.8]	厚さ1.8	[38]	粗	灰白／ 黒灰			懐し焼成ヵ 狭端または広端残存
図10 27	搬入陶器	須恵器 甕	胴片	—	—	—	[82]	微砂	暗紫灰			外面平行タタキ、内面ナデ
図10 28	鉄製品	用途不明	不明	長さ 6.4	幅 2.9	厚さ 0.3	22					錆化顕著　刃部なし
図10 29	在地土器	古式土師器 甕	口頸片	—	—	[4.4]	[38]	粗 白針	褐			内外面ヨコハケメ

２面の相当層において、北東に隣接する図２－地点❷では竪穴状遺構が検出されており今回の成果と近似した内容となっている。図２－地点❶の３面では竪穴状遺構は未検出で、谷戸開口部に向けて流下する溝状遺構や小穴列が確認されている。各地点のわずかな出土遺物からは、鎌倉時代後期～南北朝・室町時代の中で営まれた遺構群と理解できる。竪穴状遺構の機能・用途については明確にできないが、本地点の検出例では掘方底面の外縁に小穴がめぐることから護岸材を有するごく簡素な建物か、小規模な水溜め施設といった可能性が考えられる。

４面相当層では、図２－地点❶でごく浅い溝状の落ち込みが非常に散漫な展開状況を見せる。これも本地点と共通する遺構内容であり、流水など、谷戸内の自然地形に沿って形成された窪みなどの性格が推測できる。両地点とも、４面上堆積土からの出土遺物は古墳時代～古代の土器が主体となるものの、地点❶では戦国時代～近世に属しそうなかわらけも出土している。本地点における２面下から４面までの堆積土の様相、およびそこからの出土遺物を見る限り、戦国・近世に属する要素は見出し難い。勘案するに、地点❶では上層に位置付けるべき堆積土も下層と混同して掘り下げてしまった可能性が高い。

検出された各面の使用・存続時期について、１面は14世紀後半～15世紀代、２面は鎌倉時代後期～14世紀代、２面下～３面は古代、３面下～４面は古墳時代～古代という大まかな変遷過程が見て取れる。ただし、２面より下位の堆積土から出土した遺物はごく僅少の細片資料で占められることから、当地点周辺は各時期において、生活圏の中心から外れた場所であった可能性が考えられる。本報告の刊行までに分析結果は得られなかったが、基本土層のⅡｅ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層について土壌サンプルを採取し、花粉およびプラント・オパール分析を依頼中である。詳細はこの結果を待たねばならないが、おそらく耕作に関わる地か、未利用の空閑地であったかのどちらかであろう。

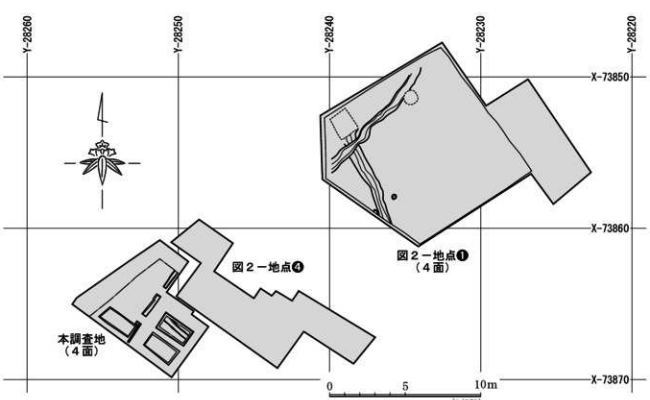
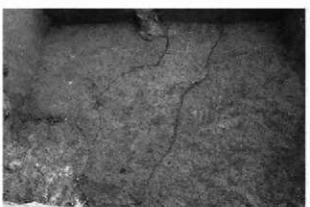


図12　４面遺構合成図

１．Ⅰ区　表土掘削状況（東から）

２．Ⅰ区北東部　２面プラン（北東から）



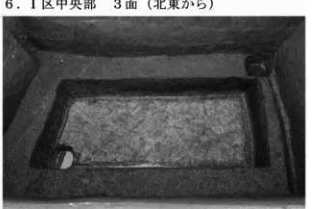
３．Ⅰ区中央部　２面プラン（北東から）

４．Ⅰ区南部　２面プラン（南西から）

５．Ⅰ区北東部　３面全景（北東から）

６．Ⅰ区中央部　３面（北東から）

７．Ⅰ区南西部　３面（南西から）



８．Ⅰ区南西部　４面（南西から）

図版２

１．Ⅰ区南西壁　土層断面（北東から）

２．Ⅱ区　表土掘削状況（北東から）

３．Ⅱ区　２面プラン（南西から）

４．Ⅱ区　１～２面　銅銭出土状況

５．Ⅱ区　２面　遺構掘削状況（南から）

６．Ⅱ区　２面全景（南西から）

７．Ⅱ区　２面　竪穴遺構１　土層断面（北から）

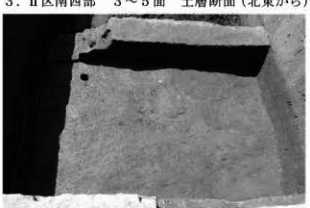
８．Ⅱ区南西部　３面全景　（南西から）

1．Ⅱ区南西部　４面全景（北東から）

2．Ⅱ区南西部　５面全景（北東から）

3．Ⅱ区南西部　３～５面　土層断面（北東から）

4．Ⅱ区南西部　３～５面　土層断面（北西から）

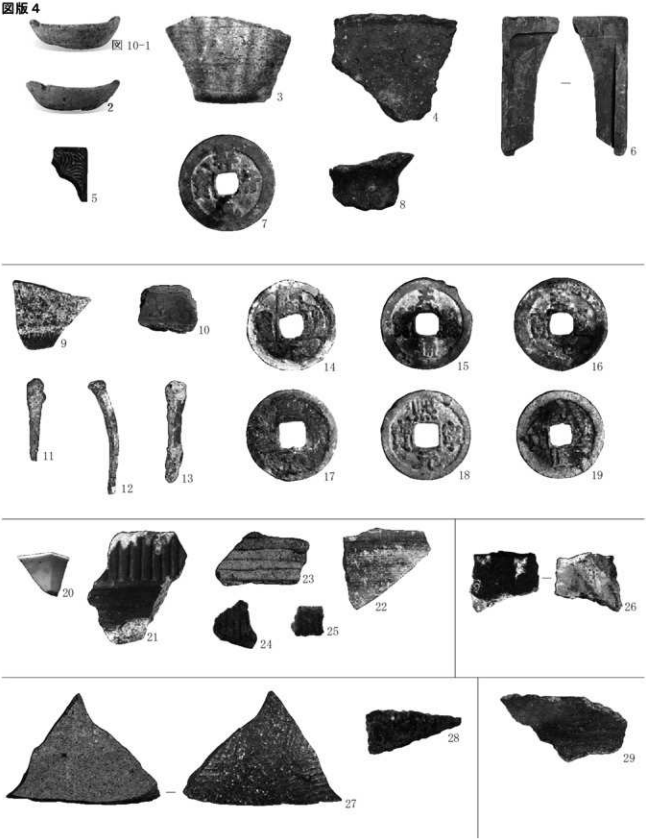

5．Ⅱ区北東部　３面全景（北東から）

6．Ⅱ区北東部　４面プラン（南西から）

7．Ⅱ区北東部　４面全景（南西から）

8．Ⅰ－Ⅱ区間中央ベルト　２面全景（南から）

図版4



出土遺物

縮尺＝約 2/5
（銅銭＝ほぼ実寸大）

北条小町邸（泰時・時頼邸跡）跡（No. 282）から出土した大型植物遺体および魚骨

雪ノ下一丁目 403 番 14 における土壌分析結果

例　言

1．本編は、鎌倉市雪ノ下一丁目 403 番 14 において実施した、「北条小町邸跡（泰時・時頼邸跡）」（鎌倉市 No. 282 遺跡）　の発掘調査成果のうち、土壌試料の分析結果に関する報告である。発掘調査地点の略号は、「ＨＪＫ１３０４」である。

2．土壌分析以外の成果については、下記文献において既に報告している。

・押木弘己 2017「北条小町邸跡（No. 282）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 33（第 2 分冊）』
鎌倉市教育委員会

3．調査地点は北条氏邸（泰時・時頼邸）推定地の一画に位置し、調査では中世（鎌倉時代）における 3 時期の遺構変遷を確認した。

中世Ⅰ期は 13 世紀前葉と推定され、柱穴列や東西に走る区画溝、井戸などが検出された。

中世Ⅱ期は 13 世紀中頃と推定され、東西方向の区画溝や土器集積が確認された。炭化穀物の試料は、この段階に属する土器集積土坑（遺構 59）の埋土（98 層）から採取した（上掲報告書 105 頁上段の土層断面図、110 頁の平面図を参照）。

中世Ⅲ期は 13 世紀後葉～ 14 世紀前葉と推定される。土坑群が幾重にも切り合い、土地の利用状況は前段階から一変する。粘土床の上に焼土・灰・炭が堆積したカマド状遺構（遺構 81）はこの段階に属し、微細な灰・炭層（134 層）から分析用試料を採取した（上掲報告書 103 頁下段の土層断面図、107 頁の平面図を参照）。

北条小町邸跡から出土した大型植物遺体および魚骨

パンダリ スダルシャン・三谷智広（パレオ・ラボ）

1．はじめに

神奈川県鎌倉市に所在する北条小町邸跡は、鎌倉時代の遺跡である。ここでは、北条小町邸跡の堆積物から採取された大型植物遺体と魚骨の同定結果を報告する。

2．試料と方法

分析試料は、北条小町邸跡のⅠ区中世下層の遺構59とⅡ区の遺構81（カマド状遺構）から採取された堆積物2試料である。

堆積物試料は、パレオ・ラボにて全量を計量し、0.5mm目の篩を用いて水洗した。各試料の水洗量については、表1を参照されたい。大型植物遺体の抽出および同定、計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。計数が難しい分類群については、おおよその数を記号（+）で表記した。試料は、鎌倉市教育委員会に保管されている。

表1　北条小町邸跡から出土した大型植物遺体（括弧内は破片数）

	遺跡名	北条小町邸跡	
	区	Ⅰ区	Ⅱ区
	面	中世下層	中世上層
	遺構	59	81
	試料No.	土壌(98層)サンプル	炭層(134層)サンプル
	時期	鎌倉時代	
分類群	水洗量（cc）	150	100
イネ	炭化籾殻	1	
	炭化種子	2 (6)	
オオムギ	炭化種子	10 (11)	
コムギ	炭化種子	4	
同定不能	炭化種実	(32)	(17)
不明	動物遺体	(++)	(++)
土器片		(+)	

+:1-9, ++:10-49

3．結果

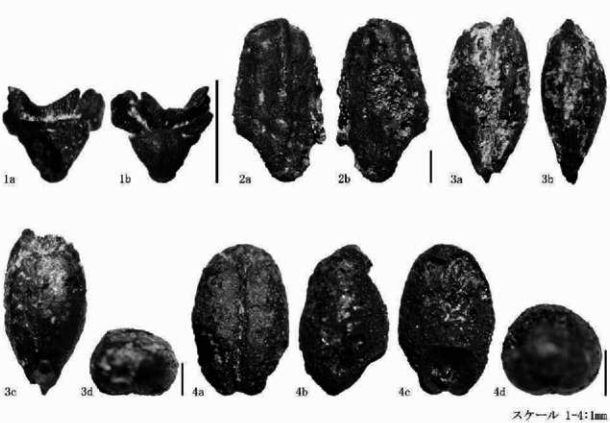
同定した結果、イネ炭化籾殻・炭化種子（頴果）とオオムギ炭化種子（頴果）、コムギ炭化種子（頴果）の3分類群が見いだされた。この他に、残存状態が悪く、微細な破片であるため、科以上の細分に必要な識別点を欠く一群を同定不能種実・炭化種実とした。また、種実以外には、不明動物遺体が得られた（表1）。このうち、Ⅱ区81（カマド状遺構）の動物遺体については、同定を試みた。結果は、硬骨魚綱（種・部位不明）の微細な破片が27点であった。

以下では、同定された大型植物遺体の産出状況を試料No.別に記載する（同定不能炭化種実は除く）。

遺構59土壌（98層）サンプル：オオムギが少量、イネとコムギがわずかに得られた。

遺構81（カマド状遺構）炭層（134層）サンプル：同定可能な種実は得られなかった。

次に、主な分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠し、APGⅢリストの順とした。



図版１　北条小町邸跡から出土した大型植物遺体

１．イネ炭化籾殻（遺構 59 土壌サンプル 98 層）　２．イネ炭化種子（遺構 59 土壌サンプル 98 層）
３．オオムギ炭化種子（遺構 59 土壌サンプル 98 層）　４．コムギ炭化種子（遺構 59 土壌サンプル 98 層）

（1）イネ　Oryza sativa L.　炭化籾殻・炭化種子（頴果）　イネ科

籾殻は、完形ならば上面観が楕円形で、側面観が長楕円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。残存長 0.9mm、残存幅 1.0mm。種子（頴果）は、上面観が両凸レンズ形、側面観が楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の２本の浅い溝がある。長さ 5.1mm、幅 2.9mm。

（2）オオムギ　Hordeum vulgare L.　炭化種子（頴果）　イネ科

側面観は長楕円形。腹面中央部には上下に走る１本の溝がある。側面観で最も幅の広い部分が中央付近にある。背面の中央部下端には三角形の胚がある。断面は楕円形である。長さ 5.2mm、幅 2.7mm、厚さ 2.0mm。

（3）コムギ　Triticum aestivum L.　炭化種子（頴果）　イネ科

上面観・側面観共に楕円形。腹面中央部には、上下に走る１本の溝がある。背面の下端中央部には、扇形の胚がある。オオムギに比べて長さが短く、幅に対して厚みがあるため、全体的に丸みを帯びている。長さ 3.3mm、幅 2.6mm、厚さ 2.0mm。

４．考察

北条小町邸跡の I 区中世下層の遺構 59 からは、栽培植物のイネとオオムギ、コムギが得られており、

保管されていた穀類がなんらかの要因で炭化して遺構内に堆積した可能性がある。Ⅱ区の遺構81（カマド状遺構）からは、大型植物遺体は得られなかったが、種や部位が不明の硬骨魚綱の微細な破片が含まれていた。

引用文献

米倉浩司・梶田　忠（2003-）BG Plants 和名－学名インデックス（YList），http://ylist.info

コメント：試料分析の目的と結果について

押木弘己（調査担当者）

試料分析の目的と結果について、以下に述べる。試料検出遺構の基本情報は、例言にて説明した。

遺構 59 では完形資料を主体とする多量のかわらけが出土し、埋土とともに長さ２㎜ほどの炭化粒が付着していた。穀物であろうことが目視でも確認できたことから、土器の洗浄水を篩にかけて炭化粒を選別、採取した。

分析の目的は穀物の種類を同定することで、その結果については前で説明されたとおりである。

炭化している点、および多量の完形かわらけとともに出土している状況を鑑みるに、何らかの儀礼にともない、これら穀物が利用・廃棄された可能性が考えられる。

遺構 81 はカマド状遺構として報告し、底面上に焼土層および炭層が堆積していた。分析試料は炭層（134 層）で、主として遺構の性格を把握する意図により、魚骨など微細な動物骨が含まれていないか分析を依頼したものである。

分析の結果、詳細な魚種・部位は不明であったものの、硬骨魚綱を含むことが確認された。遺構 81 が食物調理にともなう火処施設であった可能性を窺えるが、「カマド状」と報告した当否も含め、なお類似例の蓄積と検討が必要と考える。

当発掘地点は北条泰時・時頼「小町邸」比定地の一画にあり、若宮大路御所の推定域にも含め得る。調査結果も武家屋敷地の一画と考えて支障ない内容であったことから、厨施設の存在を想定したことが、今回分析を行った第一の目的である。

佐助ヶ谷遺跡（No.203）の花粉分析、プラント・オパール分析

佐助一丁目601番6における土壌分析結果

例　言

1．本編は、鎌倉市佐助一丁目601番６において実施した、「佐助ヶ谷遺跡」（鎌倉市No.203遺跡）の発掘調査成果のうち、土壌試料の分析結果に関する報告である。発掘調査地点の略号は、「ＳＳＫ２００３」である。

2．土壌分析以外の成果については、下記文献において既に報告している。

・押木弘己 2022「佐助ヶ谷遺跡（No.203）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書38（第２分冊）』鎌倉市教育委員会

3．当地点の調査では、中世（主に鎌倉時代後半）における４枚の遺構面を確認した。

１面は14世紀初頭～前葉、２面は13世紀後葉～末、３面は13世紀後半、４面は13世紀中葉頃と推定され、それぞれ柱穴列や東西溝、土間状遺構などが検出された。

土壌試料は３点を採取し（サンプルＡ～Ｃ）、Ａは４面上に堆積した基本土層のⅣｂ層、Ｂは４面のベースとなるⅤ層、ＣはＩＣ区２面下の土坑１埋土から採取した。

佐助ヶ谷遺跡の花粉分析、プラント・オパール分析

森　将志（パレオ・ラボ）

1．はじめに

佐助ヶ谷遺跡では、4枚の中世遺構面が確認されている。当時の古環境を検討するために、遺構面上に堆積した堆積物や遺構面のベースとなる堆積物、遺構覆土などが採取された。以下では、これらの堆積物について花粉分析とプラント・オパール分析を実施し、当時の古植生について検討した。

表1　分析試料一覧

サンプル	遺構面	遺構	層位	時期	堆積物の特徴
A	4面上	－	Ⅳb	中世	黒灰色粘質土
B	4面のベース	－	Ⅴ	古代以前か	黒褐色粘質土
C	2面下	土坑1	8	中世	暗褐色有機質腐植土

2．試料と方法

分析試料一覧を表1に示す。分析試料は、サンプルA～Cであり、サンプルAは4面上に堆積したⅣb層、サンプルBは4面のベースとなるⅤ層、サンプルCは2面の土坑埋土である。これらの試料について、以下の処理を施し、分析を行った。

2－1．花粉分析

試料（湿重量約3～4ｇ）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え、10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え、1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。この残渣より適宜プレパラートを作製して検鏡を行った。今回の分析試料は花粉化石の保存状態が良好ではなかったため、各試料につきプレパラート1枚の全面を検鏡するに留めた。さらに、花粉化石の単体標本（PLC.3541～3546）を作製し、写真を図版1に載せた。

2－2．プラント・オパール分析

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02ｇのガラスビーズ（直径約0.04㎜）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により0.01㎜以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、図版2に載せた。

3．結果

3－1．花粉分析

3試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉3、草本花粉6の、総計9である。これらの花粉の一覧表を表2に示した。検鏡の結果、サンプルAとサンプルBには花粉化石がほとんど含まれていなかった。サンプルCには比較的多くの花粉化石が含まれており、イネ科やアカザ科－ヒユ科、ヨモギ属といった草本花粉の産出が目立つ。また、サンプルCからは回虫卵と鞭虫卵も検出された。

表2　産出花粉・寄生虫卵一覧表

学名	和名	A	B	C
樹木				
Abies	モミ属	－	－	1
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	－	－	2
Alnus	ハンノキ属	－	－	1
草本				
Gramineae	イネ科	1	－	93
Polygonum sect. Persicaria－Echinocaulon	サナエタデ節－ウナギツカミ節	－	－	1
Polygonum sect. *Reynoutria*	イタドリ節	1	－	－
Chenopodiaceae－Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	－	－	12
Labiatae	シソ科	－	－	1
Artemisia	ヨモギ属	－	－	11
Arboreal pollen	樹木花粉	－	－	4
Nonarboreal pollen	草本花粉	2	－	118
Total Pollen & Spores	花粉総数	2	－	122
寄生虫卵				
Ascaris	回虫卵	－	－	19
Trichuris	鞭虫卵	－	－	58

3－2．プラント・オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から、試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め（表3）、分布図に示した（図1）。

3試料を検鏡した結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、シバ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の8種類の機動細胞珪酸体の産出が確認できた。このうち、イネ機動細胞珪酸体はサンプルCから特に多く産出しており、また、イネの籾殻に形成される珪酸体（イネ籾破片）もサンプルCから検出された。さらに、3試料ともにネザサ節型機動細胞珪酸体が多く検出されている。

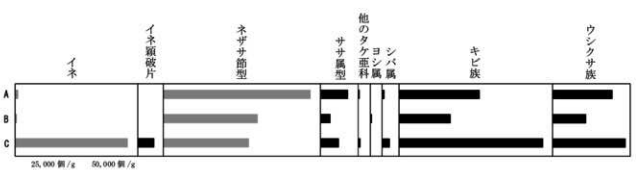


図1　植物珪酸体分布図

表3　試料1g当りのプラント・オパール個数

	イネ（個/g）	イネ籾破片（個/g）	ネザサ節型（個/g）	ササ属型（個/g）	他のタケ亜科（個/g）	ヨシ属（個/g）	シバ属（個/g）	キビ族（個/g）	ウシクサ族（個/g）	不明（個/g）
A	5,300	0	326,900	40,000	1,300	0	2,700	118,800	88,100	74,700
B	2,500	0	208,800	13,800	0	1,300	0	75,500	49,100	8,800
C	249,800	23,700	189,300	26,300	2,600	0	10,500	213,000	107,800	34,200

4．考察

花粉分析の結果、サンプルＡとサンプルＢでは十分な量の花粉化石が得られなかった。一般的に、花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され、消失してしまう。そのため、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉が残りにくい。サンプルＡとサンプルＢは４面上の堆積物と４面を構成する堆積物である。発掘調査所見によると、遺構面は岩盤層を砕いた土で整地されており、その上に建物や溝が作られていた。整地土であれば、空気に触れる酸化的環境に晒されていた可能性が高く、花粉は分解・消失したと考えられる。

一方で、ガラス質の植物珪酸体は酸化的環境であっても残存状況は良好である。サンプルＡとサンプルＢで産出が目立つのは、ネザサ節型機動細胞珪酸体である。Ⅳｂ層（サンプルＡ）とⅤ層（サンプルＢ）の堆積時には、ネザサ節型のササ類が分布を広げていた可能性がある。その他に、キビ族とウシクサ族の機動細胞珪酸体の産出も見られ、キビ族やウシクサ族も生育していたと思われる。さらに、イネ機動細胞珪酸体も検出されており、何らかの要因で稲藁が堆積していたと考えられる。

土坑から採取されたサンプルＣについては、比較的多くの花粉化石が得られた。検出された分類群は、イネ科やアカザ科－ヒユ科、ヨモギ属などである。これらの分類群のうち、イネ科とヨモギ属では花粉塊が検出された（図版２－３、４）。土坑近辺に生育していたイネ科やヨモギ属の葯が堆積していたと推測される。一方で、風媒花の樹木花粉がほとんど検出されていないため、堆積速度が速く、風媒花の花粉などが自然に堆積する時間がなかった可能性も考えられる。その場合、イネ科やヨモギ属の花粉塊の産出には、人が土坑にイネ科やヨモギ属を廃棄した等、人為的要素が関わっていた可能性が考えられる。

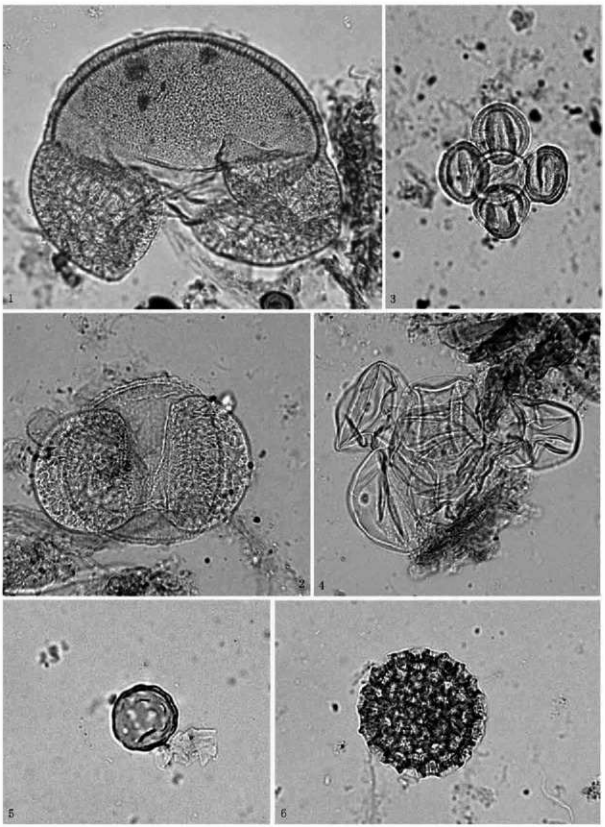
サンプルＣの堆積に人為的影響が及んでいた痕跡は、プラント・オパール分析の結果に顕著に表れている。すなわち、サンプルＣではイネ機動細胞珪酸体が突出した産出量を示しており、土坑に稲藁が多く堆積していた状況が推測される。イネ籾破片も産出しており、イネの籾殻も堆積していたと考えられる。なお、イネは開花後すぐに籾殻を閉じるため、籾殻内には花粉の多くが残留する。したがって、今回産出したイネ科花粉塊は、籾殻内に取り残された花粉の可能性が高い。

その他では、ネザサ節型機動細胞珪酸体をはじめ、キビ族やウシクサ族の機動細胞珪酸体も検出されており、サンプルＡやサンプルＢと同じように、土坑周辺にはネザサ節型のササ類やキビ族、ウシクサ族などが生育していたと考えられる。

なお、サンプルＣでは寄生虫卵の回虫卵や鞭虫卵も検出されており、土坑内の糞便の存在も推測される。鎌倉時代の鎌倉では、至る場所でみつかっている寄生虫卵の検出例が紹介されており（鈴木，2008）、本遺構もその例に漏れない。

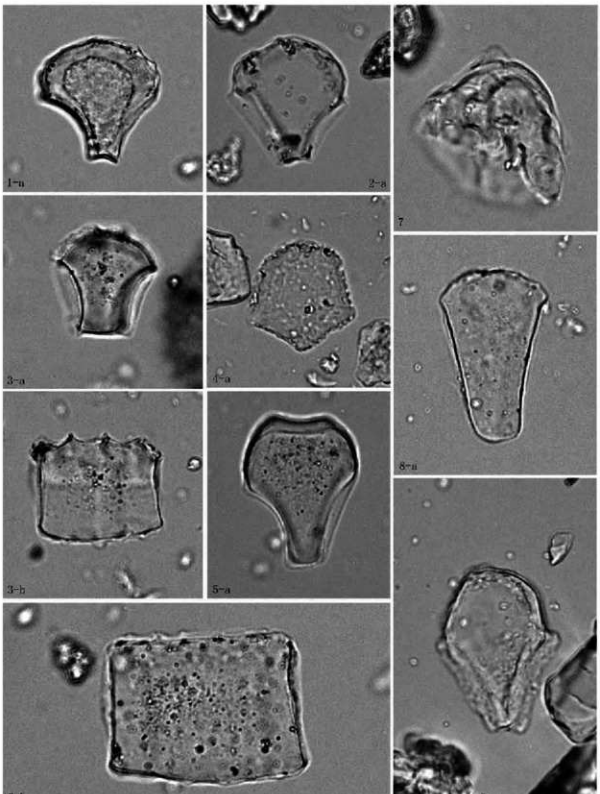
引用文献

鈴木　茂（2008）鎌倉の遺跡と寄生虫卵．考古論叢神奈河，16，77-83.



図版１　サンプルCから検出した花粉化石

１．モミ属（PLC.3541）
２．マツ属複維管束亜属（PLC.3542）
３．ヨモギ属花粉塊（PLC.3543）
４．イネ科花粉塊（PLC.3544）
５．アカザ科－ヒユ科（PLC.3545）
６．サナエタデ節－ウナギツカミ節（PLC.3546）



図版２　産出した植物珪酸体

１．イネ機動細胞珪酸体（サンプルC）
２．イネ機動細胞珪酸体（サンプルC）
３．ネザサ節型機動細胞珪酸体（サンプルA）
４．ササ属型機動細胞珪酸体（サンプルC）
５．シバ属機動細胞珪酸体（サンプルC）
６．キビ族機動細胞珪酸体（サンプルA）
７．イネ穎破片（サンプルC）
８．ウシクサ族機動細胞珪酸体（サンプルA）
９．他のタケ亜科機動細胞珪酸体（サンプルA）
a：断面　b：側面

コメント：試料分析の目的と結果について

押木弘己（調査担当者）

試料（サンプル）分析の目的と結果について、以下に述べる。サンプル検出層・遺構の基本情報は、例言で説明した。

サンプルAは4面上の堆積土層（Ⅳb層）で、鎌倉の遺跡調査従事者が「ネチャ」と呼ぶ。若干量の中世遺物が出土し、中世でも最下層に位置付けられる。

サンプルBは4面のベースとなり、中世以前と考えられるⅤ層から採取した。

A・Bともに、イネのプラント・オパール量を知ることを主眼に分析を依頼した。A・Bともに中世鎌倉の都市化が進む前段階の堆積層に含まれることから、この段階に当地点一帯で水田耕作が行われていたのか、資料蓄積を意図したところである。

結果としてAで5300個／g、Bで2500個／gのイネのプラント・オパールが検出された。試料1g当たり5000個が稲作があった目安になるというから、Aはこの目安に達し、Ⅳb層段階において稲作があった可能性を認めることができる。ただ、同様の分析を実施した横小路周辺遺跡（二階堂字荏柄26番イの一部地点）では古代層も含め26900～40300個／gが検出されており、これに比べると遥かに少ない。今回の分析ではネザサ節型やキビ族が量的優位にあり、当地点で稲作があったか否かは事例の蓄積を待って相互比較を行う必要があると感じている。Bでは稲作の目安に達しておらず、古代以前の当地で稲作があった可能性は少なかったと考えて良いだろう。

サンプルCは、ⅠC区2面下の土坑1埋土から採取した。有機質（繊維質）腐植土がベースで、鎌倉の遺跡調査従事者は「マグソ」と呼んでいる。このマグソを構成する繊維質が、具体的には何の植物に由来するものかを明らかにすることが、分析を依頼した主な目的である。この結果、イネのプラント・オパールが多量の穎片とともに検出されたことから、マグソが稲藁に由来する可能性の高いことが示唆された。土坑埋土としてのマグソの分析については、若宮大路周辺遺跡群（小町一丁目333番2地点）でも稲藁に起因する可能性が指摘されている。海岸部の砂丘域を除き、市内遺跡の中世層ではマグソの堆積は珍しくない。草履の板芯にマグソがまとわり付いて遺存しているケースも多く、稲藁に由来するという分析の結果は体感として納得できる。中世鎌倉において、稲藁は多様な場面で用いられる身近な素材であったのだろう。こちらも、折に触れて分析結果の蓄積を進めて行きたい。

なお、本地点と上掲若宮大路周辺遺跡群とでは、ネザサ節型などの検出量に大きな差が認められた。こちらは周辺の植生や土坑が閉塞するまでの速さに起因する可能性がある。この点も、分析事例の蓄積によって比較検討、ひいては中世鎌倉の環境復元が進むことを期待している。

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいさんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	令和４年度調査報告
巻次	３９　（第２分冊）
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者	玉林美男／押木弘己／押木弘己／押木弘己／押木弘己
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒２４８－００１２　鎌倉市御成町１２番１８号
発行年月日	西暦２０２３年３月２４日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
よここうじしゅうへんいせき 横小路周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 二階堂字荏柄 81番22	14204	259	35° 19′ 30″	139° 33′ 54″	20210524 ～ 20210907	56.99	個人専用住宅 （鋼管杭工事）
あまなわじんじゃいせきぐん 甘縄神社遺跡群	神奈川県鎌倉市 長谷一丁目 236番1	14204	177	35° 19′ 49″	139° 32′ 18″	20210628 ～ 20211005	56.39	個人専用住宅 （杭状改良工事）
だいぐういさゅういだいいせき 大慶寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 寺分一丁目 810番1	14204	361	35° 20′ 02″	139° 31′ 21″	20220222 ～ 20220422	39.75	個人専用住宅 （杭状改良工事）
きたふるまちいちょうやつやまいせき 北条小町邸跡（赤時・時相邸跡）	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 403番14	14204	282	35° 19′ 19″	139° 33′ 21″	20131010 ～ 20131227	41.80	個人専用住宅 （鋼管杭工事）
さすけがやついせき 佐助ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 佐助一丁目 601番6	14204	203	35° 19′ 9″	139° 32′ 37″	20200901 ～ 20201225	113.00	個人専用住宅 （鋼管杭工事）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
よここうじしゅうへんいせき 横小路周辺遺跡	城館跡	近世 中世	井戸・溝・柱穴・土坑・かわらけ廃棄	縄文時代：土器 中世：かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、瓦、金属製品、石製品 近世：国産陶器、国産磁器、瓦	12世紀末頃には土地利用が開始。13世紀中頃の東西溝が近代まで存在し、溝を境に東北が階層的になる地形が形成された。多量の瓦が出土し、任柄天神社との関係が考えられる。
あまなわじんじゃいせきぐん 甘縄神社遺跡群	城館跡 社寺跡	古墳時代 奈良～平安時代 中世 近代	中世：溝・柱穴列	古墳時代：鋼製品 奈良～平安時代：土師器・須恵器・骨製品 中世：かわらけ・陶磁器・石製品 近代：陶磁器・瓦・銅製品	古墳時代では金銅製の鞘尾板が出土。奈良～平安時代では土師器・須恵器・骨製品が出土した。中世の柱穴列は掘鉄とみられる。近代では焼けた屋根瓦を大量廃棄した大型土坑が確認された。
だいぐういさゅういだいいせき 大慶寺旧境内遺跡	城館跡	古墳時代 中世	中世：竪穴建物	古墳時代：土器 中世：かわらけ・陶磁器・石製品・銅製品	土層の違いにより5面を調査した。このうち2面では北宋銭などが出土し、鎌倉後期～14世紀代の年代が考えられる。
きたふるまちいちょうやつやまいせき 北条小町邸跡（赤時・時相邸跡）	屋敷跡	中世	溝、井戸、ピット列、土坑、カマド状遺構	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、瓦、金属製品、石製品	緊急調査報告33（第2分冊）に報告済み。今回は土壌分析の結果を掲載した。サンプルからは植物種子や魚類遺体などの検出が検出された。 13世紀前半～14世紀前半の遺構を検出。溝・柱穴列での土壌区画・変遷を確認。
さすけがやついせき 佐助ヶ谷遺跡	城館跡 社寺跡	中世	掘立柱建物・溝・竪穴状遺構・土坑	土器・陶磁器・金属製品・木製品・漆器	緊急調査報告38（第2分冊）に報告済み。今回は土壌分析の結果を掲載した。サンプルからはイネのプラント・オパールなどが検出された。 旧佐助川東岸の平坦地には4枚の平坦遺構面を形成。金属製の縁環とツマミを付けた平蒔絵の漆器蓋は優品。

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　39
令和４年度発掘調査報告
（ 第 2 分 冊 ）

発 行 日　令和５年（2023年）３月24日

編集・発行　鎌倉市教育委員会
印　　刷　文一堂印刷株式会社